

JP1 Version 12

**JP1/Performance Management - Agent Option
for Enterprise Applications**

3021-3-D88

前書き

■ 対象製品

●JP1/Performance Management - Manager (適用 OS : Windows Server 2012, Windows Server 2016)

P-2A2C-AACL JP1/Performance Management - Manager 12-00

製品構成一覧および内訳形名

P-CC2A2C-5ACL JP1/Performance Management - Manager 12-00

P-CC2A2C-5RCL JP1/Performance Management - Web Console 12-00

●JP1/Performance Management - Manager (適用 OS : CentOS 6 (x64), CentOS 7, Linux 6 (x64), Linux 7, Oracle Linux 6 (x64), Oracle Linux 7, SUSE Linux 12)

P-812C-AACL JP1/Performance Management - Manager 12-00

製品構成一覧および内訳形名

P-CC812C-5ACL JP1/Performance Management - Manager 12-00

P-CC812C-5RCL JP1/Performance Management - Web Console 12-00

●JP1/Performance Management - Agent Option for Enterprise Applications (適用 OS : Windows Server 2012, Windows Server 2016)

P-2A2C-AFCL JP1/Performance Management - Agent Option for Enterprise Applications 12-00

製品構成一覧および内訳形名

P-CC2A2C-FFCL JP1/Performance Management - Agent Option for Enterprise Applications 12-00

P-CC2A2C-AJCL JP1/Performance Management - Base 12-00

●JP1/Performance Management - Agent Option for Enterprise Applications (適用 OS : CentOS 6 (x64), CentOS 7, Linux 6 (x64), Linux 7, Oracle Linux 6 (x64), Oracle Linux 7, SUSE Linux 12)

P-812C-AFCL JP1/Performance Management - Agent Option for Enterprise Applications 12-00

製品構成一覧および内訳形名

P-CC812C-FFCL JP1/Performance Management - Agent Option for Enterprise Applications 12-00

P-CC812C-AJCL JP1/Performance Management - Base 12-00

これらの製品には、他社からライセンスを受けて開発した部分が含まれています。

■ 輸出時の注意

本製品を輸出される場合には、外国為替及び外国貿易法の規制並びに米国輸出管理規則など外国の輸出関連法規をご確認の上、必要な手続きをお取りください。

なお、不明な場合は、弊社担当営業にお問い合わせください。

■ 商標類

HITACHI, JP1 は、株式会社 日立製作所の商標または登録商標です。

AMD は、Advanced Micro Devices, Inc.の商標です。

IBM は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。

IBM, DB2 は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。

IBM, DB2 Universal Database は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。

IBM, Lotus は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。

IBM, WebSphere は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。

Internet Explorer は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Hyper-V は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Oracle と Java は、Oracle Corporation 及びその子会社、関連会社の米国及びその他の国における登録商標です。

Red Hat は、米国およびその他の国で Red Hat, Inc. の登録商標もしくは商標です。

SAP, および本文書に記載されたその他の SAP 製品, サービス, ならびにそれぞれのロゴは、ドイツおよびその他の国々における SAP SE の商標または登録商標です。

SAP, ABAP, および本文書に記載されたその他の SAP 製品, サービス, ならびにそれぞれのロゴは、ドイツおよびその他の国々における SAP SE の商標または登録商標です。

SAP, R/3, および本文書に記載されたその他の SAP 製品, サービス, ならびにそれぞれのロゴは、ドイツおよびその他の国々における SAP SE の商標または登録商標です。

SAP, SAP NetWeaver, および本文書に記載されたその他の SAP 製品, サービス, ならびにそれぞれのロゴは、ドイツおよびその他の国々における SAP SE の商標または登録商標です。

SQL Server は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標がついた製品は、米国 Sun Microsystems, Inc. が開発したアーキテクチャに基づくものです。

UNIX は、The Open Group の米国ならびに他の国における登録商標です。

Visual C++は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。Windows は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。Windows Server は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

その他記載の会社名、製品名などは、それぞれの会社の商標もしくは登録商標です。

■ マイクロソフト製品の表記について

このマニュアルでは、マイクロソフト製品の名称を次のように表記しています。

このマニュアルでの表記		正式名称
Internet Explorer		Microsoft Internet Explorer
		Windows(R) Internet Explorer(R)
Win32		Win32(R)
Windows Server 2012	Windows Server 2012	Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Datacenter
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Standard
	Windows Server 2012 R2	Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Datacenter
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Standard
Windows Server 2016		Microsoft(R) Windows Server(R) 2016 Datacenter
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2016 Standard

Windows Server 2012 および Windows Server 2016 を総称して、Windows と表記することがあります。

■ 発行

2019年1月 3021-3-D88

■ 著作権

All Rights Reserved. Copyright (C) 2019, Hitachi, Ltd.

変更内容

変更内容(3021-3-D88) JP1/Performance Management - Agent Option for Enterprise Applications 12-00

追加・変更内容	変更箇所
次の OS をサポートした。 • Windows Server 2016	—
次の OS をサポートする OS から削除した。 • Windows Server 2008 R2	—
SAP システムをリモート監視できるようにした。	1.1.8, 3.1.1, 3.1.2, 3.1.5, 3.1.6, 3.2.1, 3.2.2, 3.2.5, 3.2.6, 3.5, 3.6.3, 4.1, 4.3.1, 4.4.1, 5.3.1, 5.3.2, 5.4.3, 6.3.1, 6.3.2, 6.4.3, 8 章, 13.2.7, E.2

単なる誤字・脱字などはお断りなく訂正しました。

はじめに

このマニュアルは、JP1/Performance Management - Agent Option for Enterprise Applications の機能や収集レコードなどについて説明したものです。

■ 対象読者

このマニュアルは、次の方を対象としています。

- JP1/Performance Management - Agent Option for Enterprise Applications の機能および収集レコードについて知りたい方
- JP1/Performance Management を使用したシステムを構築、運用して、SAP システムのパフォーマンスデータを収集したい方

また、SAP システムについて熟知していることを前提としています。

JP1/Performance Management を使用したシステムの構築、運用方法については、次のマニュアルもあわせてご使用ください。

- パフォーマンス管理 基本ガイド（稼働性能管理編）
- JP1/Performance Management 設計・構築ガイド
- JP1/Performance Management 運用ガイド
- JP1/Performance Management リファレンス

■ マニュアルの構成

このマニュアルは、次に示す章から構成されています。なお、このマニュアルは各 OS に共通のマニュアルです。

OS ごとに差異がある場合は、本文中でそのつど内容を書き分けています。

1 章 PFM - Agent for Enterprise Applications の概要

PFM - Agent for Enterprise Applications でできることなど、PFM - Agent for Enterprise Applications の概要を説明しています。

2 章 パフォーマンス監視

PFM - Agent for Enterprise Applications によるパフォーマンス監視について説明しています。

3章 インストールとセットアップ

PFM - Agent for Enterprise Applications のインストールおよびセットアップ方法について説明しています。

4章 クラスタシステムでの運用

クラスタシステムで PFM - Agent for Enterprise Applications を運用する場合のインストール、セットアップ、およびクラスタシステムで PFM - Agent for Enterprise Applications を運用しているときの処理の流れについて説明しています。

5章 システムログ情報の抽出

PFM - Agent for Enterprise Applications で、システムログ情報を抽出する方法について説明しています。

6章 CCMS アラート情報の抽出

PFM - Agent for Enterprise Applications で、CCMS アラート情報を抽出する方法について説明しています。

7章 モニター情報の収集

PFM - Agent for Enterprise Applications で、SAP システムのモニター情報を収集する方法について説明しています。

8章 運用上の注意事項

PFM - Agent for Enterprise Applications の運用上の注意事項について説明しています。

9章 監視テンプレート

PFM - Agent for Enterprise Applications の監視テンプレートについて説明しています。

10章 レコード

PFM - Agent for Enterprise Applications のレコードについて説明しています。

11章 コマンド

PFM - Agent for Enterprise Applications のコマンドについて説明しています。

12章 メッセージ

PFM - Agent for Enterprise Applications のメッセージ形式、出力先一覧、syslog と Windows イベントログの一覧、およびメッセージ一覧について説明しています。

13章 トラブルへの対処方法

主に PFM - Agent でトラブルが発生した場合の対処方法について説明しています。

■ 読書手順

このマニュアルは、利用目的に合わせて章を選択して読むことができます。利用目的別にお読みいただくことをお勧めします。

マニュアルを読む目的	記述箇所
JP1/Performance Management - Agent Option for Enterprise Applications の特長を知りたい。	1 章
JP1/Performance Management - Agent Option for Enterprise Applications の機能概要を知りたい。	2 章
JP1/Performance Management - Agent Option for Enterprise Applications の導入時の作業を知りたい。	3 章
JP1/Performance Management - Agent Option for Enterprise Applications のクラスタシステムでの運用を知りたい。	4 章
JP1/Performance Management - Agent Option for Enterprise Applications のシステムログ情報の抽出方法について知りたい。	5 章
JP1/Performance Management - Agent Option for Enterprise Applications の Computer Center Management System (CCMS) アラート情報の抽出方法について知りたい。	6 章
JP1/Performance Management - Agent Option for Enterprise Applications のモニター情報の収集について知りたい。	7 章
JP1/Performance Management - Agent Option for Enterprise Applications の運用上の注意事項について知りたい。	8 章
JP1/Performance Management - Agent Option for Enterprise Applications の監視テンプレートについて知りたい。	9 章
JP1/Performance Management - Agent Option for Enterprise Applications のレコードについて知りたい。	10 章
JP1/Performance Management - Agent Option for Enterprise Applications のコマンドについて知りたい。	11 章
JP1/Performance Management - Agent Option for Enterprise Applications のメッセージについて知りたい。	12 章
障害発生時の対処方法について知りたい。	13 章

■ このマニュアルで使用する記号

このマニュアルで使用する記号を次に示します。

記号	意味
[]	ウィンドウ、タブ、メニュー、ダイアログボックス、ダイアログボックスのボタン、ダイアログボックスのチェックボックスなどを示します。 (例) [メイン] ウィンドウ [エージェント] タブ
太字	重要な用語、または利用状況によって異なる値であることを示します。

■ このマニュアルの数式中で使用する記号

このマニュアルの数式中で使用する記号を次に示します。

記号	意味
*	乗算記号を示します。
/	除算記号を示します。

■ 図中で使用する記号

このマニュアルの図中で使用する記号を次のように定義します。

●コンピュータ



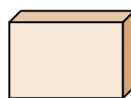
●サーバ



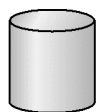
●入出力の動作



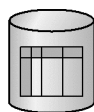
●プログラム



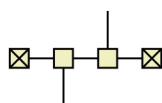
●ファイル



●データベース



●ネットワーク



●障害



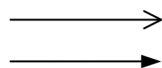
●データの流れ



●処理の流れ



●その他の流れ



目次

前書き	2
変更内容	5
はじめに	6

第1編 概要編

1	PFM - Agent for Enterprise Applications の概要	18
1.1	PFM - Agent for Enterprise Applications の特長	19
1.1.1	SAP システムのパフォーマンスデータを収集できます	19
1.1.2	パフォーマンスデータの性質に応じた方法で収集できます	20
1.1.3	パフォーマンスデータを保存できます	20
1.1.4	SAP システムの運用上の問題点を通知できます	21
1.1.5	アラームおよびレポートが容易に定義できます	21
1.1.6	SAP システムのシステムログ情報および CCMS アラート情報を抽出できます	22
1.1.7	SAP システムのモニター情報を収集できます	22
1.1.8	SAP システムをリモートで監視できます	22

2	パフォーマンス監視	23
2.1	パフォーマンス監視について	24
2.1.1	パフォーマンス監視の目的	24
2.1.2	ベースラインの選定	24
2.1.3	パフォーマンス監視の例	25

第2編 構築・運用編

3	インストールとセットアップ	30
3.1	Windows 版のインストールとセットアップ	31
3.1.1	Windows 版のインストールの前に確認すること	31
3.1.2	Windows 版のインストールとセットアップの流れ	36
3.1.3	Windows 版のインストール手順	38
3.1.4	ライブラリの適用手順	39
3.1.5	Windows 版のセットアップ手順	39
3.1.6	Windows 版のインストールとセットアップに関する注意事項	50
3.2	Linux 版のインストールとセットアップ	54
3.2.1	Linux 版のインストールの前に確認すること	54
3.2.2	Linux 版のインストールとセットアップの流れ	58

3.2.3	Linux 版のインストール手順	60
3.2.4	ライブラリの適用手順	62
3.2.5	Linux 版のセットアップ手順	62
3.2.6	Linux 版のインストールとセットアップに関する注意事項	72
3.3	Windows 版のアンインストールとアンセットアップ	75
3.3.1	Windows 版のアンインストールおよびアンセットアップする前の注意事項	75
3.3.2	Windows 版のアンセットアップ手順	76
3.3.3	Windows 版のアンインストール手順	77
3.4	Linux 版のアンインストールとアンセットアップ	79
3.4.1	Linux 版のアンインストールおよびアンセットアップする前の注意事項	79
3.4.2	Linux 版のアンセットアップ手順	80
3.4.3	Linux 版のアンインストール手順	81
3.5	PFM - Agent for Enterprise Applications のシステム構成の変更	82
3.6	PFM - Agent for Enterprise Applications の運用方式の変更	84
3.6.1	パフォーマンスデータの格納先の変更	84
3.6.2	Store バージョン 2.0 への移行	90
3.6.3	インスタンス環境の更新の設定	93
3.7	PFM - Agent for Enterprise Applications のバックアップとリストア	96
3.7.1	バックアップ	96
3.7.2	リストア	97
3.8	Web ブラウザでマニュアルを参照するための設定	100
3.8.1	マニュアルを参照するための設定手順	100
3.8.2	マニュアルの参照手順	101
4	クラスタシステムでの運用	102
4.1	クラスタシステムでの PFM - Agent for Enterprise Applications の構成	103
4.2	フェールオーバー時の処理	105
4.2.1	PFM - Agent ホストに障害が発生した場合のフェールオーバー	105
4.2.2	PFM - Manager が停止した場合の影響と対処	107
4.3	Windows 版のクラスタシステムでのインストールとセットアップ	108
4.3.1	Windows 版での SAP NetWeaver7.0 以降の場合	108
4.4	Linux 版のクラスタシステムでのインストールとセットアップ	123
4.4.1	Linux 版での SAP NetWeaver7.0 以降の場合	123
4.5	Windows 版のクラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップ	137
4.5.1	Windows 版での SAP NetWeaver7.0 以降の場合	137
4.6	Linux 版のクラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップ	139
4.6.1	Linux 版での SAP NetWeaver7.0 以降の場合	139
4.7	クラスタシステムでの PFM - Agent for Enterprise Applications のシステム構成の変更	141
4.8	クラスタシステムでの PFM - Agent for Enterprise Applications の運用方式の変更	142

- 4.8.1 クラスタシステムでのパフォーマンスデータの格納先の変更 142
- 4.8.2 クラスタシステムでの Store バージョン 2.0 への移行 142
- 4.8.3 クラスタシステムでのインスタンス環境の更新の設定 142
- 4.9 クラスタシステムでの PFM - Agent for Enterprise Applications のバックアップとリストア 143
- 4.10 注意事項 144

5 システムログ情報の抽出 145

- 5.1 システムログ情報抽出機能の概要 146
- 5.2 システムログ情報の抽出 149
 - 5.2.1 セットアップ 150
 - 5.2.2 出力例 151
- 5.3 環境パラメーター設定ファイル 152
 - 5.3.1 設定手順 152
 - 5.3.2 設定内容 153
- 5.4 コマンド実行によるシステムログ情報の抽出 160
 - 5.4.1 コマンドを実行する前に 160
 - 5.4.2 コマンド実行によるシステムログ情報の抽出方法 160
 - 5.4.3 コマンドを実行してシステムログ情報を抽出する場合の環境パラメーター設定ファイル 161

6 CCMS アラート情報の抽出 170

- 6.1 CCMS アラート情報抽出機能の概要 171
- 6.2 CCMS アラート情報の抽出 174
 - 6.2.1 セットアップ 175
 - 6.2.2 出力例 176
- 6.3 環境パラメーター設定ファイル 177
 - 6.3.1 設定手順 177
 - 6.3.2 設定内容 178
- 6.4 コマンド実行による CCMS アラート情報の抽出 185
 - 6.4.1 コマンドを実行する前に 185
 - 6.4.2 コマンド実行による CCMS アラート情報の抽出方法 185
 - 6.4.3 コマンドを実行して CCMS アラート情報を抽出する場合の環境パラメーター設定ファイル 186

7 モニター情報の収集 196

- 7.1 モニター情報収集の概要 197
- 7.2 モニター情報収集の設定 198
 - 7.2.1 モニターセット名およびモニター名の設定 198
 - 7.2.2 パフォーマンスデータ収集の設定 199

8 運用上の注意事項 200

- 8.1 収集基点時間の注意事項 201

8.2 SAP システムのタイムゾーンの注意事項 202

8.3 システムの運用に関する注意事項 203

第3編 リファレンス編

9 監視テンプレート 204

監視テンプレートの概要 205

アラームの記載形式 206

アラーム一覧 207

Buffer - CUA 209

Buffer - FieldDescri 210

Buffer - GenericKey 211

Buffer - InitialReco 212

Buffer - Program 213

Buffer - Screen 214

Buffer - ShortNameTA 215

Buffer - SingleRecor 216

Buffer - TableDefini 217

Dialog ResponseTime 218

Extended Memory 219

Heap Memory 220

Paging Area 221

Roll Area 222

SystemWideQueue 223

ServerSpecificQueue 224

Utilization % (バックグラウンドワークプロセスの平均使用率の監視アラーム) 225

QueueLength % 226

Utilization % (ダイアログプロセスの平均使用率の監視アラーム) 227

レポートの記載形式 228

レポートのフォルダ構成 230

レポート一覧 232

Dialog ResponseTime 234

Dialog ResponseTime Status 235

Dialog ResponseTime Trend (時単位の履歴レポート) 236

Dialog ResponseTime Trend (日単位の履歴レポート) 237

Dialog ResponseTime Trend(Multi-Agent) 238

Dialog Utilization % 239

Process Detail 240

Process Overview Status 241

SAP Buffer Detail(CUA) 242

SAP Buffer Detail(FieldDescription) 243

SAP Buffer Detail(GenericKey) 244

SAP Buffer Detail(InitialRecords) 245

SAP Buffer Detail(Program) 246

SAP Buffer Detail(Screen) 247

SAP Buffer Detail(ShortNameTAB)	248
SAP Buffer Detail(SingleRecord)	249
SAP Buffer Detail(TableDefinition)	250
SAP Buffer Hitratio	251
SAP Buffer Hitratio Status	253
SAP Buffer Hitratio Trend (時単位の履歴レポート)	255
SAP Buffer Hitratio Trend (日単位の履歴レポート)	256
SAP Memory Detail	257
SAP Memory Used	258
SAP Memory Used Status	259
SAP Memory Used Trend (時単位の履歴レポート)	260
SAP Memory Used Trend (日単位の履歴レポート)	261
UsersLoggedIn Trend (時単位の履歴レポート)	262
UsersLoggedIn Trend (日単位の履歴レポート)	263
UsersLoggedIn Trend(Multi-Agent)	264
Background Processing SystemWideQueue	265
Background Service ServerSpecificQueue	266
Background Service Utilization %	267

10

レコード 268

データモデルについて	269
レコードの記載形式	270
ODBC キーフィールド一覧	273
要約ルール	274
データ型一覧	277
フィールドの値	278
Store データベースに記録されるときだけ追加されるフィールド	280
レコードの注意事項	282
レコード一覧	284
Background Processing (PI_BTCP)	286
Background Service (PI_BTC)	288
CCMS Alert Monitor Command (PD_ALMX)	290
Dialog Service (PI_DIA)	292
Enqueue Service (PI_ENQ)	296
SAP Buffer Summary (PI_BUFF)	298
SAP Instance Summary (PD_SRV)	306
SAP Memory Summary (PI_MEM)	308
Spool Service (PI_SPO)	313
System Log Monitor Command (PD_SLMX)	316
Update1 Service (PI_UPD1)	318
Update2 Service (PI_UPD2)	320
User defined Monitor (Perf.) (PI_UMP)	322
Work Process Summary (PD)	325
WorkLoad Summary Interval (PI)	328

- 11 コマンド 334**
 - コマンドの記載形式 335
 - コマンド一覧 337
 - jr3alget 338
 - jr3slget 346

- 12 メッセージ 353**
 - 12.1 メッセージの形式 354
 - 12.1.1 メッセージの出力形式 354
 - 12.1.2 メッセージの記載形式 355
 - 12.2 メッセージの出力先一覧 357
 - 12.3 syslog と Windows イベントログの一覧 362
 - 12.4 メッセージ一覧 364

第4編 トラブルシューティング編

- 13 トラブルへの対処方法 408**
 - 13.1 対処の手順 409
 - 13.2 トラブルシューティング 410
 - 13.2.1 セットアップやサービスの起動に関するトラブルシューティング 411
 - 13.2.2 コマンドの実行に関するトラブルシューティング 415
 - 13.2.3 レポートの定義に関するトラブルシューティング 416
 - 13.2.4 アラームの定義に関するトラブルシューティング 416
 - 13.2.5 パフォーマンスデータの収集と管理に関するトラブルシューティング 418
 - 13.2.6 ログ監視プログラムに関するトラブルシューティング 419
 - 13.2.7 リモート監視機能に関するトラブルシューティング 421
 - 13.2.8 その他のトラブルに関するトラブルシューティング 422
 - 13.3 トラブルシューティング時に採取するログ情報 423
 - 13.3.1 トラブルシューティング時に採取するログ情報の種類 423
 - 13.3.2 トラブルシューティング時に採取するログファイルおよびディレクトリ一覧 424
 - 13.4 トラブルシューティング時に採取が必要な資料 426
 - 13.4.1 トラブルシューティング時に Windows 環境で採取が必要な資料 426
 - 13.4.2 トラブルシューティング時に Linux 環境で採取が必要な資料 432
 - 13.5 トラブルシューティング時に採取する資料の採取方法 438
 - 13.5.1 トラブルシューティング時に Windows 環境で採取する資料の採取方法 438
 - 13.5.2 トラブルシューティング時に Linux 環境で採取する資料の採取方法 441
 - 13.6 Performance Management の障害検知 444
 - 13.7 Performance Management システムの障害回復 445

付録 446

付録 A	構築前のシステム見積もり	447
付録 A.1	メモリー所要量	447
付録 A.2	ディスク占有量	447
付録 A.3	クラスタ運用時のディスク占有量	447
付録 B	カーネルパラメーター	448
付録 C	識別子一覧	449
付録 D	プロセス一覧	450
付録 E	ポート番号一覧	452
付録 E.1	Performance Management のポート番号	452
付録 E.2	ファイアウォールの通過方向	453
付録 F	PFM - Agent for Enterprise Applications のプロパティ	455
付録 F.1	Agent Store サービスのプロパティ一覧	455
付録 F.2	Agent Collector サービスのプロパティ一覧	458
付録 G	ディレクトリおよびファイル一覧	468
付録 G.1	フォルダおよびファイル一覧 (Windows の場合)	468
付録 G.2	ディレクトリおよびファイル一覧 (Linux の場合)	474
付録 H	移行手順と移行時の注意事項	481
付録 H.1	バージョンアップ時のインストールについて	481
付録 H.2	システムログ情報と CCMS アラート情報の抽出について	481
付録 I	バージョン互換	483
付録 J	動作ログの出力	484
付録 J.1	動作ログに出力される事象の種別	484
付録 J.2	動作ログの保存形式	484
付録 J.3	動作ログの出力形式	485
付録 J.4	動作ログを出力するための設定	491
付録 K	JP1/SLM との連携	494
付録 L	各バージョンの変更内容	496
付録 L.1	12-00 の変更内容	496
付録 L.2	11-00 の変更内容	496
付録 L.3	10-51 の変更内容	496
付録 L.4	10-00 の変更内容	496
付録 L.5	09-00 の変更内容	497
付録 M	このマニュアルの参考情報	499
付録 M.1	関連マニュアル	499
付録 M.2	このマニュアルでの表記	499
付録 M.3	このマニュアルで使用する英略語	502
付録 M.4	このマニュアルでのプロダクト名、サービス ID、およびサービスキーの表記	503
付録 M.5	Performance Management のインストール先ディレクトリの表記	503

付録 M.6 KB (キロバイト) などの単位表記について 504

付録 N 用語解説 505

索引 508

1

PFM - Agent for Enterprise Applications の概要

この章では、PFM - Agent for Enterprise Applications の概要について説明します。

1.1 PFM - Agent for Enterprise Applications の特長

PFM - Agent for Enterprise Applications は、SAP システムのパフォーマンスを監視するために、パフォーマンスデータを収集および管理するプログラムです。

PFM - Agent for Enterprise Applications の特長を次に示します。

- SAP システムの稼働状況を分析できる
監視対象の SAP システムから、応答時間やワークプロセス使用率の統計情報などのパフォーマンスデータを PFM - Agent for Enterprise Applications で収集および集計し、その傾向や推移を図示することで、SAP システムの稼働状況の分析が容易にできます。
- SAP システムの運用上の問題点を早期に発見し、原因を調査する資料を提供できる
監視対象の SAP システムで、応答時間が遅延するなどのパフォーマンスの低下が発生した場合、Eメールなどを使ってユーザーに通知することで、問題点を早期に発見できます。また、その問題点に関連する情報を図示することで、原因を調査する資料を提供できます。

PFM - Agent for Enterprise Applications を使用するには、PFM - Manager および PFM - Web Console が必要です。

PFM - Agent for Enterprise Applications について次に説明します。

1.1.1 SAP システムのパフォーマンスデータを収集できます

PFM - Agent for Enterprise Applications を使用すると、対象ホスト上で動作している SAP システムのバックグラウンドサービスの統計情報などのパフォーマンスデータが収集できます。

PFM - Agent for Enterprise Applications では、パフォーマンスデータは、次のように利用できます。

- SAP システムの稼働状況を表示する
パフォーマンスデータは、PFM - Web Console を使用して、「レポート」と呼ばれるグラフィカルな形式に加工し、表示できます。レポートによって、SAP システムの稼働状況がよりわかりやすく分析できるようになります。
レポートには、次の種類があります。
 - リアルタイムレポート
監視している SAP システムの現在の状況を示すレポートです。主に、システムの現在の状態や問題点を確認するために使用します。リアルタイムレポートの表示には、収集した時点のパフォーマンスデータが直接使用されます。
 - 履歴レポート
監視している SAP システムの過去から現在までの状況を示すレポートです。主に、システムの傾向を分析するために使用します。履歴レポートの表示には、PFM - Agent for Enterprise Applications のデータベースに格納されたパフォーマンスデータが使用されます。

- 問題が起こったかどうかの判定条件として使用する
収集されたパフォーマンスデータの値が何らかの異常を示した場合、ユーザーに通知するなどの処置を取るよう設定できます。

1.1.2 パフォーマンスデータの性質に応じた方法で収集できます

パフォーマンスデータは、「レコード」の形式で収集されます。各レコードは、「フィールド」と呼ばれるさらに細かい単位に分けられます。レコードおよびフィールドの総称を「データモデル」と呼びます。

レコードは、性質によって2つのレコードタイプに分けられます。どのレコードでどのパフォーマンスデータが収集されるかは、PFM - Agent for Enterprise Applications で定義されています。ユーザーは、PFM - Web Console を使用して、どのパフォーマンスデータのレコードを収集するか選択します。

PFM - Agent for Enterprise Applications のレコードタイプを次に示します。

- Product Interval レコードタイプ (以降、PI レコードタイプと省略します)
PI レコードタイプのレコードには、1分ごとのプロセス数など、ある一定の時間 (インターバル) ごとのパフォーマンスデータが収集されます。PI レコードタイプは、時間の経過に伴うシステムの状態の変化や傾向を分析したい場合に使用します。
- Product Detail レコードタイプ (以降、PD レコードタイプと省略します)
PD レコードタイプのレコードには、現在起動しているプロセスの詳細情報など、ある時点でのシステムの状態を示すパフォーマンスデータが収集されます。PD レコードタイプは、ある時点でのシステムの状態を知りたい場合に使用します。

各レコードについては、「[10. レコード](#)」を参照してください。

1.1.3 パフォーマンスデータを保存できます

収集したパフォーマンスデータを、PFM - Agent for Enterprise Applications の「Store データベース」と呼ばれるデータベースに格納することで、現在までのパフォーマンスデータを保存し、SAP システムの稼働状況について、過去から現在までの傾向を分析できます。傾向を分析するためには、履歴レポートを使用します。

ユーザーは、PFM - Web Console を使用して、どのパフォーマンスデータのレコードを Store データベースに格納するか選択します。PFM - Web Console でのレコードの選択方法については、マニュアル「[JP1/Performance Management 運用ガイド](#)」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

1.1.4 SAP システムの運用上の問題点を通知できます

PFM - Agent for Enterprise Applications で収集したパフォーマンスデータは、SAP システムのパフォーマンスをレポートとして表示するのに利用できるだけでなく、SAP システムを運用していて問題が起こったり、障害が発生したりした場合にユーザーに警告することもできます。

例えば、1 分ごとのダイアログタスクの応答時間が 3,000 ミリ秒を上回った場合、ユーザーに E メールで通知するとします。このように運用するために、「1 分ごとのダイアログタスクの応答時間が 3,000 ミリ秒を上回る」を異常条件のしきい値として、そのしきい値に達した場合、E メールをユーザーに送信するように設定します。しきい値に達した場合に取る動作を「アクション」と呼びます。アクションには、次の種類があります。

- Eメールの送信
- コマンドの実行
- SNMP トラップの発行
- JP1 イベントの発行

しきい値やアクションを定義したものを「アラーム」と呼びます。1 つ以上のアラームを 1 つのテーブルにまとめたものを「アラームテーブル」と呼びます。アラームテーブルを定義したあと、PFM - Agent for Enterprise Applications と関連づけます。アラームテーブルと PFM - Agent for Enterprise Applications とを関連づけることを「バインド」と呼びます。バインドすると、PFM - Agent for Enterprise Applications によって収集されているパフォーマンスデータが、アラームで定義したしきい値に達した場合、ユーザーに通知できるようになります。

このように、アラームおよびアクションを定義することによって、SAP システムの運用上の問題を早期に発見し、対処できます。

アラームおよびアクションの設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、アラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。

1.1.5 アラームおよびレポートが容易に定義できます

PFM - Agent for Enterprise Applications では、「監視テンプレート」と呼ばれる、必要な情報があらかじめ定義されたレポートおよびアラームを提供しています。この監視テンプレートを使用することで、複雑な定義をしなくても SAP システムの運用状況を監視する準備が容易にできるようになります。監視テンプレートは、ユーザーの環境に合わせてカスタマイズすることもできます。

監視テンプレートの使用方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働分析のためのレポートの作成またはアラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。また、監視テンプレートの詳細については、「9. [監視テンプレート](#)」を参照してください。

1.1.6 SAP システムのシステムログ情報および CCMS アラート情報を抽出できます

PFM - Agent for Enterprise Applications では、SAP システムの次の情報を定期的にテキストファイルに出力できます。

- システムログ情報
SAP システムで発生したイベントおよび障害を記録するログ（システムログ）です。システムログは、アプリケーションサーバごとに記録されます。
- CCMS アラート情報
SAP システムの CCMS（Computer Center Management System）の警告モニター内で発生する警告（アラート情報）です。

テキストファイルに出力された情報は、JP1/Base などのログファイルトラップ機能を使用して、JP1 イベントに変換できます。この JP1 イベントを JP1/IM から監視することで、SAP システムの稼働状況を JP1/IM から監視できるようになります。

SAP システムのシステムログ情報の抽出については、「[5. システムログ情報の抽出](#)」を参照してください。CCMS アラート情報の抽出については、「[6. CCMS アラート情報の抽出](#)」を参照してください。

1.1.7 SAP システムのモニター情報を収集できます

PFM - Agent for Enterprise Applications では、SAP システムのモニター情報を、ユーザーの定義に基づいて収集できます。これによって、PFM - Agent for Enterprise Applications にレコードとして用意されていないパフォーマンス情報の収集もできるようになります。なお、収集できる SAP システムのモニター情報は、パフォーマンス属性を持つ情報に限られます。

SAP システムのモニター情報の収集については、「[7. モニター情報の収集](#)」を参照してください。

1.1.8 SAP システムをリモートで監視できます

PFM - Agent for Enterprise Applications では、SAP システムのパフォーマンスをリモートで監視できます。

PFM - Agent for Enterprise Applications が稼働するホストとは異なるホストで動作する SAP システムを対象にパフォーマンスを監視します。

2

パフォーマンス監視

この章では、PFM - Agent for Enterprise Applications によるパフォーマンス監視について説明します。

2.1 パフォーマンス監視について

パフォーマンス監視をすることは、SAP システム環境の構築および管理において重要な作業です。ここでは、PFM - Agent for Enterprise Applications を使用したパフォーマンス監視の目的、およびパフォーマンス監視の例を紹介します。

2.1.1 パフォーマンス監視の目的

PFM - Agent for Enterprise Applications を使用したパフォーマンス監視は、SAP システム構成の変更や調整に役立ちます。また、将来のシステムリソースのアップグレード計画にも有効な情報となります。

パフォーマンス監視は、主に次の目的で使うことができます。

- SAP システムでのパフォーマンスデータを分析し、ボトルネック原因を見つける
- SAP システムでのパフォーマンスデータの傾向を分析し、負荷特性と対応するシステムリソースへの影響を把握する
- SAP システムが正しく動作しているかを監視する

継続的にパフォーマンス監視することで、SAP システム環境の負荷特性と対応するシステムリソースへの影響を把握できます。

SAP システムを安定稼働させるには、正しくパフォーマンス監視を行うことが重要です。SAP システムが安定稼働しているかは、次の監視をすることによって動作を確認できます。

- SAP システムの応答時間の監視
- SAP バッファの監視
- SAP メモリーの監視
- システムログ情報の監視
- CCMS アラート情報の監視

PFM - Agent for Enterprise Applications で検出された問題点などは、SAP が標準で提供している運用管理ツール「CCMS」による詳細な調査や分析を行うことの手助けとなります。

2.1.2 ベースラインの選定

ベースラインの選定とは、システム運用で問題なしと想定されるラインをパフォーマンス測定結果から選定する作業です。

JP1/PFM 製品では、ベースラインの値を「しきい値」とすることで、システムの運用監視をします。このため、ベースラインの選定は、パフォーマンス監視をするにあたっての重要な作業となります。

なお、ベースラインの選定は、次のように実施することをお勧めします。

- 運用環境の高負荷テスト時など、ピーク時の状態を測定する
- システム構成によって大きく異なるため、システムリソースの変更、および運用環境の変更を行う場合は、再度ベースラインを測定する

2.1.3 パフォーマンス監視の例

(1) SAP システムの応答時間

SAP システム全体のパフォーマンス傾向を確認するために SAP システムの応答時間を監視します。

(a) 応答時間に関連するレコードとフィールド

応答時間に関連するレコードとフィールドを次の表に示します。

表 2-1 応答時間に関連するレコードとフィールド

使用レコード	使用フィールド	値の見方 (例)
PI または PI_DIA	ResponseTime	ダイアログステップの処理時間の平均値。
	DBRequestTime	論理データベース要求を処理するための平均時間。
	QueueTime	ディスパッチャー待ち行列での平均待ち時間。

(b) 監視方法

ダイアログの応答時間の監視

SAP システムでのダイアログの応答時間は、監視テンプレートで提供している「Dialog ResponseTime アラーム (フィールド名: ResponseTime)」を使用して監視できます。

ResponseTime がしきい値以上の場合、SAP システム全体のパフォーマンスが低下している可能性があります。SAP システム全体の負荷状況やデータベース依頼時間を監視してボトルネックを確認します。

データベース依頼時間の監視

データベース依頼時間は、監視テンプレートで提供している「Dialog ResponseTime レポート (フィールド名: DBRequestTime)」を使用して監視できます。

DBRequestTime の値が高い (ResponseTime - QueueTime フィールドの値の 40%を超える) 場合、運用方法、アプリケーションサーバでのバッファ、SQL 文 (ABAP) の最適化、またはデータベースサーバに問題がある可能性があります。

SAP システム全体の負荷状況の監視

SAP システム全体の負荷状況は、監視テンプレートで提供している「Dialog ResponseTime レポート (フィールド名: QueueTime)」を使用して監視できます。

QueueTime の値が高い (ResponseTime フィールドの値の 10%を超える) 場合, SAP システム全体での負荷が高くなっている可能性があります。

(2) SAP バッファの監視

効率的に SAP システムが運用されていることを確認するために, SAP システム固有の SAP バッファを監視します。

効率よく SAP バッファを使用することで, 定型業務など実行する機会が多い業務の応答時間の短縮を図ることができます。

(a) SAP バッファに関連するレコードとフィールド

SAP バッファに関連するレコードとフィールドを次の表に示します。

表 2-2 SAP バッファに関連するレコードとフィールド

使用レコード	使用フィールド	値の見方 (例)
PI または PI_BUFF	Program HitRatio %	プログラムが Program バッファに存在するため, データベースにアクセスせずに済んだ問い合わせの割合 (バッファのヒット率)。
	CUA HitRatio %	メニュー情報が CUA バッファに存在するため, データベースにアクセスせずに済んだ問い合わせの割合 (バッファのヒット率)。
	GenericKey HitRatio %	テーブルのデータ(複数レコード)が Generic Key バッファに存在するため, データベースにアクセスせずに済んだ問い合わせの割合 (バッファのヒット率)。
	SingleRecord HitRatio %	テーブルのデータ (1 レコード) が Single record バッファに存在するため, データベースにアクセスせずに済んだ問い合わせの割合 (バッファのヒット率)。
PI_BUFF	Program Swap	Program バッファで発生した, 1 分ごとのバッファフルによるスワップ回数。値が 0 であることが望ましい。
	CUA Swap	CUA バッファで発生した, 1 分ごとのバッファフルによるスワップ回数。値が 0 であることが望ましい。
	GenericKey Swap	Generic key バッファで発生した, 1 分ごとのバッファフルによるスワップ回数。値が 0 であることが望ましい。
	SingleRecord Swap	Single record バッファで発生した, 1 分ごとのバッファフルによるスワップ回数。値が 0 であることが望ましい。

(b) 監視方法

Program バッファの監視

Program バッファのヒット率およびスワップ回数を監視できます。

Program バッファのヒット率は、監視テンプレートで提供している「SAP Buffer Hitratio レポート (フィールド名: Program HitRatio %)」を使用して監視できます。この値が低い (80%未満) 場合は、定型業務以外のユーザー依頼が増加している可能性があります。

Program バッファで発生したスワップ回数は、監視テンプレートで提供している「SAP Buffer Hitratio レポート (フィールド名: Program Swap)」を使用して監視できます。この値が 0 よりも大きい場合には、Program バッファのサイズが小さい可能性があります。

メニュー情報のバッファの監視

メニュー情報のバッファヒット率および、スワップ回数を監視できます。

メニュー情報のバッファヒット率は、監視テンプレートで提供している「SAP Buffer Hitratio レポート (フィールド名: CUA HitRatio %)」を使用して監視できます。この値が低い (80%未満) 場合は、定型業務以外でのメニュー操作が増加している可能性があります。

メニュー情報のスワップ回数は、監視テンプレートで提供している「SAP Buffer Hitratio レポート (フィールド名: CUA Swap)」を使用して監視できます。この値が 0 よりも大きい場合には、CUA バッファのサイズが小さい可能性があります。

テーブルデータの Generic key バッファの監視

テーブルデータの GenericKey バッファヒット率およびスワップ回数を監視できます。

テーブルデータのバッファヒット率は、監視テンプレートで提供している「SAP Buffer Hitratio レポート (フィールド名: GenericKey HitRatio %)」を使用して監視できます。この値が低い (80%未満) 場合は、Generic key バッファのサイズが小さいか、または Generic Key バッファへのテーブル割り当て方法に問題がある可能性があります。

テーブルデータのバッファで発生したスワップ回数は、監視テンプレートで提供している「SAP Buffer Hitratio レポート (フィールド名: GenericKey Swap)」を使用して監視できます。この値が 0 よりも大きい場合には、Generic key バッファのサイズが小さい可能性があります。

テーブルデータの SingleRecord バッファの監視

テーブルデータの SingleRecord バッファヒット率およびスワップ回数を監視できます。

テーブルデータのバッファヒット率は、監視テンプレートで提供している「SAP Buffer Hitratio レポート (フィールド名: SingleRecord HitRatio %)」を使用して監視できます。この値が低い (80%未満) 場合は、Single record バッファのサイズが小さいか、または Generic Key バッファへのテーブル割り当て方法に問題がある可能性があります。

テーブルデータのバッファで発生したスワップ回数は、監視テンプレートで提供している「SAP Buffer Hitratio レポート (フィールド名: SingleRecord Swap)」を使用して監視できます。この値が 0 よりも大きい場合には、Single record バッファのサイズが小さい可能性があります。

(3) SAP メモリーの監視

SAP メモリーの領域不足によって発生する、SAP システム全体でパフォーマンスの低下の傾向を確認するために SAP システム固有の SAP メモリーを監視します。

(a) SAP メモリーに関連するレコードとフィールド

SAP メモリーに関連するレコードとフィールドを次の表に示します。

表 2-3 SAP メモリーに関連するレコードとフィールド

使用レコード	使用フィールド	値の見方 (例)
PI または PI_MEM	EsAct %	現在の、拡張メモリーの使用率。
	HeapAct %	現在の、ヒープ領域の使用率。
	PrivWpNo	PRIV モードになったワークプロセス数。
	R3PagingUsed %	ページング領域の使用率。
	R3RollUsed %	ロール領域の使用率。

(b) 監視方法

SAP メモリーの拡張メモリー使用率の監視

SAP メモリーの拡張メモリー使用率は、監視テンプレートで提供している「Extended Memory アラーム」を使用して監視できます。

Extended Memory アラームのステータスが異常または警告になる場合、拡張メモリーの領域不足の可能性がります。

SAP メモリーのヒープ領域使用率の監視

SAP メモリーのヒープ領域使用率は、監視テンプレートで提供している「Heap Memory アラーム」を使用して監視できます。

Heap Memory アラームのステータスが異常または警告になる場合、ヒープ領域の領域不足の可能性がります。または、ダイアログのワークプロセスがショートダンプを発生するおそれがあります。

PRIV モードになったワークプロセス数の監視

「PRIV」モードになっているワークプロセス数は、監視テンプレートで提供している「SAP Memory Detail ドリルダウンレポート (フィールド名: PrivWpNo)」を使用して確認できます。

この値が 1 以上の場合、ディスパッチャーでの待ち時間が増加している可能性があります。

SAP メモリーのページング領域使用率の監視

SAP メモリーのページング領域使用率は、監視テンプレートで提供している「Paging Area アラーム」を使用して監視できます。

Paging Area アラームのステータスが異常または警告になる場合、ページング領域の領域不足の可能性がります。

SAP メモリーのロール領域使用率の監視

SAP メモリーのロール領域使用率は、監視テンプレートで提供している「Roll Area アラーム」を使用して監視できます。

Roll Area アラームのステータスが異常または警告になる場合、ロール領域の領域不足の可能性がります。または、ダイアログのワークプロセスが「PRIV」モードとなるおそれがあります。

(4) SAP システムログ, CCMS アラートの監視

SAP システムは、発生したイベントおよび障害情報をシステムログに出力しています。

また、システムの運用管理や負荷分析をする CCMS (Computer Center Management System) が備わっています。

PFM - Agent for Enterprise Applications では、システムログや CCMS の警告モニター内で発生した警告 (アラート情報) を定期的にテキストファイルに出力できます。

テキストファイルに出力された情報は、ログの監視を行うプログラムと連携することで SAP システムの状態の監視に利用できます。

(a) 監視方法

システムログの監視

システムログ情報抽出機能を使用すると、SAP システムで発生したイベントおよび障害を記録するシステムログ情報を定期的にテキストファイルに出力できます。

出力される内容を次に示します。

- メッセージ記録時刻
- メッセージを記録したサーバ
- メッセージを記録したユーザー
- メッセージを記録したプログラム
- メッセージ番号
- メッセージ

詳細は、「[5. システムログ情報の抽出](#)」を参照してください。

CCMS アラート情報の監視

CCMS アラート情報抽出機能を使用すると、CCMS の警告モニター内で発生する警告 (アラート情報) を定期的にテキストファイルに出力できます。

出力される内容を次に示します。

- アラート ID
- アラートに関連づけられている MTE の ID
- アラートの重要度
- 一般プロパティ
- メッセージ

詳細は、「[6. CCMS アラート情報の抽出](#)」を参照してください。

3

インストールとセットアップ

この章では、PFM - Agent for Enterprise Applications のインストールおよびセットアップ方法について説明します。

3.1 Windows 版のインストールとセットアップ

ここでは、PFM - Agent for Enterprise Applications をインストールおよびセットアップする手順を示します。

3.1.1 Windows 版のインストールの前に確認すること

PFM - Agent for Enterprise Applications をインストールおよびセットアップする前に確認しておくことを説明します。

(1) 前提 OS

PFM - Agent for Enterprise Applications が動作する OS を次に示します。

- Windows Server 2012
- Windows Server 2016

(2) ネットワークの環境設定

Performance Management が動作するためのネットワーク環境について説明します。

(a) IP アドレスの設定

PFM - Agent のホストは、ホスト名で IP アドレスが解決できる環境を設定してください。IP アドレスが解決できない環境では、PFM - Agent は起動できません。

監視ホスト名（Performance Management システムのホスト名として使用する名前）には、実ホスト名またはエイリアス名を使用できます。

- 監視ホスト名に実ホスト名を使用している場合
Windows システムでは `hostname` コマンドを実行して確認したホスト名で、IP アドレスを解決できるように環境を設定してください。
- 監視ホスト名にエイリアス名を使用している場合
設定しているエイリアス名で IP アドレスを解決できるように環境を設定してください。

監視ホスト名の設定については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

なお、監視対象ホストとの IP アドレス解決には、`jpchosts` ファイルに設定した IP アドレスは使用されません。

ホスト名と IP アドレスは、次のどれかの方法で設定してください。

- Performance Management のホスト情報設定ファイル（`jpchosts` ファイル）

- hosts ファイル
- DNS

注意

- PFM - Agent で監視するホスト名（ASHOST 項目に指定するホスト名など）との IP アドレス解決には、jpchosts ファイルに設定した IP アドレスは使用できません。
- Performance Management は、DNS 環境でも運用できますが、FQDN（Fully Qualified Domain Name）形式のホスト名には対応していません。このため、監視ホスト名は、ドメイン名を除いて指定してください。
- 複数の LAN 環境で使用する場合は、jpchosts ファイルで IP アドレスを設定してください。詳細は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。
- Performance Management は、DHCP による動的な IP アドレスが割り振られているホスト上では運用できません。Performance Management を導入するすべてのホストに、固定の IP アドレスを設定してください。

(b) ポート番号の設定

Performance Management プログラムのサービスは、デフォルトで次の表に示すポート番号が割り当てられています。これ以外のサービスまたはプログラムに対しては、サービスを起動するたびに、そのときシステムで使用されていないポート番号が自動的に割り当てられます。また、ファイアウォール環境で、Performance Management を使用するときは、ポート番号を固定してください。ポート番号の固定の手順は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

表 3-1 デフォルトのポート番号と Performance Management プログラムのサービス
(Windows の場合)

サービス説明	サービス名	パラメーター	ポート番号	備考
サービス構成情報管理機能	Name Server	jp1pcnsvr	22285	PFM - Manager の Name Server サービスで使用されるポート番号。 Performance Management のすべてのホストで設定される。
サービス状態管理機能	Status Server	jp1pcstatsvr	22350	PFM - Manager および PFM - Base の Status Server サービスで使用されるポート番号。 PFM - Manager および PFM - Base がインストールされているホストで設定される。
JP1/SLM 連携機能	JP1/ITSLM	-	20905	JP1/SLM でデフォルトとして設定されるポート番号。

(凡例)

- : 該当しない

これらの PFM - Agent が使用するポート番号で通信できるように、ネットワークを設定してください。

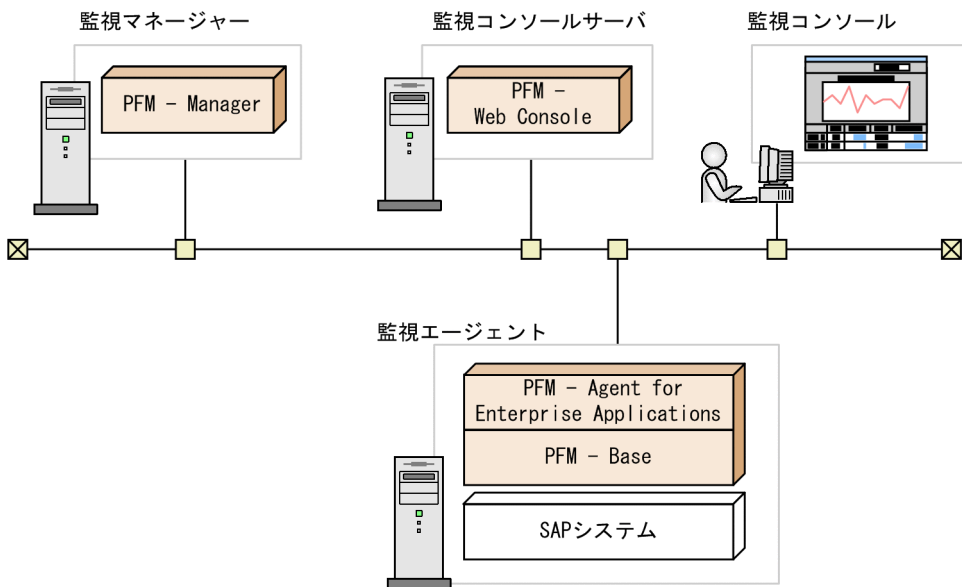
(3) インストールに必要な OS ユーザー権限について

PFM - Agent for Enterprise Applications をインストールするときは、必ず、Administrators 権限を持つアカウントで実行してください。

(4) 前提プログラム

ここでは、PFM - Agent for Enterprise Applications をインストールする場合に必要な前提プログラムを説明します。プログラムの構成図を次に示します。

図 3-1 プログラムの構成図 (SAP システムを同一ホストにインストールする場合)

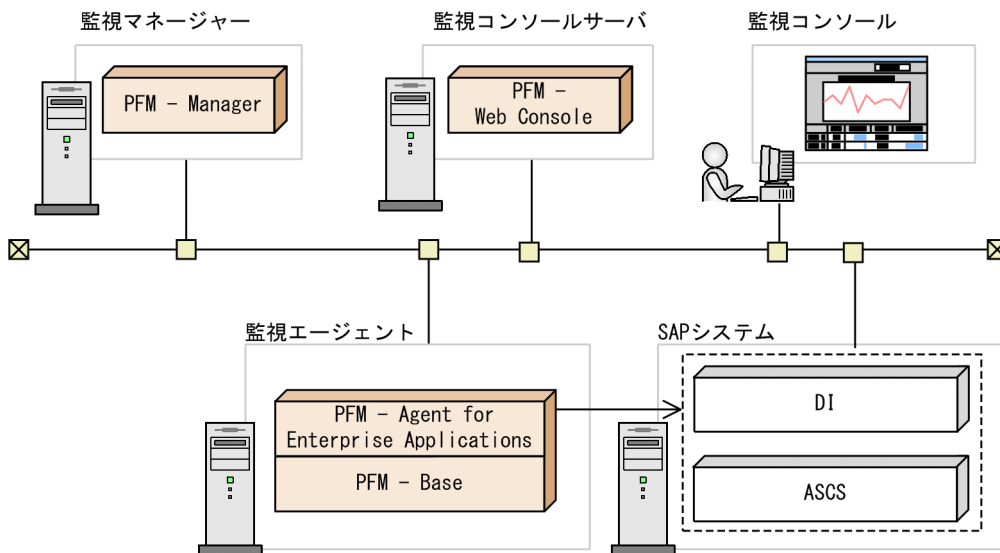


(凡例)

■ : Performance Managementが提供するプログラム

□ : 必要なプログラム

図 3-2 プログラムの構成図 (SAP システムを別ホストでリモート監視する場合)



(凡例)

■ : Performance Managementが提供するプログラム

□ : 必要なプログラム

ASCS : ABAP Central Servicesインスタンス

DI : ダイアログインスタンス

→ : 監視

(a) 監視対象プログラム

PFM - Agent for Enterprise Applications の監視対象プログラムを次に示します。

- SAP NetWeaver^{※1※2}

注※1

ダイアログサービスを持つセントラルインスタンス（プライマリアプリケーションサーバインスタンス）またはダイアログインスタンス（追加アプリケーションサーバインスタンス）が存在するホストだけを監視します。

注※2

SAP NetWeaver の詳細なバージョンはリリースノートを参照してください。

(b) Performance Management プログラム

監視エージェントには、PFM - Agent と PFM - Base をインストールします。PFM - Base は PFM - Agent の前提プログラムです。同一ホストにはほかの PFM - Agent や PFM - RM をインストールする場合でも、PFM - Base は 1 つだけでかまいません。

ただし、PFM - Manager と PFM - Agent を同一ホストにインストールする場合、PFM - Base をインストールする必要はありません。

なお、PFM - Manager または PFM - Base を PFM - Agent のホストに導入する場合は、バージョンが 12-00 のものを導入してください。Performance Management プログラムを導入するホストとバージョンの関係については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のシステム構成のバージョン互換について説明している章を参照してください。

また、PFM - Agent for Enterprise Applications を使って SAP システムの稼働監視を行うためには、PFM - Manager および PFM - Web Console が必要です。

(5) クラスタシステムでのインストールとセットアップについて

クラスタシステムでのインストールとセットアップは、前提となるネットワーク環境やプログラム構成が、通常の構成のセットアップとは異なります。また、実行系ノードと待機系ノードでの作業が必要になります。詳細については、「4. クラスタシステムでの運用」を参照してください。

(6) 障害発生時の資料採取の準備

トラブルが発生した場合にメモリーダンプ、クラッシュダンプ、ユーザーモードプロセスダンプなどが必要になることがあります。トラブル発生時にこれらのダンプを採取する場合は、あらかじめメモリーダンプ、クラッシュダンプ、ユーザーモードプロセスダンプが出力されるように設定してください。

(a) ユーザーモードプロセスダンプの出力設定

次のレジストリを設定することによって、アプリケーションプログラムの異常終了時、即座に調査資料のユーザーモードプロセスダンプを取得できます。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Microsoft\Windows\Windows Error Reporting\LocalDumps
```

このレジストリキーに、次のレジストリ値を設定します。

- DumpFolder : REG_EXPAND_SZ <ダンプ出力先のフォルダ名>
(出力先フォルダには書き込み権限が必要です)
- DumpCount : REG_DWORD <保存するダンプの数>
- DumpType : REG_DWORD 2

注意

- レジストリを設定することで、JP1 だけでなくほかのアプリケーションプログラムでもユーザーモードプロセスダンプが出力されるようになります。ユーザーモードプロセスダンプの出力を設定する場合はこの点にご注意ください。
- ユーザーモードプロセスダンプが出力されると、その分ディスク容量が圧迫されます。ユーザーモードプロセスダンプが出力されるように設定する場合は、十分なディスク領域が確保されているダンプ出力先フォルダを設定してください。

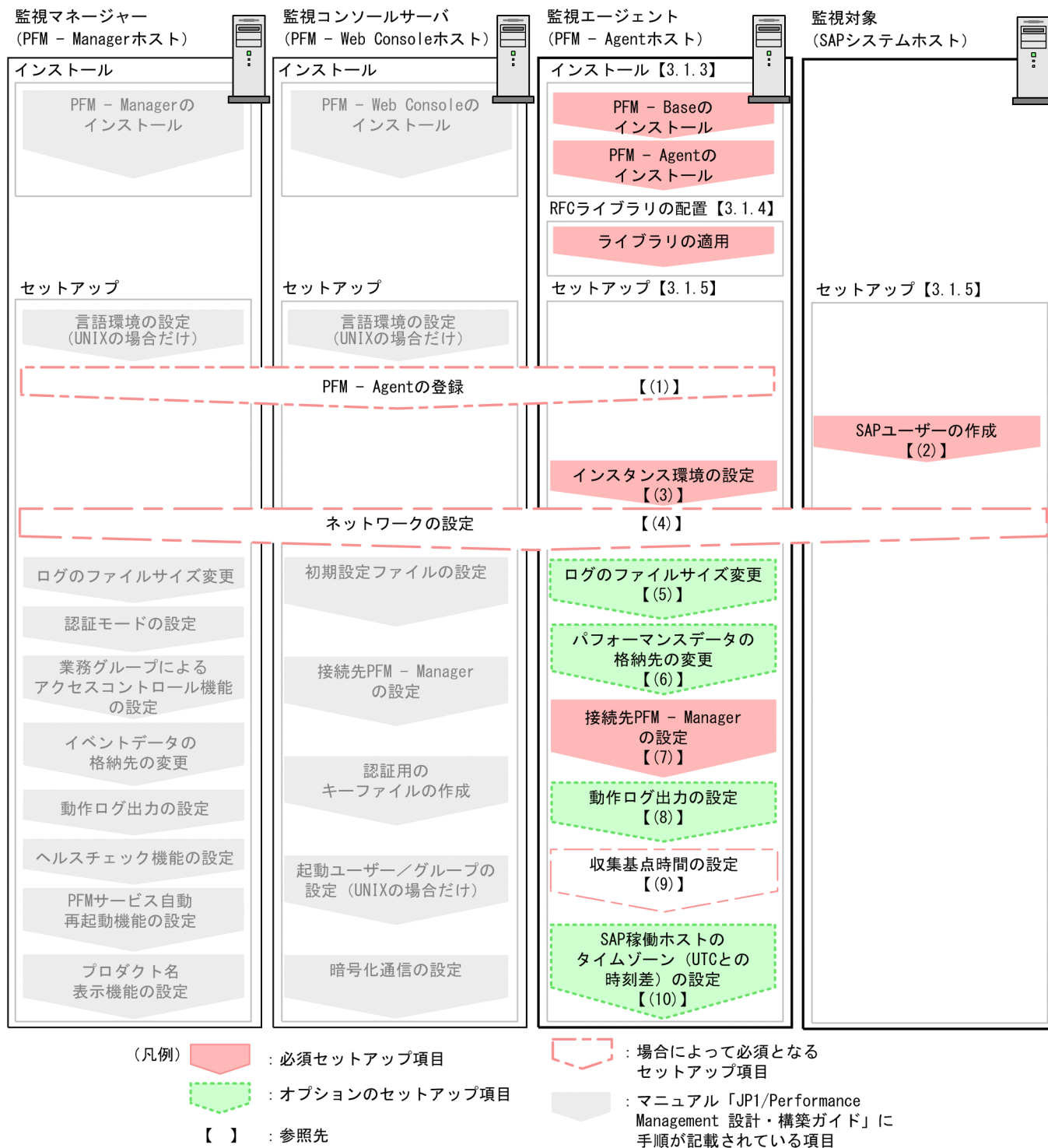
(7) インストール時の注意事項

- システムの状況等によりインストールに必要なファイルの展開に失敗する場合があります。インストールに失敗した場合は再度インストールしてください。再度インストールが失敗した場合、%windir%\TEMP\HCDINST フォルダ下のすべてのファイルを採取し、jpcras コマンドを実行したうえで、システム管理者に連絡してください。
- Windows のイベントビューアは Performance Management のファイルを参照することがあるため、イベントビューアを起動している場合は、イベントビューアを終了してからインストールしてください。
- 次のプラットフォームでは記憶域プールで作成した仮想ディスクへのインストールはサポートしていません。
 - Windows Server 2012
 - Windows Server 2016

3.1.2 Windows 版のインストールとセットアップの流れ

PFM - Agent for Enterprise Applications をインストールおよびセットアップする流れを説明します。

図 3-3 インストールとセットアップの流れ



PFM - Manager および PFM - Web Console のインストールおよびセットアップの手順は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

3.1.3 Windows 版のインストール手順

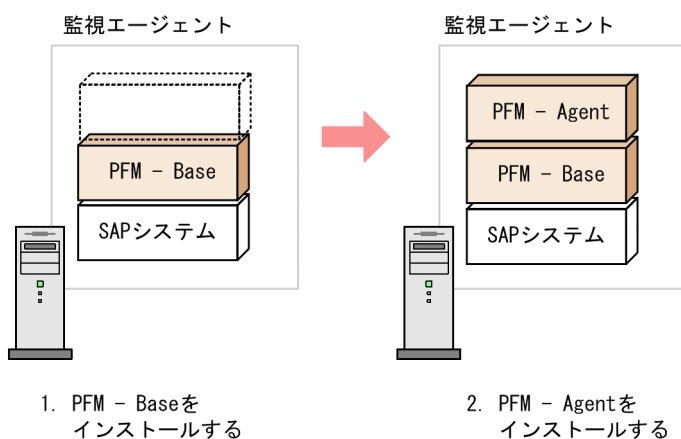
ここでは、PFM - Agent for Enterprise Applications のプログラムをインストールする順序と提供媒体からプログラムをインストールする手順を説明します。

(1) プログラムのインストール順序

まず、PFM - Base をインストールし、次に PFM - Agent をインストールします。PFM - Base がインストールされていないホストに PFM - Agent をインストールすることはできません。

なお、PFM - Manager と同一ホストに PFM - Agent をインストールする場合は、PFM - Manager → PFM - Agent の順でインストールしてください。また、Store データベースのバージョン 1.0 からバージョン 2.0 にバージョンアップする場合、PFM - Agent と PFM - Manager または PFM - Base のインストール順序によって、セットアップ方法が異なります。Store バージョン 2.0 のセットアップ方法については、「[3.6.2 Store バージョン 2.0 への移行](#)」を参照してください。

同一ホストに複数の PFM - Agent をインストールする場合、PFM - Agent 相互のインストール順序は問いません。



(2) プログラムのインストール方法

Windows ホストに Performance Management プログラムをインストールするには、提供媒体を使用する方法と、JP1/NETM/DM を使用してリモートインストールする方法があります。JP1/NETM/DM は日本国内の製品名称です。JP1/NETM/DM を使用する方法については、マニュアル「[JP1/NETM/DM 運用ガイド 1 \(Windows\(R\)用\)](#)」を参照してください。

注意事項

OS のユーザーアカウント制御機能 (UAC) を有効にしている場合は、インストール中にユーザーアカウント制御のダイアログが表示される場合があります。ダイアログが表示された場合は、[続行] ボタンをクリックしてインストールを続行してください。[キャンセル] ボタンをクリックした場合は、インストールが中止されます。

OS のユーザーアカウント制御機能 (UAC) を有効にしていない場合は、インストールするホストに Administrators 権限でログインする必要があります。

提供媒体を使用する場合のインストール手順を次に示します。なお、提供媒体の取扱説明書に総合インストーラーの使用方法を記載していますので、参照してください。

1. Performance Management プログラムをインストールするホストに、Administrators 権限でログオンする。
2. ローカルホストで起動している Performance Management のサービスがあれば、すべて停止する。
停止するサービスは、物理ホストおよび論理ホスト上の Performance Management のサービスです。サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。
3. 提供媒体をセットし、インストーラーを実行する。
起動したインストーラーの指示に従ってインストールを進めます。
PFM - Manager または PFM - Base のインストール時に設定された次の項目が表示され、確認できます。
 - ユーザー情報
 - インストール先のフォルダ
 - プログラムフォルダ
4. [インストール] ボタンをクリックして、インストールを開始する。

参考

インストール先フォルダは、PFM - Manager または PFM - Base のインストール時に指定したインストール先フォルダが指定されます。

3.1.4 ライブラリの適用手順

ここでは、ライブラリの適用手順を説明します。

PFM - Agent for Enterprise Applications を使用するには、SAP が提供する SAP NetWeaver RFC Library を PFM - Agent for Enterprise Applications がインストールされたマシンに配置する必要があります。

SAP NetWeaver RFC Library の入手方法と配置方法については、リリースノートを参照してください。

3.1.5 Windows 版のセットアップ手順

ここでは、PFM - Agent for Enterprise Applications を運用するための、セットアップについて説明します。

《オプション》は使用する環境によって必要になるセットアップ項目、またはデフォルトの設定を変更する場合のオプションのセットアップ項目を示します。

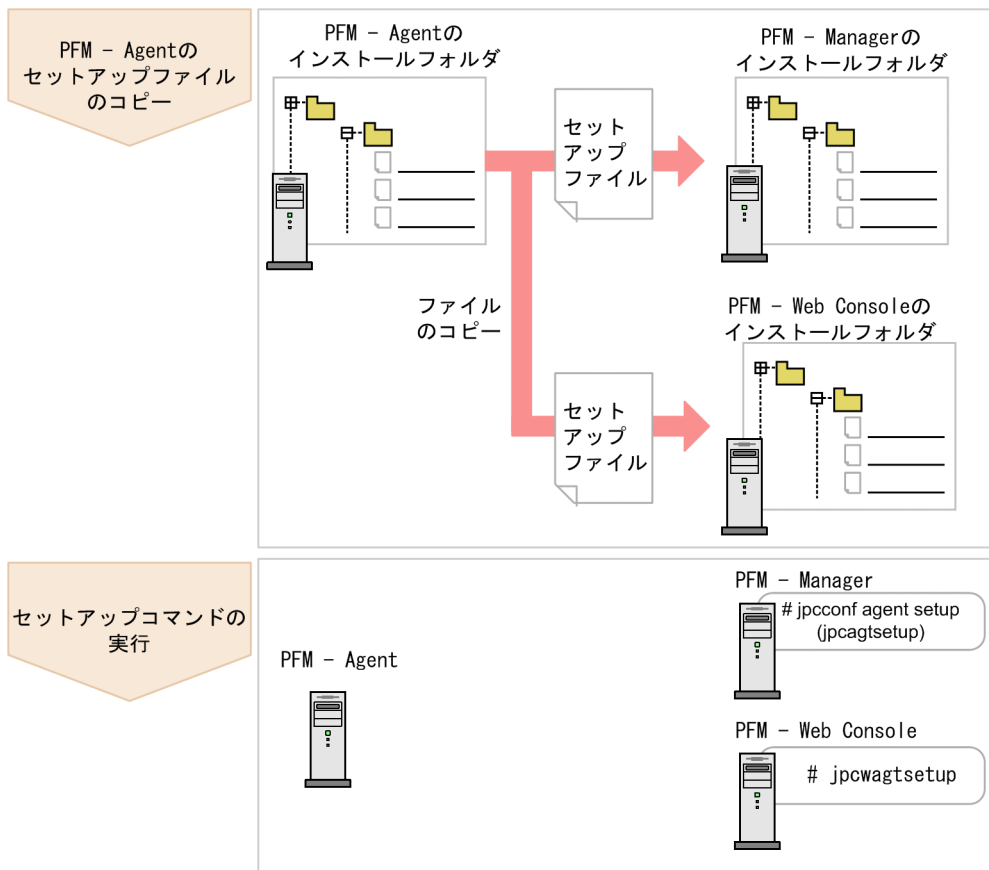
(1) PFM - Manager および PFM - Web Console への PFM - Agent for Enterprise Applications の登録

PFM - Manager および PFM - Web Console を使って PFM - Agent を一元管理するために、PFM - Manager および PFM - Web Console に PFM - Agent for Enterprise Applications を登録する必要があります。

PFM - Manager のバージョンが 08-50 以降の場合、PFM - Agent の登録は自動で行われるため、ここで説明する手順は不要です。ただし、PFM - Manager のリリースノートに記載されていないデータモデルバージョンの PFM - Agent は手動で登録する必要があります。なお、PFM - Agent for Enterprise Applications のデータモデルのバージョンについては、「付録 I バージョン互換」を参照してください。

PFM - Agent の登録の流れを次に示します。

図 3-4 PFM - Agent の登録の流れ



注意

- PFM - Agent の登録は、インスタンス環境を設定する前に実施してください。

- すでに PFM - Agent for Enterprise Applications の情報が登録されている Performance Management システムに、新たに同じバージョンの PFM - Agent for Enterprise Applications を追加した場合、PFM - Agent の登録は必要ありません。
- バージョンが異なる PFM - Agent for Enterprise Applications を、異なるホストにインストールする場合、古いバージョン、新しいバージョンの順でセットアップしてください。
- PFM - Manager と同じホストに PFM - Agent をインストールした場合、`jpccconf agent setup` コマンドが自動的に実行されます。共通メッセージログに「KAVE05908-I エージェント追加セットアップは正常に終了しました」と出力されるので、結果を確認してください。コマンドが正しく実行されていない場合は、コマンドを実行し直してください。コマンドの実行方法については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドの章を参照してください。

(a) PFM - Agent for Enterprise Applications のセットアップファイルをコピーする

PFM - Agent for Enterprise Applications をインストールしたホストにあるセットアップファイルを PFM - Manager および PFM - Web Console をインストールしたホストにコピーします。手順を次に示します。

1. PFM - Web Console が起動されている場合は、停止する。

2. PFM - Agent のセットアップファイルをバイナリーモードでコピーする。

ファイルが格納されている場所およびファイルをコピーする場所を次の表に示します。

表 3-2 コピーするセットアップファイル

PFM - Agent の セットアップファイル	コピー先		
	PFM プログラム名	OS	コピー先フォルダ またはディレクトリ
インストール先フォルダ¥setup ¥jpcagtmw.EXE	PFM - Manager	Windows	PFM - Manager のインストール先フォルダ¥setup
インストール先フォルダ¥setup ¥jpcagtmu.Z		UNIX	/opt/jp1pc/setup/
インストール先フォルダ¥setup ¥jpcagtmw.EXE	PFM - Web Console	Windows	PFM - Web Console のインストール先フォルダ¥setup
インストール先フォルダ¥setup ¥jpcagtmu.Z		UNIX	/opt/jp1pcwebcon/setup/

(b) PFM - Manager ホストでセットアップコマンドを実行する

PFM - Manager で PFM - Agent for Enterprise Applications をセットアップするための次のコマンドを実行します。

```
jpccconf agent setup -key EAP
```

注意

コマンドを実行するローカルホストの Performance Management のプログラムおよびサービスが完全に停止していない状態で `jpcconf agent setup` コマンドを実行した場合、エラーが発生することがあります。その場合は、Performance Management のプログラムおよびサービスが完全に停止したことを確認したあと、再度 `jpcconf agent setup` コマンドを実行してください。

PFM - Manager ホストにある PFM - Agent のセットアップファイルは、この作業が終了したあと、削除してもかまいません。

(c) PFM - Web Console ホストでセットアップコマンドを実行する

PFM - Web Console で PFM - Agent for Enterprise Applications をセットアップするための次のコマンドを実行します。

```
jpcwagtsetup
```

PFM - Web Console ホストにある PFM - Agent のセットアップファイルは、この作業が終了したあと削除してもかまいません。

(2) PFM - Agent for Enterprise Applications で使用する SAP ユーザーの作成

PFM - Agent for Enterprise Applications はパフォーマンス情報を収集するために、SAP 社の通信プロトコルである RFC を使用して、SAP システム側に定義されている外部管理インターフェースを実行します。そのため、PFM - Agent for Enterprise Applications が使用するユーザーをあらかじめ SAP システム側に用意しておく必要があります。

ここでは、SAP システム側に作成する SAP ユーザーのユーザータイプ、パスワード、権限について説明します。

(a) ユーザータイプ

PFM - Agent for Enterprise Applications で使用する SAP ユーザーには、次のタイプのユーザーが使用できます。

- ダイアログ (Dialog)
- システム (System)
- 通信 (Communication)
- サービス (Service)

(b) パスワードに指定できる文字

SAP ユーザーのパスワードは、半角数字(0~9)、半角英字(a~z, A~Z)、および次の半角記号で定義してください。

!@ \$ % & / () = ? ' ` * + ~ # - _ . : { [] } < > |

(c) 必要な権限

ユーザーには次の権限（権限オブジェクト）を設定する必要があります。

- ユーザーが汎用モジュールに RFC 接続するための権限 (S_RFC)
- 外部管理インターフェースを使用するための権限 (S_XMI_PROD)

各権限の値として、次の表に示す値またはすべての項目に「*」を指定したビルトイン権限值 (S_RFC_ALL や S_XMI_ADMIN) を割り当ててください。

表 3-3 ユーザーが汎用モジュールに RFC 接続するための権限 (S_RFC)

権限項目	説明	値
RFC_TYPE	保護される RFC オブジェクトのタイプ	FUGR (汎用グループ)
RFC_NAME	保護される RFC 名	*
ACTVT	アクティビティ	16 (実行)

表 3-4 外部管理インターフェースを使用するための権限 (S_XMI_PROD)

権限項目	説明	値
EXTCOMPANY	外部管理ツールの会社名	HITACHI
EXTPRODUCT	外部管理ツールのプログラム名	JP1
INTERFACE	インターフェース ID	*

(3) インスタンス環境の設定

PFM - Agent for Enterprise Applications で監視する SAP システムのインスタンス情報を設定します。インスタンス情報の設定は、PFM - Agent ホストで実施します。

設定するインスタンス情報を次の表に示します。セットアップの操作を始める前に、次の情報をあらかじめ確認してください。SAP システムのインスタンス情報の詳細については、SAP システムのマニュアルを参照してください。

表 3-5 PFM - Agent for Enterprise Applications のインスタンス情報

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
SID	監視対象となる SAP システム ID	8 バイト以内の半角文字列	—
SERVER※ ¹	監視対象となる SAP インスタンス名 (トランザクションコード SM51 で確認できる、ダイアロ	20 バイト以内の半角文字列	jpccconf inst setup コマンドの -inst で指定したインスタンス名

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
SERVER※1	グサービスを持つ SAP インスタンス名)	20 バイト以内の半角文字列	jpccconf inst setup コマンドの-inst で指定したインスタンス名
ASHOST※1	接続先アプリケーションサーバのホスト名 (トランザクションコード SM51 で確認できる SAP ローカルホスト名)	100 バイト以内の半角文字列	ローカルホスト名
SYSNR	SAP システムのシステム番号を指定する。	2 バイト以内の半角数字	[00]
CLIENT	SAP ユーザーが属するクライアント名 (接続先ダイアログインスタンスに割り当てられているシステム番号)	3 バイト以内の半角数字	[000]
USER	SAP ユーザー名	12 バイト以内の半角文字列	—
EXTPWD	SAP システムへの接続に、拡張パスワードを使用するかどうかを指定する。	Y または N で指定する。 <ul style="list-style-type: none"> • Y: 拡張パスワードを使用する。 • N: 拡張パスワードを使用しない。 	[Y]
PASSWD	SAP ユーザーのパスワード	<ul style="list-style-type: none"> • 拡張パスワードを使用する場合: 40 バイト以内の半角文字列 • 拡張パスワードを使用しない場合: 8 バイト以内の半角文字列 	—
DELAYCONNECT	SAP システムにいつ接続するかを指定する。	Y または N で指定する。 <ul style="list-style-type: none"> • Y: パフォーマンスデータ収集時に SAP システムに接続する。 この場合、Agent Collector サービスは、接続時の SAP システムの稼働状況に関係なく起動される。 • N: Agent Collector サービス起動時に SAP システムに接続する。 この場合、Agent Collector サービスは、接続時に SAP システムが停止していると起動されない。 	[N]
Store Version※2	使用する Store バージョンを指定する。Store バージョンについては「3.6.2 Store バージョ	{1.0 2.0}	2.0

3. インストールとセットアップ

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
Store Version※2	「 バージョン 2.0 への移行 」を参照してください。	{1.0 2.0}	2.0

(凡例)

— : なし

注※1

リモート監視機能を使用する場合、監視対象の SAP インスタンス名および SAP システムのホスト名を設定してください。

注※2

PFM - Agent for Enterprise Applications, および同一ホスト上の PFM - Base または PFM - Manager が 08-10 以降で、初めてインスタンス環境の設定を行う場合に必要となる設定です。

注意

- インスタンス環境を設定していない場合、PFM - Agent for Enterprise Applications のサービスを起動できません。

インスタンス環境を構築するには、`jpccconf inst setup` コマンドを使用します。インスタンス環境の構築手順を次に示します。

1. サービスキーおよびインスタンス名を指定して、`jpccconf inst setup` コマンドを実行する。

例えば、PFM - Agent for Enterprise Applications のインスタンス名 `o246bciSD500` のインスタンス環境を構築する場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccconf inst setup -key EAP -inst o246bciSD500
```

PFM - Agent for Enterprise Applications の場合、インスタンス名は任意ですが、管理のしやすさを考慮し、監視対象とする SAP システムのインスタンス名と紐づくようにしてください。SAP システムのインスタンスには、通常、「ホスト名_SAP システム ID_システム番号」という形式の名称が付けられています。

ただし、`jpccconf inst setup` コマンドでは "_" を指定できません。例えば、SAP システムのインスタンス名が `"o246bci_SD5_00"` の場合、PFM - Agent for Enterprise Applications のインスタンス名を `"o246bciSD500"` としてください。

2. SAP システムのインスタンス情報を設定する。

表 3-5 に示した項目を、コマンドの指示に従って入力してください。各項目とも省略はできません。デフォルトで表示されている値を、項目の入力とする場合はリターンキーだけを押ししてください。

すべての入力が終了すると、インスタンス環境が構築されます。構築されるインスタンス環境を次に示します。

• インスタンス環境のフォルダ構成

次のフォルダ下にインスタンス環境が構築されます。

3. インストールとセットアップ

- 物理ホスト運用の場合：インストール先フォルダ¥agtm
- 論理ホスト運用の場合：環境ディレクトリ¥jp1pc¥agtm

注※

環境ディレクトリは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

構築されるインスタンス環境のフォルダ構成を次に示します。

表 3-6 インスタンス環境のフォルダ構成

フォルダ名・ファイル名		説明	
agent	インスタンス名	jpcagt.ini	Agent Collector サービス起動情報ファイル
		jpcagt.ini.model※	Agent Collector サービス起動情報ファイルのモデルファイル
		jpcMcollect.ini	SAP 通信プロセス設定ファイル
		jr3alget.ini	CCMS Alert Monitor Command (PD_ALMX) レコード用の環境パラメーター設定ファイル
		jr3slget.ini	System Log Monitor Command (PD_SLMX) レコード用の環境パラメーター設定ファイル
		log	ログファイル格納フォルダ
store	インスタンス名	jpcsto.ini	Agent Store サービス起動情報ファイル
		jpcsto.ini.model※	Agent Store サービス起動情報ファイルのモデルファイル
		*.DAT	データモデル定義ファイル
		dump	エクスポート先フォルダ
		backup	バックアップ先フォルダ
		import	インポート先フォルダ (Store バージョン 2.0 の場合)
		log	ログファイル格納フォルダ
		partial	部分バックアップ先フォルダ (Store バージョン 2.0 の場合)
		STPD	PD レコードタイプのパフォーマンスデータ格納フォルダ (Store バージョン 2.0 の場合)
		STPI	PI レコードタイプのパフォーマンスデータ格納フォルダ (Store バージョン 2.0 の場合)
		STPL	PL レコードタイプのパフォーマンスデータ格納フォルダ (Store バージョン 2.0 の場合)

注※

インスタンス環境を構築した時点の設定値に戻したいときに使用します。

- インスタンス環境のサービス ID

インスタンス環境のサービス ID は、プロダクト ID、機能 ID、インスタンス番号、インスタンス名、ホスト名をつないだ文字列になります。プロダクト名表示機能が有効な場合、インスタンス名[ホスト名]<プログラム名>となります。

例えばサービス ID 「MA1o246bciSD500[host01]」 は、次のインスタンス環境を表します。

- プロダクト ID : M
- 機能 ID : A
- インスタンス番号 : 1
- インスタンス名 : o246bciSD500
- ホスト名 : host01

サービス ID については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、付録を参照してください。

• インスタンス環境の Windows のサービス名

インスタンス環境の Windows のサービス名は次のようになります。

- Agent Collector サービス : PFM - Agent for R/3 インスタンス名
- 論理ホスト運用の場合の Agent Collector サービス : PFM - Agent for R/3 インスタンス名 [論理ホスト名]
- Agent Store サービス : PFM - Agent Store for R/3 インスタンス名
- 論理ホスト運用の場合の Agent Store サービス : PFM - Agent Store for R/3 インスタンス名 [論理ホスト名]

Windows のサービス名については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、付録を参照してください。

(4) ネットワークの設定 オプション

Performance Management を使用するネットワーク構成に応じて、変更する場合にだけ必要な設定です。

ネットワークの設定では次の 2 つの項目を設定できます。

• IP アドレスを設定する

Performance Management を複数の LAN に接続されたネットワークで使用するときに設定します。複数の IP アドレスを設定するには、jpchosts ファイルにホスト名と IP アドレスを定義します。設定した jpchosts ファイルは Performance Management システム全体で統一させてください。

詳細についてはマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

• ポート番号を設定する

Performance Management が使用するポート番号を設定できます。運用での混乱を避けるため、ポート番号とサービス名は、Performance Management システム全体で統一させてください。

ポート番号の設定の詳細についてはマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

(5) ログのファイルサイズ変更 オプション

Performance Management の稼働状況を、Performance Management 独自のログファイルに出力します。このログファイルを「共通メッセージログ」と呼びます。このファイルサイズを変更したい場合にだけ、必要な設定です。

詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

(6) パフォーマンスデータの格納先の変更 オプション

PFM - Agent for Enterprise Applications で管理されるパフォーマンスデータを格納するデータベースの保存先、バックアップ先、エクスポート先、部分バックアップ先またはインポート先のフォルダを変更したい場合にだけ、必要な設定です。

パフォーマンスデータは、デフォルトで、次の場所に保存されます。

保存先	フォルダ名
データベースの保存先	インストール先フォルダ%agtm%store%インスタンス名%
バックアップ先	インストール先フォルダ%agtm%store%インスタンス名%backup%
エクスポート先	インストール先フォルダ%agtm%store%インスタンス名%dump%
部分バックアップ先 (Store バージョン 2.0 の場合)	インストール先フォルダ%agtm%store%インスタンス名%partial%
インポート先 (Store バージョン 2.0 の場合)	インストール先フォルダ%agtm%store%インスタンス名%import%

詳細については、「[3.6.1 パフォーマンスデータの格納先の変更](#)」を参照してください。

(7) PFM - Agent for Enterprise Applications の接続先 PFM - Manager の設定

PFM - Agent がインストールされているホストで、その PFM - Agent を管理する PFM - Manager を設定します。接続先の PFM - Manager を設定するには、`jpconf mgrhost define` コマンドを使用します。

注意

- 同一ホスト上に、複数の PFM - Agent がインストールされている場合でも、接続先に指定できる PFM - Manager は、1 つだけです。PFM - Agent ごとに異なる PFM - Manager を接続先に設定することはできません。

- PFM - Agent と PFM - Manager が同じホストにインストールされている場合、接続先 PFM - Manager はローカルホストの PFM - Manager となります。この場合、接続先の PFM - Manager をほかの PFM - Manager に変更できません。

手順を次に示します。

1. Performance Management のサービスを停止する。

セットアップを実施する前に、ローカルホストで Performance Management のサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、サービスの起動と停止について説明している章を参照してください。

jpccconf mgrhost define コマンド実行時に、Performance Management のサービスが起動されている場合は、停止を問い合わせるメッセージが表示されます。

2. 接続先の PFM - Manager ホストのホスト名を指定して、jpccconf mgrhost define コマンドを実行する。

例えば、接続先の PFM - Manager がホスト host01 上にある場合、次のように指定します。

```
jpccconf mgrhost define -s host01
```

(8) 動作ログ出力の設定 〈オプション〉

PFM サービスの起動・停止時や、PFM - Manager との接続状態の変更時に動作ログを出力したい場合に必要な設定です。動作ログとは、システム負荷などのしきい値オーバーに関するアラーム機能などと連動した動作情報の履歴を出力するログ情報です。

設定方法については、「付録】動作ログの出力」を参照してください。

(9) 収集基点時間の設定

リモート監視機能を使用する場合、システムログ情報抽出機能および CCMS アラート情報抽出機能の収集基点時間を設定してください。環境パラメーター設定ファイルの設定手順や設定項目の詳細については、「5.3 環境パラメーター設定ファイル」および「6.3 環境パラメーター設定ファイル」を参照してください。

(10) SAP システムのタイムゾーンの設定 〈オプション〉

リモート監視機能を使用する場合、システムログ情報抽出機能で考慮する SAP システムのタイムゾーン (UTC との時刻差) を設定します。環境パラメーター設定ファイルの設定手順や設定項目の詳細については、「5.3 環境パラメーター設定ファイル」および「6.3 環境パラメーター設定ファイル」を参照してください。

3.1.6 Windows 版のインストールとセットアップに関する注意事項

(1) 環境変数に関する注意事項

Performance Management では JPC_HOSTNAME を環境変数として使用しているため、ユーザー独自に環境変数として設定しないでください。設定した場合は、Performance Management が正しく動作しません。

(2) 同一ホストに Performance Management プログラムを複数インストール、セットアップするときの注意事項

Performance Management は、同一ホストに PFM - Manager, PFM - Web Console, および PFM - Agent をインストールすることもできます。その場合の注意事項を次に示します。

- PFM - Manager と PFM - Agent を同一ホストにインストールする場合、PFM - Base は不要です。この場合、PFM - Agent の前提プログラムは PFM - Manager になるため、PFM - Manager をインストールしてから PFM - Agent をインストールしてください。
- PFM - Base と PFM - Manager は同一ホストにインストールできません。PFM - Base と PFM - Agent がインストールされているホストに PFM - Manager をインストールする場合は、PFM - Web Console 以外のすべての Performance Management プログラムをアンインストールしたあとに PFM - Manager → PFM - Agent の順でインストールしてください。また、PFM - Manager と PFM - Agent がインストールされているホストに PFM - Base をインストールする場合も同様に、PFM - Web Console 以外のすべての Performance Management プログラムをアンインストールしたあとに PFM - Base → PFM - Agent の順でインストールしてください。
- PFM - Manager がインストールされているホストに PFM - Agent をインストールすると、接続先 PFM - Manager はローカルホストの PFM - Manager となります。この場合、接続先 PFM - Manager をリモートホストの PFM - Manager に変更できません。リモートホストの PFM - Manager に接続したい場合は、インストールするホストに PFM - Manager がインストールされていないことを確認してください。
- PFM - Agent がインストールされているホストに PFM - Manager をインストールすると、PFM - Agent の接続先 PFM - Manager は自ホスト名に設定し直されます。共通メッセージログに設定結果が出力されています。結果を確認してください。
- PFM - Web Console がインストールされているホストに、PFM - Agent をインストールする場合は、ブラウザの画面をすべて閉じてからインストールを実施してください。
- Performance Management プログラムを新規にインストールした場合は、ステータス管理機能がデフォルトで有効になります。ただし、07-50 から 08-00 以降にバージョンアップインストールした場合は、ステータス管理機能の設定状態はバージョンアップ前のままとなります。ステータス管理機能の設定を変更する場合は、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

ポイント

システムの性能や信頼性を向上させるため、PFM - Manager, PFM - Web Console, および PFM - Agent はそれぞれ別のホストで運用することをお勧めします。

(3) バージョンアップの注意事項

Performance Management プログラムをバージョンアップする場合の注意事項については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップの章にある、バージョンアップの注意事項について説明している個所を参照してください。

古いバージョンの PFM - Agent からバージョンアップする場合の注意事項についての詳細は、「付録 H 移行手順と移行時の注意事項」を参照してください。なお、バージョンアップについての詳細は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の付録を参照してください。

(4) SAP システムを ASCS インスタンス構成としている場合の注意事項

SAP システムを監視する場合は、ダイアログサービスを持つセントラルインスタンス（プライマリアプリケーションサーバインスタンス）またはダイアログインスタンス（追加アプリケーションサーバインスタンス）が存在するホストごとにインスタンス環境を設定する必要があります。

(5) リモート監視機能を使用する場合の注意事項

- ・ リモート監視を行う場合は、NTP などホスト間のシステム時刻が同じになるようにしてください。
- ・ PFM - Agent が稼働しているホストと監視対象の SAP システムが稼働しているホストのタイムゾーンが異なる場合、「3.1.5(10) SAP システムのタイムゾーンの設定」で説明している手順で SAP システムのタイムゾーンを使用する設定をしてください。

(6) 管理用リモートデスクトップ接続を使用する場合の制限事項

管理用リモートデスクトップ接続を使用してインストールおよび設定操作する場合、次の制限事項があります。

- ・ インストール、セットアップ、アンインストール、および保守作業の目的でだけ使用可能です。
- ・ リモートデスクトップ接続を使用してインストール、セットアップおよびアンインストールの設定操作を行うには、管理者 (Administrator), または Administrators グループに所属する OS のユーザーで接続先にログインしてください。
- ・ 複数のセッションから同時に設定操作を行わないでください。設定操作は 1 つのセッションから行ってください。
- ・ リモートデスクトップを使用して製品のインストールを行う場合は、ターミナルサービスの環境を「インストールモード」に変更してからインストールしてください。

(7) その他の注意事項

- SAP システムの接続先ダイアログインスタンスに取得対象の MTE 名がない場合、一部のレコードのフィールドは、接続先ダイアログインスタンスに存在しないためパフォーマンスデータを取得できません。このため、共通メッセージや Windows イベントログに警告メッセージ (KAVF14173-W) が出力されます。この警告メッセージは、各レコードの「Log」(収集したパフォーマンスデータを Store データベースに記録するかどうか) の設定内容に関係なく出力されます。
- Performance Management のプログラムおよびサービスや、Performance Management のファイルを参照するような他プログラム (例えば Windows のイベントビューアなど) を起動したままインストールした場合、システムの再起動を促すメッセージが表示されることがあります。この場合は、メッセージに従ってシステムを再起動し、インストールを完了させてください。
- Performance Management のプログラムおよびサービスや、Performance Management のファイルを参照するような他プログラム (例えば Windows のイベントビューアなど) を起動したままの状態、ディスク容量が不足している状態、またはディレクトリ権限がない状態でインストールした場合、ファイルの展開に失敗することがあります。Performance Management のプログラムおよびサービスや、Performance Management のファイルを参照するような他プログラムが起動している場合はすべて停止してからインストールし直してください。ディスク容量不足やディレクトリ権限不足が問題である場合は、問題を解決したあとでインストールし直してください。
- Performance Management のプログラムをインストールする場合、次に示すセキュリティ関連プログラムがインストールされていないかどうか確認してください。インストールされている場合、次の説明に従って対処してください。
 - セキュリティ監視プログラム
セキュリティ監視プログラムを停止するかまたは設定を変更して、Performance Management のプログラムのインストールを妨げないようにしてください。
 - ウィルス検出プログラム
ウィルス検出プログラムを停止してから Performance Management のプログラムをインストールすることを推奨します。
Performance Management のプログラムのインストール中にウィルス検出プログラムが稼働している場合、インストールの速度が低下したり、インストールが実行できなかつたり、または正しくインストールできなかつたりすることがあります。
 - プロセス監視プログラム
プロセス監視プログラムを停止するかまたは設定を変更して、Performance Management のサービスまたはプロセス、および共通コンポーネントのサービスまたはプロセスを監視しないようにしてください。
Performance Management のプログラムのインストール中に、プロセス監視プログラムによって、これらのサービスまたはプロセスが起動されたり停止されたりすると、インストールに失敗することがあります。
- PFM - Agent for Enterprise Applications を新規にインストールした場合、「プログラムと機能」ダイアログボックスを開いた時に、表示される PFM - Agent for Enterprise Applications のアイコン

が、最初に表示されたアイコンからすぐに別のアイコンに置き換わる場合があります。これはアイコンの表示だけの問題であり、PFM - Agent for Enterprise Applications の動作に影響はありません。

- PFM - Agent for Enterprise Applications は、IPv6 アドレスを使用した通信をサポートしていません。IPv4 と IPv6 のデュアルスタックの OS 環境で PFM - Agent for Enterprise Applications を使用する場合は、接続先の SAP ホスト名から求まる IP アドレスが、IPv4 で解決できる必要があります。この場合、本製品の実行環境に、SAP システムとの通信で IPv6 を利用するための環境変数 `SAP_IPv6_ACTIVE` を設定しないでください。

3.2 Linux 版のインストールとセットアップ

ここでは、PFM - Agent for Enterprise Applications をインストールおよびセットアップする手順を示します。

3.2.1 Linux 版のインストールの前に確認すること

PFM - Agent for Enterprise Applications をインストールおよびセットアップする前に確認しておくことを説明します。

(1) 前提 OS

PFM - Agent for Enterprise Applications が動作する OS を次に示します。

- Linux

(2) ネットワークの環境設定

Performance Management が動作するためのネットワーク環境について説明します。

(a) IP アドレスの設定

PFM - Agent のホストは、ホスト名で IP アドレスが解決できる環境を設定してください。IP アドレスが解決できない環境では、PFM - Agent は起動できません。

監視ホスト名（Performance Management システムのホスト名として使用する名前）には、実ホスト名またはエイリアス名を使用できます。

- 監視ホスト名に実ホスト名を使用している場合

Linux システムでは `uname -n` コマンドを実行して確認したホスト名で、IP アドレスを解決できるように環境を設定してください。なお、Linux システムでは、`hostname` コマンドでホスト名を取得することもできます。

- 監視ホスト名にエイリアス名を使用している場合

設定しているエイリアス名で IP アドレスを解決できるように環境を設定してください。

監視ホスト名の設定については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

なお、監視対象ホストとの IP アドレス解決には、`jpchosts` ファイルに設定した IP アドレスは使用されません。

ホスト名と IP アドレスは、次のどれかの方法で設定してください。

- Performance Management のホスト情報設定ファイル（`jpchosts` ファイル）

- hosts ファイル
- DNS

注意

- PFM - Agent で監視するホスト名（ASHOST 項目に指定するホスト名など）との IP アドレス解決には、jpchosts ファイルに設定した IP アドレスは使用できません。
- Performance Management は、DNS 環境でも運用できますが、FQDN（Fully Qualified Domain Name）形式のホスト名には対応していません。このため、監視ホスト名は、ドメイン名を除いて指定してください。
- 複数の LAN 環境で使用する場合は、jpchosts ファイルで IP アドレスを設定してください。詳細は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。
- Performance Management は、DHCP による動的な IP アドレスが割り振られているホスト上では運用できません。Performance Management を導入するすべてのホストに、固定の IP アドレスを設定してください。

(b) ポート番号の設定

Performance Management プログラムのサービスは、デフォルトで次の表に示すポート番号が割り当てられています。これ以外のサービスまたはプログラムに対しては、サービスを起動するたびに、そのときシステムで使用されていないポート番号が自動的に割り当てられます。また、ファイアウォール環境で、Performance Management を使用するときは、ポート番号を固定してください。ポート番号の固定の手順は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

表 3-7 デフォルトのポート番号と Performance Management プログラムのサービス（Linux の場合）

サービス説明	サービス名	パラメーター	ポート番号	備考
サービス構成情報管理機能	Name Server	jp1pcnsvr	22285	PFM - Manager の Name Server サービスで使用されるポート番号。 Performance Management のすべてのホストで設定される。
サービス状態管理機能	Status Server	jp1pcstatsvr	22350	PFM - Manager および PFM - Base の Status Server サービスで使用されるポート番号。 PFM - Manager および PFM - Base がインストールされているホストで設定される。
JP1/SLM 連携機能	JP1/ITSLM	-	20905	JP1/SLM でデフォルトとして設定されるポート番号です。

(凡例)

— : 該当しない

これらの PFM - Agent が使用するポート番号で通信できるように、ネットワークを設定してください。

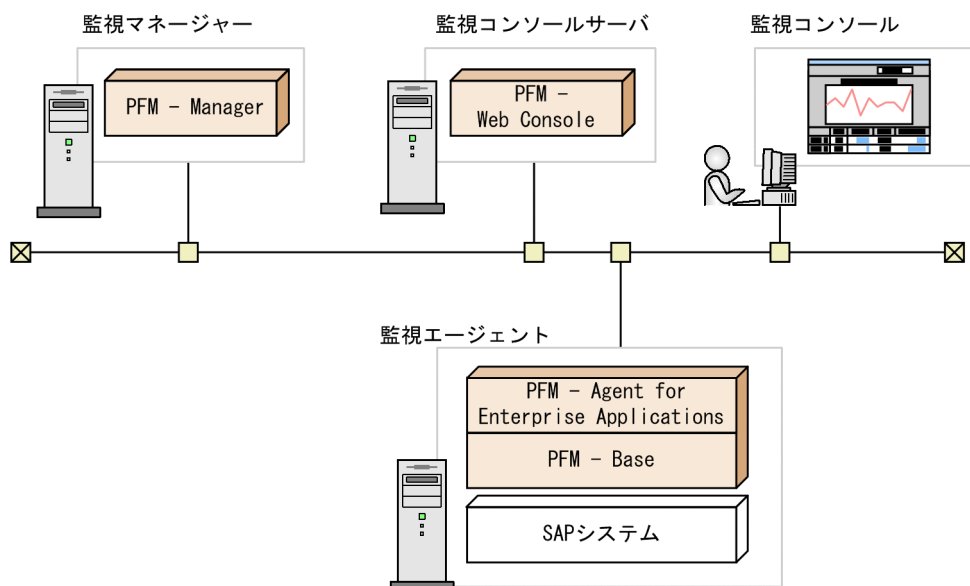
(3) インストールに必要な OS ユーザー権限について

PFM - Agent for Enterprise Applications をインストールするときは、必ず、スーパーユーザー権限を持つアカウントで実行してください。

(4) 前提プログラム

ここでは、PFM - Agent for Enterprise Applications をインストールする場合に必要な前提プログラムを説明します。プログラムの構成図を次に示します。

図 3-5 プログラムの構成図 (SAP システムを同一ホストにインストールする場合)

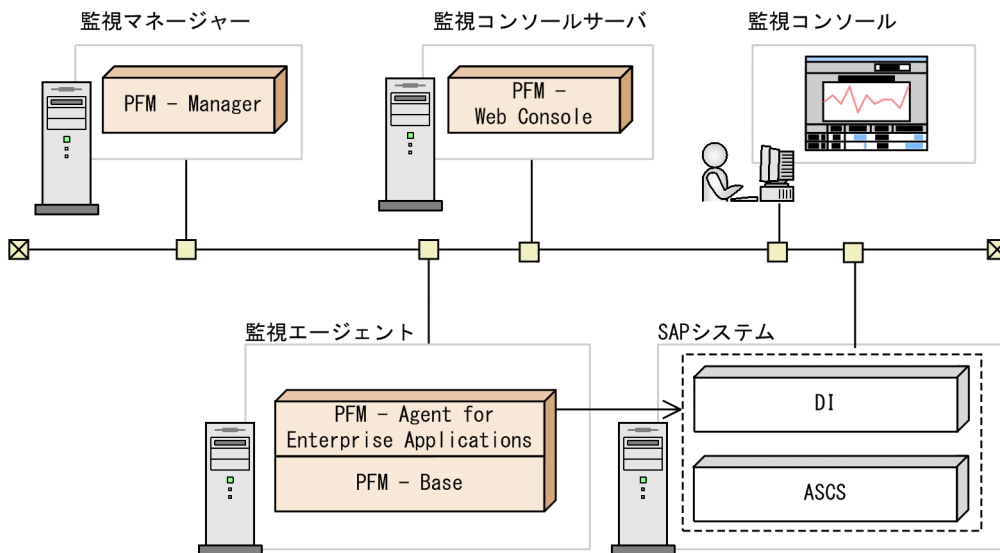


(凡例)

■ : Performance Managementが提供するプログラム

□ : 必要なプログラム

図 3-6 プログラムの構成図 (SAP システムを別ホストでリモート監視する場合)



(凡例)

■ : Performance Managementが提供するプログラム

□ : 必要なプログラム

ASCS : ABAP Central Servicesインスタンス

DI : ダイアログインスタンス

→ : 監視

(a) 監視対象プログラム

PFM - Agent for Enterprise Applications の監視対象プログラムを次に示します。

- SAP NetWeaver^{※1※2}

注※1

ダイアログサービスを持つセントラルインスタンス（プライマリアプリケーションサーバインスタンス）またはダイアログインスタンス（追加アプリケーションサーバインスタンス）が存在するホストだけを監視します。

注※2

SAP NetWeaver の詳細なバージョンはリリースノートを参照してください。

(b) Performance Management プログラム

監視エージェントには、PFM - Agent と PFM - Base をインストールします。PFM - Base は PFM - Agent の前提プログラムです。同一ホストにはほかの PFM - Agent や PFM - RM をインストールする場合でも、PFM - Base は 1 つだけでかまいません。

ただし、PFM - Manager と PFM - Agent を同一ホストにインストールする場合、PFM - Base をインストールする必要はありません。

なお、PFM - Manager または PFM - Base を PFM - Agent のホストに導入する場合は、バージョンが 12-00 のものを導入してください。Performance Management プログラムを導入するホストとバージョンの関係については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のシステム構成のバージョン互換について説明している章を参照してください。

また、PFM - Agent for Enterprise Applications を使って SAP システムの稼働監視を行うためには、PFM - Manager および PFM - Web Console が必要です。

(5) クラスタシステムでのインストールとセットアップについて

クラスタシステムでのインストールとセットアップは、前提となるネットワーク環境やプログラム構成が、通常の構成のセットアップとは異なります。また、実行系ノードと待機系ノードでの作業が必要になります。詳細については、「4. クラスタシステムでの運用」を参照してください。

(6) 障害発生時の資料採取の準備

トラブルが発生した場合に調査資料として、コアダンプファイルが必要になることがあります。コアダンプファイルの出力はユーザーの環境設定に依存するため、次に示す設定を確認しておいてください。

コアダンプファイルのサイズ設定

コアダンプファイルの最大サイズは、スーパーユーザーのコアダンプファイルのサイズ設定 (ulimit -c) によって制限されます。次のようにスクリプトを設定してください。

```
ulimit -c unlimited
```

この設定が、ご使用のマシンのセキュリティポリシーに反する場合は、スクリプトの設定を次のようにコメント行にしてください。

```
# ulimit -c unlimited
```

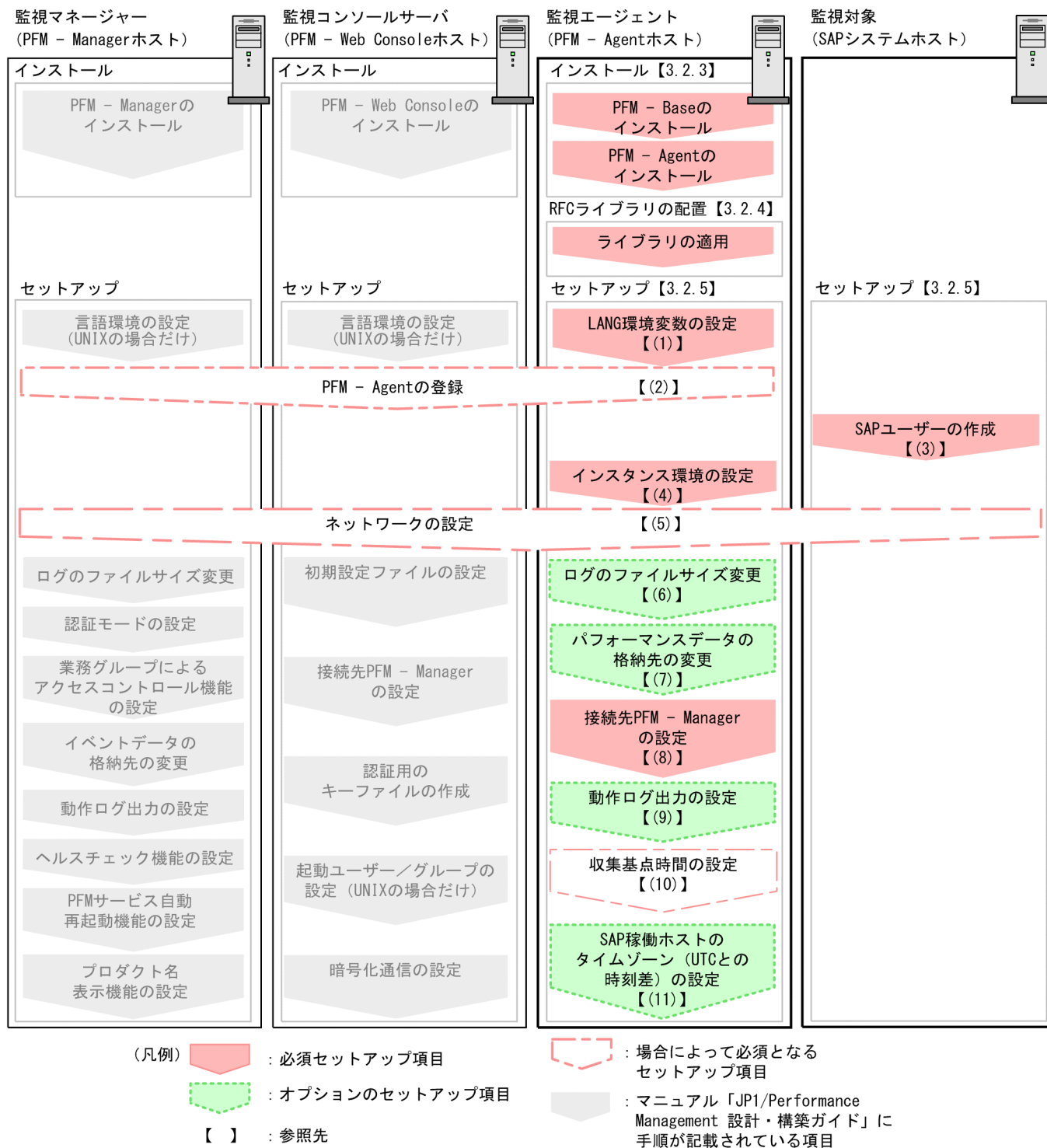
❗ 重要

コメント行にした場合、プロセスで発生したセグメンテーション障害やバス障害などのコアダンプファイルの出力契機に、コアダンプが出力されないため、調査できないおそれがあります。

3.2.2 Linux 版のインストールとセットアップの流れ

PFM - Agent for Enterprise Applications をインストールおよびセットアップする流れを説明します。

図 3-7 インストールとセットアップの流れ



PFM - Manager および PFM - Web Console のインストールおよびセットアップの手順は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

3.2.3 Linux 版のインストール手順

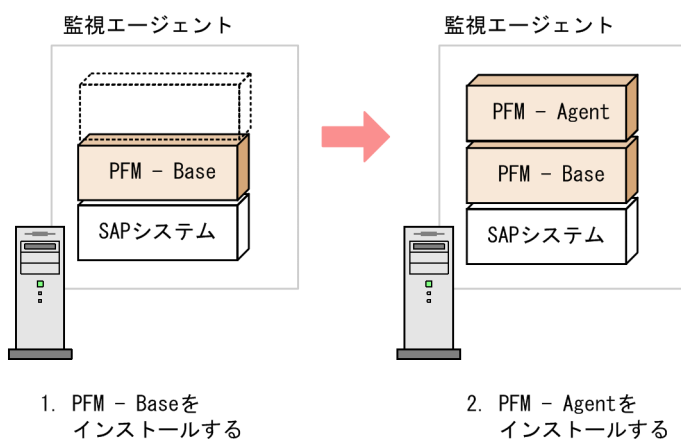
ここでは、PFM - Agent for Enterprise Applications のプログラムをインストールする順序と提供媒体からプログラムをインストールする手順を説明します。

(1) プログラムのインストール順序

まず、PFM - Base をインストールし、次に PFM - Agent をインストールします。PFM - Base がインストールされていないホストに PFM - Agent をインストールすることはできません。

なお、PFM - Manager と同一ホストに PFM - Agent をインストールする場合は、PFM - Manager → PFM - Agent の順でインストールしてください。また、Store データベースのバージョン 1.0 からバージョン 2.0 にバージョンアップする場合、PFM - Agent と PFM - Manager または PFM - Base のインストール順序によって、セットアップ方法が異なります。Store バージョン 2.0 のセットアップ方法については、「[3.6.2 Store バージョン 2.0 への移行](#)」を参照してください。

同一ホストに複数の PFM - Agent をインストールする場合、PFM - Agent 相互のインストール順序は問いません。



(2) プログラムのインストール方法

Linux ホストに Performance Management プログラムをインストールするには、提供媒体を使用する方法と、JP1/NETM/DM を使用してリモートインストールする方法があります。JP1/NETM/DM を使用する方法については、次のマニュアルを参照してください。

- 「JP1/NETM/DM Manager」
- 「JP1/NETM/DM SubManager (UNIX(R)用)」
- 「JP1/NETM/DM Client (UNIX(R)用)」

注意

インストールするホストで Performance Management のサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。なお、停止するサービスは物理ホスト上および論理ホスト上のすべてのサービスで

す。サービスの停止方法は、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、サービスの起動と停止について説明している章を参照してください。

提供媒体を使用する場合のインストール手順を示します。

(a) Linux の場合

1. Performance Management のプログラムをインストールするホストに、スーパーユーザーでログインするか、またはsu コマンドでユーザーをスーパーユーザーに変更する。

2. ローカルホストで Performance Management のサービスをすべて停止する。

Performance Management のサービスが起動している場合は、すべて停止してください。

3. Performance Management のプログラムの媒体をセットする。

4. mount コマンドを実行して、該当する装置をマウントする。

例えば、該当する装置を/cdrom にマウントする場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
mount -r -o mode=0544 デバイススペシャルファイル名 /cdrom
```

指定するコマンド、デバイススペシャルファイル名およびマウントディレクトリ名は、使用する環境によって異なります。

5. 次のコマンドを実行して、Hitachi PP Installer を起動する。

```
/cdrom/X64LIN/SETUP /cdrom
```

Hitachi PP Installer が起動され、初期画面が表示されます。

6. 初期画面で「I」を入力する。

インストールできるプログラムの一覧が表示されます。

7. インストールしたい Performance Management のプログラムを選択して、「I」を入力する。

選択したプログラムがインストールされます。なお、プログラムを選択するには、カーソルを移動させ、スペースキーで選択します。

8. インストールが正常終了したら、「Q」を入力する。

Hitachi PP Installer の初期画面に戻ります。

参考

PFM - Web Console を除く Performance Management インストールディレクトリは、インストール時に自動的に生成されます。2 回目以降のインストールでも、初回のインストール時に指定したディレクトリにインストールされます。

3.2.4 ライブラリの適用手順

ここでは、ライブラリの適用手順を説明します。

PFM - Agent for Enterprise Applications を使用するには、SAP が提供する SAP NetWeaver RFC Library を PFM - Agent for Enterprise Applications がインストールされたマシンに配置する必要があります。

SAP NetWeaver RFC Library の入手方法と配置方法については、リリースノートを参照してください。

3.2.5 Linux 版のセットアップ手順

ここでは、PFM - Agent for Enterprise Applications を運用するための、セットアップについて説明します。

〈オプション〉は使用する環境によって必要になるセットアップ項目、またはデフォルトの設定を変更する場合のオプションのセットアップ項目を示します。

(1) LANG 環境変数を設定する

PFM - Agent for Enterprise Applications で使用できる LANG 環境変数を次の表に示します。

なお、これらの LANG 環境変数を設定する前に、設定する言語環境が正しくインストール・構築されていることを確認しておいてください。正しくインストール・構築されていない場合、文字化けが発生したり、定義データが不当に書き換わってしまったりすることがあります。

注意

共通メッセージログの言語は、サービス起動時やコマンド実行時に設定されている LANG 環境変数によって決まります。そのため、日本語や英語など、複数の言語コードの文字列が混在することがあります。

表 3-8 PFM - Agent for Enterprise Applications で使用できる LANG 環境変数

OS	言語種別		LANG 環境変数の値
Linux	日本語	Shift-JIS コード	ja_JP.SJIS*または ja_JP.sjis*
		UTF-8	ja_JP.UTF-8
	英語（日本語なし）		C
	中国語（簡体字）	GB18030	zh_CN.gb18030
		UTF-8	zh_CN.UTF-8 または zn_CN.utf8

注※ SUSE Linux でだけで使用できます。

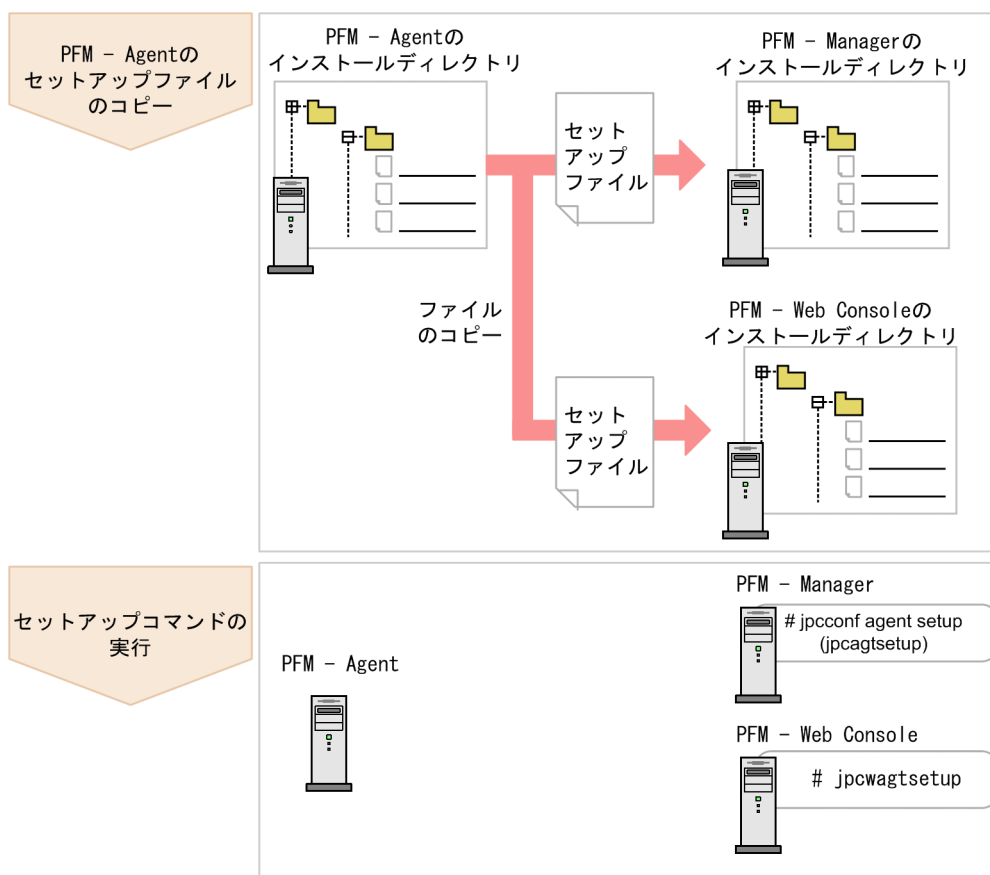
(2) PFM - Manager および PFM - Web Console への PFM - Agent for Enterprise Applications の登録

PFM - Manager および PFM - Web Console を使って PFM - Agent を一元管理するために、PFM - Manager および PFM - Web Console に PFM - Agent for Enterprise Applications を登録する必要があります。

PFM - Manager のバージョンが 08-50 以降の場合、PFM - Agent の登録は自動で行われるため、ここで説明する手順は不要です。ただし、PFM - Manager のリリースノートに記載されていないデータモデルバージョンの PFM - Agent は手動で登録する必要があります。なお、PFM - Agent for Enterprise Applications のデータモデルのバージョンについては、「付録 I バージョン互換」を参照してください。

PFM - Agent の登録の流れを次に示します。

図 3-8 PFM - Agent の登録の流れ



注意

- PFM - Agent の登録は、インスタンス環境を設定する前に実施してください。
- すでに PFM - Agent for Enterprise Applications の情報が登録されている Performance Management システムに、新たに同じバージョンの PFM - Agent for Enterprise Applications を追加した場合、PFM - Agent の登録は必要ありません。

- バージョンが異なる PFM - Agent for Enterprise Applications を、異なるホストにインストールする場合、古いバージョン、新しいバージョンの順でセットアップしてください。
- PFM - Manager と同じホストに PFM - Agent をインストールした場合、`jpccconf agent setup` コマンドが自動的に実行されます。共通メッセージログに「KAVE05908-I エージェント追加セットアップは正常に終了しました」と出力されるので、結果を確認してください。コマンドが正しく実行されていない場合は、コマンドを実行し直してください。コマンドの実行方法については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドの章を参照してください。

(a) PFM - Agent for Enterprise Applications のセットアップファイルをコピーする

PFM - Agent for Enterprise Applications をインストールしたホストにあるセットアップファイルを PFM - Manager および PFM - Web Console をインストールしたホストにコピーします。手順を次に示します。

1. PFM - Web Console が起動されている場合は、停止する。

2. PFM - Agent のセットアップファイルをバイナリーモードでコピーする。

ファイルが格納されている場所およびファイルをコピーする場所を次の表に示します。

表 3-9 コピーするセットアップファイル

PFM - Agent の セットアップファイル	コピー先		
	PFM プログラム名	OS	コピー先フォルダ またはディレクトリ
/opt/jp1pc/setup/jpcagtmw.EXE	PFM - Manager	Windows	PFM - Manager のインストール先フォルダ¥setup
/opt/jp1pc/setup/jpcagtmu.Z		UNIX	/opt/jp1pc/setup/
/opt/jp1pc/setup/jpcagtmw.EXE	PFM - Web Console	Windows	PFM - Web Console のインストール先フォルダ¥setup
/opt/jp1pc/setup/jpcagtmu.Z		UNIX	/opt/jp1pcwebcon/setup/

(b) PFM - Manager ホストでセットアップコマンドを実行する

PFM - Manager で PFM - Agent for Enterprise Applications をセットアップするための次のコマンドを実行します。

```
jpccconf agent setup -key EAP
```

注意

コマンドを実行するローカルホストの Performance Management のサービスが完全に停止していない状態で `jpccconf agent setup` コマンドを実行した場合、エラーが発生することがあります。その場合は、Performance Management のサービスが完全に停止したことを確認したあと、再度 `jpccconf agent setup` コマンドを実行してください。

PFM - Manager ホストにある PFM - Agent のセットアップファイルは、この作業が終了したあと、削除してもかまいません。

(c) PFM - Web Console ホストでセットアップコマンドを実行する

PFM - Web Console で PFM - Agent for Enterprise Applications をセットアップするための次のコマンドを実行します。

```
jpcwagtsetup
```

PFM - Web Console ホストにある PFM - Agent のセットアップファイルは、この作業が終了したあと削除してもかまいません。

(3) PFM - Agent for Enterprise Applications で使用する SAP ユーザーの作成

PFM - Agent for Enterprise Applications はパフォーマンス情報を収集するために、SAP 社の通信プロトコルである RFC を使用して、SAP システム側に定義されている外部管理インターフェースを実行します。そのため、PFM - Agent for Enterprise Applications が使用するユーザーをあらかじめ SAP システム側に用意しておく必要があります。

ここでは、SAP システム側に作成する SAP ユーザーのユーザータイプ、パスワード、権限について説明します。

(a) ユーザータイプ

PFM - Agent for Enterprise Applications で使用する SAP ユーザーには、次のタイプのユーザーが使用できます。

- ダイアログ (Dialog)
- システム (System)
- 通信 (Communication)
- サービス (Service)

(b) パスワードに指定できる文字

SAP ユーザーのパスワードは、半角数字(0~9)、半角英字(a~z, A~Z)、および次の半角記号で定義してください。

```
!@ $ % & / ( ) = ? ' ` * + ~ # - _ . : { [ ] } < > |
```

(c) 必要な権限

ユーザーには次の権限 (権限オブジェクト) を設定する必要があります。

- ユーザーが汎用モジュールに RFC 接続するための権限 (S_RFC)
- 外部管理インターフェースを使用するための権限 (S_XMI_PROD)

各権限の値として、次の表に示す値またはすべての項目に「*」を指定したビルトイン権限値 (S_RFC_ALL や S_XMI_ADMIN) を割り当ててください。

表 3-10 ユーザーが汎用モジュールに RFC 接続するための権限 (S_RFC)

権限項目	説明	値
RFC_TYPE	保護される RFC オブジェクトのタイプ	FUGR (汎用グループ)
RFC_NAME	保護される RFC 名	*
ACTVT	アクティビティ	16 (実行)

表 3-11 外部管理インターフェースを使用するための権限 (S_XMI_PROD)

権限項目	説明	値
EXTCOMPANY	外部管理ツールの会社名	HITACHI
EXTPRODUCT	外部管理ツールのプログラム名	JP1
INTERFACE	インターフェース ID	*

(4) インスタンス環境の設定

PFM - Agent for Enterprise Applications で監視する SAP システムのインスタンス情報を設定します。インスタンス情報の設定は、PFM - Agent ホストで実施します。

設定するインスタンス情報を次の表に示します。セットアップの操作を始める前に、次の情報をあらかじめ確認してください。SAP システムのインスタンス情報の詳細については、SAP システムのマニュアルを参照してください。

表 3-12 PFM - Agent for Enterprise Applications のインスタンス情報

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
SID	監視対象となる SAP システム ID	8 バイト以内の半角文字列	—
SERVER※1	監視対象となる SAP インスタンス名 (トランザクションコード SM51 で確認できる、ダイアログサービスを持つ SAP インスタンス名)	20 バイト以内の半角文字列	jpccconf inst setup コマンドの -inst で指定したインスタンス名
ASHOST※1	接続先アプリケーションサーバのホスト名 (トランザクションコード SM51 で確認できる SAP ローカルホスト名)	100 バイト以内の半角文字列	ローカルホスト名

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
SYSNR	SAP システムのシステム番号を指定する。	2 バイト以内の半角数字	[00]
CLIENT	SAP ユーザーが属するクライアント名（接続先ダイアログインスタンスに割り当てられているシステム番号）	3 バイト以内の半角数字	[000]
USER	SAP ユーザー名	12 バイト以内の半角文字列	—
EXTPWD	SAP システムへの接続に、拡張パスワードを使用するかどうかを指定する。	Y または N で指定する。 <ul style="list-style-type: none"> • Y：拡張パスワードを使用する。 • N：拡張パスワードを使用しない。 	[Y]
PASSWD	SAP ユーザーのパスワード	<ul style="list-style-type: none"> • 拡張パスワードを使用する場合：40 バイト以内の半角文字列 • 拡張パスワードを使用しない場合：8 バイト以内の半角文字列 	—
DELAYCONNECT	SAP システムにいつ接続するかを指定する。	Y または N で指定する。 <ul style="list-style-type: none"> • Y：パフォーマンスデータ収集時に SAP システムに接続する。 この場合、Agent Collector サービスは、接続時の SAP システムの稼働状況に関係なく起動される。 • N：Agent Collector サービス起動時に SAP システムに接続する。 この場合、Agent Collector サービスは、接続時に SAP システムが停止していると起動されない。 	[N]
Store Version ^{※2}	使用する Store バージョンを指定する。Store バージョンについては「 3.6.2 Store バージョン 2.0 への移行 」を参照してください。	{1.0 2.0}	2.0

(凡例)

—：なし

注※1

リモート監視機能を使用する場合、監視対象の SAP インスタンス名および SAP システムのホスト名を設定してください。

注※2

PFM - Agent for Enterprise Applications, および同一ホスト上の PFM - Base または PFM - Manager が 08-10 以降で、初めてインスタンス環境の設定を行う場合に必要となる設定です。

注意

- インスタンス環境を設定していない場合、PFM - Agent for Enterprise Applications のサービスを起動できません。

インスタンス環境を構築するには、`jpccconf inst setup` コマンドを使用します。インスタンス環境の構築手順を次に示します。

1. サービスキーおよびインスタンス名を指定して、`jpccconf inst setup` コマンドを実行する。

例えば、PFM - Agent for Enterprise Applications のインスタンス名 `o246bciSD500` のインスタンス環境を構築する場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccconf inst setup -key EAP -inst o246bciSD500
```

PFM - Agent for Enterprise Applications の場合、インスタンス名は任意ですが、管理のしやすさを考慮し、監視対象とする SAP システムのインスタンス名と紐づくようにしてください。SAP システムのインスタンスには、通常、「ホスト名_SAP システム ID_システム番号」という形式の名称が付けられています。

ただし、`jpccconf inst setup` コマンドでは "_" を指定できません。例えば、SAP システムのインスタンス名が `"o246bci_SD5_00"` の場合、PFM - Agent for Enterprise Applications のインスタンス名を `"o246bciSD500"` としてください。

2. SAP システムのインスタンス情報を設定する。

表 3-12 に示した項目を、コマンドの指示に従って入力してください。各項目とも省略はできません。デフォルトで表示されている値を、項目の入力とする場合はリターンキーだけを押ししてください。

すべての入力終了すると、インスタンス環境が構築されます。構築されるインスタンス環境を次に示します。

• インスタンス環境のディレクトリ構成

次のディレクトリ下にインスタンス環境が構築されます。

- 物理ホスト運用の場合：`/opt/jp1pc/agtm`
- 論理ホスト運用の場合：**環境ディレクトリ***/`jp1pc/agtm`

注※

環境ディレクトリは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

構築されるインスタンス環境のディレクトリ構成を次に示します。

表 3-13 インスタンス環境のディレクトリ構成

ディレクトリ名・ファイル名		説明	
agent	インスタンス名	<code>jpccagt.ini</code>	Agent Collector サービス起動情報ファイル
		<code>jpccagt.ini.model</code> *	Agent Collector サービス起動情報ファイルのモデルファイル
		<code>jpccMcollect.ini</code>	SAP 通信プロセス設定ファイル

3. インストールとセットアップ

ディレクトリ名・ファイル名		説明	
agent	インスタンス名	jr3alget.ini	CCMS Alert Monitor Command (PD_ALMX) レコード用の環境パラメーター設定ファイル
		jr3slget.ini	System Log Monitor Command (PD_SLMX) レコード用の環境パラメーター設定ファイル
		log	ログファイル格納ディレクトリ
store	インスタンス名	jpcsto.ini	Agent Store サービス起動情報ファイル
		jpcsto.ini.model*	Agent Store サービス起動情報ファイルのモデルファイル
		*.DAT	データモデル定義ファイル
		dump	エクスポート先ディレクトリ
		backup	バックアップ先ディレクトリ
		import	インポート先ディレクトリ (Store バージョン 2.0 の場合)
		log	ログファイル格納ディレクトリ
		partial	部分バックアップ先ディレクトリ (Store バージョン 2.0 の場合)
		STPD	PD レコードタイプのパフォーマンスデータ格納ディレクトリ (Store バージョン 2.0 の場合)
		STPI	PI レコードタイプのパフォーマンスデータ格納ディレクトリ (Store バージョン 2.0 の場合)
		STPL	PL レコードタイプのパフォーマンスデータ格納ディレクトリ (Store バージョン 2.0 の場合)

注※

インスタンス環境を構築した時点の設定値に戻したいときに使用します。

• インスタンス環境のサービス ID

インスタンス環境のサービス ID は、プロダクト ID、機能 ID、インスタンス番号、インスタンス名、ホスト名をつないだ文字列になります。プロダクト名表示機能が有効な場合、インスタンス名[ホスト名]<プログラム名>となります。

例えばサービス ID 「MA1o246bciSD500[host01]」は、次のインスタンス環境を表します。

- プロダクト ID : M
- 機能 ID : A
- インスタンス番号 : 1
- インスタンス名 : o246bciSD500
- ホスト名 : host01

サービス ID については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、付録を参照してください。

(5) ネットワークの設定 オプション

Performance Management を使用するネットワーク構成に応じて、変更する場合にだけ必要な設定です。

ネットワークの設定では次の 2 つの項目を設定できます。

• IP アドレスを設定する

Performance Management を複数の LAN に接続されたネットワークで使用するときには設定します。複数の IP アドレスを設定するには、jpchosts ファイルにホスト名と IP アドレスを定義します。設定した jpchosts ファイルは Performance Management システム全体で統一させてください。

詳細についてはマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

• ポート番号を設定する

Performance Management が使用するポート番号を設定できます。運用での混乱を避けるため、ポート番号とサービス名は、Performance Management システム全体で統一させてください。

ポート番号の設定の詳細についてはマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

(6) ログのファイルサイズ変更 オプション

Performance Management の稼働状況を、Performance Management 独自のログファイルに出力します。このログファイルを「共通メッセージログ」と呼びます。このファイルサイズを変更したい場合にだけ、必要な設定です。

詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

(7) パフォーマンスデータの格納先の変更 オプション

PFM - Agent for Enterprise Applications で管理されるパフォーマンスデータを格納するデータベースの保存先、バックアップ先、エクスポート先、部分バックアップ先またはインポート先のディレクトリを変更したい場合にだけ、必要な設定です。

パフォーマンスデータは、デフォルトで、次の場所に保存されます。

保存先	ディレクトリ名
データベースの保存先	/opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/
バックアップ先	/opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/backup/
エクスポート先	/opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/dump/

保存先	ディレクトリ名
部分バックアップ先 (Store バージョン 2.0 の場合)	/opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/partial/
インポート先 (Store バージョン 2.0 の場合)	/opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/import/

詳細については、「[3.6.1 パフォーマンスデータの格納先の変更](#)」を参照してください。

(8) PFM - Agent for Enterprise Applications の接続先 PFM - Manager の設定

PFM - Agent がインストールされているホストで、その PFM - Agent を管理する PFM - Manager を設定します。接続先の PFM - Manager を設定するには、`jpccconf mgrhost define` コマンドを使用します。

注意

- 同一ホスト上に、複数の PFM - Agent がインストールされている場合でも、接続先に指定できる PFM - Manager は、1 つだけです。PFM - Agent ごとに異なる PFM - Manager を接続先に設定することはできません。
- PFM - Agent と PFM - Manager が同じホストにインストールされている場合、接続先 PFM - Manager はローカルホストの PFM - Manager となります。この場合、接続先の PFM - Manager をほかの PFM - Manager に変更できません。

手順を次に示します。

1. Performance Management のサービスを停止する

セットアップを実施する前に、ローカルホストで Performance Management のサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、サービスの起動と停止について説明している章を参照してください。

`jpccconf mgrhost define` コマンド実行時に、Performance Management のサービスが起動されている場合は、停止を問い合わせるメッセージが表示されます。

2. 接続先の PFM - Manager ホストのホスト名を指定して、`jpccconf mgrhost define` コマンドを実行する

例えば、接続先の PFM - Manager がホスト `host01` 上にある場合、次のように指定します。

```
jpccconf mgrhost define -s host01
```

(9) 動作ログ出力の設定 オプション

PFM サービスの起動・停止時や、PFM - Manager との接続状態の変更時に動作ログを出力したい場合に必要な設定です。動作ログとは、システム負荷などのしきい値オーバーに関するアラーム機能などと連動した動作情報の履歴を出力するログ情報です。

設定方法については、「[付録 J 動作ログの出力](#)」を参照してください。

(10) 収集基点時間の設定

リモート監視機能を使用する場合、システムログ情報抽出機能および CCMS アラート情報抽出機能の収集基点時間を設定してください。環境パラメーター設定ファイルの設定手順や設定項目の詳細については、「5.3 環境パラメーター設定ファイル」および「6.3 環境パラメーター設定ファイル」を参照してください。

(11) SAP システムのタイムゾーンの設定 オプション

リモート監視機能を使用する場合、システムログ情報抽出機能で考慮する SAP システムのタイムゾーン (UTC との時刻差) を設定します。環境パラメーター設定ファイルの設定手順や設定項目の詳細については、「5.3 環境パラメーター設定ファイル」および「6.3 環境パラメーター設定ファイル」を参照してください。

3.2.6 Linux 版のインストールとセットアップに関する注意事項

ここでは、Performance Management をインストールおよびセットアップするときの注意事項を説明します。

(1) 環境変数に関する注意事項

Performance Management では JPC_HOSTNAME を環境変数として使用しているため、ユーザー独自に環境変数として設定しないでください。設定した場合は、Performance Management が正しく動作しません。

(2) 同一ホストに Performance Management プログラムを複数インストール、セットアップするときの注意事項

Performance Management は、同一ホストに PFM - Manager, PFM - Web Console, および PFM - Agent をインストールすることもできます。その場合の注意事項を次に示します。

- PFM - Manager と PFM - Agent を同一ホストにインストールする場合、PFM - Base は不要です。この場合、PFM - Agent の前提プログラムは PFM - Manager になるため、PFM - Manager をインストールしてから PFM - Agent をインストールしてください。
- PFM - Base と PFM - Manager は同一ホストにインストールできません。PFM - Base と PFM - Agent がインストールされているホストに PFM - Manager をインストールする場合は、PFM - Web Console 以外のすべての Performance Management プログラムをアンインストールしたあとに PFM - Manager → PFM - Agent の順でインストールしてください。また、PFM - Manager と PFM - Agent がインストールされているホストに PFM - Base をインストールする場合も同様に、PFM - Web Console 以外のすべての Performance Management プログラムをアンインストールしたあとに PFM - Base → PFM - Agent の順でインストールしてください。

- PFM - Manager がインストールされているホストに PFM - Agent をインストールすると、接続先 PFM - Manager はローカルホストの PFM - Manager となります。この場合、接続先 PFM - Manager をリモートホストの PFM - Manager に変更できません。リモートホストの PFM - Manager に接続したい場合は、インストールするホストに PFM - Manager がインストールされていないことを確認してください。
- PFM - Agent がインストールされているホストに PFM - Manager をインストールすると、PFM - Agent の接続先 PFM - Manager は自ホスト名に設定し直されます。共通メッセージログに設定結果が出力されています。結果を確認してください。
- PFM - Web Console がインストールされているホストに、PFM - Agent をインストールする場合は、ブラウザの画面をすべて閉じてからインストールを実施してください。
- Performance Management プログラムを新規にインストールした場合は、ステータス管理機能がデフォルトで有効になります。ただし、07-50 から 08-00 以降にバージョンアップインストールした場合は、ステータス管理機能の設定状態はバージョンアップ前のままとなります。ステータス管理機能の設定を変更する場合は、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

ポイント

システムの性能や信頼性を向上させるため、PFM - Manager、PFM - Web Console、および PFM - Agent はそれぞれ別のホストで運用することをお勧めします。

(3) バージョンアップの注意事項

古いバージョンの PFM - Agent からバージョンアップする場合の注意事項についての詳細は、「付録 H 移行手順と移行時の注意事項」を参照してください。なお、バージョンアップについての詳細は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の付録を参照してください。

(4) SAP システムを ASCS インスタンス構成としている場合の注意事項

SAP システムを監視する場合は、ダイアログサービスを持つセントラルインスタンス（プライマリアプリケーションサーバインスタンス）またはダイアログインスタンス（追加アプリケーションサーバインスタンス）が存在するホストごとにインスタンス環境を設定する必要があります。

(5) リモート監視機能を使用する場合の注意事項

- リモート監視を行う場合は、NTP などホスト間のシステム時刻が同じになるようにしてください。
- PFM - Agent が稼働しているホストと監視対象の SAP システムが稼働しているホストのタイムゾーンが異なる場合、「3.2.5(11) SAP システムのタイムゾーンの設定」で説明している手順で SAP システムのタイムゾーンを使用する設定をしてください。

(6) その他の注意事項

- SAP システムの接続先ダイアログインスタンスに取得対象の MTE 名がない場合、一部のレコードのフィールドは、接続先ダイアログインスタンスに存在しないためパフォーマンスデータを取得できません。このため、共通メッセージや syslog に警告メッセージ (KAVF14173-W) が出力されます。この警告メッセージは、各レコードの「Log」(収集したパフォーマンスデータを Store データベースに記録するかどうか) の設定内容に関係なく出力されます。
- セキュリティ監視プログラム
セキュリティ監視プログラムを停止するかまたは設定を変更して、Performance Management のプログラムのインストールを妨げないようにしてください。
- ウィルス検出プログラム
ウィルス検出プログラムを停止してから Performance Management のプログラムをインストールしてください。
Performance Management のプログラムのインストール中にウィルス検出プログラムが稼働している場合、インストールの速度が低下したり、インストールが実行できなかつたり、または正しくインストールできなかつたりすることがあります。
- プロセス監視プログラム
プロセス監視プログラムを停止するかまたは設定を変更して、Performance Management のサービスまたはプロセス、および共通コンポーネントのサービスまたはプロセスを監視しないようにしてください。
Performance Management のプログラムのインストール中に、プロセス監視プログラムによって、これらのサービスまたはプロセスが起動されたり停止されたりすると、インストールに失敗することがあります。
- Performance Management のプログラムが 1 つもインストールされていない環境に新規インストールする場合は、インストールディレクトリにファイルやディレクトリがないことを確認してください。
- インストール時のステータスバーに「Installation failed.」と表示されてインストールが失敗した場合、インストールログを採取してください。なお、このログファイルは、次にインストールすると上書きされるため、必要に応じてバックアップを採取してください。インストールログのデフォルトのファイル名については、「[13.4.2\(2\) Performance Management の情報](#)」を参照してください。
- インストールディレクトリにリンクを張り Performance Management のプログラムをインストールした場合、全 Performance Management のプログラムをアンインストールしても、リンク先のディレクトリに一部のファイルやディレクトリが残る場合があります。削除する場合は、手動で行ってください。また、リンク先にインストールする場合、リンク先に同名のファイルやディレクトリがあるときは、Performance Management のプログラムのインストール時に上書きされるので、注意してください。

3.3 Windows 版のアンインストールとアンセットアップ

ここでは、PFM - Agent for Enterprise Applications をアンインストールおよびアンセットアップする手順を示します。

3.3.1 Windows 版のアンインストールおよびアンセットアップする前の注意事項

ここでは、PFM - Agent for Enterprise Applications をアンインストールおよびアンセットアップするときの注意事項を次に示します。

(1) アンインストールに必要な OS ユーザー権限に関する注意事項

PFM - Agent をアンインストールするときは、必ず、Administrators 権限を持つアカウントで実行してください。

(2) ネットワークに関する注意事項

Performance Management プログラムをアンインストールしても、services ファイルに定義されたポート番号は削除されません。

(3) プログラムに関する注意事項

- インストール後に「3.1.4 ライブラリの適用手順」に従って格納した RFC ライブラリは、アンインストール時に削除されます。アンインストールの前に必要に応じてバックアップしてください。
- Performance Management のサービスや、Performance Management のファイルを参照するような他プログラム（例えば Windows のイベントビューアなど）を起動したままアンインストールした場合、ファイルやフォルダが残ることがあります。この場合は、インストール先フォルダ¥agtm 以下を削除することを促すメッセージが出力されるので、手動でインストール先フォルダ¥agtm 以下をすべて削除してください。
- Performance Management のサービスや、Performance Management のファイルを参照するような他プログラム（例えば Windows のイベントビューアなど）を起動したままアンインストールした場合、システムの再起動を促すメッセージが出力されることがあります。この場合、システムを再起動して、アンインストールを完了させてください。
- PFM - Base と PFM - Agent がインストールされているホストの場合、PFM - Agent → PFM - Base の順にアンインストールしてください。また、PFM - Manager と PFM - Agent がインストールされているホストの場合も同様に、PFM - Agent → PFM - Manager の順にアンインストールしてください。

(4) サービスに関する注意事項

PFM - Agent をアンインストールしただけでは、`jpctool service list` コマンドで表示できる PFM - Manager に登録されたサービスの情報は削除されません。この場合、PFM - Manager がインストールされているホストで `jpctool service delete` コマンドを使用してサービスの情報を削除してください。PFM - Web Console ホストにサービス情報の削除を反映するためには、`jpctool service sync` コマンドを実行して、PFM - Manager ホストと PFM - Web Console ホストのエージェント情報を同期する必要があります。

(5) その他の注意事項

- PFM - Web Console がインストールされているホストから、Performance Management プログラムをアンインストールする場合は、ブラウザの画面をすべて閉じてからアンインストールを実施してください。
- PFM - Agent for Enterprise Applications 11-00 以降をアンインストールした後に、同一装置内の PFM - Manager または PFM - Base をアンインストールせずに PFM - Agent for Enterprise Applications 11-00 未満をインストールする場合、ディスク占有量が PFM - Agent for Enterprise Applications 11-00 未満の見積もりと比べて約 70MB 大きくなります。PFM - Agent for Enterprise Applications 11-00 未満と同じディスク占有量で使いたい場合は、PFM - Base または PFM - Manager をアンインストールした後、PFM - Agent for Enterprise Applications を再インストールしてください。

3.3.2 Windows 版のアンセットアップ手順

ここでは、PFM - Agent for Enterprise Applications をアンセットアップする手順を説明します。

(1) インスタンス環境のアンセットアップ

インスタンス環境をアンセットアップするには、まず、インスタンス名を確認し、インスタンス環境を削除します。インスタンス環境の削除は、PFM - Agent ホストで実施します。

インスタンス名を確認するには、`jpccconf inst list` コマンドを使用します。また、構築したインスタンス環境を削除するには、`jpccconf inst unsetup` コマンドを使用します。

インスタンス環境をアンセットアップする手順を次に示します。

1. インスタンス名を確認する。

PFM - Agent for Enterprise Applications を示すサービスキーを指定して、`jpccconf inst list` コマンドを実行します。

```
jpccconf inst list -key EAP
```

設定されているインスタンス名が `o246bciSD500` の場合、`o246bciSD500` と表示されます。

2. インスタンス環境の PFM - Agent のサービスが起動されている場合は、停止する。

サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、サービスの起動と停止について説明している章を参照してください。

3. インスタンス環境を削除する。

PFM - Agent for Enterprise Applications を示すサービスキーおよびインスタンス名を指定して、`jpccnf inst unsetup` コマンドを実行します。

例えば、PFM - Agent for Enterprise Applications のインスタンス名が `o246bciSD500` の場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccnf inst unsetup -key EAP -inst o246bciSD500
```

`jpccnf inst unsetup` コマンドが正常終了すると、インスタンス環境として構築されたフォルダ、サービス ID および Windows のサービスが削除されます。

注意

インスタンス環境をアンセットアップしても、`jpctool service list` コマンドで表示できるサービスの情報は削除されません。サービス情報の削除方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップの章のサービスの削除について説明している箇所を参照してください。

3.3.3 Windows 版のアンインストール手順

PFM - Agent for Enterprise Applications をアンインストールする手順を説明します。

1. PFM - Agent for Enterprise Applications をアンインストールするホストに、Administrators 権限でログオンする。

2. ローカルホストで Performance Management のサービスを停止する。

サービス情報を表示して、サービスが起動されていないか確認してください。サービスの停止方法およびサービス情報の表示方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

ローカルホストで Performance Management のサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。なお、停止するサービスは物理ホスト上および論理ホスト上のすべてのサービスです。

3. アンインストールする Performance Management プログラムを選択する。

Windows の [コントロールパネル] で [プログラムと機能] ※を選択して、アンインストールする Performance Management プログラムを選択します。

注※ Windows のバージョンによって名称が異なる場合があります。

4. [アンインストール] を選択し、[OK] ボタンをクリックする。

選択したプログラムがアンインストールされます。

注意事項

OS のユーザーアカウント制御機能 (UAC) を有効にしている場合は、アンインストール中にユーザーアカウント制御のダイアログが表示される場合があります。ダイアログが表示された際に [キャンセル] または [いいえ] ボタンをクリックした場合は、アンインストールが中止されます。アンインストールを続行したい場合は、[続行] または [はい] ボタンをクリックしてください。

3.4 Linux 版のアンインストールとアンセットアップ

ここでは、PFM - Agent for Enterprise Applications をアンインストールおよびアンセットアップする手順を示します。

3.4.1 Linux 版のアンインストールおよびアンセットアップする前の注意事項

ここでは、PFM - Agent for Enterprise Applications をアンインストールおよびアンセットアップするときの注意事項を次に示します。

(1) アンインストールに必要な OS ユーザー権限に関する注意事項

PFM - Agent をアンインストールするときは、必ず、スーパーユーザー権限を持つアカウントで実行してください。

(2) ネットワークに関する注意事項

Performance Management プログラムをアンインストールしても、`services` ファイルに定義されたポート番号は削除されません。

(3) プログラムに関する注意事項

- インストール後に「3.2.4 ライブラリの適用手順」に従って格納した RFC ライブラリは、アンインストール時に削除されます。アンインストールの前に必要に応じてバックアップしてください。
- PFM - Base と PFM - Agent がインストールされているホストの場合、PFM - Agent → PFM - Base の順にアンインストールしてください。また、PFM - Manager と PFM - Agent がインストールされているホストの場合も同様に、PFM - Agent → PFM - Manager の順にアンインストールしてください。

(4) サービスに関する注意事項

PFM - Agent をアンインストールしただけでは、`jpctool service list` コマンドで表示できる PFM - Manager に登録されたサービスの情報は削除されません。この場合、PFM - Manager がインストールされているホストで `jpctool service delete` コマンドを使用してサービスの情報を削除してください。PFM - Web Console ホストにサービス情報の削除を反映するためには、`jpctool service sync` コマンドを実行して、PFM - Manager ホストと PFM - Web Console ホストのエージェント情報を同期する必要があります。

(5) その他の注意事項

PFM - Web Console がインストールされているホストから、Performance Management プログラムをアンインストールする場合は、ブラウザの画面をすべて閉じてからアンインストールを実施してください。

3.4.2 Linux 版のアンセットアップ手順

ここでは、PFM - Agent for Enterprise Applications をアンセットアップする手順を説明します。

(1) インスタンス環境のアンセットアップ

インスタンス環境をアンセットアップするには、まず、インスタンス名を確認し、インスタンス環境を削除します。インスタンス環境の削除は、PFM - Agent ホストで実施します。

インスタンス名を確認するには、`jpccconf inst list` コマンドを使用します。また、構築したインスタンス環境を削除するには、`jpccconf inst unsetup` コマンドを使用します。

インスタンス環境をアンセットアップする手順を次に示します。

1. インスタンス名を確認する。

PFM - Agent for Enterprise Applications を示すサービスキーを指定して、`jpccconf inst list` コマンドを実行します。

```
jpccconf inst list -key EAP
```

設定されているインスタンス名が `o246bciSD500` の場合、`o246bciSD500` と表示されます。

2. インスタンス環境の PFM - Agent のサービスが起動されている場合は、停止する。

サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、サービスの起動と停止について説明している章を参照してください。

3. インスタンス環境を削除する。

PFM - Agent for Enterprise Applications を示すサービスキーおよびインスタンス名を指定して、`jpccconf inst unsetup` コマンドを実行します。

例えば、PFM - Agent for Enterprise Applications のインスタンス名が `o246bciSD500` の場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccconf inst unsetup -key EAP -inst o246bciSD500
```

`jpccconf inst unsetup` コマンドが正常終了すると、インスタンス環境として構築されたフォルダ、サービス ID および Windows のサービスが削除されます。

注意

インスタンス環境をアンセットアップしても、`jpctool service list` コマンドで表示できるサービスの情報は削除されません。サービス情報の削除方法については、マニュアル「JP1/Performance

Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップの章のサービスの削除について説明している個所を参照してください。

3.4.3 Linux 版のアンインストール手順

PFM - Agent for Enterprise Applications をアンインストールする手順を説明します。

1. Performance Management のプログラムをアンインストールするホストに、スーパーユーザーでログインするか、またはsu コマンドでユーザーをスーパーユーザーに変更する。

2. ローカルホストで Performance Management のサービスを停止する。

サービス情報を表示して、サービスが起動されていないか確認してください。サービスの停止方法およびサービス情報の表示方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

ローカルホストで Performance Management のサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。なお、停止するサービスは物理ホスト上および論理ホスト上のすべてのサービスです。

3. 次のコマンドを実行して、Hitachi PP Installer を起動する。

```
/etc/hitachi_x64setup
```

Hitachi PP Installer が起動され、初期画面が表示されます。

4. 初期画面で「D」を入力する。

アンインストールできるプログラムの一覧が表示されます。

5. アンインストールしたい Performance Management のプログラムを選択して、「D」を入力する。

選択したプログラムがアンインストールされます。なお、プログラムを選択するには、カーソルを移動させ、スペースキーで選択します。

6. アンインストールが正常終了したら、「Q」を入力する。

Hitachi PP Installer の初期画面に戻ります。

3.5 PFM - Agent for Enterprise Applications のシステム構成の変更

監視対象システムのネットワーク構成の変更や、ホスト名の変更などに応じて、PFM - Agent for Enterprise Applications のシステム構成を変更する場合があります。ここでは、PFM - Agent for Enterprise Applications のシステム構成を変更する手順を説明します。

- SAP システムのホスト名を変更する場合

インスタンス環境の更新の設定手順で以下の項目を変更する必要があります。

- ASHOST

また、SAP システムでインスタンス環境の設定手順で入力した項目を変更した場合、インスタンス環境の更新の設定手順で変更された項目の情報を変更してください。

- PFM - Agent for Enterprise Applications のシステム構成を変更する場合

PFM - Manager や PFM - Web Console の設定変更もあわせて行う必要があります。Performance Management のシステム構成を変更する手順の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

- SAP システムのタイムゾーンの設定を変更する場合（標準時間と夏時間の切り替えに伴う変更を除く）
設定変更前のタイムゾーンに夏時間を適用している SAP システムのシステムログ情報を抽出する場合、標準時間と夏時間の切り替え時に SAPTIMEZONEOFFSET の設定値を変更する必要があります。

ヒント

夏時間から標準時間に切り替わる場合、夏時間の最後の 1 時間から標準時間の最初の 1 時間が経過するまでの 2 時間の期間に重複時間が発生します。SAP システムは、この期間システムを停止することを推奨しています。たとえば、夏時間から標準時間に切り替わる際に、午前 2:00 から午前 3:00 までの 1 時間が 2 回経過する場合は、午前 01:55 から午前 3:05 までシステムを無効にする必要があります。なお、夏時間から標準時間への切り替え時における SAP システムの運用方法については、SAP ノート 7417 および 102088 を参照してください。

夏時間を適用した環境での SAPTIMEZONEOFFSET の設定変更手順を示します。

標準時間から夏時間への切り替え

1. 夏時間に切り替わる前に、PFM - Agent for Enterprise Applications を停止する。
2. 環境パラメーター設定ファイルの SAPTIMEZONEOFFSET の値を、夏時間に合わせて変更する。
3. 夏時間に切り替わった後、PFM - Agent for Enterprise Applications を開始する。

夏時間から標準時間への切り替え

1. 標準時間に切り替わる 1 時間以上前に、PFM - Agent for Enterprise Applications を停止する。
2. 環境パラメーター設定ファイルの SAPTIMEZONEOFFSET の値を、標準時間に合わせて変更する。

3. 標準時間に切り替わった後、1 時間以上経過してから PFM - Agent for Enterprise Applications を開始する。

3.6 PFM - Agent for Enterprise Applications の運用方式の変更

収集した稼働監視データの運用手順の変更などで、PFM - Agent for Enterprise Applications の運用方式を変更する場合があります。ここでは、PFM - Agent for Enterprise Applications の運用方式を変更する手順を説明します。Performance Management 全体の運用方式を変更する手順の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

3.6.1 パフォーマンスデータの格納先の変更

PFM - Agent for Enterprise Applications で収集したパフォーマンスデータは、PFM - Agent for Enterprise Applications の Agent Store サービスの Store データベースで管理しています。ここではパフォーマンスデータの格納先の変更方法について説明します。

(1) jpcconf db define コマンドを使用して設定を変更する

Store データベースで管理されるパフォーマンスデータの、次のデータ格納先フォルダを変更したい場合は、jpcconf db define コマンドで設定します。Store データベースの格納先フォルダを変更する前に収集したパフォーマンスデータが必要な場合は、jpcconf db define コマンドの-move オプションを使用してください。jpcconf db define コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」を参照してください。

- 保存先フォルダ
- バックアップ先フォルダ
- エクスポート先フォルダ
- 部分バックアップ先フォルダ*
- インポート先フォルダ*

注※ Store バージョン 2.0 使用時だけ設定できます。

jpcconf db define コマンドで設定するオプション名、設定できる値の範囲などを次の表に示します。

表 3-14 パフォーマンスデータの格納先を変更するコマンドの設定項目

説明	ホスト環境	オプション名	設定できる値 (Store バージョン 1.0)	設定できる値 (Store バージョン 2.0)	デフォルト値
パフォーマンスデータの作成先フォルダ	物理ホスト	sd	1~127バイトのフルパス名	1~214バイトのフルパス名*1	<ul style="list-style-type: none">• Windows の場合 インストール先フォルダ %agt%store%インスタンス名• Linux の場合

説明	ホスト環境	オプション名	設定できる値 (Store バージョン 1.0)	設定できる値 (Store バージョン 2.0)	デフォルト値
パフォーマンスデータの作成先フォルダ	物理ホスト	sd	1~127バイトのフルパス名	1~214バイトのフルパス名※1	/opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名
	論理ホスト	sd	1~127バイトのフルパス名	1~214バイトのフルパス名※1	<ul style="list-style-type: none"> Windows の場合 環境ディレクトリ※2¥jp1pc¥agtm¥store¥インスタンス名 Linux の場合 環境ディレクトリ※2/ jp1pc/agtm/store/インスタンス名
パフォーマンスデータの退避先フォルダ (フルバックアップ)	物理ホスト	bd	1~127バイトのフルパス名	1~211バイトのフルパス名※3	<ul style="list-style-type: none"> Windows の場合 インストール先フォルダ ¥agtm¥store¥インスタンス名¥backup Linux の場合 /opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/backup
	論理ホスト	bd	1~127バイトのフルパス名	1~211バイトのフルパス名※3	<ul style="list-style-type: none"> Windows の場合 環境ディレクトリ※2¥jp1pc¥agtm¥store¥インスタンス名¥backup Linux の場合 環境ディレクトリ※2/ jp1pc/agtm/store/インスタンス名/backup
パフォーマンスデータの退避先フォルダ (部分バックアップ)	物理ホスト	pbd	—	1~214バイトのフルパス名※1	<ul style="list-style-type: none"> Windows の場合 インストール先フォルダ ¥agtm¥store¥インスタンス名¥partial Linux の場合 /opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/partial
	論理ホスト	pbd	—	1~214バイトのフルパス名※1	<ul style="list-style-type: none"> Windows の場合 環境ディレクトリ※2¥jp1pc¥agtm¥store¥インスタンス名¥partial Linux の場合 環境ディレクトリ※2/ jp1pc/agtm/store/インスタンス名/partial

3. インストールとセットアップ

説明	ホスト環境	オプション名	設定できる値 (Store バージョン 1.0)	設定できる値 (Store バージョン 2.0)	デフォルト値
パフォーマンスデータを退避する場合の最大世代番号		bs	1~9	1~9	5
パフォーマンスデータのエクスポート先フォルダ	物理ホスト	dd	1~127バイトのフルパス名	1~127バイトのフルパス名	<ul style="list-style-type: none"> Windows の場合 インストール先フォルダ ¥agtm¥store¥インスタンス名¥dump Linux の場合 /opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/dump
	論理ホスト	dd	1~127バイトのフルパス名	1~127バイトのフルパス名	<ul style="list-style-type: none"> Windows の場合 環境ディレクトリ※2¥jp1pc¥agtm¥store¥インスタンス名¥dump Linux の場合 環境ディレクトリ※2/ jp1pc/agtm/store/インスタンス名/dump
パフォーマンスデータのインポート先フォルダ	物理ホスト	id	—	1~222バイトのフルパス名※4	<ul style="list-style-type: none"> Windows の場合 インストール先フォルダ ¥agtm¥store¥インスタンス名¥import Linux の場合 /opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/import
	論理ホスト	id	—	1~222バイトのフルパス名※4	<ul style="list-style-type: none"> Windows の場合 環境ディレクトリ※2¥jp1pc¥agtm¥store¥インスタンス名¥import Linux の場合 環境ディレクトリ※2/ jp1pc/agtm/store/インスタンス名/import

(凡例)

— : 設定できない

注※1

相対パスで設定している場合には、設定したフォルダのパスの長さが、絶対パスで214バイト以内である必要があります。

注※2

環境ディレクトリは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

注※3

相対パスで設定している場合には、設定したフォルダのパスの長さが、絶対パスで 211 バイト以内である必要があります。

注※4

相対パスで設定している場合には、設定したフォルダのパスの長さが、絶対パスで 222 バイト以内である必要があります。

(2) jpcsto.ini ファイルを編集して設定を変更する (Store バージョン 1.0 の場合だけ)

Store バージョン 1.0 使用時は、jpcsto.ini を直接編集して変更できます。

(a) jpcsto.ini ファイルの設定項目

jpcsto.ini ファイルで編集するラベル名、設定できる値の範囲などを次の表に示します。

表 3-15 パフォーマンスデータの格納先の設定項目 (jpcsto.ini の[Data Section]セクション)

説明	ホスト環境	ラベル名	設定できる値 (Store バージョン 1.0) ※1	デフォルト値
パフォーマンスデータの作成先フォルダ	物理ホスト	Store Dir※2	1~127 バイトのフルパス名	<ul style="list-style-type: none">Windows の場合 インストール先フォルダ¥agtm ¥store¥インスタンス名Linux の場合 /opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名
	論理ホスト	Store Dir※2	1~127 バイトのフルパス名	<ul style="list-style-type: none">Windows の場合 環境ディレクトリ※3¥jp1pc¥agtm ¥store¥インスタンス名Linux の場合 環境ディレクトリ※3/jp1pc/agtm/store/インスタンス名
パフォーマンスデータの退避先フォルダ (フルバックアップ)	物理ホスト	Backup Dir※2	1~127 バイトのフルパス名	<ul style="list-style-type: none">Windows の場合 インストール先フォルダ¥agtm ¥store¥インスタンス名¥backupLinux の場合 /opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/backup
	論理ホスト	Backup Dir※2	1~127 バイトのフルパス名	<ul style="list-style-type: none">Windows の場合 環境ディレクトリ※3¥jp1pc¥agtm ¥store¥インスタンス名¥backupLinux の場合

説明	ホスト環境	ラベル名	設定できる値 (Store バージョン 1.0) ※1	デフォルト値
パフォーマンスデータの退避先フォルダ (フルバックアップ)	論理ホスト	Backup Dir※2	1~127 バイトのフルパス名	環境ディレクトリ※3/jp1pc/agt/store/インスタンス名/backup
パフォーマンスデータを退避する場合の最大世代番号		Backup Save	1~9	5
パフォーマンスデータのエクスポート先フォルダ	物理ホスト	Dump Dir※2	1~127 バイトのフルパス名	<ul style="list-style-type: none"> Windows の場合 インストール先フォルダ¥agt¥store¥インスタンス名¥dump Linux の場合 /opt/jp1pc/agt/store/インスタンス名/dump
	論理ホスト	Dump Dir※2	1~127 バイトのフルパス名	<ul style="list-style-type: none"> Windows の場合 環境ディレクトリ※3¥jp1pc¥agt¥store¥インスタンス名¥dump Linux の場合 環境ディレクトリ※3/jp1pc/agt/store/インスタンス名/dump

(凡例)

— : 設定できない

注※1

- フォルダ名は、すべてフルパス名で指定してください。
- 指定できる文字は、次の文字を除く、半角英数字、半角記号および半角空白です。
; , * ? ' " < > |
- 指定値に誤りがある場合、Agent Store サービスは起動できません。

注※2

Store Dir, Backup Dir, および Dump Dir には、それぞれ重複したフォルダを指定できません。

注※3

環境ディレクトリは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

(b) jpcsto.ini ファイルの編集前の準備

- Store データベースの格納先フォルダを変更する場合は、変更後の格納先フォルダを事前に作成しておいてください。
- Store データベースの格納先フォルダを変更すると、変更前に収集したパフォーマンスデータを使用できなくなります。変更前に収集したパフォーマンスデータが必要な場合は、次に示す手順でデータを引き継いでください。

1. `jpctool db backup` コマンドで Store データベースに格納されているパフォーマンスデータのバックアップを採取する。
2. 「3.6.1 パフォーマンスデータの格納先の変更」に従って Store データベースの格納先フォルダを変更する。
3. `jpctool db restore` コマンドで変更後のフォルダにバックアップデータをリストアする。

(c) jpcsto.ini ファイルの編集手順

手順を次に示します。

1. PFM - Agent のサービスを停止する。

ローカルホストで PFM -Agent のサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。

2. テキストエディターなどで、jpcsto.ini ファイルを開く。

3. パフォーマンスデータの格納先フォルダなどを変更する。

次に示す網掛け部分を、必要に応じて修正してください。

```

:
[Data Section]
Store Dir=.
Backup Dir=.%backup
Backup Save=5
Dump Dir=.%dump
:
```

注意

- 行頭および「=」の前後には空白文字を入力しないでください。
- 各ラベルの値の「.」は、Agent Store サービスの Store データベースのデフォルト格納先フォルダ（インストール先フォルダ`%agtm%store%インスタンス名`）を示します。格納先を変更する場合、その格納先フォルダからの相対パスか、または絶対パスで記述してください。
- `jpcsto.ini` ファイルには、データベースの格納先フォルダ以外にも、定義情報が記述されています。`[Data Section]` セクション以外の値は変更しないようにしてください。`[Data Section]` セクション以外の値を変更すると、Performance Management が正常に動作しなくなることがあります。

4. jpcsto.ini ファイルを保存して閉じる。

5. Performance Management のサービスを起動する。

注意

この手順で Store データベースの保存先フォルダを変更した場合、パフォーマンスデータファイルは変更前のフォルダから削除されません。これらのファイルが不要な場合は、次に示すファイルだけを削除してください。

- 拡張子が .DB であるすべてのファイル
- 拡張子が .IDX であるすべてのファイル

3.6.2 Store バージョン 2.0 への移行

Store データベースの保存形式には、バージョン 1.0 と 2.0 の 2 種類あります。Store バージョン 2.0 の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」を参照してください。

Store バージョン 2.0 は、PFM - Base または PFM - Manager のバージョン 08-10 以降の環境に、08-10 以降の PFM - Agent for Enterprise Applications で、新規にインスタンスを構築した場合にだけデフォルトで利用できます。それ以外の場合は、Store バージョン 1.0 形式のままとなっているため、セットアップコマンドによって Store バージョン 2.0 に移行してください。

何らかの理由によって Store バージョン 1.0 に戻す必要がある場合は、Store バージョン 2.0 のアンセットアップを行ってください。

インストール条件に対応する Store バージョン 2.0 の利用可否と利用手順を次の表に示します。

表 3-16 Store バージョン 2.0 の利用可否および利用手順

インストール条件		Store バージョン 2.0 の利用可否	Store バージョン 2.0 の利用手順
インストール済みの PFM - Base, または PFM - Manager のバージョン	PFM - Agent のインストール方法		
08-10 より前	上書きインストール	利用できない	PFM - Base, または, PFM - Manager を 08-10 にバージョンアップ後, セットアップコマンドを実行
	新規インストール		
08-10 以降	上書きインストール	既存のインスタンスについてはセットアップ後利用できる	セットアップコマンドを実行
		新規インスタンスについては利用できる	インスタンス構築時に <code>jpcconf inst setup</code> コマンドで設定
	新規インストール	利用できる	インスタンス構築時に <code>jpcconf inst setup</code> コマンドで設定

(1) Store バージョン 2.0 のセットアップ

Store バージョン 2.0 へ移行する場合のセットアップ手順について説明します。

1. システムリソース見積もりと保存期間の設定

Store バージョン 2.0 導入に必要なシステムリソースが、実行環境に適しているかどうかを確認してください。必要なシステムリソースを次に示します。

- ディスク容量

3. インストールとセットアップ

- ファイル数
- 1 プロセスがオープンするファイル数

これらの値は保存期間の設定によって調節できます。実行環境の保有しているリソースを考慮して保存期間を設定してください。システムリソースの見積もりについては、PFM - Agent for Enterprise Applications のリリースノートを参照してください。

2. フォルダの設定

Store バージョン 2.0 に移行する場合に、Store バージョン 1.0 でのパフォーマンスデータのデータ格納先フォルダ設定のままでは、Agent Store サービスが起動しないことがあります。この場合、フォルダを設定し直す必要があります。詳しくは、「[3.6.1 パフォーマンスデータの格納先の変更](#)」を参照してください。

3. セットアップコマンドの実行

Store バージョン 2.0 に移行するため、`jpccconf db vrset -ver 2.0` コマンドを実行します。`jpccconf db vrset -ver 2.0` コマンドは、Agent インスタンスごとに実行してください。

`jpccconf db vrset -ver 2.0` コマンドの詳細については、マニュアル「[JP1/Performance Management リファレンス](#)」を参照してください。

4. 保存期間の設定

手順 1 の見積もり時に設計した保存期間を設定してください。Agent Store サービスを起動して、PFM - Web Console で設定してください。

(2) Store バージョン 2.0 のアンセットアップ

Store バージョン 2.0 のアンセットアップは `jpccconf db vrset -ver 1.0` コマンドを使用します。Store バージョン 2.0 をアンセットアップすると、Store データベースのデータはすべて初期化され、Store バージョン 1.0 に戻ります。

`jpccconf db vrset -ver 1.0` コマンドの詳細については、マニュアル「[JP1/Performance Management リファレンス](#)」を参照してください。

(3) 注意事項

移行についての注意事項を次に示します。

(a) Store バージョン 1.0 から Store バージョン 2.0 に移行する場合

Store データベースを Store バージョン 1.0 から Store バージョン 2.0 に移行した場合、PI レコードタイプのレコードの保存期間の設定は引き継がれますが、PD レコードタイプのレコードについては、以前の設定値（保存レコード数）に関係なくデフォルトの保存日数がレコードごとに設定され、保存日数以前に収集されたデータは削除されます。

例えば、Store バージョン 1.0 で、Collection Interval が 3,600 秒の PD レコードの保存レコード数を 1,000 に設定していた場合、PD レコードは 1 日に 24 レコード保存されることになるので、 $1,000 \div 24 \approx$ 約 42 日分のデータが保存されています。この Store データベースを Store バージョン 2.0 へ移行した結

果、デフォルト保存日数が10日に設定されたとすると、11日以上前のデータは削除されて参照できなくなります。

Store バージョン 2.0 へ移行する前に、PD レコードタイプのレコードの保存レコード数の設定を確認し、Store バージョン 2.0 でのデフォルト保存日数以上のデータが保存される設定となっている場合は、`jpctool db dump` コマンドでデータベース内のデータを出力してください。Store バージョン 2.0 でのデフォルト保存日数については、PFM - Agent for Enterprise Applications のリリースノートを参照してください。

(b) Store バージョン 2.0 から Store バージョン 1.0 に戻す場合

Store バージョン 2.0 をアンセットアップすると、データは初期化されます。このため、Store バージョン 1.0 に変更する前に、`jpctool db dump` コマンドで Store バージョン 2.0 の情報を出力してください。

(c) Store バージョン 2.0 のレコードのデフォルト保存期間

Store バージョン 2.0 は、バージョン 08-10 以降の PFM - Manager または PFM - Base とバージョン 08-00 以降の PFM - Agent for Enterprise Applications の組み合わせで利用できます。PFM - Agent for Enterprise Applications 08-10 以降を使用する場合と PFM - Agent for Enterprise Applications 08-00 を使用する場合で、レコードのデフォルト保存期間が異なります。

PFM - Agent for Enterprise Applications 08-10 以降を使用する場合

レコードのデフォルト保存期間については、PFM - Agent for Enterprise Applications のリリースノートを参照してください。

PFM - Agent for Enterprise Applications 08-00 を使用する場合

PD レコードタイプと PL レコードタイプのレコードでは、すべてのレコードのデフォルト保存期間が10日に設定されます。PI レコードタイプのデフォルト保存期間を次に示します。

表 3-17 PI レコードタイプのデフォルト保存期間

セットアップ前の保存期間	セットアップ後の保存期間				
	要約区分				
	分 (単位：日)	時 (単位：日)	日 (単位：週)	週 (単位：週)	月 (単位：月)
1 分間	1	—	—	—	—
1 時間	1	1	—	—	—
1 日間	1	1	1	—	—
2 日間	2	2	1	—	—
3 日間	3	3	1	—	—
4 日間	4	4	1	—	—
5 日間	5	5	1	—	—
6 日間	6	6	1	—	—

セットアップ前の保存期間	セットアップ後の保存期間				
	要約区分				
	分 (単位：日)	時 (単位：日)	日 (単位：週)	週 (単位：週)	月 (単位：月)
1 週間	7	7	1	1	—
1 か月間	31	31	5	5	1
1 年間	366	366	54	54	12

(凡例)

—：指定できない項目

3.6.3 インスタンス環境の更新の設定

インスタンス環境を更新する手順を次に示します。

複数のインスタンス環境を更新する場合は、この手順を繰り返し実施します。

インスタンス名を確認するには、`jpccconf inst list` コマンドを使用します。また、インスタンス環境を更新するには、`jpccconf inst setup` コマンドを使用します。

1. インスタンス名を確認する。

インスタンス環境で動作している PFM - Agent for Enterprise Applications を示すサービスキーを指定して、`jpccconf inst list` コマンドを実行します。

例えば、PFM - Agent for Enterprise Applications のインスタンス名を確認したい場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccconf inst list -key EAP
```

設定されているインスタンス名が `o246bciSD500` の場合、`o246bciSD500` と表示されます。

2. 更新する情報を確認する。

インスタンス環境で更新できる情報を、次に示します。

表 3-18 PFM - Agent for Enterprise Applications のインスタンス情報

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
SID	監視対象となる SAP システム ID	8 バイト以内の半角文字列	前回の設定値
SERVER※1	監視対象となる SAP インスタンス名 (トランザクションコード SM51 で確認できる、ダイアログサービスを持つ SAP インスタンス名)	20 バイト以内の半角文字列	前回の設定値

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
ASHOST※1	接続先アプリケーションサーバのホスト名 (トランザクションコード SM51 で確認できる SAP ローカルホスト名)	100 バイト以内の半角文字列	前回の設定値
SYSNR	SAP システムのシステム番号を指定する。	2 バイト以内の半角数字	前回の設定値
CLIENT	SAP ユーザーが属するクライアント名 (接続先ダイアログインスタンスに割り当てられているシステム番号)	3 バイト以内の半角数字	前回の設定値
USER	SAP ユーザー名※2	12 バイト以内の半角文字列	前回の設定値
EXTPWD	SAP システムへの接続に、拡張パスワードを使用するかどうかを指定する。	Y または N で指定する。 <ul style="list-style-type: none"> • Y: 拡張パスワードを使用する。 • N: 拡張パスワードを使用しない。 	前回の設定値
PASSWD	SAP ユーザーのパスワード※2	<ul style="list-style-type: none"> • 拡張パスワードを使用する場合: 40 バイト以内の半角文字列 • 拡張パスワードを使用しない場合: 8 バイト以内の半角文字列 	前回の設定値 (値は表示されません)
DELAYCONNECT	SAP システムにいつ接続するかを指定する。	Y または N で指定する。 <ul style="list-style-type: none"> • Y: パフォーマンスデータ収集時に SAP システムに接続する。 この場合、Agent Collector サービスは、接続時の SAP システムの稼働状況に関係なく起動される。 • N: Agent Collector サービス起動時に SAP システムに接続する。 この場合、Agent Collector サービスは、接続時に SAP システムが停止していると起動されない。 	前回の設定値

注※1

リモート監視機能を使用する場合、監視対象の SAP インスタンス名および SAP システムのホスト名を設定してください。

注※2

SAP ユーザー名およびパスワードについては、「[3.1.5\(2\) PFM - Agent for Enterprise Applications](#) で使用する SAP ユーザーの作成」を参照してください。

3. 更新したいインスタンス環境の PFM - Agent for Enterprise Applications のサービスが起動されている場合は、停止する。

jpccnf inst setup コマンド実行時に、更新したいインスタンス環境のサービスが起動されている場合は、確認メッセージが表示され、サービスを停止できます。サービスを停止した場合は、更新処理が継続されます。サービスを停止しなかった場合は、更新処理が中断されます。

4. 更新したいインスタンス環境の PFM - Agent for Enterprise Applications を示すサービスキーおよびインスタンス名を指定して、jpccnf inst setup コマンドを実行する。

例えば、PFM - Agent for Enterprise Applications のインスタンス名 o246bciSD500 のインスタンス環境を更新する場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccnf inst setup -key EAP -inst o246bciSD500
```

PFM - Agent for Enterprise Applications の場合、インスタンス名は任意ですが、管理のしやすさを考慮し、監視対象とする SAP システムのインスタンス名と紐づくようにしてください。SAP システムのインスタンスには、通常、「ホスト名_SAP システム ID_システム番号」という形式の名称が付けられています。

ただし、jpccnf inst setup コマンドでは "_" を指定できません。例えば、SAP システムのインスタンス名が "o246bci_SD5_00" の場合、PFM - Agent for Enterprise Applications のインスタンス名を "o246bciSD500" としてください。

5. SAP システムのインスタンス情報を更新する。

表 3-18 に示した項目を、コマンドの指示に従って入力します。現在設定されている値が表示されます (ただし PASSWD の値は表示されません)。表示された値を変更しない場合は、リターンキーだけを押してください。すべての入力が終了すると、インスタンス環境が更新されます。

6. 更新したインスタンス環境のサービスを再起動する。

サービスの起動方法および停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、サービスの起動と停止について説明している章を参照してください。コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

3.7 PFM - Agent for Enterprise Applications のバックアップとリストア

PFM - Agent for Enterprise Applications のバックアップおよびリストアについて説明します。

障害が発生してシステムが壊れた場合に備えて、PFM - Agent for Enterprise Applications の設定情報をバックアップしてください。また、PFM - Agent for Enterprise Applications をセットアップしたときなど、システムを変更した場合にもバックアップを取得してください。

なお、Performance Management システム全体のバックアップおよびリストアについては、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」のバックアップとリストアについて説明している章を参照してください。

3.7.1 バックアップ

バックアップはファイルをコピーするなど、任意の方法で取得してください。バックアップを取得する際は、PFM - Agent for Enterprise Applications のサービスを停止した状態で行ってください。

PFM - Agent for Enterprise Applications の設定情報のバックアップ対象ファイルを次の表に示します。

表 3-19 PFM - Agent for Enterprise Applications のバックアップ対象ファイル

説明	ホスト環境	ファイル名
Agent Collector サービスの設定ファイル	物理ホスト	<ul style="list-style-type: none">Windows の場合 インストール先フォルダ¥agtm¥agent¥*. ini ファイルLinux の場合 /opt/jp1pc/agtm/agent/*. ini ファイル
	論理ホスト	<ul style="list-style-type: none">Windows の場合 環境ディレクトリ¥jp1pc¥agtm¥agent¥*. ini ファイルLinux の場合 環境ディレクトリ/jp1pc/agtm/agent/*. ini ファイル
Agent Store サービスの設定ファイル	物理ホスト	<ul style="list-style-type: none">Windows の場合 インストール先フォルダ¥agtm¥store¥*. ini ファイルLinux の場合 /opt/jp1pc/agtm/store/*. ini ファイル
	論理ホスト	<ul style="list-style-type: none">Windows の場合 環境ディレクトリ¥jp1pc¥agtm¥store¥*. ini ファイルLinux の場合 環境ディレクトリ/jp1pc/agtm/store/*. ini ファイル
システムログの環境パラメーター設定ファイル	物理ホスト	<ul style="list-style-type: none">Windows の場合 インストール先フォルダ¥agtm¥agent¥jr3slget. ini ファイル (デフォルトの場合)Linux の場合

説明	ホスト環境	ファイル名
システムログの環境パラメーター設定ファイル	物理ホスト	<p>/opt/jp1pc/agtm/agent/jr3slget.ini ファイル (デフォルトの場合)</p> <p>ファイルのパスは、コマンド実行のカレントディレクトリか、-cnf オプションで指定したファイルパス。</p>
	論理ホスト	<ul style="list-style-type: none"> Windows の場合 環境ディレクトリ¥jp1pc¥agtm¥agent¥jr3slget.ini ファイル (デフォルトの場合) Linux の場合 環境ディレクトリ/jp1pc/agtm/agent/jr3slget.ini ファイル (デフォルトの場合) <p>ファイルのパスは、コマンド実行のカレントディレクトリか、-cnf オプションで指定したファイルパス。</p>
CCMS アラートの環境パラメーター設定ファイル	物理ホスト	<ul style="list-style-type: none"> Windows の場合 インストール先フォルダ¥agtm¥agent¥jr3alget.ini ファイル (デフォルトの場合) Linux の場合 /opt/jp1pc/agtm/agent/jr3alget.ini ファイル (デフォルトの場合) <p>ファイルのパスは、コマンド実行のカレントディレクトリか、-cnf オプションで指定したファイルパス。</p>
	論理ホスト	<ul style="list-style-type: none"> Windows の場合 環境ディレクトリ¥jp1pc¥agtm¥agent¥jr3alget.ini ファイル (デフォルトの場合) Linux の場合 環境ディレクトリ/jp1pc/agtm/agent/jr3alget.ini ファイル (デフォルトの場合) <p>ファイルのパスは、コマンド実行のカレントディレクトリか、-cnf オプションで指定したファイルパス。</p>

❗ 重要

PFM - Agent for Enterprise Applications のバックアップを取得する際は、取得した環境の製品バージョンを管理するようにしてください。製品バージョンの詳細については、PFM - Agent for Enterprise Applications のリリースノートを参照してください。

3.7.2 リストア

PFM - Agent for Enterprise Applications の設定情報をリストアする場合は、次に示す前提条件の内容を確認した上で、バックアップ対象ファイルを元の位置にコピーしてください。バックアップした設定情報ファイルで、ホスト上の設定情報ファイルを上書きします。

(1) 前提条件

- PFM - Agent for Enterprise Applications がインストール済みであること。
- PFM - Agent for Enterprise Applications のサービスが停止していること。
- バックアップ時点でセットアップされていた PFM - Agent for Enterprise Applications のインスタンス環境がセットアップ済みであること。

(2) リストアでの注意事項

- PFM - Agent for Enterprise Applications の設定情報をリストアする場合、バックアップを取得した環境とリストアする環境の製品バージョンが完全に一致している必要があります。製品バージョンの詳細については、PFM - Agent for Enterprise Applications のリリースノートを参照してください。リストアの可否についての例を次に示します。

リストアできるケース

PFM - Agent for Enterprise Applications 08-50 でバックアップした設定情報を PFM - Agent for Enterprise Applications 08-50 にリストアする。

リストアできないケース

- PFM - Agent for Enterprise Applications 08-00 でバックアップした設定情報を PFM - Agent for Enterprise Applications 08-50 にリストアする。
- PFM - Agent for Enterprise Applications 08-50 でバックアップした設定情報を PFM - Agent for Enterprise Applications 08-50-04 にリストアする。
- リストア後に SAP システムのシステムログと CCMS アラートが正しく出力できない場合があります。リストア後に次のディレクトリにある対象のファイルを手動で削除してください。

対象ディレクトリ

- Windows（物理ホスト環境）の場合
インストール先フォルダ¥agtm¥agent¥インスタンス名¥log
- Windows（論理ホスト環境）の場合
環境ディレクトリ¥jp1pc¥agtm¥agent¥インスタンス名¥log
- Linux（物理ホスト環境）の場合
/opt/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/log
- Linux（論理ホスト環境）の場合
環境ディレクトリ/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/log
- コマンド実行している場合
環境パラメーター設定ファイルの COMMAND セクションの WORKDIR ラベルに指定したディレクトリ

対象のファイル

- タイムスタンプファイル（デフォルトは、jr3slget.lasttime または jr3alget.lasttime）

- システムログ情報格納ファイル（デフォルトは、SYSLOG またはSYSLOG n ※）
- CCMS アラート情報格納ファイル（デフォルトは、ALERT またはALERT n ※）
- 管理ファイル（デフォルトは、SYSLOG ofs またはALERT ofs）

注※

n は 1～「環境パラメーター設定ファイルの EXTRACTFILE セクションの NUM ラベルに指定した値」です。

3.8 Web ブラウザでマニュアルを参照するための設定

Performance Management では、PFM - Web Console がインストールされているホストに、プログラムプロダクトに標準添付されているマニュアル提供媒体からマニュアルをコピーすることで、Web ブラウザでマニュアルを参照できるようになります。なお、PFM - Web Console をクラスタ運用している場合は、実行系、待機系それぞれの物理ホストでマニュアルをコピーしてください。

3.8.1 マニュアルを参照するための設定手順

(1) PFM - Web Console のヘルプからマニュアルを参照する場合

1. PFM - Web Console のセットアップ手順に従い、PFM - Web Console に PFM - Agent を登録する (PFM - Agent の追加セットアップを行う)。

2. PFM - Web Console がインストールされているホストに、マニュアルのコピー先ディレクトリを作成する。

作成するディレクトリを次に示します。

Windows の場合

PFM - Web Console のインストール先フォルダ¥doc¥ja¥PFM - Agent for Enterprise Applications のヘルプ ID

Linux の場合

/opt/jp1pcwebcon/doc/ja/PFM - Agent for Enterprise Applications のヘルプ ID

PFM - Agent for Enterprise Applications のヘルプ ID については、「付録 C 識別子一覧」を参照してください。

3. 上記で作成したディレクトリの直下に、マニュアル提供媒体から次のファイルおよびディレクトリをコピーする。

HTML マニュアルの場合

Windows の場合

該当するドライブ¥MAN¥3021¥資料番号 (03004A0D など) 配下にあるすべての HTML ファイル、CSS ファイル、および GRAPHICS フォルダ

Linux の場合

/提供媒体のマウントポイント/MAN/3021/資料番号 (03004A0D など) 配下にあるすべての HTML ファイル、CSS ファイル、および GRAPHICS ディレクトリ

PDF マニュアルの場合

Windows の場合

該当するドライブ¥MAN¥3021¥資料番号 (03004A0D など) 配下の PDF ファイル

Linux の場合

/提供媒体のマウントポイント/MAN/3021/資料番号 (03004A0D など) 配下の PDF ファイル

HTML マニュアルの場合はINDEX.HTM を、PDF マニュアルの場合は PDF ファイル自体を作成したディレクトリの直下に配置してください。

4. PFM - Web Console を再起動する。

(2) お使いのマシンのハードディスクからマニュアルを参照する場合

使用するマシンのハードディスクからマニュアルを参照する場合は、次のどちらかの方法で設定してください。

- 提供媒体のsetup.exe を使ってインストールする (Windows の場合だけ)
- HTML ファイル、CSS ファイル、PDF ファイル、および GIF ファイルを任意のディレクトリに直接コピーする

HTML マニュアルを参照する場合は、次のディレクトリ構成になるようにしてください。

html (HTML ファイルおよび CSS ファイルを格納)

└GRAPHICS (GIF ファイルを格納)

3.8.2 マニュアルの参照手順

マニュアルの参照手順を次に示します。

1. PFM - Web Console の [メイン] 画面のメニューバーフレームにある [ヘルプ] メニューをクリックし、[ヘルプ選択] 画面を表示する。
2. マニュアル名またはマニュアル名の後ろの [PDF] をクリックする。
マニュアル名をクリックすると HTML 形式のマニュアルが表示されます。[PDF] をクリックすると PDF 形式のマニュアルが表示されます。

Web ブラウザでの表示に関する注意事項

Windows の場合は [スタート] メニューからオンラインマニュアルを表示させると、すでに表示されている Web ブラウザの画面上に HTML マニュアルが表示されることがあります。

4

クラスタシステムでの運用

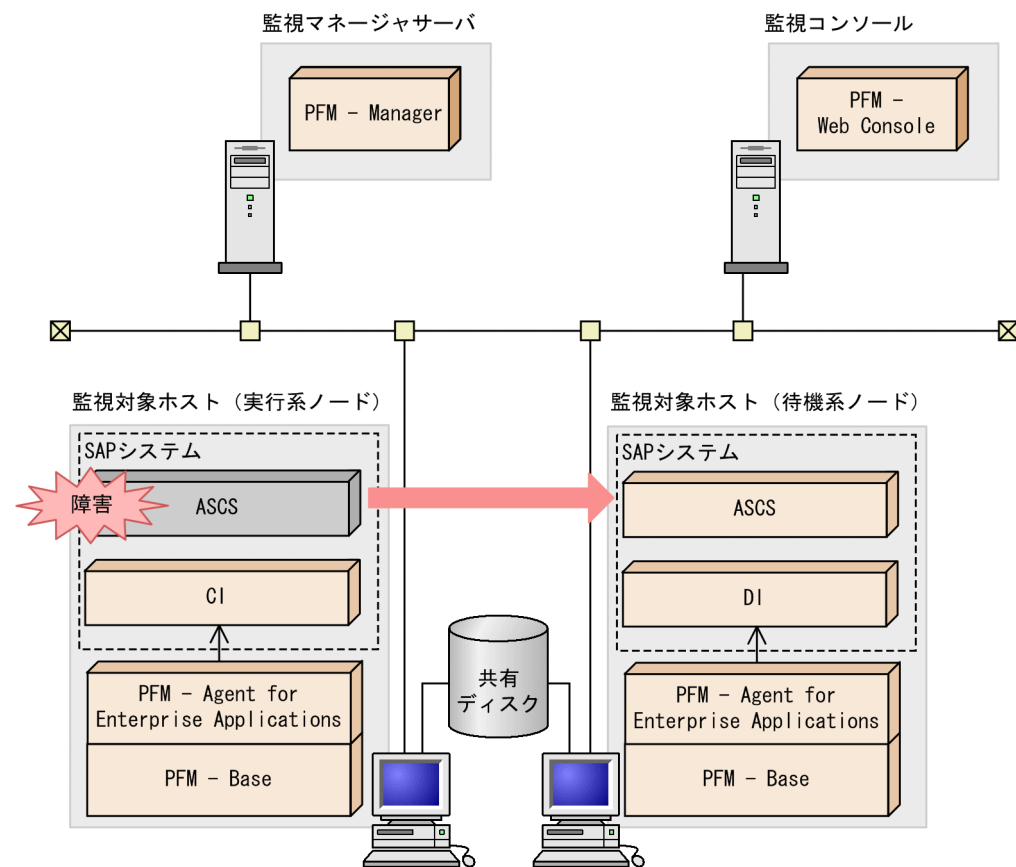
この章では、クラスタシステムで PFM - Agent for Enterprise Applications を運用する場合のインストール、セットアップ、およびクラスタシステムで PFM - Agent for Enterprise Applications を運用しているときの処理の流れについて説明します。

4.1 クラスタシステムでの PFM - Agent for Enterprise Applications の構成

クラスタシステムを使うと、システムに障害が発生した場合にも継続して業務を運用できる、信頼性の高いシステムが構築できます。このため、システムに障害が発生した場合でも Performance Management の 24 時間稼働および 24 時間監視ができます。

クラスタシステムで PFM - Agent ホストに障害が発生した場合の運用例を次の図に示します。

図 4-1 クラスタシステムの運用例 (PFM - Agent ホストと SAP システムが同じホストの場合)



(凡例)

ASCS : ABAP Central Services インスタンス

CI : セントラルインスタンス

DI : ダイアログインスタンス

↔ : フェールオーバー

→ : 監視

同じ設定の環境を 2 つ構築し、通常運用する方を「実行系ノード」、障害発生時に使う方を「待機系ノード」として定義しておきます。

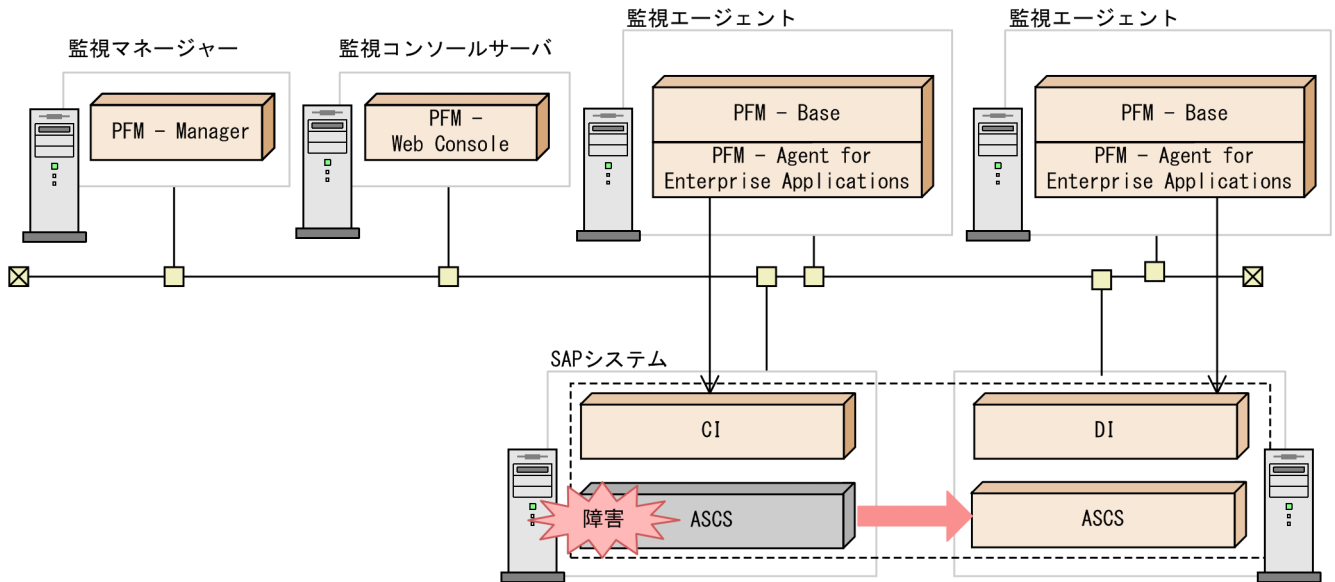
次に、クラスタシステムの SAP システムをリモート監視する場合の運用例を次の図に示します。ASCS インスタンスがフェールオーバーする構成としてクラスタシステムを構築するため、監視対象であるダイア

ログサービスはフェールオーバーしません。この場合は非クラスタシステムと同じセットアップを実施してください。

注意

1つのPFM - Agent for Enterprise Applicationsから監視できるのは、SAPシステム内の1つのホストだけとなります。

図 4-2 クラスタシステムの運用例 (SAPシステムをリモート監視する場合)



(凡例)

ASCS : ABAP Central Servicesインスタンス

CI : セントラルインスタンス

DI : ダイアログインスタンス

↔ : フェールオーバー

→ : 監視

4.2 フェールオーバー時の処理

実行系ホストに障害が発生すると、処理が待機系ホストに移ります。

ここでは、PFM - Agent for Enterprise Applications に障害が発生した場合のフェールオーバー時の処理について説明します。また、PFM - Manager に障害が発生した場合の、PFM - Agent for Enterprise Applications への影響について説明します。

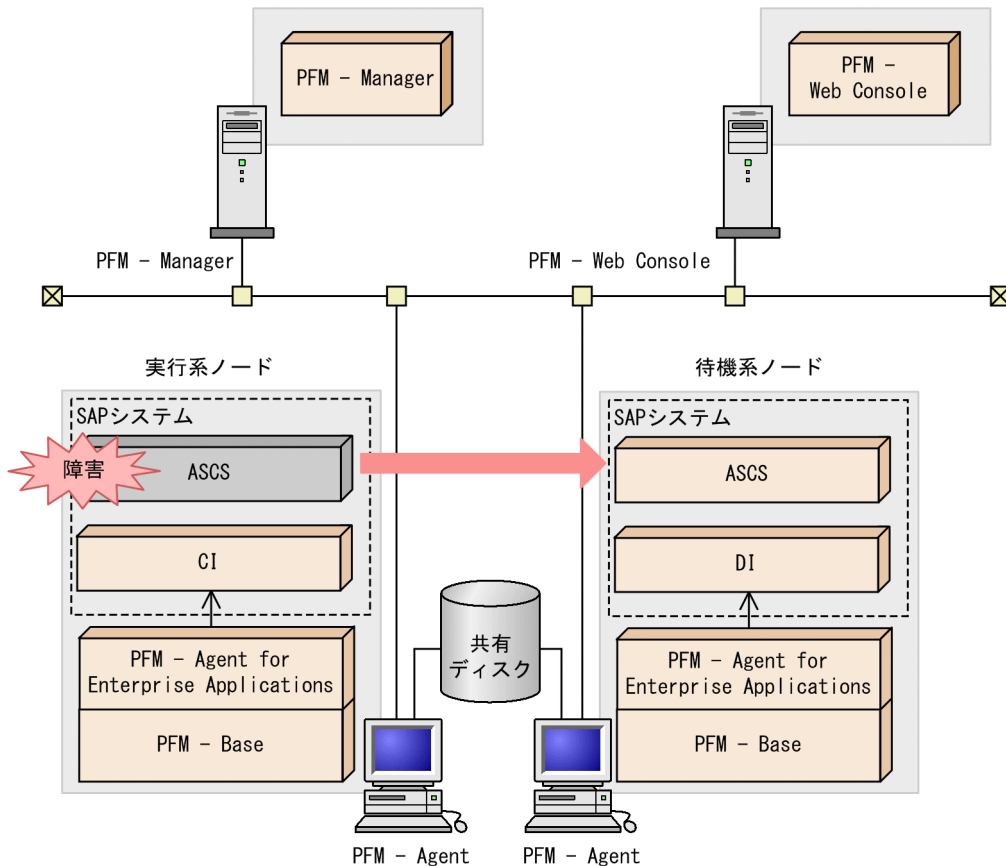
4.2.1 PFM - Agent ホストに障害が発生した場合のフェールオーバー

PFM - Agent for Enterprise Applications を実行している PFM - Agent ホストでフェールオーバーが発生した場合の処理について説明します。

(1) PFM - Agent ホストでフェールオーバーが発生した場合の処理 (SAP NetWeaver7.0 以降の場合)

SAP NetWeaver7.0 以降の場合に、PFM - Agent ホストでフェールオーバーが発生した場合の処理を次の図に示します。

図 4-3 PFM - Agent ホストでフェールオーバーが発生した場合の処理 (SAP NetWeaver7.0 以降の場合)



(凡例)

ASCS : ABAP Central Servicesインスタンス

CI : セントラルインスタンス

DI : ダイアログインスタンス

↔ : フェールオーバー

→ : 監視

各ノードでセントラルインスタンスとダイアログインスタンスが動作しています。PFM - Agent for Enterprise Applications は、各ノードのセントラルインスタンスとダイアログインスタンスを監視します。

単体ノードと同様に各ノードで PFM - Agent for Enterprise Applications をセットアップし、各ノードのセントラルインスタンス、ダイアログインスタンスを監視する構成にします。この場合、クラスタソフトへの登録は行いません。

注意

SAP NetWeaver7.0 以降で PFM - Agent for Enterprise Applications を監視する場合、ノードごとに非クラスタシステムと同じように運用してください。

4.2.2 PFM - Manager が停止した場合の影響と対処

PFM - Manager が停止すると、Performance Management システム全体に影響があります。

PFM - Manager は、各ノードで動作している PFM - Agent for Enterprise Applications のエージェント情報を一括管理しています。また、PFM - Agent for Enterprise Applications がパフォーマンス監視中にしきい値を超えた場合のアラームイベントの通知や、アラームイベントを契機としたアクションの実行を制御しています。このため、PFM - Manager が停止すると、Performance Management システムに次の表に示す影響があります。

表 4-1 PFM - Manager が停止した場合の PFM - Agent for Enterprise Applications への影響

プログラム名	影響	対処
PFM - Agent for Enterprise Applications	<p>PFM - Agent for Enterprise Applications が動作中に、PFM - Manager が停止した場合、次のように動作する。</p> <ul style="list-style-type: none">パフォーマンスデータは継続して収集される。発生したアラームイベントを PFM - Manager に通知できないため、アラーム定義ごとにアラームイベントが保持され、PFM - Manager が起動するまで通知をリトライする。保持しているアラームイベントが3つを超えると、古いアラームイベントは上書きされる。また、PFM - Agent for Enterprise Applications を停止すると、保持しているアラームイベントは削除される。PFM - Manager に通知済みのアラームステータスは、PFM - Manager が再起動したときに一度リセットされる。その後、PFM - Manager が PFM - Agent for Enterprise Applications の状態を確認したあと、アラームステータスは最新の状態となる。PFM - Agent for Enterprise Applications を停止しようとした場合、PFM - Manager に停止することを通知できないため、停止に時間が掛かる。	<p>PFM - Manager を起動する。動作中の PFM - Agent for Enterprise Applications はそのまま運用できる。ただし、アラームが期待したとおり通知されない場合があるため、PFM - Manager 復旧後に、PFM - Agent の共通メッセージログに出力されているメッセージ KAVE00024-I を確認すること。</p>

PFM - Manager が停止した場合の影響を考慮の上、運用方法を検討してください。なお、トラブル以外にも、構成変更やメンテナンスの作業などで PFM - Manager の停止が必要になる場合もあります。運用への影響が少ないときに、メンテナンスをすることをお勧めします。

4.3 Windows 版のクラスタシステムでのインストールとセットアップ

ここでは、クラスタシステムでの PFM - Agent for Enterprise Applications の環境構築と設定の手順について説明します。

なお、PFM - Manager の環境構築と設定の手順については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

4.3.1 Windows 版での SAP NetWeaver7.0 以降の場合

(1) インストールを始める前に

インストールおよびセットアップを開始する前に前提条件、必要な情報、および注意事項について説明します。

(a) 前提条件

PFM - Agent for Enterprise Applications をクラスタシステムで使用する場合、次に示す前提条件があります。

■ クラスタシステム

次の条件が整っていることを確認してください。

- クラスタシステムがクラスタソフトによって制御されていること。

また、次に示すエラー通知の抑止を設定してください。

Microsoft へのエラー報告を抑止する（実行系・待機系）

Windows では、アプリケーションエラーが発生すると、Microsoft へエラーを報告するダイアログボックスが表示されます。このダイアログボックスが表示されるとフェールオーバーできないおそれがあるため、エラー報告を抑止する必要があります。

Windows Server 2012 の場合

1. [コントロールパネル] - [システムとセキュリティ] - [アクションセンター] - [メンテナンス] を選択する。
2. [問題のレポートの解決策を確認] で [設定] をクリックする。
3. [Windows エラー報告の構成] ダイアログボックスで、[レポートを送信せず、この確認画面も今後表示しません] を選択する。
4. [OK] ボタンをクリックする。

Windows Server 2016 の場合

1. Windows の [スタート] メニューを右クリックし, [ファイル名を指定して実行] を選択する。
2. 「gpedit.msc」を入力し, [OK] ボタンをクリックする。
ローカルグループポリシーエディターが表示されます。
3. [コンピュータの構成] - [管理用テンプレート] - [Windows コンポーネント] - [Windows エラー報告] をクリックする。
4. 右ペインにある [Windows エラー報告を無効にする] を右クリックし, [編集] を選択する。
設定画面が表示されます。
5. 設定画面で [有効] をチェックする。
6. [OK] ボタンをクリックする。

(b) 物理ホスト名

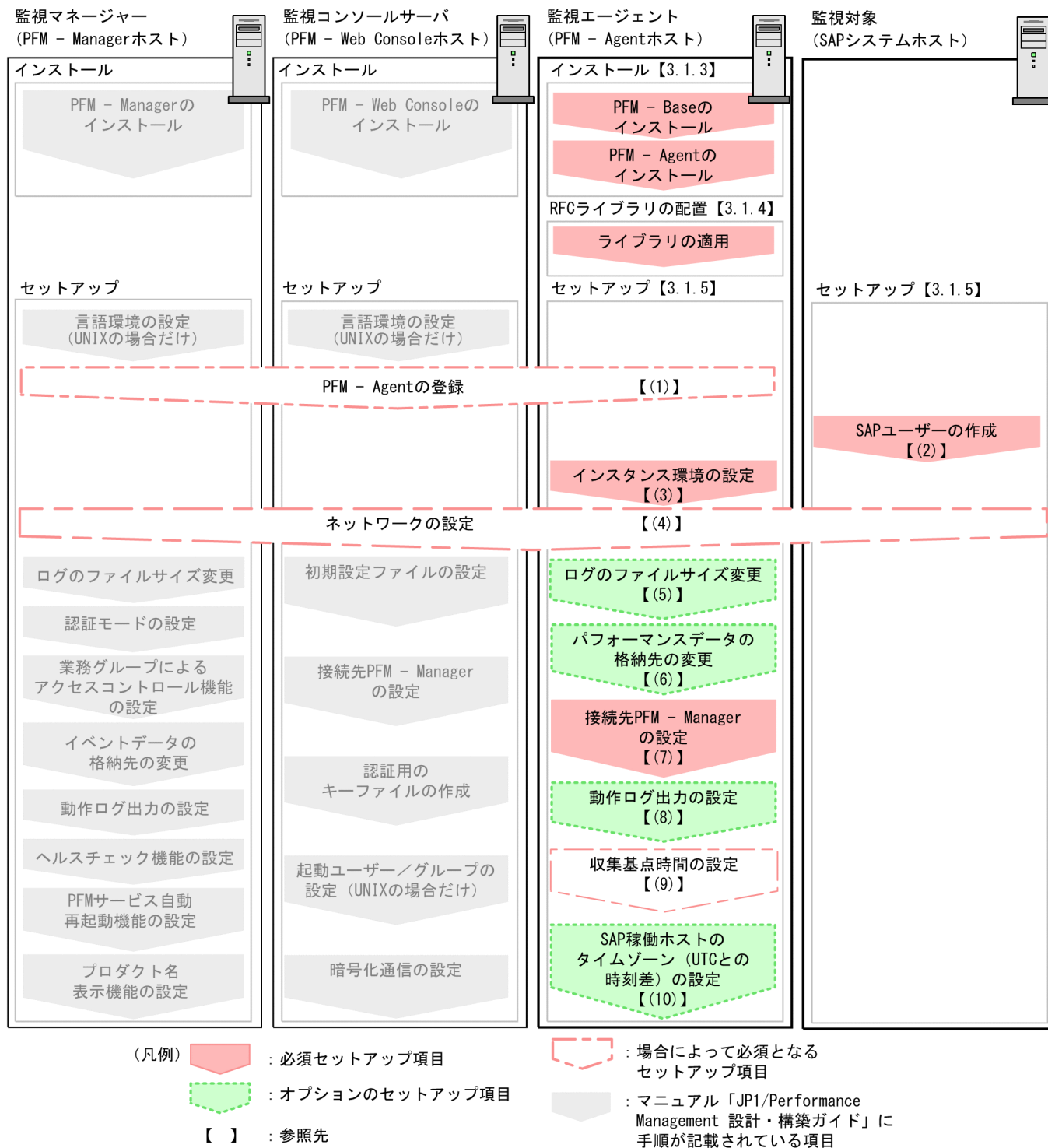
次の条件が整っていることを確認してください。

- 物理ホスト名は, システムの中でユニークであること。

(2) インストールから運用開始までの流れ

PFM - Agent for Enterprise Applications をインストールおよびセットアップする流れを説明します。

図 4-4 インストールとセットアップの流れ



PFM - Manager および PFM - Web Console のインストールおよびセットアップの手順は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

(3) インストール

実行系ノードおよび待機系ノードに PFM - Agent for Enterprise Applications をインストールします。

インストール先はローカルディスクです。共有ディスクにはインストールしないでください。

インストール手順は非クラスタシステムの場合と同じです。インストール手順については、「[3.1.3 Windows 版のインストール手順](#)」を参照してください。

(4) セットアップ

ここでは、PFM - Agent for Enterprise Applications を SAP NetWeaver7.0 以降で運用するための、セットアップについて説明します。

〈オプション〉は使用する環境によって必要になるセットアップ項目、またはデフォルトの設定を変更する場合のオプションのセットアップ項目を示します。

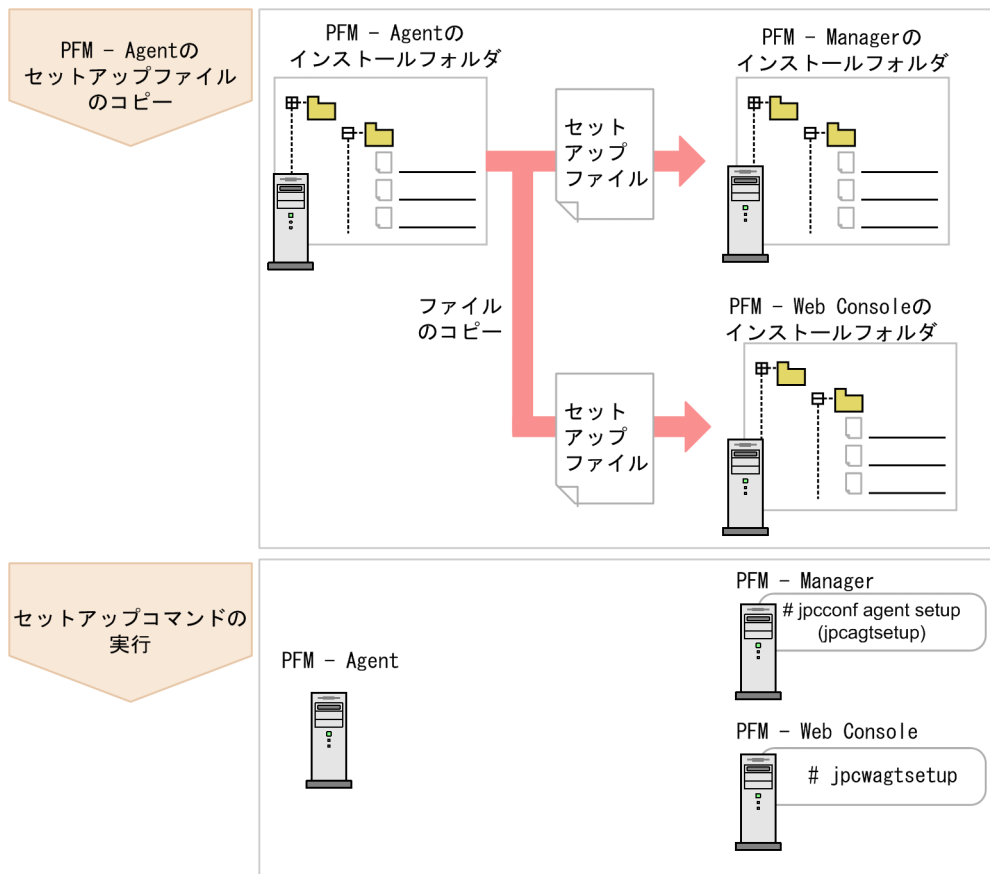
(a) PFM - Agent for Enterprise Applications の登録

PFM - Manager および PFM - Web Console を使って PFM - Agent を一元管理するために、PFM - Manager および PFM - nsole に PFM - Agent for Enterprise Applications を登録する必要があります。

PFM - Manager のバージョンが 08-50 以降の場合、PFM - Agent の登録は自動で行われるため、ここで説明する手順は不要です。ただし、PFM - Manager のリリースノートに記載されていないデータモデルバージョンの PFM - Agent は手動で登録する必要があります。なお、PFM - Agent for Enterprise Applications のデータモデルのバージョンについては、「[付録 I バージョン互換](#)」を参照してください。

PFM - Agent の登録の流れを次に示します。

図 4-5 PFM - Agent の登録の流れ



注意

- PFM - Agent の登録は、インスタンス環境を設定する前に実施してください。
- すでに PFM - Agent for Enterprise Applications の情報が登録されている Performance Management システムに、新たに同じバージョンの PFM - Agent for Enterprise Applications を追加した場合、PFM - Agent の登録は必要ありません。
- バージョンが異なる PFM - Agent for Enterprise Applications を、異なるホストにインストールする場合、古いバージョン、新しいバージョンの順でセットアップしてください。
- PFM - Manager と同じホストに PFM - Agent をインストールした場合、`jpcconf agent setup` コマンドが自動的に実行されます。共通メッセージログに「KAVE05908-I エージェント追加セットアップは正常に終了しました」と出力されるので、結果を確認してください。コマンドが正しく実行されていない場合は、コマンドを実行し直してください。コマンドの実行方法については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドの章を参照してください。

■ PFM - Agent for Enterprise Applications のセットアップファイルをコピーする

PFM - Agent for Enterprise Applications をインストールしたホストにあるセットアップファイルを PFM - Manager および PFM - Web Console をインストールしたホストにコピーします。手順を次に示します。

1. PFM - Web Console が起動されている場合は、停止する。
2. PFM - Agent のセットアップファイルをバイナリーモードでコピーする。

ファイルが格納されている場所およびファイルをコピーする場所を次の表に示します。

表 4-2 コピーするセットアップファイル

PFM - Agent の セットアップファイル	コピー先		
	PFM プログラム名	OS	コピー先フォルダ またはディレクトリ
インストール先フォルダ¥setup ¥jpcagtmw.EXE	PFM - Manager	Windows	PFM - Manager のインストール先フォルダ¥setup
インストール先フォルダ¥setup ¥jpcagtmu.Z		UNIX	/opt/jp1pc/setup/
インストール先フォルダ¥setup ¥jpcagtmw.EXE	PFM - Web Console	Windows	PFM - Web Console のインストール先フォルダ¥setup
インストール先フォルダ¥setup ¥jpcagtmu.Z		UNIX	/opt/jp1pcwebcon/setup/

■ PFM - Manager ホストでセットアップコマンドを実行する

PFM - Manager で PFM - Agent for Enterprise Applications をセットアップするための次のコマンドを実行します。

```
jpcconf agent setup -key EAP
```

注意

コマンドを実行するローカルホストの Performance Management のプログラムおよびサービスが完全に停止していない状態で `jpcconf agent setup` コマンドを実行した場合、エラーが発生することがあります。その場合は、Performance Management のプログラムおよびサービスが完全に停止したことを確認したあと、再度 `jpcconf agent setup` コマンドを実行してください。

PFM - Manager ホストにある PFM - Agent のセットアップファイルは、この作業が終了したあと、削除してもかまいません。

■ PFM - Web Console ホストでセットアップコマンドを実行する

PFM - Web Console で PFM - Agent for Enterprise Applications をセットアップするための次のコマンドを実行します。

```
jpcwagtsetup
```

PFM - Web Console ホストにある PFM - Agent のセットアップファイルは、この作業が終了したあと削除してもかまいません。

(b) PFM - Agent for Enterprise Applications で使用する SAP ユーザーの作成

PFM - Agent for Enterprise Applications はパフォーマンス情報を収集するために、SAP 社の通信プロトコルである RFC を使用して、SAP システム側に定義されている外部管理インターフェースを実行しま

す。そのため、PFM - Agent for Enterprise Applications が使用するユーザーをあらかじめ SAP システム側に用意しておく必要があります。

ここでは、SAP システム側に作成する SAP ユーザーのユーザータイプ、パスワード、権限について説明します。

■ ユーザータイプ

PFM - Agent for Enterprise Applications で使用する SAP ユーザーには、次のタイプのユーザーが使用できます。

- ダイアログ (Dialog)
- システム (System)
- 通信 (Communication)
- サービス (Service)

■ パスワードに指定できる文字

SAP ユーザーのパスワードは、半角数字(0~9)、半角英字(a~z, A~Z)、および次の半角記号で定義してください。

!@ \$ % & / () = ? ' ` * + ~ # - _ . : { [] } < > |

■ 必要な権限

ユーザーには次の権限 (権限オブジェクト) を設定する必要があります。

- ユーザーが汎用モジュールに RFC 接続するための権限 (S_RFC)
- 外部管理インターフェースを使用するための権限 (S_XMI_PROD)

各権限の値として、次の表に示す値またはすべての項目に「*」を指定したビルトイン権限値 (S_RFC_ALL や S_XMI_ADMIN) を割り当ててください。

表 4-3 ユーザーが汎用モジュールに RFC 接続するための権限 (S_RFC)

権限項目	説明	値
RFC_TYPE	保護される RFC オブジェクトのタイプ	FUGR (汎用グループ)
RFC_NAME	保護される RFC 名	*
ACTVT	アクティビティ	16 (実行)

表 4-4 外部管理インターフェースを使用するための権限 (S_XMI_PROD)

権限項目	説明	値
EXTCOMPANY	外部管理ツールの会社名	HITACHI
EXTPRODUCT	外部管理ツールのプログラム名	JP1

権限項目	説明	値
INTERFACE	インターフェース ID	*

(c) インスタンス環境の設定

PFM - Agent for Enterprise Applications で監視する SAP システムのインスタンス情報を設定します。インスタンス情報の設定は、PFM - Agent ホストで実施します。

設定するインスタンス情報を次の表に示します。セットアップの操作を始める前に、次の情報をあらかじめ確認してください。SAP システムのインスタンス情報の詳細については、SAP システムのマニュアルを参照してください。

表 4-5 PFM - Agent for Enterprise Applications のインスタンス情報

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
SID	監視対象となる SAP システム ID	8 バイト以内の半角文字列	—
SERVER※ ¹	監視対象となる SAP インスタンス名 (トランザクションコード SM51 で確認できる、ダイアログサービスを持つ SAP インスタンス名)	20 バイト以内の半角文字列	jpccconf inst setup コマンドの -inst で指定したインスタンス名
ASHOST※ ¹	接続先アプリケーションサーバのホスト名 (トランザクションコード SM51 で確認できる SAP ローカルホスト名)	100 バイト以内の半角文字列	ローカルホスト名
SYSNR	SAP システムのシステム番号を指定する。	2 バイト以内の半角数字	[00]
CLIENT	SAP ユーザーが属するクライアント名 (接続先ダイアログインスタンスに割り当てられているシステム番号)	3 バイト以内の半角数字	[000]
USER	SAP ユーザー名	12 バイト以内の半角文字列	—
EXTPWD	SAP システムへの接続に、拡張パスワードを使用するかどうかを指定する。	Y または N で指定する。 <ul style="list-style-type: none"> • Y: 拡張パスワードを使用する。 • N: 拡張パスワードを使用しない。 	[Y]
PASSWD	SAP ユーザーのパスワード	<ul style="list-style-type: none"> • 拡張パスワードを使用する場合: 40 バイト以内の半角文字列 • 拡張パスワードを使用しない場合: 8 バイト以内の半角文字列 	—

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
DELAYCONNECT	SAP システムにいつ接続するかを指定する。	Y または N で指定する。 <ul style="list-style-type: none"> • Y: パフォーマンスデータ収集時に SAP システムに接続する。 この場合、Agent Collector サービスは、接続時の SAP システムの稼働状況に関係なく起動される。 • N: Agent Collector サービス起動時に SAP システムに接続する。 この場合、Agent Collector サービスは、接続時に SAP システムが停止していると起動されない。 	[N]
Store Version ^{※2}	使用する Store バージョンを指定する。Store バージョンについては「 3.6.2 Store バージョン 2.0 への移行 」を参照してください。	{1.0 2.0}	2.0

(凡例)

— : なし

注※1

リモート監視機能を使用する場合、監視対象の SAP インスタンス名および SAP システムのホスト名を設定してください。

注※2

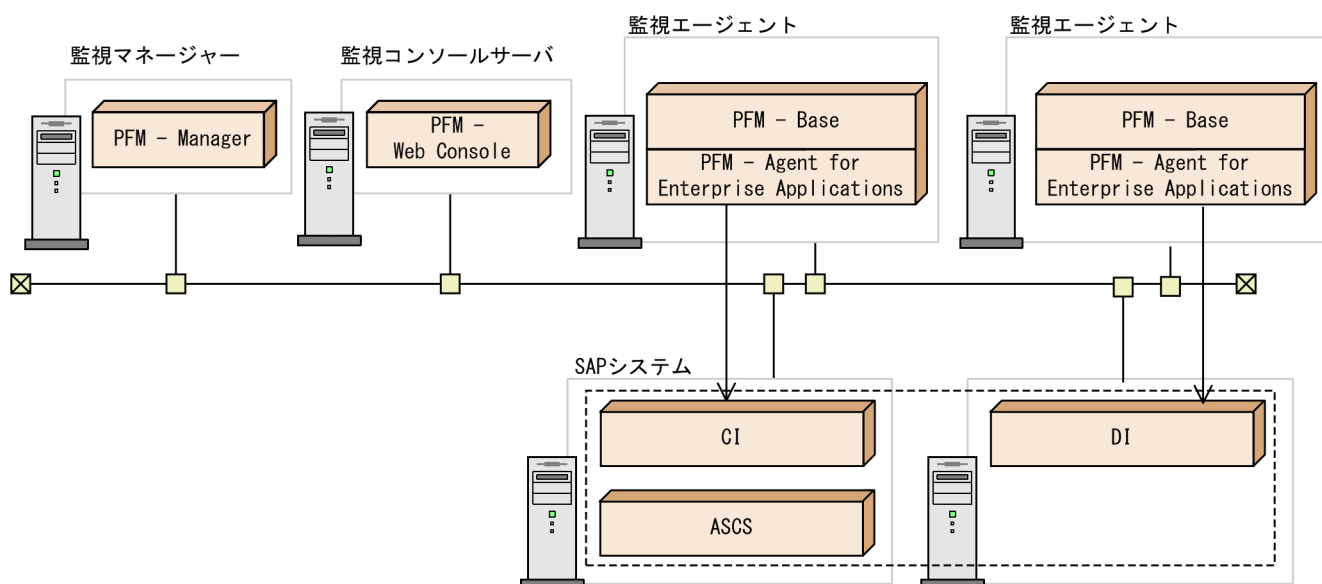
PFM - Agent for Enterprise Applications, および同一ホスト上の PFM - Base または PFM - Manager が 08-10 以降で、初めてインスタンス環境の設定を行う場合に必要となる設定です。

注意

- インスタンス環境を設定していない場合、PFM - Agent for Enterprise Applications のサービスを起動できません。
- 1 つの PFM - Agent for Enterprise Applications から監視できるのは、SAP システム内の 1 つのホストだけです。

分散構成やクラスタシステムでの運用など、複数のホストで構成された SAP システムを監視する場合は、次の図のように監視対象ホスト分の PFM - Agent for Enterprise Applications を用意する必要があります。

図 4-6 SAP システムが複数ホストで構成される例



(凡例)

- ASCS : ABAP Central Servicesインスタンス
- CI : セントラルインスタンス
- DI : ダイアログインスタンス
- : 監視

インスタンス環境を構築するには、`jpcconf inst setup` コマンドを使用します。インスタンス環境の構築手順を次に示します。

1. サービスキーおよびインスタンス名を指定して、`jpcconf inst setup` コマンドを実行する。

例えば、PFM - Agent for Enterprise Applications のインスタンス名 `o246bciSD500` のインスタンス環境を構築する場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpcconf inst setup -key EAP -inst o246bciSD500
```

PFM - Agent for Enterprise Applications の場合、インスタンス名は任意ですが、管理のしやすさを考慮し、監視対象とする SAP システムのインスタンス名と紐づくようにしてください。SAP システムのインスタンスには、通常、「ホスト名_SAP システム ID_システム番号」という形式の名称が付けられています。

ただし、`jpcconf inst setup` コマンドでは"_"を指定できません。例えば、SAP システムのインスタンス名が"o246bci_SD5_00"の場合、PFM - Agent for Enterprise Applications のインスタンス名を"o246bciSD500"としてください。

2. SAP システムのインスタンス情報を設定する。

表 4-5 に示した項目を、コマンドの指示に従って入力してください。各項目とも省略はできません。デフォルトで表示されている値を、項目の入力とする場合はリターンキーだけを押してください。

すべての入力が終了すると、インスタンス環境が構築されます。構築されるインスタンス環境を次に示します。

- インスタンス環境のフォルダ構成

次のフォルダ下にインスタンス環境が構築されます。

- 物理ホスト運用の場合：インストール先フォルダ¥agtm

構築されるインスタンス環境のフォルダ構成を次に示します。

表 4-6 インスタンス環境のフォルダ構成

フォルダ名・ファイル名		説明	
agent	インスタンス名	jpcagt.ini	Agent Collector サービス起動情報ファイル
		jpcagt.ini.model*	Agent Collector サービス起動情報ファイルのモデルファイル
		jpcMcollect.ini	SAP 通信プロセスの環境パラメーター設定ファイル
		jr3alget.ini	CCMS Alert Monitor Command (PD_ALMX) レコード用の環境パラメーター設定ファイル
		jr3slget.ini	System Log Monitor Command (PD_SLMX) レコード用の環境パラメーター設定ファイル
		log	ログファイル格納フォルダ
store	インスタンス名	jpcsto.ini	Agent Store サービス起動情報ファイル
		jpcsto.ini.model*	Agent Store サービス起動情報ファイルのモデルファイル
		*.DAT	データモデル定義ファイル
		dump	エクスポート先フォルダ
		backup	バックアップ先フォルダ
		import	インポート先フォルダ (Store バージョン 2.0 の場合)
		log	ログファイル格納フォルダ
		partial	部分バックアップ先フォルダ (Store バージョン 2.0 の場合)
		STPD	PD レコードタイプのパフォーマンスデータ格納フォルダ (Store バージョン 2.0 の場合)
		STPI	PI レコードタイプのパフォーマンスデータ格納フォルダ (Store バージョン 2.0 の場合)
		STPL	PL レコードタイプのパフォーマンスデータ格納フォルダ (Store バージョン 2.0 の場合)

注※

インスタンス環境を構築した時点の設定値に戻したいときに使用します。

- インスタンス環境のサービス ID

インスタンス環境のサービス ID は、プロダクト ID、機能 ID、インスタンス番号、インスタンス名、ホスト名をつないだ文字列になります。例えばサービス ID 「MA1o246bciSD500[host01]」は、次のインスタンス環境を表します。

- プロダクト ID：M
- 機能 ID：A
- インスタンス番号：1
- インスタンス名：o246bciSD500
- ホスト名：host01

サービス ID については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、付録を参照してください。

• インスタンス環境の Windows のサービス名

インスタンス環境の Windows のサービス名は次のようになります。

- Agent Collector サービス：PFM - Agent for R/3 インスタンス名
- Agent Store サービス：PFM - Agent Store for R/3 インスタンス名

Windows のサービス名については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、付録を参照してください。

(5) ネットワークの設定 オプション

Performance Management を使用するネットワーク構成に応じて、変更する場合にだけ必要な設定です。

ネットワークの設定では次の 2 つの項目を設定できます。

• IP アドレスを設定する

Performance Management を複数の LAN に接続されたネットワークで使用するときに設定します。複数の IP アドレスを設定するには、jpchosts ファイルにホスト名と IP アドレスを定義します。設定した jpchosts ファイルは Performance Management システム全体で統一させてください。

詳細についてはマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

• ポート番号を設定する

Performance Management が使用するポート番号を設定できます。運用での混乱を避けるため、ポート番号とサービス名は、Performance Management システム全体で統一させてください。

ポート番号の設定の詳細についてはマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

(a) ログのファイルサイズ変更 オプション

Performance Management の稼働状況を、Performance Management 独自のログファイルに出力します。このログファイルを「共通メッセージログ」と呼びます。このファイルサイズを変更したい場合にだけ、必要な設定です。

詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

(b) パフォーマンスデータの格納先の変更 オプション

PFM - Agent for Enterprise Applications で管理されるパフォーマンスデータを格納するデータベースの保存先、バックアップ先、エクスポート先、部分バックアップ先またはインポート先のフォルダを変更したい場合にだけ、必要な設定です。

パフォーマンスデータは、デフォルトで、次の場所に保存されます。

保存先	フォルダ名
データベースの保存先	<ul style="list-style-type: none">物理ホストの場合 インストール先フォルダ¥agtm¥store¥インスタンス名¥論理ホストの場合 環境ディレクトリ¥¥jp1pc¥agtm¥store¥インスタンス名¥
バックアップ先	<ul style="list-style-type: none">物理ホストの場合 インストール先フォルダ¥agtm¥store¥インスタンス名¥backup¥論理ホストの場合 環境ディレクトリ¥¥jp1pc¥agtm¥store¥インスタンス名¥backup¥
エクスポート先	<ul style="list-style-type: none">物理ホストの場合 インストール先フォルダ¥agtm¥store¥インスタンス名¥dump¥論理ホストの場合 環境ディレクトリ¥¥jp1pc¥agtm¥store¥インスタンス名¥dump¥
部分バックアップ先 (Store バージョン 2.0 の場合)	<ul style="list-style-type: none">物理ホストの場合 インストール先フォルダ¥agtm¥store¥インスタンス名¥partial¥論理ホストの場合 環境ディレクトリ¥¥jp1pc¥agtm¥store¥インスタンス名¥partial¥
インポート先 (Store バージョン 2.0 の場合)	<ul style="list-style-type: none">物理ホストの場合 インストール先フォルダ¥agtm¥store¥インスタンス名¥import¥論理ホストの場合

保存先	フォルダ名
インポート先 (Store バージョン 2.0 の場合)	環境ディレクトリ※¥jp1pc¥agtm¥store¥インスタンス名 ¥import¥

注※

環境ディレクトリは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

詳細については、「[3.6.1 パフォーマンスデータの格納先の変更](#)」を参照してください。

(c) PFM - Agent for Enterprise Applications の接続先 PFM - Manager の設定

PFM - Agent がインストールされているホストで、その PFM - Agent を管理する PFM - Manager を設定します。接続先の PFM - Manager を設定するには、`jpccconf mgrhost define` コマンドを使用します。

注意

- 同一ホスト上に、複数の PFM - Agent がインストールされている場合でも、接続先に指定できる PFM - Manager は、1 つだけです。PFM - Agent ごとに異なる PFM - Manager を接続先に設定することはできません。
- PFM - Agent と PFM - Manager が同じホストにインストールされている場合、接続先 PFM - Manager はローカルホストの PFM - Manager となります。この場合、接続先の PFM - Manager をほかの PFM - Manager に変更できません。

手順を次に示します。

1. Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する。

セットアップを実施する前に、ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。サービスの停止方法については、マニュアル「[JP1/Performance Management 運用ガイド](#)」の、サービスの起動と停止について説明している章を参照してください。

`jpccconf mgrhost define` コマンド実行時に、Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、停止を問い合わせるメッセージが表示されます。

2. 接続先の PFM - Manager ホストのホスト名を指定して、`jpccconf mgrhost define` コマンドを実行する。

例えば、接続先の PFM - Manager がホスト `host01` 上にある場合、次のように指定します。

```
jpccconf mgrhost -host host01
```

(d) 動作ログ出力の設定 オプション

PFM サービスの起動・停止時や、PFM - Manager との接続状態の変更時に動作ログを出力したい場合に必要な設定です。動作ログとは、システム負荷などのしきい値オーバーに関するアラーム機能などと連動した動作情報の履歴を出力するログ情報です。

設定方法については、「[付録】動作ログの出力](#)」を参照してください。

(e) 収集基点時間の設定

リモート監視機能を使用する場合、システムログ情報抽出機能および CCMS アラート情報抽出機能の収集基点時間を設定してください。環境パラメーター設定ファイルの設定手順や設定項目の詳細については、「5.3 環境パラメーター設定ファイル」および「6.3 環境パラメーター設定ファイル」を参照してください。

(f) SAP システムのタイムゾーンの設定 オプション

リモート監視機能を使用する場合、システムログ情報抽出機能で考慮する SAP システムのタイムゾーン (UTC との時刻差) を設定します。環境パラメーター設定ファイルの設定手順や設定項目の詳細については、「5.3 環境パラメーター設定ファイル」および「6.3 環境パラメーター設定ファイル」を参照してください。

4.4 Linux 版のクラスタシステムでのインストールとセットアップ

4.4.1 Linux 版での SAP NetWeaver7.0 以降の場合

(1) インストールを始める前に

インストールおよびセットアップを開始する前に前提条件、必要な情報、および注意事項について説明します。

(a) 前提条件

PFM - Agent for Enterprise Applications をクラスタシステムで使用する場合、次に示す前提条件があります。

(b) クラスタシステム

次の条件が整っていることを確認してください。

- クラスタシステムがクラスタソフトによって制御されていること。

(c) 物理ホスト名

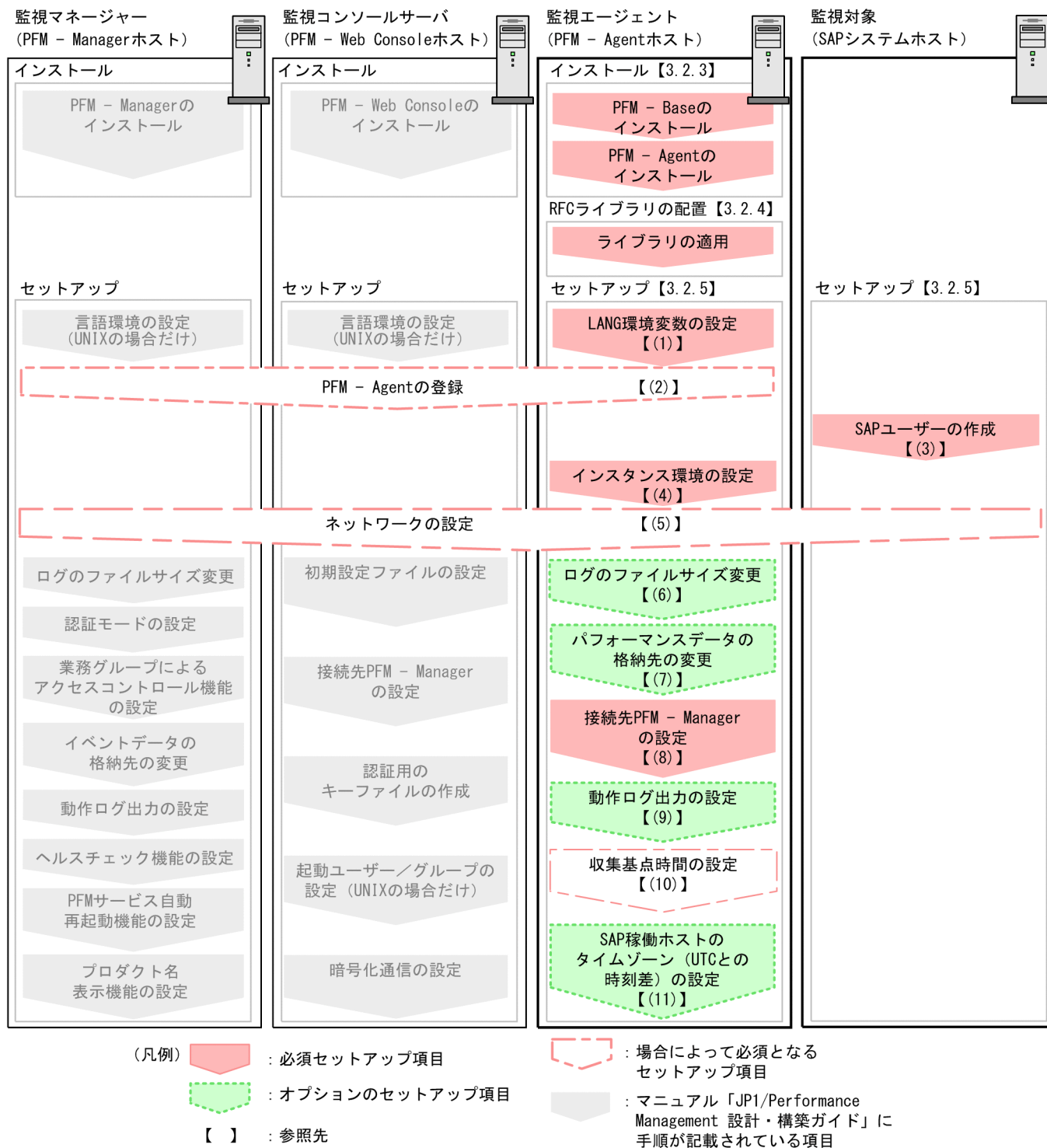
次の条件が整っていることを確認してください。

- 物理ホスト名は、システムの中でユニークであること。

(2) インストールから運用開始までの流れ

PFM - Agent for Enterprise Applications をインストールおよびセットアップする流れを説明します。

図 4-7 インストールとセットアップの流れ



PFM - Manager および PFM - Web Console のインストールおよびセットアップの手順は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

(3) インストール

実行系ノードおよび待機系ノードに PFM - Agent for Enterprise Applications をインストールします。

インストール先はローカルディスクです。共有ディスクにはインストールしないでください。

インストール手順は非クラスタシステムの場合と同じです。インストール手順については、「[3.2.3 Linux版のインストール手順](#)」を参照してください。

(4) セットアップ

ここでは、PFM - Agent for Enterprise Applications を運用するための、セットアップについて説明します。

◁オプション▷ は使用する環境によって必要になるセットアップ項目、またはデフォルトの設定を変更する場合のオプションのセットアップ項目を示します。

(a) LANG 環境変数を設定する

PFM - Agent for Enterprise Applications で使用できる LANG 環境変数を次の表に示します。

なお、これらの LANG 環境変数を設定する前に、設定する言語環境が正しくインストール・構築されていることを確認しておいてください。正しくインストール・構築されていない場合、文字化けが発生したり、定義データが不当に書き換わってしまったりすることがあります。

注意

共通メッセージログの言語は、サービス起動時やコマンド実行時に設定されている LANG 環境変数によって決まります。そのため、日本語や英語など、複数の言語コードの文字列が混在することがあります。

表 4-7 PFM - Agent for Enterprise Applications で使用できる LANG 環境変数

OS	言語種別		LANG 環境変数の値
Linux	日本語	Shift-JIS コード	ja_JP.SJIS*または ja_JP.sjis*
		UTF-8	ja_JP.UTF-8
	英語（日本語なし）		C
	中国語（簡体字）	GB18030	zh_CN.gb18030
		UTF-8	zh_CN.UTF-8または zn_CN.utf8

注※ SUSE Linux でだけで使用できます。

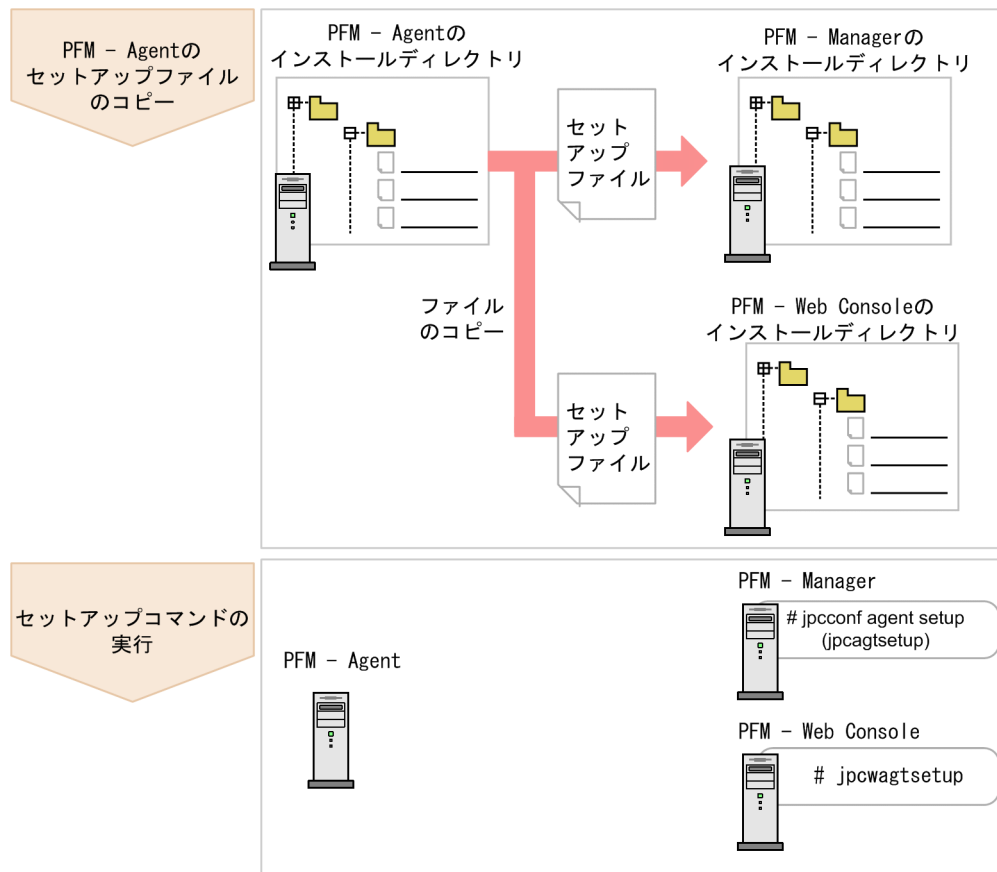
(b) PFM - Agent for Enterprise Applications の登録

PFM - Manager および PFM - Web Console を使って PFM - Agent を一元管理するために、PFM - Manager および PFM - Web Console に PFM - Agent for Enterprise Applications を登録する必要があります。

PFM - Manager のバージョンが 08-50 以降の場合、PFM - Agent の登録は自動で行われるため、ここで説明する手順は不要です。ただし、PFM - Manager のリリースノートに記載されていないデータモデルバージョンの PFM - Agent は手動で登録する必要があります。なお、PFM - Agent for Enterprise Applications のデータモデルのバージョンについては、「付録 I バージョン互換」を参照してください。

PFM - Agent の登録の流れを次に示します。

図 4-8 PFM - Agent の登録の流れ



注意

- PFM - Agent の登録は、インスタンス環境を設定する前に実施してください。
- すでに PFM - Agent for Enterprise Applications の情報が登録されている Performance Management システムに、新たに同じバージョンの PFM - Agent for Enterprise Applications を追加した場合、PFM - Agent の登録は必要ありません。
- バージョンが異なる PFM - Agent for Enterprise Applications を、異なるホストにインストールする場合、古いバージョン、新しいバージョンの順でセットアップしてください。
- PFM - Manager と同じホストに PFM - Agent をインストールした場合、`jpcconf agent setup` コマンドが自動的に実行されます。共通メッセージログに「KAVE05908-I エージェント追加セットアップは正常に終了しました」と出力されるので、結果を確認してください。コマンドが正しく実行されていない場合は、コマンドを実行し直してください。コマンドの実行方法については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドの章を参照してください。

■ PFM - Agent for Enterprise Applications のセットアップファイルをコピーする

PFM - Agent for Enterprise Applications をインストールしたホストにあるセットアップファイルを PFM - Manager および PFM - Web Console をインストールしたホストにコピーします。手順を次に示します。

1. PFM - Web Console が起動されている場合は、停止する。
2. PFM - Agent のセットアップファイルをバイナリーモードでコピーする。
ファイルが格納されている場所およびファイルをコピーする場所を次の表に示します。

表 4-8 コピーするセットアップファイル

PFM - Agent の セットアップファイル	コピー先		
	PFM プログラム名	OS	コピー先フォルダ またはディレクトリ
/opt/jp1pc/setup/jpcagtmw.EXE	PFM - Manager	Windows	PFM - Manager のインストール先フォルダ¥setup
/opt/jp1pc/setup/jpcagtmu.Z		UNIX	/opt/jp1pc/setup/
/opt/jp1pc/setup/jpcagtmw.EXE	PFM - Web Console	Windows	PFM - Web Console のインストール先フォルダ¥setup
/opt/jp1pc/setup/jpcagtmu.Z		UNIX	/opt/jp1pcwebcon/setup/

■ PFM - Manager ホストでセットアップコマンドを実行する

PFM - Manager で PFM - Agent for Enterprise Applications をセットアップするための次のコマンドを実行します。

```
jpccconf agent setup -key EAP
```

注意

コマンドを実行するローカルホストの Performance Management のプログラムおよびサービスが完全に停止していない状態で `jpccconf agent setup` コマンドを実行した場合、エラーが発生することがあります。その場合は、Performance Management のプログラムおよびサービスが完全に停止したことを確認したあと、再度 `jpccconf agent setup` コマンドを実行してください。

PFM - Manager ホストにある PFM - Agent のセットアップファイルは、この作業が終了したあと、削除してもかまいません。

■ PFM - Web Console ホストでセットアップコマンドを実行する

PFM - Web Console で PFM - Agent for Enterprise Applications をセットアップするための次のコマンドを実行します。

```
jpcwagtsetup
```

PFM - Web Console ホストにある PFM - Agent のセットアップファイルは、この作業が終了したあと削除してもかまいません。

(c) PFM - Agent for Enterprise Applications で使用する SAP ユーザーの作成

PFM - Agent for Enterprise Applications はパフォーマンス情報を収集するために、SAP 社の通信プロトコルである RFC を使用して、SAP システム側に定義されている外部管理インターフェースを実行します。そのため、PFM - Agent for Enterprise Applications が使用するユーザーをあらかじめ SAP システム側に用意しておく必要があります。

ここでは、SAP システム側に作成する SAP ユーザーのユーザータイプ、パスワード、権限について説明します。

■ ユーザータイプ

PFM - Agent for Enterprise Applications で使用する SAP ユーザーには、次のタイプのユーザーが使用できます。

- ダイアログ (Dialog)
- システム (System)
- 通信 (Communication)
- サービス (Service)

■ パスワードに指定できる文字

SAP ユーザーのパスワードは、半角数字(0~9)、半角英字(a~z, A~Z)、および次の半角記号で定義してください。

! @ \$ % & / () = ? ' ` * + ~ # - _ . : { [] } < > |

■ 必要な権限

ユーザーには次の権限 (権限オブジェクト) を設定する必要があります。

- ユーザーが汎用モジュールに RFC 接続するための権限 (S_RFC)
- 外部管理インターフェースを使用するための権限 (S_XMI_PROD)

各権限の値として、次の表に示す値またはすべての項目に「*」を指定したビルトイン権限値 (S_RFC_ALL や S_XMI_ADMIN) を割り当ててください。

表 4-9 ユーザーが汎用モジュールに RFC 接続するための権限 (S_RFC)

権限項目	説明	値
RFC_TYPE	保護される RFC オブジェクトのタイプ	FUGR (汎用グループ)
RFC_NAME	保護される RFC 名	*
ACTVT	アクティビティ	16 (実行)

表 4-10 外部管理インターフェースを使用するための権限 (S_XMI_PROD)

権限項目	説明	値
EXTCOMPANY	外部管理ツールの会社名	HITACHI
EXTPRODUCT	外部管理ツールのプログラム名	JP1
INTERFACE	インターフェース ID	*

(d) インスタンス環境の設定

PFM - Agent for Enterprise Applications で監視する SAP システムのインスタンス情報を設定します。インスタンス情報の設定は、PFM - Agent ホストで実施します。

設定するインスタンス情報を次の表に示します。セットアップの操作を始める前に、次の情報をあらかじめ確認してください。SAP システムのインスタンス情報の詳細については、SAP システムのマニュアルを参照してください。

表 4-11 PFM - Agent for Enterprise Applications のインスタンス情報

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
SID	監視対象となる SAP システム ID	8 バイト以内の半角文字列	—
SERVER※ ¹	監視対象となる SAP インスタンス名 (トランザクションコード SM51 で確認できる、ダイアログサービスを持つ SAP インスタンス名)	20 バイト以内の半角文字列	jpccconf inst setup コマンドの -inst で指定したインスタンス名
ASHOST※ ¹	接続先アプリケーションサーバのホスト名 (トランザクションコード SM51 で確認できる SAP ローカルホスト名)	100 バイト以内の半角文字列	ローカルホスト名
SYSNR	SAP システムのシステム番号を指定する。	2 バイト以内の半角数字	[00]
CLIENT	SAP ユーザーが属するクライアント名 (接続先ダイアログインスタンスに割り当てられているシステム番号)	3 バイト以内の半角数字	[000]
USER	SAP ユーザー名	12 バイト以内の半角文字列	—
EXTPWD	SAP システムへの接続に、拡張パスワードを使用するかどうかを指定する。	Y または N で指定する。 <ul style="list-style-type: none"> Y: 拡張パスワードを使用する。 N: 拡張パスワードを使用しない。 	[Y]
PASSWD	SAP ユーザーのパスワード	<ul style="list-style-type: none"> 拡張パスワードを使用する場合: 40 バイト以内の半角文字列 	—

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
PASSWD	SAP ユーザーのパスワード	<ul style="list-style-type: none"> 拡張パスワードを使用しない場合：8 バイト以内の半角文字列 	—
DELAYCONNECT	SAP システムにいつ接続するかを指定する。	<p>Y または N で指定する。</p> <ul style="list-style-type: none"> Y：パフォーマンスデータ収集時に SAP システムに接続する。 この場合、Agent Collector サービスは、接続時の SAP システムの稼働状況に関係なく起動される。 N：Agent Collector サービス起動時に SAP システムに接続する。 この場合、Agent Collector サービスは、接続時に SAP システムが停止していると起動されない。 	[N]
Store Version ^{※2}	使用する Store バージョンを指定する。Store バージョンについては「 3.6.2 Store バージョン 2.0 への移行 」を参照してください。	{1.0 2.0}	2.0

(凡例)

—：なし

注※1

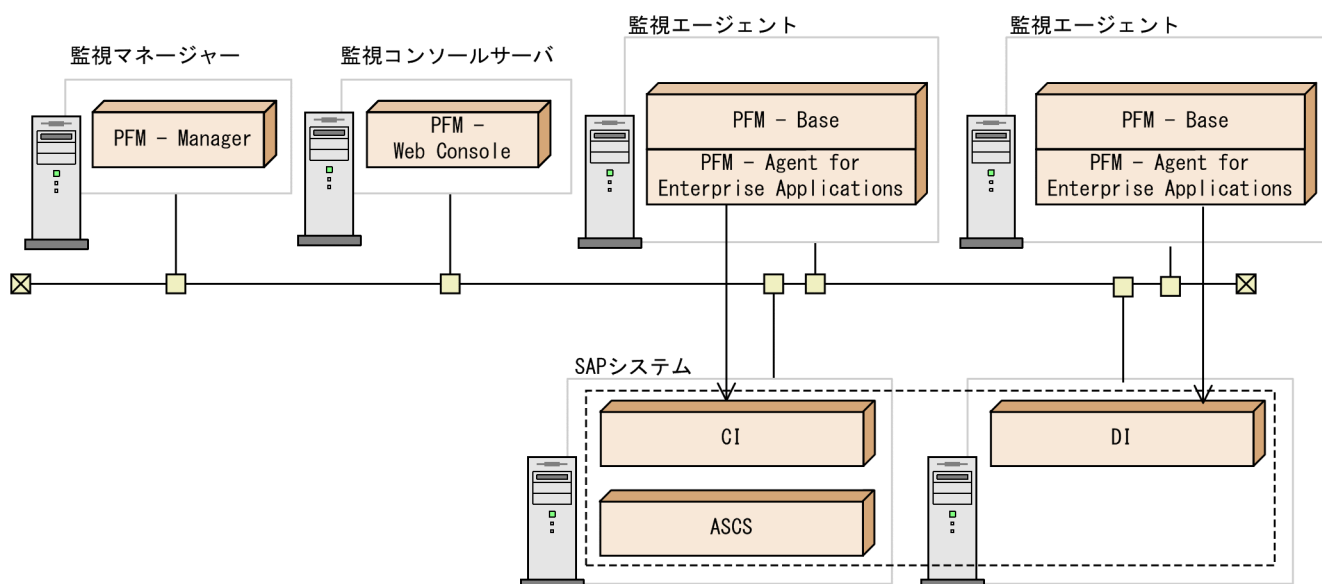
リモート監視機能を使用する場合、監視対象の SAP インスタンス名および SAP システムのホスト名を設定してください。

注※2

- PFM - Agent for Enterprise Applications, および同一ホスト上の PFM - Base または PFM - Manager が 08-10 以降で、初めてインスタンス環境の設定を行う場合に必要となる設定です。
- 1 つの PFM - Agent for Enterprise Applications から監視できるのは、SAP システム内の 1 つのホストだけです。

分散構成やクラスタシステムでの運用など、複数のホストで構成された SAP システムを監視する場合は、次の図のように監視対象ホスト分の PFM - Agent for Enterprise Applications を用意する必要があります。

図 4-9 SAP システムが複数ホストで構成される例



(凡例)

- ASCS : ABAP Central Servicesインスタンス
- CI : セントラルインスタンス
- DI : ダイアログインスタンス
- : 監視

注意

- インスタンス環境を設定していない場合、PFM - Agent for Enterprise Applications のサービスを起動できません。

インスタンス環境を構築するには、`jpcconf inst setup` コマンドを使用します。インスタンス環境の構築手順を次に示します。

1. サービスキーおよびインスタンス名を指定して、`jpcconf inst setup` コマンドを実行する。

例えば、PFM - Agent for Enterprise Applications のインスタンス名 `o246bciSD500` のインスタンス環境を構築する場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpcconf inst setup -key EAP -inst o246bciSD500
```

PFM - Agent for Enterprise Applications の場合、インスタンス名は任意ですが、管理のしやすさを考慮し、監視対象とする SAP システムのインスタンス名と紐づくようにしてください。SAP システムのインスタンスには、通常、「ホスト名_SAP システム ID_システム番号」という形式の名称が付けられています。

ただし、`jpcconf inst setup` コマンドでは "_" を指定できません。例えば、SAP システムのインスタンス名が `"o246bci_SD5_00"` の場合、PFM - Agent for Enterprise Applications のインスタンス名を `"o246bciSD500"` としてください。

2. SAP システムのインスタンス情報を設定する。

表 4-11 に示した項目を、コマンドの指示に従って入力してください。各項目とも省略はできません。デフォルトで表示されている値を、項目の入力とする場合はリターンキーだけを押してください。

すべての入力終了すると、インスタンス環境が構築されます。構築されるインスタンス環境を次に示します。

• インスタンス環境のディレクトリ構成

次のディレクトリ下にインスタンス環境が構築されます。

- 物理ホスト運用の場合：/opt/jp1pc/agt

構築されるインスタンス環境のディレクトリ構成を次に示します。

表 4-12 インスタンス環境のディレクトリ構成

ディレクトリ名・ファイル名		説明	
agent	インスタンス名	jpcagt.ini	Agent Collector サービス起動情報ファイル
		jpcagt.ini.model*	Agent Collector サービス起動情報ファイルのモデルファイル
		jpcMcollect.ini	SAP 通信プロセスの環境パラメーター設定ファイル
		jr3alget.ini	CCMS Alert Monitor Command (PD_ALMX) レコード用の環境パラメーター設定ファイル
		jr3slget.ini	System Log Monitor Command (PD_SLMX) レコード用の環境パラメーター設定ファイル
		log	ログファイル格納ディレクトリ
store	インスタンス名	jpcsto.ini	Agent Store サービス起動情報ファイル
		jpcsto.ini.model*	Agent Store サービス起動情報ファイルのモデルファイル
		*.DAT	データモデル定義ファイル
		dump	エクスポート先ディレクトリ
		backup	バックアップ先ディレクトリ
		import	インポート先ディレクトリ (Store バージョン 2.0 の場合)
		log	ログファイル格納ディレクトリ
		partial	部分バックアップ先ディレクトリ (Store バージョン 2.0 の場合)
		STPD	PD レコードタイプのパフォーマンスデータ格納ディレクトリ (Store バージョン 2.0 の場合)
		STPI	PI レコードタイプのパフォーマンスデータ格納ディレクトリ (Store バージョン 2.0 の場合)

ディレクトリ名・ファイル名			説明
store	インスタンス名	STPL	PL レコードタイプのパフォーマンスデータ格納ディレクトリ (Store バージョン 2.0 の場合)

注※

インスタンス環境を構築した時点の設定値に戻したいときに使用します。

• インスタンス環境のサービス ID

インスタンス環境のサービス ID は、プロダクト ID、機能 ID、インスタンス番号、インスタンス名、ホスト名をつないだ文字列になります。例えばサービス ID 「MA1o246bciSD500[host01]」は、次のインスタンス環境を表します。

- プロダクト ID : M
- 機能 ID : A
- インスタンス番号 : 1
- インスタンス名 : o246bciSD500
- ホスト名 : host01

サービス ID については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、付録を参照してください。

(5) ネットワークの設定 オプション

Performance Management を使用するネットワーク構成に応じて、変更する場合にだけ必要な設定です。

ネットワークの設定では次の 2 つの項目を設定できます。

• IP アドレスを設定する

Performance Management を複数の LAN に接続されたネットワークで使用するときには設定します。複数の IP アドレスを設定するには、jpchosts ファイルにホスト名と IP アドレスを定義します。設定した jpchosts ファイルは Performance Management システム全体で統一させてください。

詳細についてはマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

• ポート番号を設定する

Performance Management が使用するポート番号を設定できます。運用での混乱を避けるため、ポート番号とサービス名は、Performance Management システム全体で統一させてください。

ポート番号の設定の詳細についてはマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

(a) ログのファイルサイズ変更 オプション

Performance Management の稼働状況を、Performance Management 独自のログファイルに出力します。このログファイルを「共通メッセージログ」と呼びます。このファイルサイズを変更したい場合にだけ、必要な設定です。

詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

(b) パフォーマンスデータの格納先の変更 オプション

PFM - Agent for Enterprise Applications で管理されるパフォーマンスデータを格納するデータベースの保存先、バックアップ先、エクスポート先、部分バックアップ先またはインポート先のディレクトリを変更したい場合にだけ、必要な設定です。

パフォーマンスデータは、デフォルトで、次の場所に保存されます。

保存先	ディレクトリ名
データベースの保存先	<ul style="list-style-type: none"> • 物理ホストの場合 /opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/ • 論理ホストの場合 環境ディレクトリ[※]/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/
バックアップ先	<ul style="list-style-type: none"> • 物理ホストの場合 /opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/backup/ • 論理ホストの場合 環境ディレクトリ[※]/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/backup/
エクスポート先	<ul style="list-style-type: none"> • 物理ホストの場合 /opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/dump/ • 論理ホストの場合 環境ディレクトリ[※]/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/dump/
部分バックアップ先 (Store バージョン 2.0 の場合)	<ul style="list-style-type: none"> • 物理ホストの場合 /opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/partial/ • 論理ホストの場合 環境ディレクトリ[※]/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/partial/
インポート先 (Store バージョン 2.0 の場合)	<ul style="list-style-type: none"> • 物理ホストの場合 /opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/import/ • 論理ホストの場合 環境ディレクトリ[※]/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/import/

注※

環境ディレクトリは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

詳細については、「3.6.1 パフォーマンスデータの格納先の変更」を参照してください。

(c) PFM - Agent for Enterprise Applications の接続先 PFM - Manager の設定

PFM - Agent がインストールされているホストで、その PFM - Agent を管理する PFM - Manager を設定します。接続先の PFM - Manager を設定するには、`jpccconf mgrhost define` コマンドを使用します。

注意

- 同一ホスト上に、複数の PFM - Agent がインストールされている場合でも、接続先に指定できる PFM - Manager は、1 つだけです。PFM - Agent ごとに異なる PFM - Manager を接続先に設定することはできません。
- PFM - Agent と PFM - Manager が同じホストにインストールされている場合、接続先 PFM - Manager はローカルホストの PFM - Manager となります。この場合、接続先の PFM - Manager をほかの PFM - Manager に変更できません。

手順を次に示します。

1. Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する

セットアップを実施する前に、ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、サービスの起動と停止について説明している章を参照してください。

`jpccconf mgrhost define` コマンド実行時に、Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、停止を問い合わせるメッセージが表示されます。

2. 接続先の PFM - Manager ホストのホスト名を指定して、`jpccconf mgrhost define` コマンドを実行する

例えば、接続先の PFM - Manager がホスト `host01` 上にある場合、次のように指定します。

```
jpccconf mgrhost -host host01
```

(d) 動作ログ出力の設定 オプション

PFM サービスの起動・停止時や、PFM - Manager との接続状態の変更時に動作ログを出力したい場合に必要な設定です。動作ログとは、システム負荷などのしきい値オーバーに関するアラーム機能などと連動した動作情報の履歴を出力するログ情報です。

設定方法については、「付録 J 動作ログの出力」を参照してください。

(e) 収集基点時間の設定

リモート監視機能を使用する場合、システムログ情報抽出機能および CCMS アラート情報抽出機能の収集基点時間を設定してください。環境パラメーター設定ファイルの設定手順や設定項目の詳細については、「5.3 環境パラメーター設定ファイル」および「6.3 環境パラメーター設定ファイル」を参照してください。

(f) SAP システムのタイムゾーンの設定 オプション

リモート監視機能を使用する場合、システムログ情報抽出機能で考慮する SAP システムのタイムゾーン (UTC との時刻差) を設定します。環境パラメーター設定ファイルの設定手順や設定項目の詳細については、「[5.3 環境パラメーター設定ファイル](#)」および「[6.3 環境パラメーター設定ファイル](#)」を参照してください。

4.5 Windows 版のクラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップ

ここでは、クラスタシステムで運用していた PFM - Agent for Enterprise Applications を、アンインストールする方法とアンセットアップする方法について説明します。

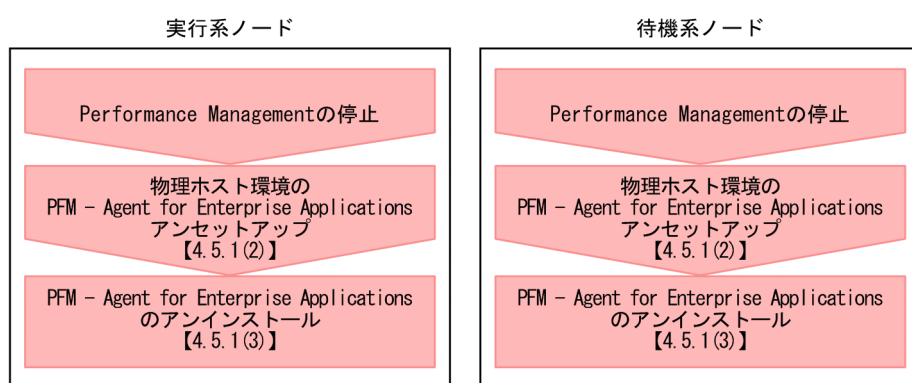
なお、PFM - Manager のアンインストールとアンセットアップについては、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

4.5.1 Windows 版での SAP NetWeaver7.0 以降の場合


(1) PFM - Agent for Enterprise Applications のアンインストールとアンセットアップの流れ

クラスタシステムで運用していた PFM - Agent for Enterprise Applications のアンインストールおよびアンセットアップの流れを次の図に示します。

図 4-10 クラスタシステムで物理ホスト運用する PFM - Agent for Enterprise Applications のアンインストールおよびアンセットアップの流れ (Windows の場合)



(凡例)

-  : 必須セットアップ項目
- 【 】 : 参照先

(2) PFM - Agent for Enterprise Applications のアンセットアップ

ここでは、PFM - Agent for Enterprise Applications をアンセットアップする手順を説明します。

(a) インスタンス環境のアンセットアップ

インスタンス環境をアンセットアップするには、まず、インスタンス名を確認し、インスタンス環境を削除します。インスタンス環境の削除は、PFM - Agent ホストで実施します。

インスタンス名を確認するには、`jpccconf inst list` コマンドを使用します。また、構築したインスタンス環境を削除するには、`jpccconf inst unsetup` コマンドを使用します。

インスタンス環境をアンセットアップする手順を次に示します。

1. インスタンス名を確認する。

PFM - Agent for Enterprise Applications を示すサービスキーを指定して、`jpccconf inst list` コマンドを実行します。

```
jpccconf inst list -key EAP
```

設定されているインスタンス名が `o246bciSD500` の場合、`o246bciSD500` と表示されます。

2. インスタンス環境の PFM - Agent のサービスが起動されている場合は、停止する。

サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、サービスの起動と停止について説明している章を参照してください。

3. インスタンス環境を削除する。

PFM - Agent for Enterprise Applications を示すサービスキーおよびインスタンス名を指定して、`jpccconf inst unsetup` コマンドを実行します。

例えば、PFM - Agent for Enterprise Applications のインスタンス名が `o246bciSD500` の場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccconf inst unsetup -key EAP -inst o246bciSD500
```

`jpccconf inst unsetup` コマンドが正常終了すると、インスタンス環境として構築されたフォルダ、サービス ID および Windows のサービスが削除されます。

注意

インスタンス環境をアンセットアップしても、`jpctool service list` コマンドで表示できるサービスの情報は削除されません。サービス情報の削除方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップの章のサービスの削除について説明している個所を参照してください。

(3) アンインストール

PFM - Agent for Enterprise Applications をアンインストールしてください。

アンインストール手順は、非クラスタシステムの場合と同じです。詳細は、「[3.3.3 Windows 版のアンインストール手順](#)」を参照してください。

注意

- PFM - Agent for Enterprise Applications をアンインストールする場合は、PFM - Agent for Enterprise Applications をアンインストールするノードの Performance Management のプログラムのサービスをすべて停止してください。

4.6 Linux 版のクラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップ

4.6.1 Linux 版での SAP NetWeaver7.0 以降の場合

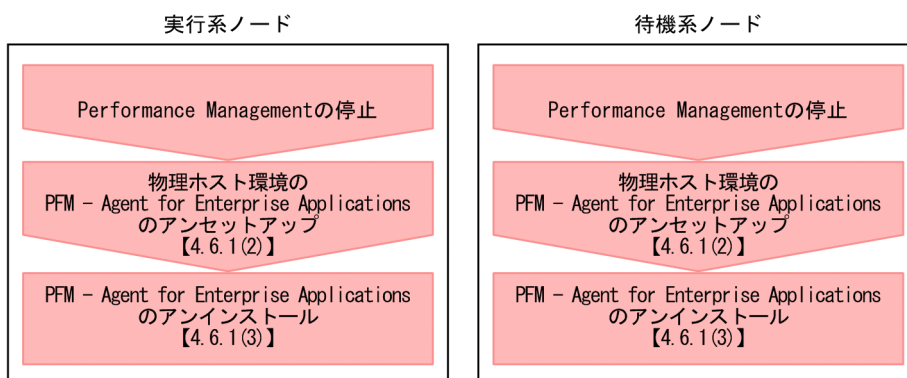
ここでは、クラスタシステムで運用していた PFM - Agent for Enterprise Applications を、アンインストールする方法とアンセットアップする方法について説明します。

なお、PFM - Manager のアンインストールとアンセットアップについては、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

(1) PFM - Agent for Enterprise Applications のアンインストールとアンセットアップの流れ

クラスタシステムで運用していた PFM - Agent for Enterprise Applications のアンインストールおよびアンセットアップの流れを次の図に示します。

図 4-11 クラスタシステムで物理ホスト運用する PFM - Agent for Enterprise Applications のアンインストールおよびアンセットアップの流れ (Linux の場合)



(凡例)

◻ : 必須セットアップ項目

【 】 : 参照先

(2) PFM - Agent for Enterprise Applications のアンセットアップ

ここでは、PFM - Agent for Enterprise Applications をアンセットアップする手順を説明します。

(a) インスタンス環境のアンセットアップ

インスタンス環境をアンセットアップするには、まず、インスタンス名を確認し、インスタンス環境を削除します。インスタンス環境の削除は、PFM - Agent ホストで実施します。

インスタンス名を確認するには、`jpccconf inst list` コマンドを使用します。また、構築したインスタンス環境を削除するには、`jpccconf inst unsetup` コマンドを使用します。

インスタンス環境をアンセットアップする手順を次に示します。

1. インスタンス名を確認する。

PFM - Agent for Enterprise Applications を示すサービスキーを指定して、`jpccconf inst list` コマンドを実行します。

```
jpccconf inst list -key EAP
```

設定されているインスタンス名が `o246bciSD500` の場合、`o246bciSD500` と表示されます。

2. インスタンス環境の PFM - Agent のサービスが起動されている場合は、停止する。

サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、サービスの起動と停止について説明している章を参照してください。

3. インスタンス環境を削除する。

PFM - Agent for Enterprise Applications を示すサービスキーおよびインスタンス名を指定して、`jpccconf inst unsetup` コマンドを実行します。

例えば、PFM - Agent for Enterprise Applications のインスタンス名が `o246bciSD500` の場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccconf inst unsetup -key EAP -inst o246bciSD500
```

`jpccconf inst unsetup` コマンドが正常終了すると、インスタンス環境として構築されたフォルダ、サービス ID および Windows のサービスが削除されます。

注意

インスタンス環境をアンセットアップしても、`jpctool service list` コマンドで表示できるサービスの情報は削除されません。サービス情報の削除方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップの章のサービスの削除について説明している個所を参照してください。

(3) アンインストール

PFM - Agent for Enterprise Applications をアンインストールしてください。

アンインストール手順は、非クラスタシステムの場合と同じです。詳細は、「[3.4.3 Linux 版のアンインストール手順](#)」を参照してください。

注意

- PFM - Agent for Enterprise Applications をアンインストールする場合は、PFM - Agent for Enterprise Applications をアンインストールするノードの Performance Management のプログラムのサービスをすべて停止してください。

4.7 クラスタシステムでの PFM - Agent for Enterprise Applications のシステム構成の変更

監視対象システムのネットワーク構成の変更や、ホスト名の変更などに応じて、PFM - Agent for Enterprise Applications のシステム構成を変更する場合があります。ここでは、PFM - Agent for Enterprise Applications のシステム構成を変更する手順を説明します。

- SAP システムのホスト名を変更する場合

インスタンス環境の更新の設定手順で以下の項目を変更する必要があります。

- ASHOST

変更方法については、「4.8.3 クラスタシステムでのインスタンス環境の更新の設定」を参照してください。また、そのほかの項目についても、接続先の SAP システムで変更があった場合は、インスタンス環境を更新してください。

- PFM - Agent for Enterprise Applications のシステム構成を変更する場合

PFM - Manager や PFM - Web Console の設定変更もあわせて行う必要があります。Performance Management のシステム構成を変更する手順の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

4.8 クラスタシステムでの PFM - Agent for Enterprise Applications の運用方式の変更

ここでは、クラスタシステムで PFM - Agent for Enterprise Applications の運用方式を変更する手順を説明します。Performance Management 全体の運用方式を変更する手順の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

4.8.1 クラスタシステムでのパフォーマンスデータの格納先の変更

PFM - Agent for Enterprise Applications で収集したパフォーマンスデータは、PFM - Agent for Enterprise Applications の Agent Store サービスの Store データベースで管理しています。パフォーマンスデータの格納先の変更方法については、「[3.6.1 パフォーマンスデータの格納先の変更](#)」を参照してください。

4.8.2 クラスタシステムでの Store バージョン 2.0 への移行

Store バージョン 2.0 への以降の詳細については、「[3.6.2 Store バージョン 2.0 への移行](#)」を参照してください。

4.8.3 クラスタシステムでのインスタンス環境の更新の設定

クラスタシステムでインスタンス環境を更新する方法については、「[3.6.3 インスタンス環境の更新の設定](#)」を参照してください。

4.9 クラスタシステムでの PFM - Agent for Enterprise Applications のバックアップとリストア

PFM - Agent for Enterprise Applications のバックアップおよびリストアについては、[「3.7 PFM - Agent for Enterprise Applications のバックアップとリストア」](#)を参照してください。

4.10 注意事項

次のレコード ID のパフォーマンスデータは、SAP システムごとのパフォーマンスデータであるため、任意の物理ホストのインスタンスで監視可能です。

- PI_BTCP
- PD_ALMX
- PD_SRV
- PI_UMP (ただし、設定しているパフォーマンスモニターによります。)

ただし、監視している物理ホストで障害が発生した場合には、監視を継続できなくなりますので、複数の物理ホストで多重に監視することを推奨します。

複数の物理ホストで多重に監視している場合、同一の事象で複数のアラームが発生することがあります。運用上問題となる場合は、任意のひとつの物理ホストでアラームをバインドしておき、クラスタのフェイルオーバーにあわせて、アラームを稼動している物理ホストにバインドすることを検討してください。

5

システムログ情報の抽出

この章では、PFM - Agent for Enterprise Applications で、システムログ情報を抽出する方法について説明します。

5.1 システムログ情報抽出機能の概要

PFM - Agent for Enterprise Applications で、SAP システムで発生したイベントおよび障害を記録するシステムログ情報を定期的にテキストファイルに出力できます。PFM - Agent for Enterprise Applications のシステムログ情報抽出機能を使用すると、次のようなシステムログ情報をテキストファイルに出力できます。

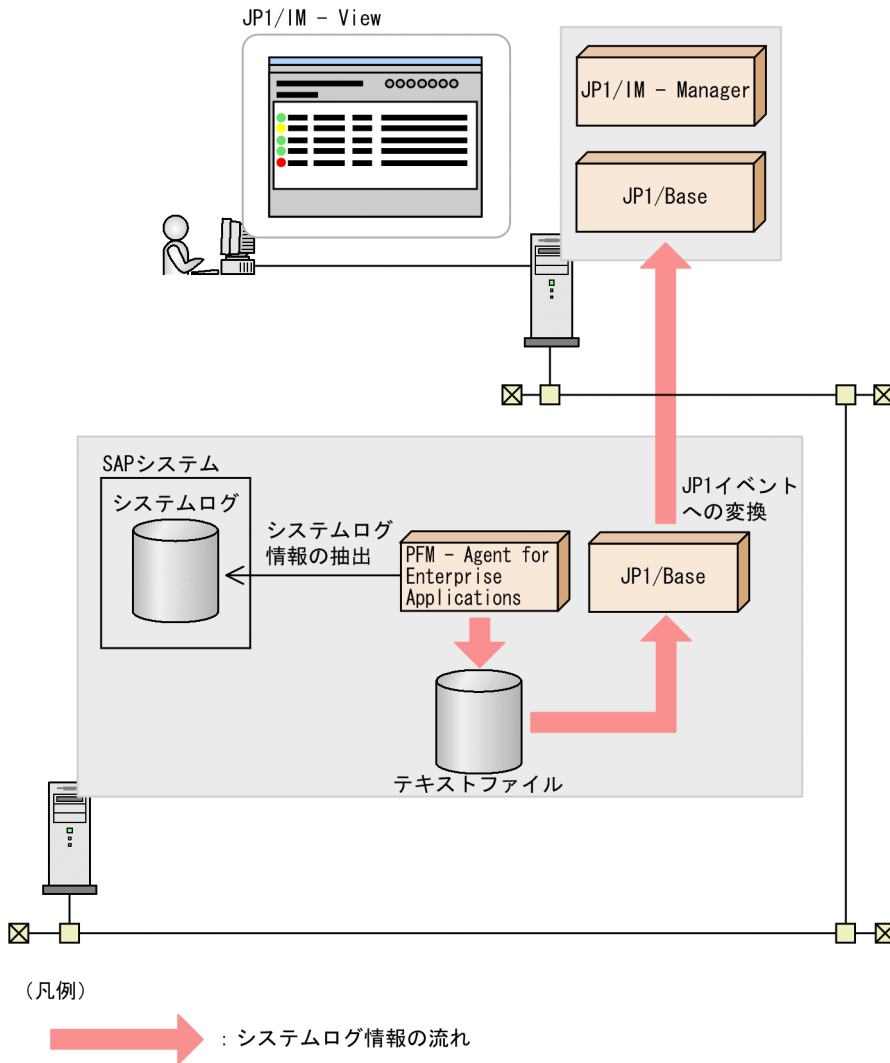
- メッセージ記録時刻
- メッセージを記録したサーバ
- メッセージを記録したユーザー
- メッセージを記録したプログラム
- メッセージ番号
- メッセージ

テキストファイルに出力されたシステムログ情報は、ほかのプログラムと連携することで、SAP システムの状態の監視に利用できます。ここでは、JP1/Base と JP1/IM との連携による状態監視の例を説明します。

JP1/Base のログファイルトラップ機能を使用すると、システムログ情報を JP1 イベントに変換できます。この JP1 イベントを JP1/IM から監視することで、SAP システムの状態を JP1/IM から監視できるようになります。

JP1/Base および JP1/IM と連携して SAP システムの状態を監視する例を、次の図に示します。

図 5-1 JP1/Base および JP1/IM と連携して SAP システムの状態を監視する例



PFM - Agent for Enterprise Applications がシステムログ情報を格納するファイルの形式には、次の 2 種類があります。

- WRAP1 形式

システムログ情報が一定の容量に達すると、ラップアラウンドして再び先頭からデータを上書きする形式のファイルです。ファイルの先頭には、管理情報として 1 行のヘッダーがあります。WRAP1 形式で格納できるファイル数は 1 個です。WRAP1 形式を使用してシステムログ情報を監視する場合には、動作定義ファイルに次のパラメーターを指定してください。

```
FILETYPE=WRAP1
HEADLINE=1
```

- WRAP2 形式

システムログ情報が一定の容量に達してラップアラウンドするとき、データを削除して再び先頭からデータを書き込む形式のファイルです。WRAP2 形式では複数のファイルに格納できます。WRAP2 形式を使用してシステムログ情報を監視する場合には、動作定義ファイルに次のパラメーターを指定してください。

注意事項

- 同一装置内前提ソフトウェア中の SAP NetWeaver PI 7.1 または SAP NetWeaver PI 7.1 EHP1 の SAP システムログを監視する場合は、SAP プロファイルに次のパラメーターを追加し、SAP システムログの収集方法を HTTP から RFC に変更する必要があります。これは、SAP セントラルログ機能での SAP ローカルシステムログの収集方法が、デフォルトで HTTP となっているためです。

`rslg/central/log/new = 0`

この設定をすると、HTTP が前提としている SAP セントラル機能が使用できなくなるので、変更前に SAP セントラル機能を使用しているアプリケーションへの影響を確認してください。なお、PFM - Agent for Enterprise Applications では、SAP セントラル機能を使用しないため、この変更を実施しても影響はありません。

- ご使用の SAP システムのバージョンにより、メッセージテキストの最大が 255 バイトより少ない文字数で切れる場合があります。これは SAP システムから返却されるメッセージテキストの最大長が異なるためです。
- `jr3slget` コマンド実行によるシステムログ情報抽出時、コマンド実行環境に環境変数 `TZ` が定義されていると、コマンドが異常終了したり、無効な期間のシステムログ情報が抽出されたりすることがあります。

コマンド実行環境には `TZ` 環境変数を定義しないでください。適用されるタイムゾーンは、Windows の「日付と時刻のプロパティ」で定義されたものとなります。

5.2 システムログ情報の抽出

SAP システムのシステムログ情報を抽出する方法および出力例について説明します。

システムログ情報を抽出するには、System Log Monitor Command (PD_SLMX) レコードのパフォーマンスデータを Store データベースに格納するように設定します。System Log Monitor Command (PD_SLMX) レコードのパフォーマンスデータを収集するごとに、システムログ情報が自動的に抽出されます。前回のレコード収集時刻をタイムスタンプファイルに記録し、この時刻よりもあとに発生したシステムログ情報だけを抽出します。SAP システムのシステムログ情報は、デフォルトでは、次のテキストファイルに出力されます。

OS 環境	ホスト環境	システムログ情報格納ファイル
Windows	物理ホスト	<ul style="list-style-type: none"> • WRAP1 の場合 インストール先フォルダ¥agtm¥agent¥インスタンス名¥log¥SYSLOG • WRAP2 の場合 インストール先フォルダ¥agtm¥agent¥インスタンス名¥log¥SYSLOG_n※¹
	論理ホスト	<ul style="list-style-type: none"> • WRAP1 の場合 環境ディレクトリ^{※2}¥jp1pc¥agtm¥agent¥インスタンス名¥log¥SYSLOG • WRAP2 の場合 環境ディレクトリ^{※2}¥jp1pc¥agtm¥agent¥インスタンス名¥log¥SYSLOG_n※¹
Linux	物理ホスト	<ul style="list-style-type: none"> • WRAP1 の場合 /opt/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/log/SYSLOG • WRAP2 の場合 /opt/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/log/SYSLOG_n※¹
	論理ホスト	<ul style="list-style-type: none"> • WRAP1 の場合 環境ディレクトリ^{※2}/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/log/SYSLOG • WRAP2 の場合 環境ディレクトリ^{※2}/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/log/SYSLOG_n※¹

注※1

n は、1～「環境パラメーター設定ファイルの EXTRACTFILE セクションの NUM ラベルに指定した値」です。

注※2

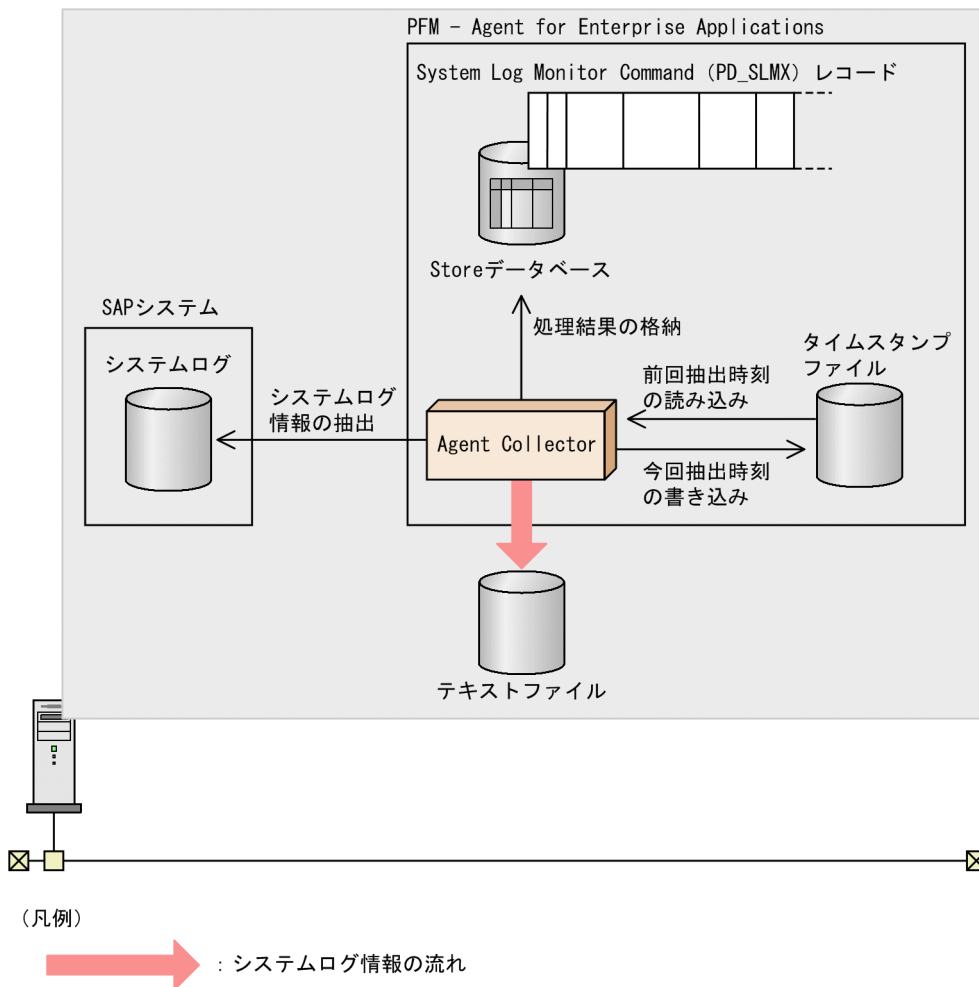
環境ディレクトリは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

System Log Monitor Command (PD_SLMX) レコードには、処理結果が格納されます。

System Log Monitor Command (PD_SLMX) レコードについては、「10. レコード」を参照してください。

SAP システムのシステムログ情報を抽出する流れを次の図に示します。

図 5-2 システムログ情報を抽出する流れ



5.2.1 セットアップ

SAP システムのシステムログ情報を抽出するためのセットアップ手順を次に示します。

注意

デフォルトで指定されているシステムログ情報の出力先ファイル名などを変更したい場合、環境パラメーター設定ファイルを編集したあとにセットアップしてください。環境パラメーター設定ファイルについては、「5.3 環境パラメーター設定ファイル」を参照してください。

1. PFM - Web Console で、System Log Monitor Command (PD_SLMX) レコードのパフォーマンスデータを Store データベースに格納するように設定する。

設定する方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

5.2.2 出力例

SAP システムのシステムログ情報の出力例を次に示します。

```
13:58:04o246bci_SD5_00  SAPSYS  SAPMSSY8R49通信エラー、CPIC リターンコード 027、SAP  
リターンコード 456  
13:58:04o246bci_SD5_00  SAPSYS  SAPMSSY8R64> CPI-C 機能: CMINIT(SAP)
```

5.3 環境パラメーター設定ファイル

ここでは、環境パラメーター設定ファイルについて説明します。

環境パラメーター設定ファイルとは、システムログ情報の出力先ファイル名などを設定するファイルです。PFM - Agent for Enterprise Applications で、SAP システムのシステムログ情報が抽出される際、このファイルの設定内容を基に抽出されます。

この環境パラメーター設定ファイルは、テキストファイルとしてユーザーが作成します。

5.3.1 設定手順

環境パラメーター設定ファイルの設定手順を次に示します。

1. 環境パラメーター設定ファイルを変更する前に、System Log Monitor Command (PD_SLMX) レコードの収集を停止する。

次のどちらかの方法で収集を停止してください。

- Agent Collector サービスを停止する
- Agent Collector サービスが起動中の状態で、PFM - Web Console で、System Log Monitor Command (PD_SLMX) レコードのパフォーマンスデータを Store データベースに格納しないように設定する

設定する方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

2. 環境パラメーター設定ファイルを開く。

環境パラメーター設定ファイルを次に示します。

OS 環境	ホスト環境	環境パラメーター設定ファイル
Windows	物理ホスト	インストール先フォルダ¥agtm¥agent¥インスタンス名¥jr3slget.ini
	論理ホスト	環境ディレクトリ¥¥jp1pc¥agtm¥agent¥インスタンス名¥jr3slget.ini
Linux	物理ホスト	/opt/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/jr3slget.ini
	論理ホスト	環境ディレクトリ¥¥jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/jr3slget.ini

注※

環境ディレクトリは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

3. 設定内容を編集する。

環境パラメーター設定ファイルの設定内容を次に示します。次の網掛け部分が修正できます。設定内容については、「5.3.2 設定内容」を参照してください。


```
[EXTRACTFILE]
TYPE=WRAP2
NUM=5
SIZE=10240
X2PATH=log¥SYSLOG※
```

```
[FORMAT]
COLUMN=<TIME>
COLUMN=<INSTANCE>
COLUMN=<USER>
COLUMN=<PROGRAM>
COLUMN=<MSGNO>
COLUMN=<MSGTEXT>
```

```
[TRACE]
MSGLOG_LEVEL=2
MSGLOG_SIZE=512
MSGLOG_DIR=log
DATALOG_LEVEL=2
DATALOG_SIZE=512
DATALOG_DIR=log
```

```
:[CONNECT]
:LANG=JA
:CODEPAGE=8000
```

```
[Option]
SHIFTEXTRACTTIME=10
SAPTIMEZONEOFFSET=0
```

コメント行を表す「:」が行頭にある項目は、デフォルトでは設定が有効になっていません。設定を有効にするには、コメント行を表す「:」を外してください。

注※

Windowsでの設定値です。UNIXでは「log/SYSLOG」です。

4. 環境パラメーター設定ファイルを保存する。

5. 環境パラメーター設定ファイルの変更をしたあとに System Log Monitor Command (PD_SLMX) レコードの収集を再開する。

注意

SAP システムのタイムゾーンの設定を変更した場合（標準時間と夏時間の切り替えに伴う変更を除く）、設定変更前のタイムゾーンに基づくタイムスタンプが記録された、タイムスタンプファイルは削除する必要があります。次のタイムスタンプファイルが存在する場合には、レコードの収集を再開する前にタイムスタンプファイルを削除してください。

- インストール先フォルダ¥agtm¥agent¥インスタンス名¥log¥jr3slget.lasttime

5.3.2 設定内容

環境パラメーター設定ファイルは、次の形式で記述します。

```
[セクション]
ラベル=値
ラベル=値
:
:
```

[セクション]

ラベル=値

ラベル=値

注意

- 行頭および「=」の前後に、空白文字などの余計な文字を設定しないでください。
- セクションおよびラベルでは、指定した値の大文字・小文字は区別されません。
- 行の先頭に「;」を指定すると、その行はコメントとして扱われます。

次に、環境パラメーター設定ファイルの各セクションで設定する内容を表形式で説明します。

(1) EXTRACTFILE セクション

EXTRACTFILE セクションでは、システムログ情報の出力ファイルの情報を指定します。

表 5-1 EXTRACTFILE セクションに指定できる値

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値
TYPE	<p>システムログ情報を格納するファイルの形式。</p> <ul style="list-style-type: none">• WRAP1 システムログ情報が一定の容量に達すると、ラップアラウンドして再び先頭からデータを上書きする形式のファイルです。• WRAP2 NUM ラベルで設定した複数のファイルを持つ形式です。1つ目のファイルが一定の容量に達すると、ラップアラウンドして2つ目のファイルに書き込みます。このとき、2つ目のファイルのデータを削除し、先頭からデータを書き込みます。 複数のファイルすべてで一定の容量に達すると、1つ目のファイルに戻ってデータを削除し、先頭からデータを書き込みます。 <p>PFM - Agent for Enterprise Applications の環境を新規で構築する場合は、WRAP2 を指定することを推奨します。</p> <p>運用の開始後、格納ファイルの形式を変更する場合は、事前に格納ファイルを監視している製品を停止し、格納ファイルとその管理ファイル^{※1}を削除してください。</p>	WRAP1 または WRAP2	WRAP2 ただし、Version 9 以前からのバージョンアップなどによって、TYPE ラベルが存在しない場合は、WRAP1 となります。

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値
SIZE	1 ファイル当たりの格納ファイル容量。 <ul style="list-style-type: none"> • 0 : 2GB (32 ビットの符号付き整数で示せる最大値 (0x7FFFFFFF)) • 1~65535 : 指定サイズ内でラップアラウンド (キロバイト)。 	0~65535	10240 ^{※2}
X2PATH	<ul style="list-style-type: none"> • TYPE ラベルで WRAP1 を設定している場合 -x2 オプションで、格納ファイル出力を指定したときに適用される格納ファイルのパスを指定する。 ※1※3 • TYPE ラベルで WRAP2 を設定している場合 -x2 オプションで、格納ファイル出力を指定したときに適用される格納ファイルを指定する。 ※3※4 	<ul style="list-style-type: none"> • TYPE ラベルで WRAP1 を設定している場合 1~251 バイトの半角英数字。 ※5 • TYPE ラベルで WRAP2 を設定している場合 1~254 バイトの半角英数字。 ※5 	<ul style="list-style-type: none"> • Windows の場合 log%SYSLOG • Linux の場合 log/SYSLOG
NUM	WRAP2 形式で格納するときのファイル数。 TYPE ラベルで WRAP2 を設定している場合だけ有効です。	2~9	5

(凡例)

－：該当なし。

注※1

WRAP1 形式の場合、格納ファイルと同じディレクトリに、格納ファイル名 ofs という名称で管理ファイルが作成されます。

例：

格納ファイル名として SYSLOG を指定したとき SYSLOG ファイルとは別に SYSLOG ofs ファイルが管理ファイルとして作成されます。

格納ファイルを削除する場合は、この管理ファイルも合わせて削除してください。

注※2

09-00 以前からバージョンアップした場合に適用されるデフォルト値の詳細については、「付録 H 移行手順と移行時の注意事項」を参照してください。

注※3

デフォルトの格納先から変更した場合、格納ファイルと管理ファイルを jpcras コマンドで採取することができません。このため、トラブルが発生した場合、手動で格納ファイルと管理ファイルを採取していただく必要があります。

注※4

この値に NUM ラベルに指定した範囲 (デフォルトは 1~5) の値が付与されたファイル名が格納されます。

注※5

相対パスを指定した場合、コマンドの作業ディレクトリ (COMMAND セクションの WORKDIR ラベルに指定したディレクトリ) が相対パスのカレントディレクトリとなります。なお、作業ディレクトリが指定されていない場合、以下のディレクト

りからの相対パスのカレントディレクトリとなります。また、環境ディレクトリは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

Windows の場合：

物理ホスト環境：インストール先フォルダ¥agtm¥agent¥インスタンス名

論理ホスト環境：環境ディレクトリ¥jp1pc¥agtm¥agent¥インスタンス名

Linux の場合：

物理ホスト環境：/opt/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名

論理ホスト環境：環境ディレクトリ/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名

(2) FORMAT セクション

FORMAT セクションでは、出力されるシステムログ情報の出力形式を指定します。

表 5-2 FORMAT セクションに指定できる値

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値
COLUMN	出力されるシステムログ情報の出力形式。	フィールド ID。フィールド ID については、「11. コマンド」の jr3slget コマンドの「出力形式および内容」を参照のこと。	列 1：<TIME> 列 2：<INSTANCE> 列 3：<USER> 列 4：<PROGRAM> 列 5：<MSGNO> 列 6：<MSGTEXT>

(3) TRACE セクション

TRACE セクションでは、システムログ情報抽出の実行履歴が保存されるメッセージログおよびデータログの情報を指定します。

表 5-3 TRACE セクションに指定できる値

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値
MSGLOG_LEVEL	アプリケーションのトレース情報を保存するメッセージログの取得レベル。 <ul style="list-style-type: none"> 0：採取しない 1：エラーだけ採取 2：標準 3：詳細 4：デバッグ 	0~4	2
MSGLOG_SIZE	メッセージログを取得するファイル容量。 <ul style="list-style-type: none"> 0：2GB (32 ビットの符号付き整数で示せる最大値 (0x7FFFFFFF)) 	0~65535	512

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値
MSGLOG_SIZE	<ul style="list-style-type: none"> 1~65535：指定サイズ（単位：キロバイト）内でラップアラウンド 	0~65535	512
MSGLOG_DIR	メッセージログファイル（jr3slogt.log）の取得先ディレクトリ。	（変更できない）	log
DATALOG_LEVEL	アプリケーションの各種データ情報を保存するデータログの取得レベル。 <ul style="list-style-type: none"> 0：採取しない 1：エラーだけ採取 2：標準 3：詳細 4：デバッグ 	0~4	2
DATALOG_SIZE	データログを取得するファイル容量。 <ul style="list-style-type: none"> 0：2GB（32ビットの符号付き整数で示せる最大値（0x7FFFFFFF）） 1~65535：指定サイズ（単位：キロバイト）内でラップアラウンド 	0~65535	512
DATALOG_DIR	データログファイル（jr3slogt.dat）の取得先ディレクトリ。	（変更できない）	log

(4) CONNECT セクション

CONNECT セクションでは、SAP システムとの RFC 接続を確立するための情報を指定します。

表 5-4 CONNECT セクションに指定できる値

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値
LANG	接続に利用するユーザーの言語	日本語と英語が使用できる。 次に示す SAP システムで使用されている 2 バイトの ISO ID または 1 バイトの言語キーを指定する。 <ul style="list-style-type: none"> 日本語の場合：JA または J 英語の場合：EN または E 	なし
CODEPAGE	接続先の Unicode 版 SAP システムで文字コードを変換するときに使用するコードページ	LANG ラベルの言語と組み合わせ指定する。*	なし

注※

LANG ラベルと CODEPAGE ラベルは、次の組み合わせで設定してください。次の組み合わせ以外の言語とコードページを指定した場合、SAP システムから取得した情報が文字化けする可能性があります。

表 5-5 言語とコードページの指定内容の組み合わせ

接続先 SAP システム	接続言語	言語 (LANG)	コードページ (CODEPAGE)
Unicode 版	日本語	JA	8000
	英語	EN	指定する必要はありません。指定する場合は、1100 を指定してください。
非 Unicode 版	日本語	JA	指定する必要はありません。指定する場合は、8000 を指定してください。
	英語	EN	指定する必要はありません。指定する場合は、1100 を指定してください。

LANG ラベルの指定を省略した場合、接続先システムで定義されているユーザーの言語が仮定されます。

CODEPAGE ラベルの指定を省略した場合、接続先システムのデフォルトコードページが仮定されます。

(5) Option セクション

Option セクションでは、システムログの抽出の基点を決めるための情報を指定します。

SAP システムのタイムゾーンは、システムログ情報抽出機能で参照する環境パラメーター設定ファイルの Option セクションの SAPTIMEZONEOFFSET に設定します。SAPTIMEZONEOFFSET を設定することで、PFM - Agent for Enterprise Applications の稼働ホストと SAP システムでタイムゾーンが異なる環境でも、システムログ情報を正しく抽出できます。ラベルが未設定の場合、デフォルト値を使用します。

なお、リモート監視における収集基点時間の推奨値については、「[8.1 収集基点時間の注意事項](#)」を参照してください。また、SAP システムのタイムゾーンを設定する場合の注意事項は、「[8.2 SAP システムのタイムゾーンの注意事項](#)」を参照してください。

表 5-6 Option セクションに指定できる値

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値
SHIFTEXTRACTTIME※ ¹	システムログ情報の抽出の基点を決める収集基点時間（単位：秒）。 収集時刻に対して、抽出対象のシステムログ情報の時刻の範囲をずらす時間を指定してください。	0~600	5
SAPTIMEZONEOFFSET※ ²	PFM - Agent for Enterprise Applications の稼働ホストと SAP システムでタイムゾーン（夏時間の適用有無を含む）が異なる場合に、SAP システムの	-1440~+1440※ ³	PFM - Agent for Enterprise Applications の稼働ホストのタイムゾーン

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値
SAPTIMEZONEOFFSET*2	タイムゾーンを UTC との時刻差（単位：分）で設定してください。	-1440~+1440*3	例えば、PFM - Agent for Enterprise Applications の稼働ホストのタイムゾーンが JST (UTC+9) である場合、+540 となります。

注※1

0 以上の数値を指定する場合、符号 (+) を省略できます。

注※2

SAP システムの処理遅延によって、発生時刻通りにシステムログ情報が保存されない場合、このラベルの設定値をデフォルトよりも大きな値に変更してください。

注※3

リモート監視機能を使用する環境で PFM - Agent が稼働するホストと監視対象の SAP システムが稼働するホストのタイムゾーンが異なる場合だけ設定してください。

収集基点時間およびタイムゾーンの設定例を次に示します。

- 収集基点時間を 10 秒とする場合

```
[Option]
SHIFTEXTRACTIME=10
```

- SAP システムのタイムゾーンが UTC (UTC+0)、かつ標準時間である場合

```
[Option]
SAPTIMEZONEOFFSET=0
```

- SAP システムのタイムゾーンが EST (UTC-5)、かつ夏時間 (+1 時間) である場合

```
[Option]
SAPTIMEZONEOFFSET=-240
```

5.4 コマンド実行によるシステムログ情報の抽出

jr3slget コマンドを手動実行、またはほかのプログラムでjr3slget コマンドを自動実行して、SAP システムのシステムログ情報を抽出することもできます。ここでは、jr3slget コマンド実行によるシステムログ情報の抽出方法を説明します。

5.4.1 コマンドを実行する前に

jr3slget コマンドを実行して SAP システムのシステムログ情報を抽出する前に、次のことを確認してください。

- 環境パラメーター設定ファイルの設定内容
この場合の環境パラメーター設定ファイルは、System Log Monitor Command (PD_SLMX) レコードを使用してシステムログ情報を抽出する場合の環境パラメーター設定ファイルとは異なります。この場合に使用する環境パラメーター設定ファイルについては、「[5.4.3 コマンドを実行してシステムログ情報を抽出する場合の環境パラメーター設定ファイル](#)」を参照してください。
- コマンドの実行環境
次のことについて確認してください。
 - ネットワークの設定に問題がないか
 - SAP システムが稼働しているか
 - SAP システムが RFC 要求を受け付けられる状態にあるか

5.4.2 コマンド実行によるシステムログ情報の抽出方法

jr3slget コマンドを手動実行、またはほかのプログラムでjr3slget コマンドを自動実行して、SAP システムのシステムログ情報を抽出する場合、抽出するシステムログ情報を次のように選定できます。

- コマンドを実行した日に出力されたすべてのシステムログ情報を抽出する
- 前回のコマンド実行時以降に出力されたシステムログ情報だけを抽出する

jr3slget コマンドについては、「[jr3slget](#)」を参照してください。

注意

すでに環境パラメーター設定ファイルで設定したパラメーターの値を、jr3slget コマンドでも指定した場合、コマンドで指定した値が優先されます。

次にそれぞれの方法について説明します。

(1) コマンドを実行した日に出力されたすべてのシステムログ情報を抽出する

コマンドを実行した日に出力されたすべてのシステムログ情報を抽出する場合のコマンドの指定例を次に示します（環境パラメーター設定ファイルで CONNECT セクションの値および TARGET セクションの値を定義済み）。

```
jr3slget
```

(2) 前回のコマンド実行時以降に出力されたシステムログ情報だけを抽出する

前回のコマンド実行時以降に出力されたシステムログ情報だけを抽出する場合、`-lasttime` オプションで、タイムスタンプファイルを指定してコマンドを実行します。タイムスタンプファイルには、`jr3slget` コマンドの実行日時の履歴が格納されています。そのため、同じタイムスタンプファイルを指定して、コマンドを繰り返し実行すると、システムログ情報を連続かつ重複しないで抽出できます。

注意

`-lasttime` オプションの初回実行時に、指定したタイムスタンプファイルが存在しない場合、新規に作成されます。`-lasttime` オプション初回実行時は、システムログ情報が報告されません。

前回のコマンド実行時以降に出力されたシステムログ情報だけを抽出する場合のコマンドの指定例を次に示します（環境パラメーター設定ファイルで CONNECT セクションの値および TARGET セクションの値を定義済み）。

```
jr3slget -lasttime sltimestamp.txt
```

5.4.3 コマンドを実行してシステムログ情報を抽出する場合の環境パラメーター設定ファイル

`jr3slget` コマンド実行時に、引数として環境パラメーター設定ファイルを指定すると、ファイルの設定内容を基に、SAP システムのシステムログ情報が抽出されます。

この環境パラメーター設定ファイルは、テキストファイルとしてユーザーが作成します。

(1) 設定手順

環境パラメーター設定ファイルの設定手順を次に示します。

1. 環境パラメーター設定ファイルを編集する前に、`jr3slget` コマンドが実行されていないことを確認する。

2. 環境パラメーター設定ファイルを新規に作成する場合は、環境パラメーター設定ファイルのサンプルファイルを「jr3slget.ini」の名前でコピーする。

この「jr3slget.ini」が、デフォルトの環境パラメーター設定ファイルとなります。環境パラメーター設定ファイルのサンプルファイルを次に示します。

Windows の場合

```
インストール先フォルダ¥agtm¥evtrap¥jr3slget.ini.sample
```

Linux の場合

```
/opt/jp1pc/agtm/evtrap/jr3slget.ini.sample
```

3. jr3slget.ini を開く。

4. 設定内容を編集する。

デフォルトの環境パラメーター設定ファイルの設定内容を次に示します。設定内容については、「(2) 設定内容」を参照してください。

```
[CONNECT]
ASHOST=localhost
SYSNR=00
CLIENT=000
USER=CPIC
PASSWD=ADMIN
:LANG=JA
:CODEPAGE=8000

[COMMAND]
:WORKDIR=

[TRACE]
MSGLOG_LEVEL=2
MSGLOG_SIZE=512
MSGLOG_DIR=.
DATALOG_LEVEL=2
DATALOG_SIZE=512
DATALOG_DIR=.

[TARGET]
:SERVER=

[FORMAT]
:COLUMN=<TIME>
:COLUMN=<INSTANCE>
:COLUMN=<USER>
:COLUMN=<PROGRAM>
:COLUMN=<MSGNO>
:COLUMN=<MSGTEXT>

[EXTRACTFILE]
TYPE=WRAP2
NUM=5
SIZE=10240
X2PATH=SYSLOG
```

コメント行を表す「;」が行頭にある項目は、デフォルトでは設定が有効になっていません。設定を有効にするには、コメント行を表す「;」を外してください。

5. 環境パラメーター設定ファイルを保存する。

jr3slget コマンド実行時に-cnf オプションを指定することで、環境パラメーター設定ファイルの内容を基に SAP システムのシステムログ情報が抽出されます。

(2) 設定内容

環境パラメーター設定ファイルは、次の形式で記述します。

```
[セクション]
ラベル=値
ラベル=値
:
:
[セクション]
ラベル=値
ラベル=値
```

注意

- 行頭および「=」の前後に、空白文字などの余計な文字を設定しないでください。
- セクションおよびラベルでは、指定した値の大文字・小文字は区別されません。
- 行の先頭に「;」を指定すると、その行はコメントとして扱われます。

次に、環境パラメーター設定ファイルの各セクションで設定する内容を表形式で説明します。表の「引数」列は、jr3slget コマンドでも指定できる設定値の場合、コマンドで指定する際の引数を示します。「-」は、コマンドでは指定できない項目を示します。

(a) CONNECT セクション

CONNECT セクションでは、コマンド実行時に、SAP システムとの RFC 接続を確立するための情報を指定します。

表 5-7 CONNECT セクションに指定できる値

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値	引数
ASHOST	接続先のアプリケーションサーバのホスト名（トランザクションコード SM51 で確認できるホスト名）。	1~100 バイトの半角英数字。 次の形式で指定できる。 <ul style="list-style-type: none">• hosts ファイルに指定されたホスト名• IP アドレス• SAP ルーターアドレス	localhost	-h
SYSNR	接続先のアプリケーションサーバホストで識別するためのシステム番号。	0~99	00	-s
CLIENT	接続に利用するユーザーのクライアント名。	0~999	000	-c
USER	接続に利用するユーザー名。*1	1~12 バイトの半角英数字。	CPIC	-u

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値	引数
PASSWD	接続に利用するユーザーのパスワード。*2	1~8 バイトの半角文字列。*3	ADMIN	-p
PASSWD2	接続に利用するユーザーの拡張パスワード。*2	1~40 バイトの半角文字列。*3	ADMIN	-p2
LANG	接続に利用するユーザーの言語。	日本語と英語が使用できる。次に示す SAP システムで使用されている 2 バイトの ISO ID または 1 バイトの言語キーを指定する。 <ul style="list-style-type: none"> 日本語の場合：JA または J 英語の場合：EN または E 	なし	-l
CODEPAGE	接続先の Unicode 版 SAP システムで文字コードを変換する時に使用するコードページ。	LANG ラベルの言語と組み合わせて指定する。*4	なし	-codepage

注※1

このラベルで指定するユーザーには、次の権限を付与しておく必要があります。

表 5-8 ユーザーが汎用モジュールに RFC 接続するための権限 (S_RFC)

権限項目	説明	値
RFC_TYPE	保護される RFC オブジェクトのタイプ	FUGR (汎用グループ)
RFC_NAME	保護される RFC 名	*
ACTVT	アクティビティ	16 (実行)

表 5-9 外部管理インターフェースを使用するための権限 (S_XMI_PROD)

権限項目	説明	値
EXTCOMPANY	外部管理ツールの会社名	HITACHI
EXTPRODUCT	外部管理ツールのプログラム名	JP1
INTERFACE	インターフェース ID	XAL

また、このラベルで指定するユーザーには、次のタイプのユーザーが使用できます。

- ダイアログ (Dialog)
- システム (System)
- 通信 (Communication)
- サービス (Service)

注※2

PASSWD ラベルは、SAP システム側で従来型のパスワードルールが適用されている場合に指定します。PASSWD2 ラベルは、SAP システム側で拡張パスワードルールが適用されている場合に指定します。PASSWD ラベルと PASSWD2 ラベルは同時に指定できません。

注※3

接続に利用するユーザーのパスワード、および拡張パスワードは、半角数字(0~9)、半角英字(a~z, A~Z)、および次の半角記号で定義してください。

!@ \$ % & / () = ? ' ` * + ~ # - _ . : { [] } < > |

注※4

LANG ラベルと CODEPAGE ラベルは、次の組み合わせで設定してください。次の組み合わせ以外の言語とコードページを指定した場合、SAP システムから取得した情報が文字化けする可能性があります。

表 5-10 言語とコードページの指定内容の組み合わせ

接続先 SAP システム	接続言語	言語 (LANG)	コードページ (CODEPAGE)
Unicode 版	日本語	JA	8000
	英語	EN	指定する必要はありません。指定する場合は、1100 を指定してください。
非 Unicode 版	日本語	JA	指定する必要はありません。指定する場合は、8000 を指定してください。
	英語	EN	指定する必要はありません。指定する場合は、1100 を指定してください。

LANG ラベルの指定を省略した場合、接続先システムで定義されているユーザーの言語が仮定されます。

CODEPAGE ラベルの指定を省略した場合、接続先システムのデフォルトコードページが仮定されます。

(b) COMMAND セクション

COMMAND セクションでは、jr3slget コマンドの作業ディレクトリの情報を指定します。

表 5-11 COMMAND セクションに指定できる値

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値	引数
WORKDIR	コマンドの作業ディレクトリ。	1~255 バイトの半角英数字。相対パスを指定した場合、カレントディレクトリからの相対パスとなる。	カレントディレクトリ	-

(c) TRACE セクション

TRACE セクションでは、jr3slget コマンドの実行履歴が保存されるメッセージログおよびデータログの情報を指定します。

表 5-12 TRACE セクションに指定できる値

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値	引数
MSGLOG_LEVEL	アプリケーションのトレース情報を保存するメッセージログの取得レベル。 <ul style="list-style-type: none"> 0: 採取しない 1: エラーだけ採取 2: 標準 3: 詳細 4: デバッグ 	0~4	2	—
MSGLOG_SIZE	メッセージログを取得するファイル容量。 <ul style="list-style-type: none"> 0: 2GB (32 ビットの符号付き整数で示せる最大値 (0x7FFFFFFF)) 1~65535: 指定サイズ (単位: キロバイト) 内でラップアラウンド 	0~65535	512	—
MSGLOG_DIR	メッセージログファイル (jr3slget.log) の取得先ディレクトリ。	1~255 バイトの半角英数字。ファイル名部分の jr3slget.log までを含めて 255 バイト以内で指定する必要がある。相対パスを指定した場合、コマンドの作業ディレクトリからの相対パスとなる。	コマンドの作業ディレクトリ (COMMAND セクションの WORKDIR ラベルで変更していないときは、カレントディレクトリ)	—
DATALOG_LEVEL	アプリケーションの各種データ情報を保存するデータログの取得レベル。 <ul style="list-style-type: none"> 0: 採取しない 1: エラーだけ採取 2: 標準 3: 詳細 4: デバッグ 	0~4	2	—
DATALOG_SIZE	データログを取得するファイル容量。 <ul style="list-style-type: none"> 0: 2GB (32 ビットの符号付き整数で示せる最大値 (0x7FFFFFFF)) 1~65535: 指定サイズ (単位: キロバイト) 内でラップアラウンド 	0~65535	512	—
DATALOG_DIR	データログファイル (jr3slget.dat) の取得先ディレクトリ。	1~255 バイトの半角英数字。ファイル名部分の jr3slget.dat までを含めて 255 バイト以内で指定する必要がある。相対パスを	コマンドの作業ディレクトリ (COMMAND セクションの	—

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値	引数
DATALOG_DIR	データログファイル (jr3slget.dat) の取得先ディレクトリ。	指定した場合、コマンドの作業ディレクトリからの相対パスとなる。	WORKDIR ラベルで変更していないときは、カレントディレクトリ)	—

(d) TARGET セクション

TARGET セクションでは、抽出対象のシステムログ情報を特定するための情報を指定します。

表 5-13 TARGET セクションに指定できる値

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値	引数
SERVER	SAP インスタンス名 (トランザクションコード SM51 で確認できる、ダイアログサービスを持つ SAP インスタンス名)。	1~20 バイトの半角英数字。	なし	-server

(e) FORMAT セクション

FORMAT セクションでは、出力されるシステムログ情報の出力形式を指定します。

表 5-14 FORMAT セクションに指定できる値

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値	引数
COLUMN	出力されるシステムログ情報の出力形式。	フィールド ID。フィールド ID については、「11. コマンド」の jr3slget コマンドの「出力形式および内容」を参照のこと。	列 1: <TIME> 列 2: <INSTANCE> 列 3: <USER> 列 4: <PROGRAM> 列 5: <MSGNO> 列 6: <MSGTEXT>	—

(f) EXTRACTFILE セクション

EXTRACTFILE セクションでは、システムログ情報の出力ファイルの情報を指定します。

表 5-15 EXTRACTFILE セクションに指定できる値

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値
TYPE	システムログ情報を格納するファイルの形式。 <ul style="list-style-type: none"> • WRAP1 システムログ情報が一定の容量に達すると、ラップアラウンドして再び先頭からデータを上書きする形式のファイルです。 • WRAP2 	WRAP1 または WRAP2	WRAP1

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値
TYPE	<p>NUM ラベルで設定した複数のファイルを持つ形式です。1つ目のファイルが一定の容量に達すると、ラップアラウンドして2つ目のファイルに書き込みます。このとき、2つ目のファイルのデータを削除し、先頭からデータを書き込みます。</p> <p>複数のファイルすべてで一定の容量に達すると、1つ目のファイルに戻ってデータを削除し、先頭からデータを書き込みます。</p> <p>PFM - Agent for Enterprise Applications の環境を新規で構築する場合は、WRAP2 を指定することを推奨します。</p> <p>運用の開始後、格納ファイルの形式を変更する場合は、事前に格納ファイルを監視している製品を停止し、格納ファイルとその管理ファイル※1を削除してください。</p>	WRAP1 または WRAP2	WRAP1
SIZE	<p>1 ファイル当たりの格納ファイル容量。</p> <ul style="list-style-type: none"> 0 : 2GB (32 ビットの符号付き整数で示せる最大値 (0x7FFFFFFF)) 1~65535 : 指定サイズ内でラップアラウンド (キロバイト)。 	0~65535	10240※2
X2PATH	<ul style="list-style-type: none"> TYPE ラベルで WRAP1 を設定している場合 -x2 オプションで、格納ファイル出力を指定したときに適用される格納ファイルのパスを指定する。 ※1※3 TYPE ラベルで WRAP2 を設定している場合 -x2 オプションで、格納ファイル出力を指定したときに適用される格納ファイルを指定する。 ※3※4 	<ul style="list-style-type: none"> TYPE ラベルで WRAP1 を設定している場合 1~251 バイトの半角英数字。 ※5 TYPE ラベルで WRAP2 を設定している場合 1~254 バイトの半角英数字。 ※5 	—
NUM	<p>WRAP2 形式で格納するときのファイル数。</p> <p>TYPE ラベルで WRAP2 を設定している場合だけ有効です。</p>	2~9	5

注※1

WRAP1 形式の場合、格納ファイルと同じディレクトリに、格納ファイル名.ofs という名称で管理ファイルが作成されます。

例：

格納ファイル名として SYSLOG を指定したとき SYSLOG ファイルとは別に SYSLOG.ofs ファイルが管理ファイルとして作成されます。

格納ファイルを削除する場合は、この管理ファイルも合わせて削除してください。

注※2

09-00 以前からバージョンアップした場合に適用されるデフォルト値の詳細については、「付録 H 移行手順と移行時の注意事項」を参照してください。

注※3

デフォルトの格納先から変更した場合、格納ファイルと管理ファイルを jpcras コマンドで採取することができません。このため、トラブルが発生した場合、手動で格納ファイルと管理ファイルを採取していただく必要があります。

注※4

この値に NUM ラベルに指定した範囲（デフォルトは 1~5）の値が付与されたファイル名が格納されます。

注※5

相対パスを指定した場合、コマンドの作業ディレクトリ（COMMAND セクションの WORKDIR ラベルに指定したディレクトリ）が相対パスのカレントディレクトリとなります。なお、作業ディレクトリが指定されていない場合、以下のディレクトリからの相対パスのカレントディレクトリとなります。また、環境ディレクトリは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

Windows の場合：

物理ホスト環境：インストール先フォルダ¥agtm¥agent¥インスタンス名

論理ホスト環境：環境ディレクトリ¥jp1pc¥agtm¥agent¥インスタンス名

Linux の場合：

物理ホスト環境：/opt/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名

論理ホスト環境：環境ディレクトリ/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名

(g) Option セクション

Option セクションでは、システムログの抽出の基点を決めるための情報を指定します。

Option セクションの詳細は、「5.3.2(5) Option セクション」を参照してください。

(3) 注意事項

SAP システムのタイムゾーンの設定を変更した場合（標準時間と夏時間の切り替えに伴う変更を除く）、設定変更前のタイムゾーンに基づくタイムスタンプが記録された、タイムスタンプファイルは削除する必要があります。jr3slget コマンドの -lasttime オプションに指定したタイムスタンプファイルが存在する場合には、コマンド実行を再開する前にタイムスタンプファイルを削除してください。

6

CCMS アラート情報の抽出

この章では、PFM - Agent for Enterprise Applications で、CCMS アラート情報を抽出する方法について説明します。

6.1 CCMS アラート情報抽出機能の概要

PFM - Agent for Enterprise Applications で、CCMS の警告モニター内で発生する警告（アラート情報）を定期的にテキストファイルに出力できます。PFM - Agent for Enterprise Applications の CCMS アラート情報抽出機能を使用すると、次のような CCMS アラート情報をテキストファイルに出力できます。

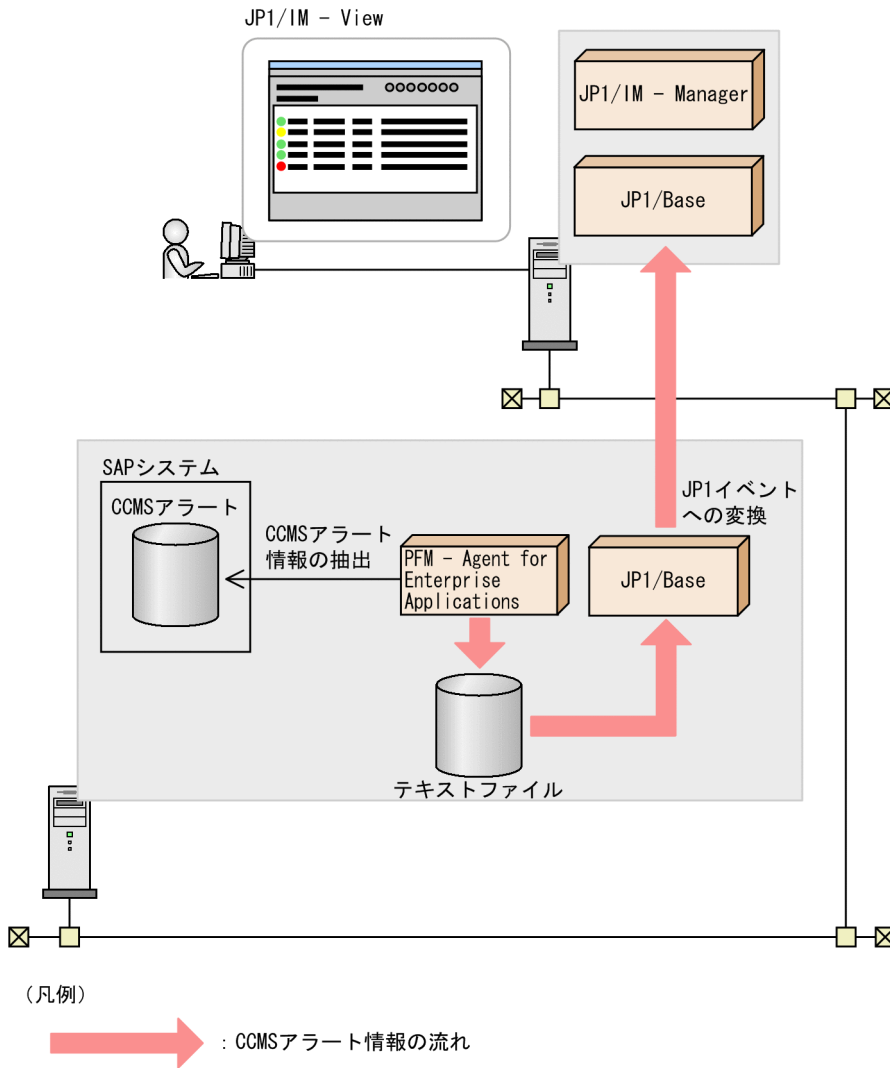
- アラート ID
- アラートに関連づけられている MTE の ID
- アラートの重要度
- 一般プロパティ
- メッセージ

テキストファイルに出力された CCMS アラート情報は、ほかのプログラムと連携することで、SAP システムの障害情報の監視に利用できます。ここでは、JP1/Base と JP1/IM との連携による障害監視の例を説明します。

JP1/Base のログファイルトラップ機能を使用すると、CCMS アラート情報を JP1 イベントに変換できます。この JP1 イベントを JP1/IM から監視することで、SAP システムの障害情報を JP1/IM から監視できるようになります。

JP1/Base および JP1/IM と連携して SAP システムの障害を監視する例を、次の図に示します。

図 6-1 JP1/Base および JP1/IM と連携して SAP システムの障害を監視する例



PFM - Agent for Enterprise Applications が CCMS アラート情報を格納するファイルの形式には、次の 2 種類があります。

- WRAP1 形式

CCMS アラート情報が一定の容量に達すると、ラップアラウンドして再び先頭からデータを上書きする形式のファイルです。ファイルの先頭には、管理情報として 1 行のヘッダーがあります。WRAP1 形式で格納できる CCMS アラート情報のファイル数は 1 個です。WRAP1 形式を使用して CCMS アラート情報を監視する場合には、動作定義ファイルに次のパラメーターを指定してください。

```
FILETYPE=WRAP1
HEADLINE=1
```

- WRAP2 形式

CCMS アラート情報が一定の容量に達してラップアラウンドするとき、データを削除して再び先頭からデータを書き込む形式のファイルです。WRAP2 形式では複数の CCMS アラート情報のファイルに格納できます。WRAP2 形式を使用して CCMS アラート情報を監視する場合には、動作定義ファイルに次のパラメーターを指定してください。

FILETYPE=WRAP2

6.2 CCMS アラート情報の抽出

SAP システムの CCMS アラート情報を抽出する方法および出力例について説明します。

CCMS アラート情報を抽出するには、CCMS Alert Monitor Command (PD_ALMX) レコードのパフォーマンスデータを Store データベースに格納するように設定します。CCMS Alert Monitor Command (PD_ALMX) レコードのパフォーマンスデータを収集するごとに、CCMS アラート情報が自動的に抽出されます。前回のレコード収集時刻をタイムスタンプファイルに記録し、この時刻よりもあとに発生した CCMS アラート情報だけを抽出します。SAP システムの CCMS アラート情報は、デフォルトでは、次のテキストファイルに出力されます。

OS 環境	ホスト環境	CCMS アラート情報格納ファイル
Windows	物理ホスト	<ul style="list-style-type: none"> • WRAP1 の場合 インストール先フォルダ%agtm%agent%インスタンス名%log%ALERT • WRAP2 の場合 インストール先フォルダ%agtm%agent%インスタンス名%log%ALERTn^{※1}
	論理ホスト	<ul style="list-style-type: none"> • WRAP1 の場合 環境ディレクトリ^{※2}%jp1pc%agtm%agent%インスタンス名%log%ALERT • WRAP2 の場合 環境ディレクトリ^{※2}%jp1pc%agtm%agent%インスタンス名%log%ALERTn^{※1}
Linux	物理ホスト	<ul style="list-style-type: none"> • WRAP1 の場合 /opt/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/log/ALERT • WRAP2 の場合 /opt/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/log/ALERTn^{※1}
	論理ホスト	<ul style="list-style-type: none"> • WRAP1 の場合 環境ディレクトリ^{※2}/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/log/ALERT • WRAP2 の場合 環境ディレクトリ^{※2}/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/log/ALERTn^{※1}

注※1

n は、1～「環境パラメーター設定ファイルの EXTRACTFILE セクションの NUM ラベルに指定した値」です。

注※2

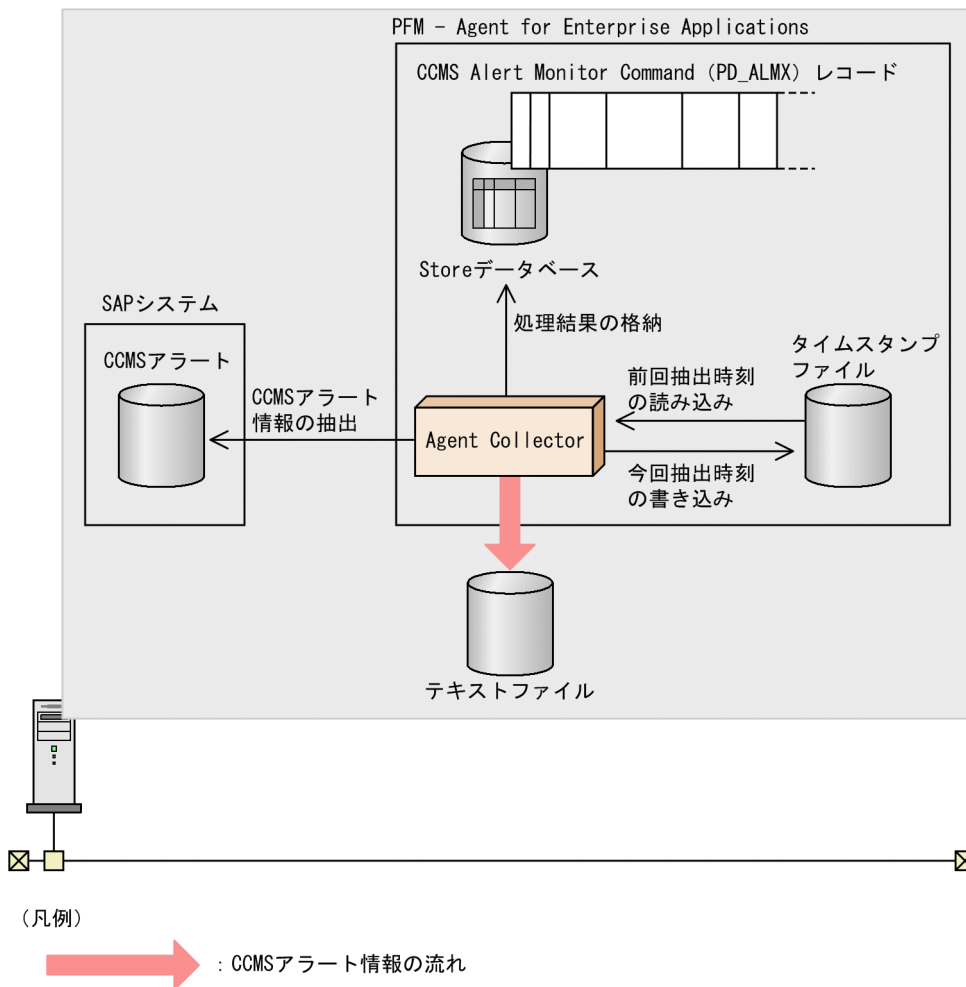
環境ディレクトリは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

CCMS Alert Monitor Command (PD_ALMX) レコードには、処理結果が格納されます。

CCMS Alert Monitor Command (PD_ALMX) レコードについては、「[10. レコード](#)」を参照してください。

SAP システムの CCMS アラート情報を抽出する流れを次の図に示します。

図 6-2 CCMS アラート情報を抽出する流れ



6.2.1 セットアップ

SAP システムの CCMS アラート情報を抽出するためのセットアップ手順を次に示します。

注意

デフォルトで指定されている CCMS アラート情報の出力先ファイル名などを変更したい場合、環境パラメーター設定ファイルを編集したあとにセットアップしてください。環境パラメーター設定ファイルについては、「6.3 環境パラメーター設定ファイル」を参照してください。

1. PFM - Web Console で、CCMS Alert Monitor Command (PD_ALMX) レコードのパフォーマンスデータを Store データベースに格納するように設定する。

設定する方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

6.2.2 出力例

SAP システムの CCMS アラート情報の出力例を次に示します。

```
20030321171911SD5 o246bci_SD5_00 Background AbortedJobs Job  
DBA:CHECKOPT_____@021500/6007 (ID number 02153101) terminated20030321171911SD5  
o246bci_SD5_00 GenericKey SpaceUsed 95 % > 90 % 15 min. avg. value over threshold  
value
```


6.3 環境パラメーター設定ファイル

ここでは、環境パラメーター設定ファイルについて説明します。

環境パラメーター設定ファイルとは CCMS アラート情報の出力先ファイル名などを設定するファイルです。PFM - Agent for Enterprise Applications で、SAP システムの CCMS アラート情報が抽出される際、このファイルの設定内容を基に抽出されます。

この環境パラメーター設定ファイルは、テキストファイルとしてユーザーが作成します。

6.3.1 設定手順

環境パラメーター設定ファイルの設定手順を次に示します。

1. 環境パラメーター設定ファイルを変更する前に、CCMS Alert Monitor Command (PD_ALMX) レコードの収集を停止する。

次のどちらかの方法で収集を停止してください。

- Agent Collector サービスを停止する
- Agent Collector サービスが起動中の状態で、PFM - Web Console で、CCMS Alert Monitor Command (PD_ALMX) レコードのパフォーマンスデータを Store データベースに格納しないように設定する

設定する方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

2. 環境パラメーター設定ファイルを開く。

環境パラメーター設定ファイルを次に示します。

OS 環境	ホスト環境	環境パラメーター設定ファイル
Windows	物理ホスト	インストール先フォルダ¥agtm¥agent¥インスタンス名¥jr3alget.ini
	論理ホスト	環境ディレクトリ*¥jp1pc¥agtm¥agent¥インスタンス名¥jr3alget.ini
Linux	物理ホスト	/opt/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/jr3alget.ini
	論理ホスト	環境ディレクトリ*/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/jr3alget.ini

注※

環境ディレクトリは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

3. 設定内容を編集する。

環境パラメーター設定ファイルの設定内容を次に示します。次の網掛け部分が修正できます。設定内容については、「6.3.2 設定内容」を参照してください。

```
[TARGET]
MONITOR_SET=SAP CCMS Monitor Templates
MONITOR=Entire System
```

```
[EXTRACTFILE]
TYPE=WRAP2
NUM=5
SIZE=10240
X2PATH=log¥ALERT*
```

```
[FORMAT]
COLUMN=<ALERTDATE>
COLUMN=<ALERTTIME>
COLUMN=<MTSYSID>
COLUMN=<MTMCNAME>
COLUMN=<OBJECTNAME>
COLUMN=<FIELDNAME>
COLUMN=<VALUE>
COLUMN=<SEVERITY>
COLUMN=<MSG>
```

```
[TRACE]
MSGLOG_LEVEL=2
MSGLOG_SIZE=512
MSGLOG_DIR=log
DATALOG_LEVEL=2
DATALOG_SIZE=512
DATALOG_DIR=log
```

```
:[CONNECT]
:LANG=JA
:CODEPAGE=8000
```

```
[Option]
SHIFTEXTRACTTIME=10
```

コメント行を表す「:」が行頭にある項目は、デフォルトでは設定が有効になっていません。設定を有効にするには、コメント行を表す「:」を外してください。

注※

Windowsでの設定値です。UNIXでは「log/ALERT」です。

4. 環境パラメーター設定ファイルを保存する。
5. 環境パラメーター設定ファイルの変更をしたあとに CCMS Alert Monitor Command (PD_ALMX) レコードの収集を再開する。

6.3.2 設定内容

環境パラメーター設定ファイルは、次の形式で記述します。

```
[セクション]
ラベル=値
ラベル=値
:
:
[セクション]
ラベル=値
ラベル=値
```

注意

- 行頭および「=」の前後に、空白文字などの余計な文字を設定しないでください。
- セクションおよびラベルでは、指定した値の大文字・小文字は区別されません。
- 行の先頭に「;」を指定すると、その行はコメントとして扱われます。

次に、環境パラメーター設定ファイルの各セクションで設定する内容を表形式で説明します。

(1) TARGET セクション

TARGET セクションでは、抽出対象の CCMS アラート情報を特定するための情報を指定します。

表 6-1 TARGET セクションに指定できる値

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値
MONITOR_SET*	モニターセット名 (SAP システムの警告モニター (トランザクションコード RZ20) で、「CCMS 監視セット」として表示される名称)。	1~60 バイトの半角英数字。	SAP CCMS Monitor Templates
MONITOR*	モニター名 (SAP システムの警告モニター (トランザクションコード RZ20) で、CCMS 監視セットのツリーに表示される名称)。	1~60 バイトの半角英数字。	Entire System

注※

複数の監視対象を指定することはできません。複数のモニターを監視したい場合は SAP システムの CCMS の機能で監視したいモニターを 1 つのモニターにまとめて定義します。PFM - Agent for Enterprise Applications からはこのモニターを監視するようにしてください。

(2) EXTRACTFILE セクション

EXTRACTFILE セクションでは、CCMS アラート情報の出力ファイルの情報を指定します。

表 6-2 EXTRACTFILE セクションに指定できる値

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値
TYPE	CCMS アラート情報を格納するファイルの形式。 <ul style="list-style-type: none">WRAP1 CCMS アラート情報が一定の容量に達すると、ラップアラウンドして再び先頭からデータを上書きする形式のファイルです。WRAP2 NUM ラベルで設定した複数のファイルを持つ形式です。1 つ目	WRAP1 または WRAP2	WRAP2 ただし、Version 9 以前からのバージョンアップなどによって、TYPE ラベルが存在しない場合は、WRAP1 となります。

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値
TYPE	<p>のファイルが一定の容量に達すると、ラップアラウンドして2つ目のファイルに書き込みます。このとき、2つ目のファイルのデータを削除し、先頭からデータを書き込みます。</p> <p>複数のファイルすべてで一定の容量に達すると、1つ目のファイルに戻ってデータを削除し、先頭からデータを書き込みます。</p> <p>PFM - Agent for Enterprise Applications の環境を新規で構築する場合は、WRAP2 を指定することを推奨します。</p> <p>運用の開始後、格納ファイルの形式を変更する場合は、事前に格納ファイルを監視している製品を停止し、格納ファイルとその管理ファイル※1を削除してください。</p>	WRAP1 または WRAP2	WRAP2 ただし、Version 9 以前からのバージョンアップなどによって、TYPE ラベルが存在しない場合は、WRAP1 となります。
SIZE	<p>1 ファイル当たりの格納ファイル容量。</p> <ul style="list-style-type: none"> 0 : 2GB (32 ビットの符号付き整数で示せる最大値 (0x7FFFFFFF)) 1~65535 : 指定サイズ内でラップアラウンド (キロバイト)。 	0~65535	10240※2
X2PATH	<ul style="list-style-type: none"> TYPE ラベルで WRAP1 を設定している場合 -x2 オプションで、格納ファイル出力を指定したときに適用される格納ファイルのパスを指定する。 ※1※3 TYPE ラベルで WRAP2 を設定している場合 -x2 オプションで、格納ファイル出力を指定したときに適用される格納ファイルを指定する。 ※3※4 	<ul style="list-style-type: none"> TYPE ラベルで WRAP1 を設定している場合 1~251 バイトの半角英数字。 ※5 TYPE ラベルで WRAP2 を設定している場合 1~254 バイトの半角英数字。 ※5 	<ul style="list-style-type: none"> Windows の場合 log#ALERT Linux の場合 log/ALERT
NUM	<p>WRAP2 形式で格納するときのファイル数。</p> <p>TYPE ラベルで WRAP2 を設定している場合だけ有効です。</p>	2~9	5

(凡例)

— : 該当なし

注※1

WRAP1 形式の場合、格納ファイルと同じディレクトリに、格納ファイル名.ofs という名称で管理ファイルが作成されます。

例：

格納ファイル名として ALERT を指定したとき ALERT ファイルとは別に ALERT.ofs ファイルが管理ファイルとして作成されます。

格納ファイルを削除する場合は、この管理ファイルも合わせて削除してください。

注※2

09-00 以前からバージョンアップした場合に適用されるデフォルト値の詳細については、「付録 H 移行手順と移行時の注意事項」を参照してください。

注※3

デフォルトの格納先から変更した場合、jpcras コマンドで格納ファイルと管理ファイルを採取することができません。このため、トラブルが発生した場合、手動で格納ファイルと管理ファイルを採取していただく必要があります。

注※4

この値に NUM ラベルに指定した範囲（デフォルトは 1~5）の値が付与されたファイル名が格納されます。

注※5

相対パスを指定した場合、コマンドの作業ディレクトリ（COMMAND セクションの WORKDIR ラベルに指定したディレクトリ）が相対パスのカレントディレクトリとなります。なお、作業ディレクトリが指定されていない場合、以下のディレクトリからの相対パスのカレントディレクトリとなります。また、環境ディレクトリは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

Windows の場合

物理ホスト環境：インストール先フォルダ¥jp1pc¥agtm¥agent¥インスタンス名

論理ホスト環境：環境ディレクトリ¥jp1pc¥agtm¥agent¥インスタンス名

Linux の場合：

物理ホスト環境：/opt/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名

論理ホスト環境：環境ディレクトリ/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名

(3) FORMAT セクション

FORMAT セクションでは、出力される CCMS アラート情報の出力形式を指定します。

表 6-3 FORMAT セクションに指定できる値

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値
COLUMN	出力される CCMS アラート情報の出力形式。	フィールド ID。フィールド ID については、「11. コマンド」の jr3alget コマンドの「出力形式および内容」を参照のこと。	列 1：<ALERTDATE> 列 2：<ALERTTIME> 列 3：<MTSYSID> 列 4：<MTMCNAME> 列 5：<OBJECTNAME> 列 6：<FIELDNAME> 列 7：<VALUE> 列 8：<SEVERITY> 列 9：<MSG>
TIMEZONE	フィールド ID<ALERTDATE>、<ALERTTIME>、	<ul style="list-style-type: none"> UTC UTC（世界標準時）で出力する。 	UTC

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値
TIMEZONE	<STATCHGDAT>, <STATCHGTIM>で指定された時刻情報に関するタイムゾーン指定。	<ul style="list-style-type: none"> LOCAL コマンドを実行したユーザーのローカルタイムで出力する。	UTC

(4) TRACE セクション

TRACE セクションでは、CCMS アラート情報抽出の実行履歴が保存されるメッセージログおよびデータログの情報を指定します。

表 6-4 TRACE セクションに指定できる値

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値
MSGLOG_LEVEL	アプリケーションのトレース情報を保存するメッセージログの取得レベル。 <ul style="list-style-type: none"> 0: 採取しない 1: エラーだけ採取 2: 標準 3: 詳細 4: デバッグ 	0~4	2
MSGLOG_SIZE	メッセージログを取得するファイル容量。 <ul style="list-style-type: none"> 0: 2GB (32 ビットの符号付き整数で示せる最大値 (0x7FFFFFFF)) 1~65535: 指定サイズ (単位: キロバイト) 内でラップアラウンド 	0~65535	512
MSGLOG_DIR	メッセージログファイル (jr3alget.log) の取得先ディレクトリ。	(変更できない)	log
DATALOG_LEVEL	アプリケーションの各種データ情報を保存するデータログの取得レベル。 <ul style="list-style-type: none"> 0: 採取しない 1: エラーだけ採取 2: 標準 3: 詳細 4: デバッグ 	0~4	2
DATALOG_SIZE	データログを取得するファイル容量。 <ul style="list-style-type: none"> 0: 2GB (32 ビットの符号付き整数で示せる最大値 (0x7FFFFFFF)) 	0~65535	512

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値
DATALOG_SIZE	<ul style="list-style-type: none"> 1~65535：指定サイズ（単位：キロバイト）内でラップアラウンド 	0~65535	512
DATALOG_DIR	データログファイル（jr3alget.dat）の取得先ディレクトリ。	（変更できない）	log

(5) CONNECT セクション

CONNECT セクションでは、SAP システムとの RFC 接続を確立するための情報を指定します。

表 6-5 CONNECT セクションに指定できる値

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値
LANG	接続に利用するユーザーの言語	日本語と英語が使用できる。次に示す SAP システムで使用されている 2 バイトの ISO ID または 1 バイトの言語キーを指定する。 <ul style="list-style-type: none"> 日本語の場合：JA または J 英語の場合：EN または E 	なし
CODEPAGE	接続先の Unicode 版 SAP システムで文字コードを変換するときに使用するコードページ	LANG ラベルの言語と組み合わせで指定する※	なし

注※

LANG ラベルと CODEPAGE ラベルは、次の組み合わせで設定してください。次の組み合わせ以外の言語とコードページを指定した場合、SAP システムから取得した情報が文字化けする可能性があります。

表 6-6 言語とコードページの指定内容の組み合わせ

接続先 SAP システム	接続言語	言語 (LANG)	コードページ (CODEPAGE)
Unicode 版	日本語	JA	8000
	英語	EN	指定する必要はありません。指定する場合は、1100 を指定してください。
非 Unicode 版	日本語	JA	指定する必要はありません。指定する場合は、8000 を指定してください。
	英語	EN	指定する必要はありません。指定する場合は、1100 を指定してください。

LANG ラベルの指定を省略した場合、接続先システムで定義されているユーザーの言語が仮定されます。CODEPAGE ラベルの指定を省略した場合、接続先システムのデフォルトコードページが仮定されます。

(6) Option セクション

Option セクションでは、CCMS アラート情報の抽出の基点を決めるための情報を指定します。ラベルが未設定の場合、デフォルト値を使用します。

なお、リモート監視における収集基点時間の推奨値については、「8.1 収集基点時間の注意事項」を参照してください。

表 6-7 Option セクションに指定できる値

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値
SHIFTEXTRACTTIME※	CCMS アラート情報の抽出の基点を決める収集基点時間（単位：秒）。 収集時刻に対して、CCMS アラート情報の時刻の範囲をずらす時間を指定してください。	0~600	5

注※

SAP システムの処理遅延によって、発生時刻通りに CCMS アラート情報が保存されない場合、このラベルの設定値をデフォルトよりも大きな値に変更してください。

収集基点時間の設定例を次に示します。

- 収集基点時間を 10 秒とする場合

```
[Option]  
SHIFTEXTRACTTIME=10
```


6.4 コマンド実行による CCMS アラート情報の抽出

jr3alget コマンドを手動実行、またはほかのプログラムで jr3alget コマンドを自動実行して、SAP システムの CCMS アラート情報を抽出することもできます。ここでは、jr3alget コマンド実行による CCMS アラート情報の抽出方法を説明します。

6.4.1 コマンドを実行する前に

jr3alget コマンドを実行して SAP システムの CCMS アラート情報を抽出する前に、次のことを確認してください。

- 環境パラメーター設定ファイルの設定内容
この場合の環境パラメーター設定ファイルは、CCMS Alert Monitor Command (PD_ALMX) レコードを使用して CCMS アラート情報を抽出する場合の環境パラメーター設定ファイルとは異なります。この場合に使用する環境パラメーター設定ファイルについては、「[6.4.3 コマンドを実行して CCMS アラート情報を抽出する場合の環境パラメーター設定ファイル](#)」を参照してください。
- コマンドの実行環境
次のことについて確認してください。
 - ネットワークの設定に問題がないか
 - SAP システムが稼働しているか
 - SAP システムが RFC 要求を受け付けられる状態にあるか

6.4.2 コマンド実行による CCMS アラート情報の抽出方法

jr3alget コマンドを手動実行、またはほかのプログラムで jr3alget コマンドを自動実行して、SAP システムの CCMS アラート情報を抽出する場合、抽出する CCMS アラート情報を次のように選定できます。

- コマンドを実行した日に出力されたすべての CCMS アラート情報を抽出する
- 前回のコマンド実行時以降に出力された CCMS アラート情報だけを抽出する

jr3alget コマンドについては、「[jr3alget](#)」を参照してください。

注意

- CCMS アラート情報は、SAP システム内で 1 つのリソースとして扱われていて、どのアプリケーションサーバからも参照できるため、接続先のアプリケーションサーバは、任意です。1 つの SAP システムにつき、1 つだけコマンドを実行するようにしてください。
- すでに環境パラメーター設定ファイルで設定したパラメーターの値を、jr3alget コマンドでも指定した場合、コマンドで指定した値が優先されます。

次にそれぞれの方法について説明します。

(1) コマンドを実行した日に出力されたすべての CCMS アラート情報を抽出する

コマンドを実行した日に出力されたすべての CCMS アラート情報を抽出する場合のコマンドの指定例を次に示します（環境パラメーター設定ファイルで CONNECT セクションの値および TARGET セクションの値を定義済み）。

```
jr3alget
```

(2) 前回のコマンド実行時以降に出力された CCMS アラート情報だけを抽出する

前回のコマンド実行時以降に出力された CCMS アラート情報だけを抽出する場合、`-lasttime` オプションで、タイムスタンプファイルを指定してコマンドを実行します。タイムスタンプファイルには、`jr3alget` コマンドの実行日時の履歴が格納されています。そのため、同じタイムスタンプファイルを指定して、コマンドを繰り返し実行すると、CCMS アラート情報を連続かつ重複しないで抽出できます。

注意

`-lasttime` オプションの初回実行時に、指定したタイムスタンプファイルが存在しない場合、新規に作成されます。`-lasttime` オプション初回実行時は、CCMS アラート情報が報告されません。

前回のコマンド実行時以降に出力された CCMS アラート情報だけを抽出する場合のコマンドの指定例を次に示します（環境パラメーター設定ファイルで CONNECT セクションの値および TARGET セクションの値を定義済み）。

```
jr3alget -lasttime altimestamp.txt
```

6.4.3 コマンドを実行して CCMS アラート情報を抽出する場合の環境パラメーター設定ファイル

`jr3alget` コマンド実行時に、引数として環境パラメーター設定ファイルを指定すると、ファイルの設定内容を基に、SAP システムの CCMS アラート情報が抽出されます。

この環境パラメーター設定ファイルは、テキストファイルとしてユーザーが作成します。

(1) 設定手順

環境パラメーター設定ファイルの設定手順を次に示します。

1. 環境パラメーター設定ファイルを編集する前に、`jr3alget` コマンドが実行されていないことを確認する。

2. 環境パラメーター設定ファイルを新規に作成する場合は、環境パラメーター設定ファイルのサンプルファイルを「jr3alget.ini」の名前でコピーする。

この「jr3alget.ini」が、デフォルトの環境パラメーター設定ファイルとなります。環境パラメーター設定ファイルのサンプルファイルを次に示します。

Windows の場合

```
インストール先フォルダ%agtm%evtrap%jr3alget.ini.sample
```

Linux の場合

```
/opt/jp1pc/agtm/evtrap/jr3alget.ini.sample
```

3. jr3alget.ini を開く。

4. 設定内容を編集する。

デフォルトの環境パラメーター設定ファイルの設定内容を次に示します。設定内容については、「(2) 設定内容」を参照してください。

```
[CONNECT]
ASHOST=localhost
SYSNR=00
CLIENT=000
USER=CPIC
PASSWD=ADMIN
:LANG=JA
:CODEPAGE=8000

[COMMAND]
:WORKDIR=

[TRACE]
MSGLOG_LEVEL=2
MSGLOG_SIZE=512
MSGLOG_DIR=.
DATALOG_LEVEL=2
DATALOG_SIZE=512
DATALOG_DIR=.

[TARGET]
:MONITOR_SET=SAP CCMS Technical Expert Monitors
:MONITOR=All Monitoring Contexts

[FORMAT]
:COLUMN=<ALERTDATE>
:COLUMN=<ALERTTIME>
:COLUMN=<MTSYSID>
:COLUMN=<MTMCNAME>
:COLUMN=<OBJECTNAME>
:COLUMN=<FIELDNAME>
:COLUMN=<VALUE>
:COLUMN=<SEVERITY>
:COLUMN=<MSG>

[EXTRACTFILE]
TYPE=WRAP2
NUM=5
SIZE=10240
X2PATH=ALERT
```

コメント行を表す「;」が行頭にある項目は、デフォルトでは設定が有効になっていません。設定を有効にするには、コメント行を表す「;」を外してください。

5. 環境パラメーター設定ファイルを保存する。

jr3alget コマンド実行時に-cnf オプションを指定することで、環境パラメーター設定ファイルの内容を基に SAP システムの CCMS アラート情報が抽出されます。

(2) 設定内容

環境パラメーター設定ファイルは、次の形式で記述します。

```
[セクション]
ラベル=値
ラベル=値
:
:
[セクション]
ラベル=値
ラベル=値
```

注意

- 行頭および「=」の前後に、空白文字などの余計な文字を設定しないでください。
- セクションおよびラベルでは、指定した値の大文字・小文字は区別されません。
- 行の先頭に「;」を指定すると、その行はコメントとして扱われます。

次に、環境パラメーター設定ファイルの各セクションで設定する内容を表形式で説明します。表の「引数」列は、jr3alget コマンドでも指定できる設定値の場合、コマンドで指定する際の引数を示します。「-」は、コマンドでは指定できない項目を示します。

(a) CONNECT セクション

CONNECT セクションでは、コマンド実行時に、SAP システムとの RFC 接続を確立するための情報を指定します。

表 6-8 CONNECT セクションに指定できる値

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値	引数
ASHOST	接続先のアプリケーションサーバのホスト名（トランザクションコード SM51 で確認できるホスト名）。	1~100 バイトの半角英数字。 次の形式で指定できる。 <ul style="list-style-type: none">hosts ファイルに指定されたホスト名IP アドレスSAP ルーターアドレス	localhost	-h
SYSNR	接続先のアプリケーションサーバホストで識別するためのシステム番号。	0~99	00	-s
CLIENT	接続に利用するユーザーのクライアント名。	0~999	000	-c

6. CCMS アラート情報の抽出

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値	引数
USER	接続に利用するユーザー名。※1	1～12バイトの半角英数字。	CPIC	-u
PASSWD	接続に利用するユーザーのパスワード。※2	1～8バイトの半角文字列。※3	ADMIN	-p
PASSWD2	接続に利用するユーザーの拡張パスワード。※2	1～40バイトの半角文字列。※3	ADMIN	-p2
LANG	接続に利用するユーザーの言語。	日本語と英語が使用できる。 次に示す SAP システムで使用されている 2 バイトの ISO ID または 1 バイトの言語キーを指定する。 <ul style="list-style-type: none"> 日本語の場合：JA または J 英語の場合：EN または E 	なし	-l
CODEPAGE	接続先の Unicode 版 SAP システムで文字コードを変換するときに使用するコードページ。	LANG ラベルの言語と組み合わせて指定する。※4	なし	-codepage

注※1

このラベルで指定するユーザーには、次の権限を付与しておく必要があります。

表 6-9 ユーザーが汎用モジュールに RFC 接続するための権限 (S_RFC)

権限項目	説明	値
RFC_TYPE	保護される RFC オブジェクトのタイプ	FUGR (汎用グループ)
RFC_NAME	保護される RFC 名	*
ACTVT	アクティビティ	16 (実行)

表 6-10 外部管理インターフェースを使用するための権限 (S_XMI_PROD)

権限項目	説明	値
EXTCOMPANY	外部管理ツールの会社名	HITACHI
EXTPRODUCT	外部管理ツールのプログラム名	JP1
INTERFACE	インターフェース ID	XAL

また、このラベルで指定するユーザーには、次のタイプのユーザーが使用できます。

- ダイアログ (Dialog)
- システム (System)
- 通信 (Communication)
- サービス (Service)

注※2

PASSWD ラベルは、SAP システム側で従来型のパスワードルールが適用されている場合に指定します。PASSWD2 ラベルは、SAP システム側で拡張パスワードルールが適用されている場合に指定します。PASSWD ラベルと PASSWD2 ラベルは同時に指定できません。

注※3

接続に利用するユーザーのパスワード、および拡張パスワードは、半角数字(0~9)、半角英字(a~z, A~Z)、および次の半角記号で定義してください。

!@ \$ % & / () = ? ' ` * + ~ # - _ . : { [] } < > |

注※4

LANG ラベルと CODEPAGE ラベルは、次の組み合わせで設定してください。次の組み合わせ以外の言語とコードページを指定した場合、SAP システムから取得した情報が文字化けする可能性があります。

表 6-11 言語とコードページの指定内容の組み合わせ

接続先 SAP システム	接続言語	言語 (LANG)	コードページ (CODEPAGE)
Unicode 版	日本語	JA	8000
	英語	EN	指定する必要はありません。指定する場合は、1100 を指定してください。
非 Unicode 版	日本語	JA	指定する必要はありません。指定する場合は、8000 を指定してください。
	英語	EN	指定する必要はありません。指定する場合は、1100 を指定してください。

LANG ラベルの指定を省略した場合、接続先システムで定義されているユーザーの言語が仮定されます。CODEPAGE ラベルの指定を省略した場合、接続先システムのデフォルトコードページが仮定されます。

(b) COMMAND セクション

COMMAND セクションでは、jr3alget コマンドの作業ディレクトリの情報を指定します。

表 6-12 COMMAND セクションに指定できる値

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値	引数
WORKDIR	コマンドの作業ディレクトリ。	1~255 バイトの半角英数字。相対パスを指定した場合、カレントディレクトリからの相対パスとなる。	カレントディレクトリ	—

(c) TRACE セクション

TRACE セクションでは、jr3alget コマンドの実行履歴が保存されるメッセージログおよびデータログの情報を指定します。

表 6-13 TRACE セクションに指定できる値

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値	引数
MSGLOG_LEVEL	アプリケーションのトレース情報を保存するメッセージログの取得レベル。 <ul style="list-style-type: none"> 0: 採取しない 1: エラーだけ採取 2: 標準 3: 詳細 4: デバッグ 	0~4	2	—
MSGLOG_SIZE	メッセージログを取得するファイル容量。 <ul style="list-style-type: none"> 0: 2GB (32 ビットの符号付き整数で示せる最大値 (0x7FFFFFFF)) 1~65535: 指定サイズ (単位: キロバイト) 内でラップアラウンド 	0~65535	512	—
MSGLOG_DIR	メッセージログファイル (jr3alget.log) の取得先ディレクトリ。	1~255 バイトの半角英数字。ファイル名部分の jr3alget.log までを含めて 255 バイト以内で指定する必要がある。相対パスを指定した場合、コマンドの作業ディレクトリからの相対パスとなる。	コマンドの作業ディレクトリ (COMMAND セクションの WORKDIR ラベルで変更していないときは、カレントディレクトリ)	—
DATALOG_LEVEL	アプリケーションの各種データ情報を保存するデータログの取得レベル。 <ul style="list-style-type: none"> 0: 採取しない 1: エラーだけ採取 2: 標準 3: 詳細 4: デバッグ 	0~4	2	—
DATALOG_SIZE	データログを取得するファイル容量。 <ul style="list-style-type: none"> 0: 2GB (32 ビットの符号付き整数で示せる最大値 (0x7FFFFFFF)) 1~65535: 指定サイズ (単位: キロバイト) 内でラップアラウンド 	0~65535	512	—
DATALOG_DIR	データログファイル (jr3alget.dat) の取得先ディレクトリ。	1~255 バイトの半角英数字。ファイル名部分の jr3alget.dat までを含めて 255 バイト以内で指定する必要がある。相対パスを	コマンドの作業ディレクトリ (COMMAND セクションの	—

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値	引数
DATALOG_DIR	データログファイル (jr3alget.dat) の取得先ディレクトリ。	指定した場合、コマンドの作業ディレクトリからの相対パスとなる。	WORKDIR ラベルで変更していないときは、カレントディレクトリ)	—

(d) TARGET セクション

TARGET セクションでは、抽出対象の CCMS アラート情報を特定するための情報を指定します。

表 6-14 TARGET セクションに指定できる値

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値	引数
MONITOR_SET	モニターセット名 (詳細は-ms オプションを参照)。	1~60 バイトの半角英数字。	SAP CCMS Technical Expert Monitors	-ms
MONITOR	モニター名 (詳細は-mn オプションを参照)。	1~60 バイトの半角英数字。	All Monitoring Contexts	-mn

(e) FORMAT セクション

FORMAT セクションでは、出力される CCMS アラート情報の出力形式を指定します。

表 6-15 FORMAT セクションに指定できる値

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値	引数
COLUMN	出力される CCMS アラート情報の出力形式。	フィールド ID。 フィールド ID については、「11. コマンド」の jr3alget コマンドの「出力形式および内容」を参照のこと。	列 1 : <ALERTDATE> 列 2 : <ALERTTIME> 列 3 : <MTSYSID> 列 4 : <MTMCNAME> 列 5 : <OBJECTNAME> 列 6 : <FIELDNAME> 列 7 : <VALUE> 列 8 : <SEVERITY> 列 9 : <MSG>	—
TIMEZONE	フィールド ID<ALERTDATE>, <ALERTTIME>, <STATCHGDAT>, <STATCHGTIM>で指定された時刻情報に関するタイムゾーン指定。	<ul style="list-style-type: none"> UTC UTC (世界標準時) で出力する。 LOCAL コマンドを実行したユーザーのローカルタイムで出力する。 	UTC	TIMEZONE

(f) EXTRACTFILE セクション

EXTRACTFILE セクションでは、CCMS アラート情報の出力ファイルの情報を指定します。

表 6-16 EXTRACTFILE セクションに指定できる値

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値
TYPE	<p>CCMS アラート情報を格納するファイルの形式。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WRAP1 CCMS アラート情報が一定の容量に達すると、ラップアラウンドして再び先頭からデータを上書きする形式のファイルです。 • WRAP2 NUM ラベルで設定した複数のファイルを持つ形式です。1つ目のファイルが一定の容量に達すると、ラップアラウンドして2つ目のファイルに書き込みます。このとき、2つ目のファイルのデータを削除し、先頭からデータを書き込みます。 複数のファイルすべてで一定の容量に達すると、1つ目のファイルに戻ってデータを削除し、先頭からデータを書き込みます。 <p>PFM - Agent for Enterprise Applications の環境を新規で構築する場合は、WRAP2 を指定することを推奨します。</p> <p>運用の開始後、格納ファイルの形式を変更する場合は、事前に格納ファイルを監視している製品を停止し、格納ファイルとその管理ファイル※1を削除してください。</p>	WRAP1 または WRAP2	WRAP1
SIZE	<p>1 ファイル当たりの格納ファイル容量。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 0 : 2GB (32 ビットの符号付き整数で示せる最大値 (0x7FFFFFFF)) • 1~65535 : 指定サイズ内でラップアラウンド (キロバイト)。 	0~65535	10240※2
X2PATH	<ul style="list-style-type: none"> • TYPE ラベルで WRAP1 を設定している場合 	<ul style="list-style-type: none"> • TYPE ラベルで WRAP1 を設定している場合 	—

ラベル	意味	指定できる値	デフォルト値
X2PATH	-x2 オプションで、格納ファイル出力を指定したときに適用される格納ファイルのパスを指定する。 ※1※3 • TYPE ラベルで WRAP2 を設定している場合 -x2 オプションで、格納ファイル出力を指定したときに適用される格納ファイルを指定する。 ※4※5	1～251 バイトの半角英数字。 ※5 • TYPE ラベルで WRAP2 を設定している場合 1～254 バイトの半角英数字。 ※5	—
NUM	WRAP2 形式で格納するときのファイル数。 TYPE ラベルで WRAP2 を設定している場合だけ有効です。	2～9	5

(凡例)

—：該当なし

注※1

WRAP1 形式の場合、格納ファイルと同じディレクトリに、格納ファイル名.ofs という名称で管理ファイルが作成されます。

例：

格納ファイル名として ALERT を指定したとき、ALERT ファイルとは別に ALERT.ofs ファイルが管理ファイルとして作成されます。

格納ファイルを削除する場合は、この管理ファイルも合わせて削除してください。

注※2

09-00 以前からバージョンアップした場合に適用されるデフォルト値の詳細については、「付録 H 移行手順と移行時の注意事項」を参照してください。

注※3

デフォルトの格納先から変更した場合、jpcras コマンドで格納ファイルと管理ファイルを採取することができません。このため、トラブルが発生した場合、手動で格納ファイルと管理ファイルを採取していただく必要があります。

注※4

この値に NUM ラベルに指定した範囲（デフォルトは 1～5）の値が付与されたファイル名が格納されます。

注※5

相対パスを指定した場合、コマンドの作業ディレクトリ（COMMAND セクションの WORKDIR ラベルに指定したディレクトリ）が相対パスのカレントディレクトリとなります。なお、作業ディレクトリが指定されていない場合、以下のディレクトリからの相対パスのカレントディレクトリとなります。また、環境ディレクトリは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

Windows の場合：

物理ホスト環境：インストール先フォルダ¥jp1pc¥agtm¥agent¥インスタンス名

論理ホスト環境：環境ディレクトリ¥jp1pc¥agtm¥agent¥インスタンス名

Linux の場合：

物理ホスト環境：/opt/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名

論理ホスト環境：環境ディレクトリ/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名

(g) Option セクション

Option セクションでは、CCMS アラート情報の抽出の基点を決めるための情報を指定します。

Option セクションの詳細は、「[6.3.2\(6\) Option セクション](#)」を参照してください。

7

モニター情報の収集

この章では、PFM - Agent for Enterprise Applications で、SAP システムのモニター情報を収集する方法について説明します。

7.1 モニター情報収集の概要

PFM - Agent for Enterprise Applications では、SAP システムのモニター情報を、ユーザーの定義に基づいて収集できます。

SAP システムのモニター情報は、CCMS モニタリングアーキテクチャーによって管理されている SAP システムの稼働性能情報です。個々の稼働性能情報は、モニターセットおよびモニターと呼ばれるツリー構造で階層的に管理されています。

このモニターセットおよびモニターに定義されている稼働性能情報のうち、パフォーマンス属性を持つ項目とその値を、PFM - Agent for Enterprise Applications のレコードおよびフィールドにマッピングして、パフォーマンスデータを収集し、PFM - Agent for Enterprise Applications のユーザー定義レコードとして格納できます。

ユーザー定義レコードは、PFM - Agent for Enterprise Applications の User defined Monitor (Perf.) (PI_UMP) レコードとして管理されます。複数のパフォーマンスデータを収集する場合、パフォーマンスデータごとにユーザーレコードのフィールドが 1 行ずつ追加されます。その結果、それぞれのユーザーレコードは、複数行のレコードになります。複数行のレコードとは、複数インスタンスレコードのことです。

レコードの詳細については、「[10. レコード](#)」を参照してください。

注意事項

- jr3alget コマンド実行による CCMS アラート情報の情報抽出時、コマンド実行環境に環境変数 TZ が定義されていると、CCMS アラート情報が抽出されなかったり、CCMS アラート情報を示す時刻情報のフィールドに 1 時間遅い時刻が出力されます。コマンド実行環境には TZ 環境変数を定義しないでください。
適用されるタイムゾーンは、Windows の「日付と時刻のプロパティ」で定義されたものとなります。
- PI_UMP レコードの収集において、MTE 名 (MTE Name フィールド) が同じとなるパフォーマンスデータは、Store データベースに記録するときには 1 件にまとめられます。この結果、リアルタイムレポートで表示される項目に比べて、履歴レポートで表示される項目が少なくなることがあります。

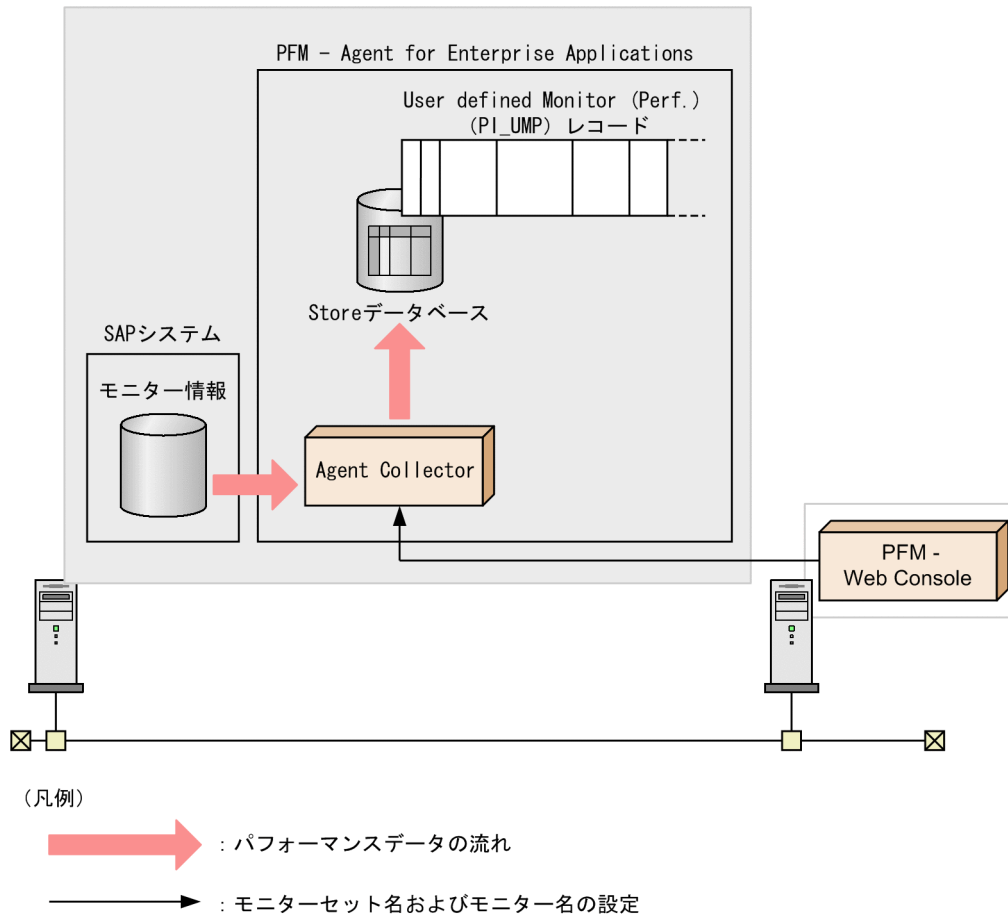
7.2 モニター情報収集の設定

SAP システムのモニター情報を収集するために、次の項目を設定します。

- モニターセット名およびモニター名の設定
- パフォーマンスデータ収集の設定

SAP システムのモニター情報を収集する流れを次の図に示します。

図 7-1 SAP システムのモニター情報を収集する流れ



7.2.1 モニターセット名およびモニター名の設定

モニターセット名およびモニター名を、PFM - Web Console から設定する手順を次に示します。

この操作は、管理ユーザー権限を持つ Performance Management ユーザーが実行してください。

1. PFM - Web Console にログインする。

PFM - Web Console へのログイン方法の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

2. メイン画面のナビゲーションフレームで、[サービス階層] タブを選択する。
3. [サービス階層] 画面のナビゲーションフレームで、SAP システムのモニター情報を収集したいエージェントを選択する。
選択したエージェントにチェックマークが表示されます。
4. メソッドフレームで、[プロパティの表示] メソッドを選択する。
[プロパティの表示] 画面が表示されます。
5. [Agent] - [PI_UMP] フォルダをクリックする。
モニターセット名およびモニター名の設定値が表示されます。
6. [MONITOR_SET] および [MONITOR] の [値] を設定する。
収集したい SAP システムのモニター情報のモニターセット名およびモニター名を設定します。指定できる文字は、1~60 バイトの半角英数字です。
モニターセット名およびモニター名は、トランザクションコード RZ20 などで確認できます。なお、設定値の大文字・小文字は区別されます。
7. [OK] ボタンをクリックする。
設定が有効になります。

7.2.2 パフォーマンスデータ収集の設定

SAP システムのモニターの情報を収集したパフォーマンスデータを、Store データベースに格納する手順を次に示します。

この操作は、管理ユーザー権限を持つ Performance Management ユーザーが実行してください。

1. PFM - Web Console で、User defined Monitor (Perf.) (PI_UMP) レコードのパフォーマンスデータを Store データベースに格納するように設定する。

設定する方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

注意

1 回のパフォーマンスデータの収集で取得できるレコード数の上限値は、4,096 です。レコード数が上限値を超えた場合、超えた分のレコードは切り捨てられます。

8

運用上の注意事項

この章では、PFM - Agent for Enterprise Applications の運用上の注意事項について説明します。

8.1 収集基点時間の注意事項

収集基点時間を設定する場合は、次の点に注意してください。

- 環境パラメーター設定ファイルを作成するまたは更新するときに Option セクションと SHIFTEXTRACTTIME ラベルを追加してください。
- リモート監視における収集基点時間の推奨値は、次の考え方に沿って変更してください。

収集基点時間の考え方

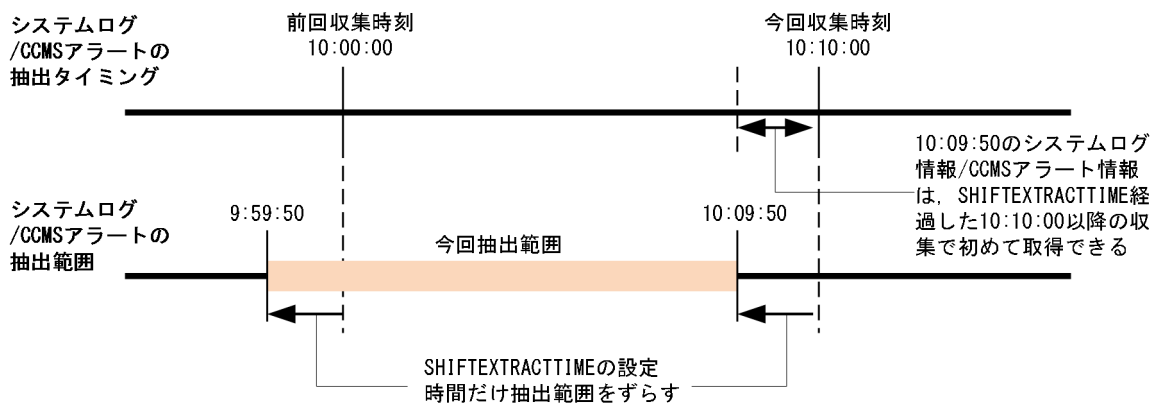
SAP システムの処理遅延によって、発生時刻通りにシステムログ情報/CCMS アラート情報が保存されていない場合があります。この場合、監視対象がローカルホストであったとしても、SAP システムの時刻遅延（ホスト間の時刻差）が収集基点時間を超えた場合と同様に、システムログ/CCMS アラート情報の抽出漏れが発生します。この問題を回避するために、収集基点時間のデフォルト値は 5 秒としています。リモートホストを監視対象とする場合には、さらに SAP システムの時刻遅延の影響が加わるため、前提条件のホスト間の時刻ずれが 1 秒未満の環境に対して余裕を持たせた値（5 秒）を加えた 10 秒を推奨設定値としています。

8.2 SAP システムのタイムゾーンの注意事項

SAP システムのタイムゾーンを設定する場合は、次の点に注意してください。

- 環境パラメーター設定ファイルのサンプルファイルには、Option セクションや SAPTIMEZONEOFFSET ラベルはありません。環境パラメーター設定ファイルを作成するときに追加してください。
- SAP システム上で発生したシステムログ情報/CCMS アラート情報は、SHIFTEXTRACTTIME に設定した時間経過した以降の収集により、初めて JP1 側で参照できるようになります。SHIFTEXTRACTTIME の設定値を推奨値から変更する場合は、収集タイミングが遅れることを考慮のうえ変更してください。SHIFTEXTRACTTIME の設定値が、システムログ情報/CCMS アラート情報の抽出に与える影響を次の図に示します。

図 8-1 SHIFTEXTRACTTIME の情報抽出範囲への影響



8.3 システムの運用に関する注意事項

PFM - Agent for Enterprise Applications を運用するにあたって、知っておくべき注意事項について説明します。

- Agent Collector サービスや Agent Store サービスに対して `jpctool service list` コマンドを実行する場合の注意事項については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドについて説明している章を参照してください。
- PFM - Agent for Enterprise Applications に対して `jpccspm start` コマンドおよび `jpccspm stop` コマンドを実行する場合の注意事項については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドについて説明している章を参照してください。
- サービスを起動する場合、PFM - Manager の各サービスが起動されていない状態で PFM - Agent の各サービスを起動することもできますが、PFM - Agent がスタンドアロンモードで起動し、Performance Management で使用できる機能が制限されます。

サービスを停止する場合、PFM - Agent の各サービスが起動されている状態で PFM - Manager の各サービスを停止することもできますが、PFM - Manager 停止中は Performance Management で使用できる機能が制限されます。また、PFM - Manager 再起動後も、PFM - Agent の最新の状態を表示できない場合があります。この場合は次の手順で最新の状態を確認することができます。

- PFM - Agent が停止している場合
PFM - Agent を起動したあとで状態を確認してください。
- PFM - Agent が起動している場合
PFM - Manager の再起動後、しばらく時間をおいてから、再度状態を確認してください。

サービスを起動する場合は PFM - Manager の各サービスを起動したあとに PFM - Agent の各サービスを起動することを、サービスを停止する場合は PFM - Agent の各サービスを停止したあとに PFM - Manager の各サービスを停止することをお勧めします。スタンドアロンモードについては、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の大規模システムで PFM - Agent または PFM - RM を起動する場合について説明している章を参照してください。

- JIS X 0213 でサポートされている第三水準および第四水準の文字には対応していません。
- Windows Server 2012 および Windows Server 2016 では、アンインストール時に UAC ポップアップが表示されることがあります。UAC ポップアップに応答し、アンインストールを継続してください。
- Linux 環境の場合、PFM - Web Console で PFM - Agent for Enterprise Applications のフィールドの説明文を参照すると、「説明文なし」と表示されることがあります。このような現象が発生した場合は、PFM - Agent for Enterprise Applications 10-00-01 以降で提供しているセットアップファイルを使用して、エージェントの登録手順を実施してください。エージェントの登録手順の詳細については、「[3.1.5 Windows 版のセットアップ手順](#)」および「[3.2.5 Linux 版のセットアップ手順](#)」を参照ください。

9

監視テンプレート

この章では、PFM - Agent for Enterprise Applications の監視テンプレートについて説明します。

監視テンプレートの概要

Performance Management では、次の方法でアラームとレポートを定義できます。

- PFM - Agent で定義されているアラームやレポートをそのまま使用する
- PFM - Agent で定義されているアラームやレポートをコピーしてカスタマイズする
- ウィザードを使用して新規に定義する

PFM - Agent で用意されているアラームやレポートを「監視テンプレート」と呼びます。監視テンプレートのレポートとアラームは、必要な情報があらかじめ定義されているので、コピーしてそのまま使用したり、ユーザーの環境に合わせてカスタマイズしたりできます。そのため、ウィザードを使用して新規に定義をしなくても、監視対象の運用状況を監視する準備が容易にできるようになります。

この章では、PFM - Agent for Enterprise Applications で定義されている監視テンプレートのアラームとレポートの設定内容について説明します。

監視テンプレートの使用方法の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、アラームによる稼働監視および稼働分析のためのレポートの作成について説明している章を参照してください。

重要

監視テンプレートのアラームに設定されているしきい値は参考例です。監視テンプレートのアラームを使用する場合は、コピーして、環境や OS に合わせて適切なしきい値を設定してください。

アラームの記載形式

ここでは、アラームの記載形式を示します。アラームは、アルファベット順に記載しています。

アラーム名

監視テンプレートのアラーム名を示します。

概要

このアラームで監視できる監視対象の概要について説明します。

主な設定

このアラームの主な設定値を表で説明します。この表では、アラームの設定値と、PFM - Web Console の [アラーム階層] タブでアラームアイコンをクリックし、[プロパティの表示] メソッドをクリックしたときに表示される、[プロパティ] 画面の設定項目との対応を示しています。各アラームの設定の詳細については、PFM - Web Console のアラームの [プロパティ] 画面で確認してください。

設定値の「-」は、設定が常に無効であることを示します。

なお、条件式で異常条件と警告条件が同じ場合は、アラームイベントは異常のものだけが発行されます。

アラームテーブル

このアラームが格納されているアラームテーブルを示します。

関連レポート

このアラームに関連する、監視テンプレートのレポートを示します。PFM - Web Console の [エージェント階層] タブでエージェントアイコンをクリックし、[アラームの状態の表示] メソッドで表示される



アイコンをクリックすると、このレポートを表示できます。

なお、PFM - Web Console の画面でレポート階層を確認する場合は、Reports/で始まるパスを System Reports/と読みかえてください。

アラーム一覧

1つ以上のアラームを1つのテーブルにまとめたものを「アラームテーブル」と呼びます。PFM - Agent for Enterprise Applications の監視テンプレートで定義されているアラームは、アラームテーブルの形式で、PFM - Web Console の [アラーム階層] タブに表示される「SAP System」フォルダに格納されています。

アラームテーブル名を次に示します。

- PFM SAP System Template Alarms 10.00
- PFM SAP System Template Alarms [Background Processing] 10.00
- PFM SAP System Template Alarms [Background Service] 10.00
- PFM SAP System Template Alarms [Dialog Utilization] 10.00

アラームテーブル名の [] 内の表示

[] 内は、そのアラームテーブルがどんな監視項目に対応しているかを示しています。[] が付かないアラームテーブルは、基本的なアラームをまとめたアラームテーブルです。

アラームテーブル名末尾の「10.00」

アラームテーブルのバージョンを示します。

なお、PFM - Agent for Enterprise Applications の場合、アラーム階層に、ご使用の Performance Management システムにはないバージョンのアラームテーブルが表示されることがあります。監視テンプレートで定義されているアラームを使用する際は、Performance Management システムで使用しているアラームテーブルのバージョンおよびバージョンの互換性をご確認ください。アラームテーブルのバージョンおよびバージョン互換については、「付録 I バージョン互換」を参照してください。

PFM - Agent for Enterprise Applications の監視テンプレートで定義されているアラームを、次の表に示します。

表 9-1 アラーム一覧

アラームテーブル名	アラーム名	監視対象
PFM SAP System Template Alarms 10.00	Buffer - CUA	SAP バッファ (CUA バッファ) のヒット率。
	Buffer - FieldDescri	SAP バッファ (Field description バッファ) のヒット率。
	Buffer - GenericKey	SAP バッファ (Generic key バッファ) のヒット率。
	Buffer - InitialReco	SAP バッファ (Initial records バッファ) のヒット率。
	Buffer - Program	SAP バッファ (Program バッファ) のヒット率。

アラームテーブル名	アラーム名	監視対象
PFM SAP System Template Alarms 10.00	Buffer - Screen	SAP バッファ (Screen バッファ) のヒット率。
	Buffer - ShortNameTA	SAP バッファ (Short nametab バッファ) のヒット率。
	Buffer - SingleRecor	SAP バッファ (Single record バッファ) のヒット率。
	Buffer - TableDefini	SAP バッファ (Table definition バッファ) のヒット率。
	Dialog ResponseTime	ダイアログタスクでの応答時間。
	Extended Memory	拡張メモリーの使用率。
	Heap Memory	ヒープメモリーの使用率。
	Paging Area	ページング領域の使用率。
	Roll Area	ロール領域の使用率。
PFM SAP System Template Alarms [Background Processing] 10.00	SystemWideQueue	実行を待っているジョブの数 (システム全体の平均)。
PFM SAP System Template Alarms [Background Service] 10.00	ServerSpecificQueue	実行を待っているリリース済みジョブの数。
	Utilization %	サーバのバックグラウンドワークプロセスの平均使用率。
PFM SAP System Template Alarms [Dialog Utilization] 10.00	QueueLength %	ダイアログワークプロセスのディスパッチャ待機キューの平均使用率。
	Utilization %	アプリケーションサーバのダイアログプロセスの平均使用率。

Buffer - CUA

概要

Buffer - CUA アラームは、SAP バッファ（CUA バッファ）のヒット率を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	SAP Sytem(3.0)
	アラームメッセージテキスト	—
	値の存在を確認するアラームとする	しない
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	回しきい値超過	—
	インターバル中	—
アラーム条件式	レコード	Workload Summary Interval (PI)
	フィールド	CUA HitRatio %
	異常条件	CUA HitRatio % < 60
	警告条件	CUA HitRatio % < 80
アクション	E メール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

関連レポート

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Troubleshooting/Recent Past/SAP Buffer Hitratio

Buffer - FieldDescri

概要

Buffer - FieldDescri アラームは、SAP バッファ (Field description バッファ) のヒット率を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	SAP Sytem(3.0)
	アラームメッセージテキスト	—
	値の存在を確認するアラームとする	しない
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	回しきい値超過	—
	インターバル中	—
アラーム条件式	レコード	Workload Summary Interval (PI)
	フィールド	FieldDescription HitRatio %
	異常条件	FieldDescription HitRatio % < 60
	警告条件	FieldDescription HitRatio % < 80
アクション	E メール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

関連レポート

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Troubleshooting/Recent Past/SAP Buffer Hitratio

Buffer - GenericKey

概要

Buffer - GenericKey アラームは、SAP バッファ（Generic key バッファ）のヒット率を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	SAP Sytem(3.0)
	アラームメッセージテキスト	—
	値の存在を確認するアラームとする	しない
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	回しきい値超過	—
	インターバル中	—
アラーム条件式	レコード	Workload Summary Interval (PI)
	フィールド	GenericKey HitRatio %
	異常条件	GenericKey HitRatio % < 60
	警告条件	GenericKey HitRatio % < 80
アクション	E メール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

関連レポート

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Troubleshooting/Recent Past/SAP Buffer Hitratio

Buffer - InitialReco

概要

Buffer - InitialReco アラームは、SAP バッファ（Initial records バッファ）のヒット率を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	SAP Sytem(3.0)
	アラームメッセージテキスト	—
	値の存在を確認するアラームとする	しない
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	回しきい値超過	—
	インターバル中	—
アラーム条件式	レコード	Workload Summary Interval (PI)
	フィールド	InitialRecords HitRatio %
	異常条件	InitialRecords HitRatio % < 60
	警告条件	InitialRecords HitRatio % < 80
アクション	E メール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

関連レポート

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Troubleshooting/Recent Past/SAP Buffer Hitratio

Buffer - Program

概要

Buffer - Program アラームは、SAP バッファ (Program バッファ) のヒット率を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	SAP Sytem(3.0)
	アラームメッセージテキスト	—
	値の存在を確認するアラームとする	しない
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	回しきい値超過	—
	インターバル中	—
アラーム条件式	レコード	Workload Summary Interval (PI)
	フィールド	Program HitRatio %
	異常条件	Program HitRatio % < 60
	警告条件	Program HitRatio % < 80
アクション	E メール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

関連レポート

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Troubleshooting/Recent Past/SAP Buffer Hitratio

Buffer - Screen

概要

Buffer - Screen アラームは、SAP バッファ (Screen バッファ) のヒット率を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	SAP Sytem(3.0)
	アラームメッセージテキスト	—
	値の存在を確認するアラームとする	しない
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	回しきい値超過	—
	インターバル中	—
アラーム条件式	レコード	Workload Summary Interval (PI)
	フィールド	Screen HitRatio %
	異常条件	Screen HitRatio % < 60
	警告条件	Screen HitRatio % < 80
アクション	E メール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

関連レポート

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Troubleshooting/Recent Past/SAP Buffer Hitratio

Buffer - ShortNameTA

概要

Buffer - ShortNameTA アラームは、SAP バッファ（Short nametab バッファ）のヒット率を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	SAP Sytem(3.0)
	アラームメッセージテキスト	—
	値の存在を確認するアラームとする	しない
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	回しきい値超過	—
	インターバル中	—
アラーム条件式	レコード	Workload Summary Interval (PI)
	フィールド	ShortNameTAB HitRatio %
	異常条件	ShortNameTAB HitRatio % < 60
	警告条件	ShortNameTAB HitRatio % < 80
アクション	E メール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

関連レポート

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Troubleshooting/Recent Past/SAP Buffer Hitratio

Buffer - SingleRecor

概要

Buffer - SingleRecor アラームは、SAP バッファ（Single record バッファ）のヒット率を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	SAP Sytem(3.0)
	アラームメッセージテキスト	—
	値の存在を確認するアラームとする	しない
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	回しきい値超過	—
	インターバル中	—
アラーム条件式	レコード	Workload Summary Interval (PI)
	フィールド	SingleRecord HitRatio %
	異常条件	SingleRecord HitRatio % < 60
	警告条件	SingleRecord HitRatio % < 80
アクション	E メール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

関連レポート

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Troubleshooting/Recent Past/SAP Buffer Hitratio

Buffer - TableDefini

概要

Buffer - TableDefini アラームは、SAP バッファ（Table definition バッファ）のヒット率を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	SAP Sytem(3.0)
	アラームメッセージテキスト	—
	値の存在を確認するアラームとする	しない
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	回しきい値超過	—
	インターバル中	—
アラーム条件式	レコード	Workload Summary Interval (PI)
	フィールド	TableDefinition HitRatio %
	異常条件	TableDefinition HitRatio % < 60
	警告条件	TableDefinition HitRatio % < 80
アクション	E メール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

関連レポート

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Troubleshooting/Recent Past/SAP Buffer Hitratio

Dialog ResponseTime

概要

Dialog ResponseTime アラームは、ダイアログタスクでの応答時間を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	SAP Sytem(3.0)
	アラームメッセージテキスト	—
	値の存在を確認するアラームとする	しない
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	回しきい値超過	—
	インターバル中	—
アラーム条件式	レコード	Workload Summary Interval (PI)
	フィールド	ResponseTime
	異常条件	ResponseTime > 3000
	警告条件	ResponseTime > 2000
アクション	Eメール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

関連レポート

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Troubleshooting/Recent Past/Dialog ResponseTime

Extended Memory

概要

Extended Memory アラームは、拡張メモリの使用率を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	SAP Sytem(3.0)
	アラームメッセージテキスト	—
	値の存在を確認するアラームとする	しない
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	回しきい値超過	—
	インターバル中	—
アラーム条件式	レコード	Workload Summary Interval (PI)
	フィールド	EsAct %
	異常条件	EsAct % > 95
	警告条件	EsAct % > 80
アクション	E メール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

関連レポート

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Troubleshooting/Recent Past/SAP Memory Used

Heap Memory

概要

Heap Memory アラームは、ヒープメモリの使用率を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	SAP Sytem(3.0)
	アラームメッセージテキスト	—
	値の存在を確認するアラームとする	しない
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	回しきい値超過	—
	インターバル中	—
アラーム条件式	レコード	Workload Summary Interval (PI)
	フィールド	HeapAct %
	異常条件	HeapAct % > 95
	警告条件	HeapAct % > 80
アクション	Eメール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

関連レポート

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Troubleshooting/Recent Past/SAP Memory Used

Paging Area

概要

Paging Area アラームは、ページング領域の使用率を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	SAP Sytem(3.0)
	アラームメッセージテキスト	—
	値の存在を確認するアラームとする	しない
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	回しきい値超過	—
	インターバル中	—
アラーム条件式	レコード	Workload Summary Interval (PI)
	フィールド	R3PagingUsed %
	異常条件	R3PagingUsed % > 95
	警告条件	R3PagingUsed % > 80
アクション	Eメール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

関連レポート

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Troubleshooting/Recent Past/SAP Memory Used

Roll Area

概要

Roll Area アラームは、ロール領域の使用率を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	SAP Sytem(3.0)
	アラームメッセージテキスト	—
	値の存在を確認するアラームとする	しない
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	回しきい値超過	—
	インターバル中	—
アラーム条件式	レコード	Workload Summary Interval (PI)
	フィールド	R3RollUsed %
	異常条件	R3RollUsed % > 95
	警告条件	R3RollUsed % > 80
アクション	E メール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

関連レポート

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Troubleshooting/Recent Past/SAP Memory Used

SystemWideQueue

概要

SystemWideQueue アラームは、実行を待っているジョブの数（システム全体の平均）を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	SAP Sytem(3.0)
	アラームメッセージテキスト	—
	値の存在を確認するアラームとする	しない
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	回しきい値超過	—
	インターバル中	—
アラーム条件式	レコード	Background Processing (PI_BTCP)
	フィールド	SystemWideQueueLength
	異常条件	SystemWideQueueLength > 4
	警告条件	SystemWideQueueLength > 2
アクション	E メール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

関連レポート

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Background Processing SystemWideQueue

ServerSpecificQueue

概要

ServerSpecificQueue アラームは、実行を待っているリリース済みジョブの数を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	SAP Sytem(3.0)
	アラームメッセージテキスト	—
	値の存在を確認するアラームとする	しない
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	回しきい値超過	—
	インターバル中	—
アラーム条件式	レコード	Background Service (PI_BTC)
	フィールド	ServerSpecificQueueLength
	異常条件	ServerSpecificQueueLength > 4
	警告条件	ServerSpecificQueueLength > 2
アクション	Eメール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

関連レポート

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Background Service ServerSpecificQueue

Utilization % (バックグラウンドワークプロセスの平均使用率の監視アラーム)

概要

Utilization %アラームは、サーバのバックグラウンドワークプロセスの平均使用率を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	SAP Sytem(3.0)
	アラームメッセージテキスト	—
	値の存在を確認するアラームとする	しない
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	回しきい値超過	—
	インターバル中	—
アラーム条件式	レコード	Background Service (PI_BTC)
	フィールド	Utilization %
	異常条件	Utilization % > 95
	警告条件	Utilization % > 90
アクション	Eメール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

関連レポート

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Background Service Utilization %

QueueLength %

概要

QueueLength %アラームは、ダイアログワークプロセスのディスパッチャ待機キューの平均使用率を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	SAP Sytem(3.0)
	アラームメッセージテキスト	—
	値の存在を確認するアラームとする	しない
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	回しきい値超過	—
	インターバル中	—
アラーム条件式	レコード	Dialog Service (PI_DIA)
	フィールド	QueueLength %
	異常条件	QueueLength % > 100
	警告条件	QueueLength % > 99
アクション	Eメール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

関連レポート

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Troubleshooting/Recent Past/Advanced/Dialog Utilization %

Utilization % (ダイアログプロセスの平均使用率の監視アラーム)

概要

Utilization %アラームは、アプリケーションサーバのダイアログプロセスの平均使用率を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	プロダクト	SAP Sytem(3.0)
	アラームメッセージテキスト	—
	値の存在を確認するアラームとする	しない
	アラームを有効にする	する
	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	監視時刻範囲	常に監視する
	発生頻度を満たした時にアラーム通知する	しない
	回しきい値超過	—
	インターバル中	—
アラーム条件式	レコード	Dialog Service (PI_DIA)
	フィールド	Utilization %
	異常条件	Utilization % > 100
	警告条件	Utilization % > 99
アクション	Eメール	—
	コマンド	—
	SNMP	異常, 警告, 正常

関連レポート

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Troubleshooting/Recent Past/Advanced/Dialog Utilization %

レポートの記載形式

ここでは、レポートの記載形式を示します。レポートは、アルファベット順に記載しています。

レポート名

監視テンプレートのレポート名を示します。

レポート名に「(Multi-Agent)」が含まれるレポートは、複数のインスタンスについて情報を表示するレポートです。

レポート名に「(Multi-Agent)」が含まれないレポートは、単一のインスタンスについて情報を表示するレポートです。

概要

このレポートで表示できる情報の概要について説明します。

格納先

このレポートの格納先を示します。

なお、PFM - Web Console の画面でレポート階層を確認する場合は、Reports/で始まるパスを System Reports/と読みかえてください。

レコード

このレポートで使用するパフォーマンスデータが、格納されているレコードを示します。履歴レポートを表示するためには、この欄に示すレコードを収集するように、あらかじめ設定しておく必要があります。レポートを表示する前に、PFM - Web Console の [エージェント階層] タブでエージェントアイコンをクリックし、[プロパティの表示] メソッドをクリックして表示される [プロパティ] 画面で、このレコードが「Log = Yes」に設定されているか確認してください。リアルタイムレポートの場合、設定する必要はありません。

フィールド

このレポートで使用するレコードのフィールドについて、表で説明します。

ドリルダウンレポート (レポートレベル)

このレポートに関連づけられた、監視テンプレートのレポートを表で説明します。このドリルダウンレポートを表示するには、PFM - Web Console のレポートウィンドウのドリルダウンレポートプルダウンメニューから、該当するドリルダウンレポート名を選択し、[レポートの表示] をクリックしてください。なお、レポートによってドリルダウンレポートを持つものと持たないものがあります。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

このレポートのフィールドに関連づけられた、監視テンプレートのレポートを表で説明します。このドリルダウンレポートを表示するには、PFM - Web Console のレポートウィンドウのグラフ、一覧、または表をクリックしてください。履歴レポートの場合、時間項目からドリルダウンレポートを表示することで、より詳細な時間間隔でレポートを表示できます。なお、レポートによってドリルダウンレポートを持つものと持たないものがあります。

ドリルダウンレポートについての詳細は、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働分析のためのレポートの作成について説明している章を参照してください。

レポートのフォルダ構成

PFM - Agent for Enterprise Applications のレポートのフォルダ構成を次に示します。< >内は、フォルダ名を示します。

```
<SAP System>
+-- <SAP Basis/Web Application Server>
+-- <Monthly Trend>
|   +-- Dialog ResponseTime Trend
|   +-- Dialog ResponseTime Trend(Multi-Agent)
|   +-- SAP Buffer Hitratio Trend
|   +-- SAP Memory Used Trend
|   +-- UsersLoggedIn Trend
|   +-- UsersLoggedIn Trend(Multi-Agent)
+-- <Status Reporting>
|   +-- <Daily Trend>
|   |   +-- Dialog ResponseTime Trend
|   |   +-- SAP Buffer Hitratio Trend
|   |   +-- SAP Memory Used Trend
|   |   +-- UsersLoggedIn Trend
|   |   +-- <Advanced>
|   |   |   +-- Background Processing SystemWideQueue
|   |   |   +-- Background Service ServerSpecificQueue
|   |   |   +-- Background Service Utilization %
|   +-- <Real-Time>
|   |   +-- Dialog ResponseTime Status
|   |   +-- Process Overview Status
|   |   +-- SAP Buffer Hitratio Status
|   |   +-- SAP Memory Used Status
|   |   +-- <Drilldown Only>
|   |   |   +-- SAP Buffer Detail(CUA)
|   |   |   +-- SAP Buffer Detail(FieldDescription)
|   |   |   +-- SAP Buffer Detail(GenericKey)
|   |   |   +-- SAP Buffer Detail(InitialRecords)
|   |   |   +-- SAP Buffer Detail(Program)
|   |   |   +-- SAP Buffer Detail(Screen)
|   |   |   +-- SAP Buffer Detail(ShortNameTAB)
|   |   |   +-- SAP Buffer Detail(SingleRecord)
|   |   |   +-- SAP Buffer Detail(TableDefinition)
|   |   |   +-- SAP Memory Detail
|   +-- <Troubleshooting>
|   |   +-- <Real-Time>
|   |   +-- <Recent Past>
|   |   |   +-- Dialog ResponseTime
|   |   |   +-- <Advanced>
|   |   |   |   +-- Dialog Utilization %
|   |   |   +-- SAP Buffer Hitratio
|   |   |   +-- SAP Memory Used
|   |   |   +-- <Drilldown Only>
|   |   |   |   +-- Process Detail
```

各フォルダの説明を次に示します。

- 「Monthly Trend」フォルダ

最近 1 か月間の 1 日ごとに集計された情報を表示するレポートが格納されています。1 か月のシステムの傾向を分析するために使用します。

- 「Status Reporting」フォルダ

日、または週ごとに集計された情報を表示するレポートが格納されています。システムの総合的な状態を見るために使用します。また、履歴レポートのほかにリアルタイムレポートの表示もできます。

- 「Daily Trend」フォルダ

最近 24 時間の 1 時間ごとに集計された情報を表示するレポートが格納されています。1 日ごとにシステムの状態を確認するために使用します。

- 「Real-Time」フォルダ

システムの状態を確認するためのリアルタイムレポートが格納されています。

- 「Troubleshooting」フォルダ

トラブルを解決するのに役立つ情報を表示するレポートが格納されています。システムに問題が発生した場合、問題の原因を調査するために使用します。

- 「Real-Time」フォルダ

現在のシステムの状態を確認するためのリアルタイムレポートが格納されています。

- 「Recent Past」フォルダ

最近 1 時間の 1 分ごとに集計された情報を表示する履歴レポートが格納されています。

さらに、これらのフォルダの下位には、次のフォルダがある場合があります。

- 「Drilldown Only」フォルダ

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）として表示されるレポートが格納されています。そのレポートのフィールドに関連する詳細な情報を表示するために使用します。

レポート一覧

監視テンプレートで定義されているレポートをアルファベット順に次の表に示します。

表 9-2 レポート一覧

カテゴリー	レポート名	表示する情報
応答時間	Dialog ResponseTime	最近 1 時間のダイアログタスクの応答時間に問題が発生したときの分析レポート。
	Dialog ResponseTime Status	ダイアログタスクでの応答時間の概要。
	Dialog ResponseTime Trend (時単位の履歴レポート)	最近 24 時間のダイアログタスクでの応答時間の傾向 (時単位)。
	Dialog ResponseTime Trend (日単位の履歴レポート)	最近 1 か月間のダイアログタスクでの応答時間の傾向 (日単位)。
	Dialog ResponseTime Trend(Multi-Agent)	最近 1 か月間のダイアログタスクでの応答時間の傾向 (アプリケーションサーバ間で比較)。
ワークプロセス	Background Service Utilization %	最近 24 時間のサーバのバックグラウンドワークプロセスの平均使用率の傾向 (時単位)。
	Dialog Utilization %	最近 1 時間のダイアログワークプロセスに問題が発生したときの分析レポート (分単位)。
	Process Detail	最近 1 時間のワークプロセスの活動状態。
	Process Overview Status	ワークプロセスの活動状態。
SAP バッファ	SAP Buffer Detail(CUA)	SAP バッファ (CUA バッファ) の詳細 (ドリルダウンレポート)。
	SAP Buffer Detail(FieldDescription)	SAP バッファ (Field description バッファ) の詳細 (ドリルダウンレポート)。
	SAP Buffer Detail(GenericKey)	SAP バッファ (Generic key バッファ) の詳細 (ドリルダウンレポート)。
	SAP Buffer Detail(InitialRecords)	SAP バッファ (Initial records バッファ) の詳細 (ドリルダウンレポート)。
	SAP Buffer Detail(Program)	SAP バッファ (Program バッファ) の詳細 (ドリルダウンレポート)。
	SAP Buffer Detail(Screen)	SAP バッファ (Screen バッファ) の詳細 (ドリルダウンレポート)。
	SAP Buffer Detail(ShortNameTAB)	SAP バッファ (Short nametab バッファ) の詳細 (ドリルダウンレポート)。
	SAP Buffer Detail(SingleRecord)	SAP バッファ (Single record バッファ) の詳細 (ドリルダウンレポート)。

カテゴリー	レポート名	表示する情報
SAP バッファ	SAP Buffer Detail(TableDefinition)	SAP バッファ (Table definition バッファ) の詳細 (ドリルダウンレポート)。
	SAP Buffer Hitratio	最近 1 時間の SAP バッファのヒット率に問題が発生したときの分析レポート。
	SAP Buffer Hitratio Status	SAP バッファのヒット率の概要。
	SAP Buffer Hitratio Trend (時単位の履歴レポート)	最近 24 時間の SAP バッファのヒット率の傾向 (時単位)。
	SAP Buffer Hitratio Trend (日単位の履歴レポート)	最近 1 か月間の SAP バッファのヒット率の傾向 (日単位)。
SAP メモリー	SAP Memory Detail	SAP メモリーの詳細。
	SAP Memory Used	最近 1 時間の SAP メモリーの使用率に問題が発生したときの分析レポート。
	SAP Memory Used Status	SAP メモリーの使用率の概要。
	SAP Memory Used Trend (時単位の履歴レポート)	最近 24 時間の SAP メモリーの使用率の傾向 (時単位)。
	SAP Memory Used Trend (日単位の履歴レポート)	最近 1 か月間の SAP メモリーの使用率の傾向 (日単位)。
ログインユーザー	UsersLoggedIn Trend (時単位の履歴レポート)	最近 24 時間のログインユーザー数の傾向 (時単位)。
	UsersLoggedIn Trend (日単位の履歴レポート)	最近 1 か月間のログインユーザー数の傾向 (日単位)。
	UsersLoggedIn Trend(Multi-Agent)	最近 1 か月間のログインユーザー数の傾向 (アプリケーションサーバ間で比較)。
ジョブ数の傾向	Background Processing SystemWideQueue	最近 24 時間の実行を待っているジョブの数 (システム全体の平均) の傾向 (時単位)。
	Background Service ServerSpecificQueue	最近 24 時間の実行を待っているリリース済みジョブの数の傾向 (時単位)。

Dialog ResponseTime

概要

Dialog ResponseTime レポートは、ダイアログタスクの応答時間に問題が発生したときの分析レポートです。最近 1 時間の応答時間の傾向を分単位で表示します。表示形式は、表および折れ線グラフです。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Troubleshooting/Recent Past/

レコード

WorkLoad Summary Interval (PI)

フィールド

フィールド名	説明
DBRequestTime	論理データベース要求を処理するための平均時間。ミリ秒単位。
DialogSteps	1 分当たりの平均ダイアログステップ数。
FrontendResponseTime	自分の要求が処理されるのをユーザーがフロントエンドで待つ平均時間。つまり、応答時間、ネットワーク転送時間、およびフロントエンド処理時間の合計平均時間。ミリ秒単位。
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
Load+GenTime	データベースからのソーステキスト、グラフィカルユーザーインターフェース、および画面情報の平均ロードと作成時間。ミリ秒単位。
QueueTime	ディスパッチャー待ち行列での平均待ち時間。ユーザー要求がディスパッチャークューに入っている平均待ち時間。ミリ秒単位。
ResponseTime	ダイアログステップの処理時間の平均値。ミリ秒単位。ダイアログステップの処理に必要な全処理時間を含む。データベース処理時間を含むが、ネットワーク転送時間やフロントエンド処理時間は含まれない。
System ID	SAP システム ID。

ドリルダウンレポート (レポートレベル)

レポート名	説明
Process Detail	最近 1 時間のワークプロセスの活動状態を表示する。

Dialog ResponseTime Status

概要

Dialog ResponseTime Status レポートは、ダイアログタスクでの応答時間の概要をリアルタイムに表示します。表示形式は、一覧および折れ線グラフです。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Status Reporting/Real-Time/

レコード

Dialog Service (PI_DIA)

フィールド

フィールド名	説明
FrontendNetTime	フロントエンドからアプリケーションサーバへの最初のデータ転送時と、アプリケーションサーバからフロントエンドへの最後のデータ転送時に、ネットワークで使われる時間。ミリ秒単位。GuiCallBackTime フィールドの値は含まれていない。
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
ResponseTime	ダイアログステップの処理時間の平均値。ミリ秒単位。ダイアログステップの処理に必要な全処理時間を含む。データベース処理時間を含むが、ネットワーク転送時間やフロントエンド処理時間は含まれない。
ResponseTime:StandardTran.	標準トランザクションの応答時間。ミリ秒単位。
System ID	SAP システム ID。
UsersLoggedIn	ログインしているユーザー数。

Dialog ResponseTime Trend (時単位の履歴レポート)

概要

Dialog ResponseTime Trend レポートは、最近 24 時間のダイアログタスクでの応答時間の傾向を時単位で表示します。表示形式は、表および折れ線グラフです。

表示されたデータは、分単位でドリルダウンでき、ある時間帯の、より詳細なデータを表示させることもできます。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Status Reporting/Daily Trend/

レコード

WorkLoad Summary Interval (PI)

フィールド

フィールド名	説明
DBRequestTime	論理データベース要求を処理するための平均時間。ミリ秒単位。
DialogSteps	1 分当たりの平均ダイアログステップ数。
FrontendResponseTime	自分の要求が処理されるのをユーザーがフロントエンドで待つ平均時間。つまり、応答時間、ネットワーク転送時間、およびフロントエンド処理時間の合計平均時間。ミリ秒単位。
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
Load+GenTime	データベースからのソーステキスト、グラフィカルユーザーインターフェース、および画面情報の平均ロードと作成時間。ミリ秒単位。
QueueTime	ディスパッチャー待ち行列での平均待ち時間。ユーザー要求がディスパッチャークューに入っている平均待ち時間。ミリ秒単位。
ResponseTime	ダイアログステップの処理時間の平均値。ミリ秒単位。ダイアログステップの処理に必要な全処理時間を含む。データベース処理時間を含むが、ネットワーク転送時間やフロントエンド処理時間は含まれない。
System ID	SAP システム ID。

Dialog ResponseTime Trend (日単位の履歴レポート)

概要

Dialog ResponseTime Trend レポートは、最近 1 か月間のダイアログタスクでの応答時間の傾向を日単位で表示します。表示形式は、一覧および折れ線グラフです。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Monthly Trend/

レコード

WorkLoad Summary Interval (PI)

フィールド

フィールド名	説明
DBRequestTime	論理データベース要求を処理するための平均時間。ミリ秒単位。
DialogSteps	1 分当たりの平均ダイアログステップ数。
FrontendResponseTime	自分の要求が処理されるのをユーザーがフロントエンドで待つ平均時間。つまり、応答時間、ネットワーク転送時間、およびフロントエンド処理時間の合計平均時間。ミリ秒単位。
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
Load+GenTime	データベースからのソーステキスト、グラフィカルユーザーインターフェース、および画面情報の平均ロードと作成時間。ミリ秒単位。
QueueTime	ディスパッチャー待ち行列での平均待ち時間。ユーザー要求がディスパッチャークューに入っている平均待ち時間。ミリ秒単位。
ResponseTime	ダイアログステップの処理時間の平均値。ミリ秒単位。ダイアログステップの処理に必要な全処理時間を含む。データベース処理時間を含むが、ネットワーク転送時間やフロントエンド処理時間は含まれない。
System ID	SAP システム ID。

Dialog ResponseTime Trend(Multi-Agent)

概要

Dialog ResponseTime Trend(Multi-Agent)レポートは、最近 1 か月間のダイアログタスクでの応答時間の傾向を、アプリケーションサーバ間で比較します。表示形式は、一覧および折れ線グラフです。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Monthly Trend/

レコード

WorkLoad Summary Interval (PI)

フィールド

フィールド名	説明
DBRequestTime	論理データベース要求を処理するための平均時間。ミリ秒単位。
DialogSteps	1 分当たりの平均ダイアログステップ数。
FrontendResponseTime	自分の要求が処理されるのをユーザーがフロントエンドで待つ平均時間。つまり、応答時間、ネットワーク転送時間、およびフロントエンド処理時間の合計平均時間。ミリ秒単位。
Agent Instance	PFM - Agent のインスタンス名。
Load+GenTime	データベースからのソーステキスト、グラフィカルユーザーインターフェース、および画面情報の平均ロードと作成時間。ミリ秒単位。
QueueTime	ディスパッチャー待ち行列での平均待ち時間。ユーザー要求がディスパッチャーキューに入っている平均待ち時間。ミリ秒単位。
ResponseTime	ダイアログステップの処理時間の平均値。ミリ秒単位。ダイアログステップの処理に必要な全処理時間を含む。データベース処理時間を含むが、ネットワーク転送時間やフロントエンド処理時間は含まれない。
System ID	SAP システム ID。

Dialog Utilization %

概要

Dialog Utilization %レポートは、ダイアログワークプロセスに問題が発生したときの分析レポートです。最近 1 時間のダイアログワークプロセスの傾向を分単位で表示します。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Troubleshooting/Recent Past/Advanced/

レコード

Dialog Service (PI_DIA)

フィールド

フィールド名	説明
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
QueueLength %	ダイアログワークプロセスのディスパッチャー待機キューの平均使用率。
Utilization %	アプリケーションサーバのダイアログプロセスの平均使用率。
System ID	SAP システム ID。

Process Detail

概要

Process Detail レポートは、最近 1 時間のワークプロセスの活動状態を表示します。表示形式は、一覧です。このレポートは、ドリルダウンレポートです。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Troubleshooting/Recent Past/Drilldown Only/

レコード

Work Process Summary (PD)

フィールド

フィールド名	説明
Action	ワークプロセスの該当アクティビティ名。
Bname	現在ワークプロセスが処理している依頼のユーザー名。
CPU	予約フィールドのため、使用できない。
Dumps	ワークプロセスが異常終了した回数。
ElTime	ワークプロセスの実行経過時間。秒単位。
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
ManDt	現在ワークプロセスが処理している依頼のクライアント名。
No	ワークプロセス番号。
Pid	ホストシステムでのワークプロセスのプロセス ID。
Report	ワークプロセスが実行しているレポート名。
Restart	異常終了したイベントで、ワークプロセスが自動的に再実行されるかどうかを Y (再実行される) または N (再実行されない) で表す。
Sem	ワークプロセスが待ち状態にあるセマフォの番号。
Status	ワークプロセスの現在の状態 (例: 待機中, 実行中)。
System ID	SAP システム ID。
Table	ワークプロセスの最終アクセス DB テーブル名。
Typ	ワークプロセスのタイプ (例: DIA, UPD, UP2, ENQ, BGD, SPO)。
Waiting	ワークプロセスが待機中である理由。

Process Overview Status

概要

Process Overview Status レポートは、ワークプロセスの活動状態をリアルタイムに表示します。表示形式は、表です。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Status Reporting/Real-Time/

レコード

Work Process Summary (PD)

フィールド

フィールド名	説明
Action	ワークプロセスの該当アクティビティ名。
Bname	現在ワークプロセスが処理している依頼のユーザー名。
CPU	予約フィールドのため、使用できない。
Dumps	ワークプロセスが異常終了した回数。
ElTime	ワークプロセスの実行経過時間。秒単位。
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
ManDt	現在ワークプロセスが処理している依頼のクライアント名。
No	ワークプロセス番号。
Pid	ホストシステムでのワークプロセスのプロセス ID。
Report	ワークプロセスが実行しているレポート名。
Restart	異常終了したイベントで、ワークプロセスが自動的に再実行されるかどうかを Y (再実行される) または N (再実行されない) で表す。
Sem	ワークプロセスが待ち状態にあるセマフォの番号。
Status	ワークプロセスの現在の状態 (例: Running, Waiting)。
System ID	SAP システム ID。
Table	ワークプロセスの最終アクセス DB テーブル名。
Typ	ワークプロセスのタイプ (例: DIA, UPD, UP2, ENQ, BGD, SPO)。
Waiting	ワークプロセスが待機中である理由。

SAP Buffer Detail(CUA)

概要

SAP Buffer Detail(CUA)レポートは、SAP バッファ (CUA バッファ) の詳細をリアルタイムで表示します。表示形式は、一覧です。このレポートは、ドリルダウンレポートです。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Status Reporting/Real-Time/Drilldown Only/

レコード

SAP Buffer Summary (PI_BUFF)

フィールド

フィールド名	説明
CUA DirectoryUsed %	CUA バッファのディレクトリの使用率 (エントリーの数)。
CUA HitRatio %	CUA バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
CUA SpaceUsed %	CUA バッファストレージの使用率。
CUA Swap	CUA バッファで発生した、1 分ごとのバッファフルによるスワップ回数。
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
System ID	SAP システム ID。

SAP Buffer Detail(FieldDescription)

概要

SAP Buffer Detail(FieldDescription)レポートは、SAP バッファ (Field description バッファ) の詳細をリアルタイムで表示します。表示形式は、一覧です。このレポートは、ドリルダウンレポートです。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Status Reporting/Real-Time/Drilldown Only/

レコード

SAP Buffer Summary (PI_BUFF)

フィールド

フィールド名	説明
FieldDescription DirectoryUsed %	Field description バッファのディレクトリの使用率 (エントリーの数)。
FieldDescription HitRatio %	Field description バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
FieldDescription SpaceUsed %	Field description バッファストレージの使用率。
FieldDescription Swap	Field description バッファで発生した、1分ごとのバッファフルによるスワップ回数。
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
System ID	SAP システム ID。

SAP Buffer Detail(GenericKey)

概要

SAP Buffer Detail(GenericKey)レポートは、SAP バッファ (Generic key バッファ) の詳細をリアルタイムで表示します。表示形式は、一覧です。このレポートは、ドリルダウンレポートです。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Status Reporting/Real-Time/Drilldown Only/

レコード

SAP Buffer Summary (PI_BUFF)

フィールド

フィールド名	説明
GenericKey DirectoryUsed %	Generic key バッファのディレクトリの使用率 (エントリーの数)。
GenericKey HitRatio %	Generic key バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
GenericKey SpaceUsed %	Generic key バッファストレージの使用率。
GenericKey Swap	Generic key バッファで発生した、1 分ごとのバッファフルによるスワップ回数。
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
System ID	SAP システム ID。

SAP Buffer Detail(InitialRecords)

概要

SAP Buffer Detail(InitialRecords)レポートは、SAP バッファ (Initial records バッファ) の詳細をリアルタイムで表示します。表示形式は、一覧です。このレポートは、ドリルダウンレポートです。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Status Reporting/Real-Time/Drilldown Only/

レコード

SAP Buffer Summary (PI_BUFF)

フィールド

フィールド名	説明
InitialRecords DirectoryUsed %	Initial records バッファのディレクトリの使用率 (エントリーの数)。
InitialRecords HitRatio %	Initial records バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
InitialRecords SpaceUsed %	Initial records バッファストレージの使用率。
InitialRecords Swap	Initial records バッファで発生した、1分ごとのバッファフルによるスワップ回数。
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
System ID	SAP システム ID。

SAP Buffer Detail(Program)

概要

SAP Buffer Detail(Program)レポートは、SAP バッファ (Program バッファ) の詳細をリアルタイムで表示します。表示形式は、一覧です。このレポートは、ドリルダウンレポートです。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Status Reporting/Real-Time/Drilldown Only/

レコード

SAP Buffer Summary (PI_BUFF)

フィールド

フィールド名	説明
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
Program DirectoryUsed %	Program バッファのディレクトリの使用率 (エントリーの数)。
Program HitRatio %	Program バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
Program SpaceUsed %	Program バッファストレージの使用率。
Program Swap	Program バッファで発生した、1 分ごとのバッファフルによるスワップ回数。
System ID	SAP システム ID。

SAP Buffer Detail(Screen)

概要

SAP Buffer Detail(Screen)レポートは、SAP バッファ (Screen バッファ) の詳細をリアルタイムで表示します。表示形式は、一覧です。このレポートは、ドリルダウンレポートです。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Status Reporting/Real-Time/Drilldown Only/

レコード

SAP Buffer Summary (PI_BUFF)

フィールド

フィールド名	説明
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
Screen DirectoryUsed %	Screen バッファのディレクトリの使用率 (エントリーの数)。
Screen HitRatio %	Screen バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
Screen SpaceUsed %	Screen バッファストレージの使用率。
Screen Swap	Screen バッファで発生した、1 分ごとのバッファフルによるスワップ回数。
System ID	SAP システム ID。

SAP Buffer Detail(ShortNameTAB)

概要

SAP Buffer Detail(ShortNameTAB)レポートは、SAP バッファ (Short nametab バッファ) の詳細をリアルタイムで表示します。表示形式は、一覧です。このレポートは、ドリルダウンレポートです。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Status Reporting/Real-Time/Drilldown Only/

レコード

SAP Buffer Summary (PI_BUFF)

フィールド

フィールド名	説明
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
ShortNameTAB DirectoryUsed %	Short nametab バッファのディレクトリの使用率 (エントリーの数)。
ShortNameTAB HitRatio %	Short nametab バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
ShortNameTAB SpaceUsed %	Short nametab バッファストレージの使用率。
ShortNameTAB Swap	Short nametab バッファで発生した、1 分ごとのバッファフルによるスワップ回数。
System ID	SAP システム ID。

SAP Buffer Detail(SingleRecord)

概要

SAP Buffer Detail(SingleRecord)レポートは、SAP バッファ (Single record バッファ) の詳細をリアルタイムで表示します。表示形式は、一覧です。このレポートは、ドリルダウンレポートです。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Status Reporting/Real-Time/Drilldown Only/

レコード

SAP Buffer Summary (PI_BUFF)

フィールド

フィールド名	説明
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
SingleRecord DirectoryUsed %	Single record バッファのディレクトリの使用率 (エントリーの数)。
SingleRecord HitRatio %	Single record バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
SingleRecord SpaceUsed %	Single record バッファのバッファストレージの使用率。
SingleRecord Swap	Single record バッファで発生した、1 分ごとのバッファフルによるスワップ回数。
System ID	SAP システム ID。

SAP Buffer Detail(TableDefinition)

概要

SAP Buffer Detail(TableDefinition)レポートは、SAP バッファ (Table definition バッファ) の詳細をリアルタイムで表示します。表示形式は、一覧です。このレポートは、ドリルダウンレポートです。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Status Reporting/Real-Time/Drilldown Only/

レコード

SAP Buffer Summary (PI_BUFF)

フィールド

フィールド名	説明
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
System ID	SAP システム ID。
TableDefinition DirectoryUsed %	Table definition バッファのディレクトリの使用率 (エントリーの数)。
TableDefinition HitRatio %	Table definition バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
TableDefinition SpaceUsed %	Table definition バッファストレージの使用率。
TableDefinition Swap	Table definition バッファで発生した、1 分ごとのバッファフルによるスワップ回数。

SAP Buffer Hitratio

概要

SAP Buffer Hitratio レポートは、SAP バッファのヒット率に問題が発生したときの分析レポートです。最近 1 時間の SAP バッファのヒット率の傾向を分単位で表示します。表示形式は、表および折れ線グラフです。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Troubleshooting/Recent Past/

レコード

WorkLoad Summary Interval (PI)

フィールド

フィールド名	説明
CUA HitRatio %	CUA バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
FieldDescription HitRatio %	Field description バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
GenericKey HitRatio %	Generic key バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
InitialRecords HitRatio %	Initial records バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
Program HitRatio %	Program バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
Screen HitRatio %	Screen バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
ShortNameTAB HitRatio %	Short nametab バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
SingleRecord HitRatio %	Single record バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
System ID	SAP システム ID。
TableDefinition HitRatio %	Table definition バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。

ドリルダウンレポート (レポートレベル)

レポート名	説明
Process Detail	最近 1 時間のワークプロセスの活動状態を表示する。

SAP Buffer Hitratio Status

概要

SAP Buffer Hitratio Status レポートは、SAP バッファのヒット率の概要をリアルタイムに表示します。表示形式は、一覧および折れ線グラフです。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Status Reporting/Real-Time/

レコード

SAP Buffer Summary (PI_BUFF)

フィールド

フィールド名	説明
CUA HitRatio %	CUA バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
FieldDescription HitRatio %	Field description バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
GenericKey HitRatio %	Generic key バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
InitialRecords HitRatio %	Initial records バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
Program HitRatio %	Program バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
Screen HitRatio %	Screen バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
ShortNameTAB HitRatio %	Short nametab バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
SingleRecord HitRatio %	Single record バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
System ID	SAP システム ID。
TableDefinition HitRatio %	Table definition バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。

ドリルダウンレポート (フィールドレベル)

レポート名	説明
SAP Buffer Detail(CUA)	SAP バッファ (CUA バッファ) の詳細をリアルタイムで表示する。このレポートを表示するには、CUA HitRatio %フィールドをクリックする。
SAP Buffer Detail(FieldDescription)	SAP バッファ (Field description バッファ) の詳細をリアルタイムで表示する。このレポートを表示するには、FieldDescription HitRatio %フィールドをクリックする。
SAP Buffer Detail(GenericKey)	SAP バッファ (Generic key バッファ) の詳細をリアルタイムで表示する。このレポートを表示するには、GenericKey HitRatio %フィールドをクリックする。
SAP Buffer Detail(InitialRecords)	SAP バッファ (Initial records バッファ) の詳細をリアルタイムで表示する。このレポートを表示するには、InitialRecords HitRatio %フィールドをクリックする。
SAP Buffer Detail(Program)	SAP バッファ (Program バッファ) の詳細をリアルタイムで表示する。このレポートを表示するには、Program HitRatio %フィールドをクリックする。
SAP Buffer Detail(Screen)	SAP バッファ (Screen バッファ) の詳細をリアルタイムで表示する。このレポートを表示するには、Screen HitRatio %フィールドをクリックする。
SAP Buffer Detail(ShortNameTAB)	SAP バッファ (Short nametab バッファ) の詳細をリアルタイムで表示する。このレポートを表示するには、ShortNameTAB HitRatio %フィールドをクリックする。
SAP Buffer Detail(SingleRecord)	SAP バッファ (Single record バッファ) の詳細をリアルタイムで表示する。このレポートを表示するには、SingleRecord HitRatio %フィールドをクリックする。
SAP Buffer Detail(TableDefinition)	SAP バッファ (Table definition バッファ) の詳細をリアルタイムで表示する。このレポートを表示するには、TableDefinition HitRatio %フィールドをクリックする。

SAP Buffer Hitratio Trend (時単位の履歴レポート)

概要

SAP Buffer Hitratio Trend レポートは、最近 24 時間の SAP バッファのヒット率の傾向を時単位で表示します。表示形式は、表および折れ線グラフです。

表示されたデータは、分単位でドリルダウンでき、ある時間帯の、より詳細なデータを表示させることもできます。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Status Reporting/Daily Trend/

レコード

WorkLoad Summary Interval (PI)

フィールド

フィールド名	説明
CUA HitRatio %	CUA バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
FieldDescription HitRatio %	Field description バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
GenericKey HitRatio %	Generic key バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
InitialRecords HitRatio %	Initial records バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
Program HitRatio %	Program バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
Screen HitRatio %	Screen バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
ShortNameTAB HitRatio %	Short nametab バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
SingleRecord HitRatio %	Single record バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
System ID	SAP システム ID。
TableDefinition HitRatio %	Table definition バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。

SAP Buffer Hitratio Trend (日単位の履歴レポート)

概要

SAP Buffer Hitratio Trend レポートは、最近 1 か月間の SAP バッファのヒット率の傾向を日単位で表示します。表示形式は、一覧および折れ線グラフです。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Monthly Trend/

レコード

WorkLoad Summary Interval (PI)

フィールド

フィールド名	説明
CUA HitRatio %	CUA バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
FieldDescription HitRatio %	Field description バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
GenericKey HitRatio %	Generic key バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
InitialRecords HitRatio %	Initial records バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
Program HitRatio %	Program バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
Screen HitRatio %	Screen バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
ShortNameTAB HitRatio %	Short nametab バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
SingleRecord HitRatio %	Single record バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。
System ID	SAP システム ID。
TableDefinition HitRatio %	Table definition バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。

SAP Memory Detail

概要

SAP Memory Detail レポートは、SAP メモリーの詳細をリアルタイムで表示します。表示形式は、一覧です。このレポートは、ドリルダウンレポートです。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Status Reporting/Real-Time/Drilldown Only/

レコード

SAP Memory Summary (PI_MEM)

フィールド

フィールド名	説明
EmSlotsAct %	現在の、拡張メモリースロットの使用率。
EmSlotsTotal	拡張メモリースロットの合計数。
EsAct %	現在の、拡張メモリーの使用率。
EsAttached %	アタッチされている拡張メモリーの使用率。
EsTotal	拡張メモリーのサイズ。メガバイト単位。
HeapAct %	現在の、ヒープ領域の使用率。
HeapTotal	ヒープ領域の合計。メガバイト単位。
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
PrivWpNo	PRIV モードになったワークプロセス数。
R3PagingUsed %	ページング領域の使用率。
R3RollUsed %	ロール領域の使用率。
System ID	SAP システム ID。
WpDiaRestart	「リスタート=Yes」のダイアログワークプロセス数。
WpNonDiaRestart	「リスタート=No」のダイアログワークプロセス数。

SAP Memory Used

概要

SAP Memory Used レポートは、SAP メモリーの使用率に問題が発生したときの分析レポートです。最近 1 時間の SAP メモリーの使用率の傾向を分単位で表示します。表示形式は、表および折れ線グラフです。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Troubleshooting/Recent Past/

レコード

WorkLoad Summary Interval (PI)

フィールド

フィールド名	説明
EsAct %	現在の、拡張メモリーの使用率。
HeapAct %	現在の、ヒープ領域の使用率。
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
R3PagingUsed %	ページング領域の使用率。
R3RollUsed %	ロール領域の使用率。
System ID	SAP システム ID。

ドリルダウンレポート (レポートレベル)

レポート名	説明
Process Detail	最近 1 時間のワークプロセスの活動状態を表示する。

SAP Memory Used Status

概要

SAP Memory Used Status レポートは、SAP メモリーの使用率の概要をリアルタイムで表示します。表示形式は、一覧および折れ線グラフです。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Status Reporting/Real-Time/

レコード

SAP Memory Summary (PI_MEM)

フィールド

フィールド名	説明
EsAct %	現在の、拡張メモリーの使用率。
HeapAct %	現在の、ヒープ領域の使用率。
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
R3PagingUsed %	ページング領域の使用率。
R3RollUsed %	ロール領域の使用率。
System ID	SAP システム ID。

ドリルダウンレポート (フィールドレベル)

レポート名	説明
SAP Memory Detail	SAP メモリーの詳細をリアルタイムで表示する。このレポートを表示するには、EsAct %フィールド、HeapAct %フィールド、R3PagingUsed %フィールド、または R3RollUsed %フィールドをクリックする。

SAP Memory Used Trend (時単位の履歴レポート)

概要

SAP Memory Used Trend レポートは、最近 24 時間の SAP メモリーの使用率の傾向を時単位で表示します。表示形式は、表および折れ線グラフです。表示されたデータは、分単位でドリルダウンでき、ある時間帯の、より詳細なデータを表示させることもできます。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Status Reporting/Daily Trend/

レコード

WorkLoad Summary Interval (PI)

フィールド

フィールド名	説明
EsAct %	現在の、拡張メモリーの使用率。
HeapAct %	現在の、ヒープ領域の使用率。
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
R3PagingUsed %	ページング領域の使用率。
R3RollUsed %	ロール領域の使用率。
System ID	SAP システム ID。

SAP Memory Used Trend (日単位の履歴レポート)

概要

SAP Memory Used Trend レポートは、最近 1 か月間の SAP メモリーの使用率の傾向を日単位で表示します。表示形式は、一覧および折れ線グラフです。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Monthly Trend/

レコード

WorkLoad Summary Interval (PI)

フィールド

フィールド名	説明
EsAct %	現在の、拡張メモリーの使用率。
HeapAct %	現在の、ヒープ領域の使用率。
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
R3PagingUsed %	ページング領域の使用率。
R3RollUsed %	ロール領域の使用率。
System ID	SAP システム ID。

UsersLoggedIn Trend (時単位の履歴レポート)

概要

UsersLoggedIn Trend レポートは、最近 24 時間のログインユーザー数の傾向を表示します。集約された平均値に加えて最大値および最小値が表示されます。表示形式は、表および折れ線グラフです。表示されたデータは、分単位でドリルダウンでき、ある時間帯での、より詳細なデータを表示させることもできます。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Status Reporting/Daily Trend/

レコード

WorkLoad Summary Interval (PI)

フィールド

フィールド名	説明
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
System ID	SAP システム ID。
UsersLoggedIn	ログインしているユーザー数。
UsersLoggedIn (Max)	ログインしている最大ユーザー数。
UsersLoggedIn (Min)	ログインしている最小ユーザー数。

UsersLoggedIn Trend (日単位の履歴レポート)

概要

UsersLoggedIn Trend レポートは、最近 1 か月間のログインユーザー数の傾向を日単位で表示します。集約された平均値に加えて最大値および最小値が表示されます。表示形式は、一覧および折れ線グラフです。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Monthly Trend/

レコード

WorkLoad Summary Interval (PI)

フィールド

フィールド名	説明
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
System ID	SAP システム ID。
UsersLoggedIn	ログインしているユーザー数。
UsersLoggedIn (Max)	ログインしている最大ユーザー数。
UsersLoggedIn (Min)	ログインしている最小ユーザー数。

UsersLoggedIn Trend(Multi-Agent)

概要

UsersLoggedIn Trend(Multi-Agent)レポートは、最近 1 か月間のログインユーザー数の傾向をアプリケーションサーバ間で比較します。表示形式は、一覧および折れ線グラフです。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Monthly Trend/

レコード

WorkLoad Summary Interval (PI)

フィールド

フィールド名	説明
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
System ID	SAP システム ID。
UsersLoggedIn	ログインしているユーザー数。
UsersLoggedIn (Max)	ログインしている最大ユーザー数。
UsersLoggedIn (Min)	ログインしている最小ユーザー数。

Background Processing SystemWideQueue

概要

Background Processing SystemWideQueue レポートは、最近 24 時間の実行を待っているジョブの数（システム全体の平均）の傾向を時単位で表示します。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

レコード

Background Processing (PI_BTCP)

フィールド

フィールド名	説明
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
SystemWideQueueLength	実行を待っているジョブの数（システム全体の平均）。
System ID	SAP システム ID。

Background Service ServerSpecificQueue

概要

Background Service ServerSpecificQueue レポートは、最近 24 時間の実行を待っているリリース済みジョブの数の傾向を時単位で表示します。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

レコード

Background Service (PI_BTC)

フィールド

フィールド名	説明
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
ServerSpecificQueueLength	実行を待っているリリース済みジョブの数。
System ID	SAP システム ID。

Background Service Utilization %

概要

Background Service Utilization %レポートは、最近 24 時間のサーバのバックグラウンドワークプロセスの平均使用率の傾向を時単位で表示します。

格納先

Reports/SAP System/SAP Basis/Web Application Server/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

レコード

Background Service (PI_BTC)

フィールド

フィールド名	説明
Instance Name	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。
System ID	SAP システム ID。
Utilization %	サーバのバックグラウンドワークプロセスの平均使用率。

10

レコード

この章では、PFM - Agent for Enterprise Applications のレコードについて説明します。各レコードのパフォーマンスデータの収集方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の Performance Management の機能、または「JP1/Performance Management 運用ガイド」の稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

データモデルについて

各 PFM - Agent が持つレコードおよびフィールドの総称を「データモデル」と呼びます。各 PFM - Agent と、その PFM - Agent が持つデータモデルには、それぞれ固有のバージョン番号が付与されています。PFM - Agent for Enterprise Applications のデータモデルのバージョンは、5.0 です。

各 PFM - Agent のデータモデルのバージョンは、PFM - Web Console の [エージェント階層] タブで エージェントアイコンをクリックし、[プロパティの表示] メソッドをクリックして表示される [プロパティ] 画面で確認してください。

データモデルについては、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、Performance Management の機能について説明している章を参照してください。

レコードの記載形式

この章では、PFM - Agent for Enterprise Applications のレコードをアルファベット順に記載しています。各レコードの説明は、次の項目から構成されています。

機能

各レコードに格納されるパフォーマンスデータの概要および注意事項について説明します。

デフォルト値および変更できる値

各レコードに設定されているパフォーマンスデータの収集条件のデフォルト値およびユーザーが変更できる値を表で示します。「デフォルト値および変更できる値」に記載している項目とその意味を次の表に示します。この表で示す各項目については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	パフォーマンスデータの収集間隔（秒単位）。	○：変更できる ×：変更できない
Collection Offset ^{*1}	パフォーマンスデータの収集を開始するオフセット値（秒単位）。 オフセット値については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照のこと。 また、パフォーマンスデータの収集開始時刻については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、Performance Management の機能について説明している章を参照のこと。	
Log	収集したパフォーマンスデータを Store データベースに記録するかどうか。 Yes：記録する。ただし、「Collection Interval=0」の場合、記録しない。 No：記録しない。	
LOGIF	収集したパフォーマンスデータを Store データベースに記録するかどうかの条件。	
Over 10 Sec Collection Time ^{*2}	システム構成によって、レコードの収集に 10 秒以上掛かることがあるかどうか。 Yes：10 秒以上掛かることがある。 No：10 秒掛からない。	
Realtime Report Data Collection Mode ^{*2}	リアルタイムレポートの表示モードを指定する。 Reschedule：再スケジュールモードの場合 Temporary Log：一時保存モードの場合 Over 10 Sec Collection Time の値が「Yes」のレコードには、一時保存モード（Temporary Log）を指定する必要がある。	

注※1

指定できる値は、0～32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは、複数のデータを収集する場合に、一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので、収集処理の負荷を分散するために使用します。なお、データ収集の記録時間は、Collection Offset の値に関係なく、Collection Interval と同様の時間となります。

Collection Offset の値を変更する場合は、収集処理の負荷を考慮した上で値を指定してください。

注※2

履歴収集優先機能が有効の場合に表示されます。

ODBC キーフィールド

PFM - Manager または PFM - Base で、Store データベースに格納されているレコードのデータを利用する場合に必要な主キーを示します。ODBC キーフィールドには、各レコード共通のものと各レコード固有のものがあります。ここで示すのは、各レコード固有の ODBC キーフィールドです。複数インスタンスレコードだけが、固有の ODBC キーフィールドを持っています。

各レコード共通の ODBC キーフィールドについては、「[ODBC キーフィールド一覧](#)」を参照してください。ODBC キーフィールドの使用方法については、マニュアル「[JP1/Performance Management 運用ガイド](#)」の、ODBC に準拠したアプリケーションプログラムとの連携について説明している章を参照してください。

ライフタイム

各レコードに収集されるパフォーマンスデータの一貫性が保証される期間を示します。ライフタイムについては、マニュアル「[JP1/Performance Management 設計・構築ガイド](#)」の、Performance Management の機能について説明している章を参照してください。

レコードサイズ

1 回の収集で各レコードに格納されるパフォーマンスデータの容量を示します。

フィールド

各レコードのフィールドについて表で説明します。表の各項目について次に説明します。

- PFM - View 名 (PFM - Manager 名)
 - PFM - View 名
PFM - Web Console で表示されるフィールド名を示します。
 - PFM - Manager 名
PFM - Manager で、SQL を使用して Store データベースに格納されているフィールドのデータを利用する場合、SQL 文で記述するフィールド名 (PFM - Manager 名) を示します。
SQL 文では、先頭に各レコードのレコード ID を付加した形式で記述します。例えば、Dialog Service (PI_DIA) レコードの DialogSteps (DIALOG_STEPS) フィールドの場合、「PI_DIA_DIALOG_STEPS」と記述します。

- 説明
各フィールドに格納されるパフォーマンスデータについて説明します。
- 要約
Agent Store がデータを要約するときの方法（要約ルール）を示します。要約ルールについては、「[要約ルール](#)」を参照してください。
- 形式
char 型や float 型など、各フィールドの値のデータ型を示します。データ型については、「[データ型一覧](#)」を参照してください。
- デルタ
累積値として収集するデータに対し、変化量でデータを表すことを「デルタ」と呼びます。デルタについては、「[フィールドの値](#)」を参照してください。
- サポートバージョン
そのフィールドを使用できる SAP Basis のバージョン番号を示します。バージョン番号が記述してある場合、そのバージョン以降の SAP Basis でそのフィールドが使用できます。「-」の場合、SAP Basis のバージョンに関係なく、そのフィールドが使用できます。
- データソース
該当するフィールドの値の計算方法または取得先を示します。フィールドの値については、「[フィールドの値](#)」を参照してください。

ODBC キーフィールド一覧

ODBC キーフィールドには、各レコード共通のものと各レコード固有のものがあります。ここで示すのは、各レコード共通の ODBC キーフィールドです。PFM - Manager で Store データベースに格納されているレコードのデータを利用する場合、ODBC キーフィールドが必要です。

各レコード共通の ODBC キーフィールド一覧を次の表に示します。各レコード固有の ODBC キーフィールドについては、各レコードの説明を参照してください。

表 10-1 各レコード共通の ODBC キーフィールド一覧

ODBC キーフィールド	ODBC フォーマット	データ	説明
レコード ID_DATE	SQL_INTEGER	内部	レコードが生成された日付を表すレコードのキー。
レコード ID_DATETIME	SQL_INTEGER	内部	レコード ID_DATE フィールドとレコード ID_TIME フィールドの組み合わせ。
レコード ID_DEVICEID	SQL_VARCHAR	内部	インスタンス名[ホスト名]。
レコード ID_DRAWER_TYPE	SQL_VARCHAR	内部	区分。有効な値を次に示す。 m：分 H：時 D：日 W：週 M：月 Y：年
レコード ID_PROD_INST	SQL_VARCHAR	内部	PFM - Agent のインスタンス名。
レコード ID_PRODID	SQL_VARCHAR	内部	PFM - Agent のプロダクト ID。
レコード ID_RECORD_TYPE	SQL_VARCHAR	内部	レコードタイプを表す識別子（4 バイト）。
レコード ID_TIME	SQL_INTEGER	内部	レコードが生成された時刻（グリニッジ標準時）。

要約ルール

要約レコードは、収集したデータを一定の時間単位（分・時・日・週・月・年）ごとに要約して Store データベースに格納します。要約は、フィールドごとに定められた演算の定義に基づいて行われます。この演算の定義を「要約ルール」と呼びます。

要約によって Store データベースに追加されるフィールドを「追加フィールド」と呼びます。追加フィールドの有無や種類は要約ルールごとに異なります。追加フィールドの一部は、PFM - Web Console でレコードのフィールドとして表示されます。PFM - Web Console に表示される追加フィールドは、履歴レポートに表示するフィールドとして使用できます。

なお、要約によって追加される「追加フィールド」と区別するために、ここでは、各レコードの説明に記載されているフィールドを「固有フィールド」と呼びます。

追加フィールドのフィールド名は次のようになります。

- Store データベースに格納される追加フィールド名
固有フィールドの PFM - Manager 名にサフィックスが付加されたフィールド名になります。
- PFM - Web Console で表示される追加フィールド名
固有フィールドの PFM - View 名にサフィックスが付加されたフィールド名になります。

PFM - Manager 名に付加されるサフィックスと、それに対応する PFM - View 名に付加されるサフィックス、およびフィールドに格納されるデータを次の表に示します。

表 10-2 追加フィールドのサフィックス一覧

PFM - Manager 名	PFM - View 名	格納データ
_TOTAL	(Total)	要約期間内のレコードのフィールドの値の総和
_TOTAL_SEC	(Total)	要約期間内のレコードのフィールドの値の総和（utime 型の場合）
_COUNT	—	要約期間内の収集レコード数
_HI	(Max)	要約期間内のレコードのフィールド値の最大値
_LO	(Min)	要約期間内のレコードのフィールド値の最小値

(凡例)

—：追加フィールドがないことを示します。

要約ルールの一覧を次の表に示します。

表 10-3 要約ルール一覧

要約ルール名	要約ルール
COPY	要約期間内の最新のレコードのフィールド値がそのまま格納される。

要約ルール名	要約ルール
AVG	<p>要約期間内のフィールド値の平均値が格納される。 次に計算式を示す。 (フィールド値の総和) / (収集レコード数) 追加フィールド (Store データベース)</p> <ul style="list-style-type: none"> • _TOTAL • _TOTAL_SEC (utime 型の場合) • _COUNT <p>追加フィールド (PFM - Web Console) ※1※2</p> <ul style="list-style-type: none"> • (Total)
ADD	要約期間内のフィールド値の総和が格納される。
HI	要約期間内のフィールド値の最大値が格納される。
LO	要約期間内のフィールド値の最小値が格納される。
HILO	<p>要約期間内のデータの最大値, 最小値, および平均値が格納される。 固有フィールドには平均値が格納される。 次に計算式を示す。 (フィールド値の総和) / (収集レコード数) 追加フィールド (Store データベース)</p> <ul style="list-style-type: none"> • _HI • _LO • _TOTAL • _TOTAL_SEC (utime 型の場合) • _COUNT <p>追加フィールド (PFM - Web Console) ※1※2</p> <ul style="list-style-type: none"> • (Max) • (Min) • (Total)
%	<p>要約期間内のフィールド値の平均値が格納される。 主に百分率のフィールドに適用される。 次に計算式を示す。 (フィールド値の総和) / (収集レコード数) 追加フィールド (Store データベース)</p> <ul style="list-style-type: none"> • _TOTAL • _TOTAL_SEC (utime 型の場合) • _COUNT <p>追加フィールド (PFM - Web Console) ※3</p> <ul style="list-style-type: none"> • (Total)
R	<p>要約期間内のフィールド値の平均値が格納される。 主に 1 秒当たりの量を表すフィールドに適用される。 次に計算式を示す。 (フィールド値の総和) / (収集レコード数)</p>

要約ルール名	要約ルール
R	Real-Time レポートの delta 指定時は差分を Interval で割る特殊な計算方法を採用する。 追加フィールド (Store データベース) <ul style="list-style-type: none"> • _TOTAL • _COUNT 追加フィールド (PFM - Web Console) ※1※2 <ul style="list-style-type: none"> • (Total)
—	要約されないことを示す。

注※1

PFM - Manager 名に 「_AVG」 が含まれる utime 型のフィールドは、PFM - Web Console に追加される 「(Total)」 フィールドを履歴レポートで利用できません。

注※2

PFM - Manager 名に次の文字列が含まれるフィールドは、PFM - Web Console に追加される (Total) フィールドを履歴レポートで利用できません。

「_PER_」, 「PCT 」, 「PERCENT 」, 「_AVG 」, 「_RATE_TOTAL 」

注※3

utime 型のフィールドだけ PFM - Web Console に追加される 「(Total)」 フィールドを履歴レポートで利用できます。

データ型一覧

各フィールドの値のデータ型と、対応する C および C++ のデータ型の一覧を次の表に示します。この表で示す「データ型」の「フィールド」の値は、各レコードのフィールドの表にある「形式」の列に示されています。

表 10-4 データ型一覧

データ型		サイズ (バイト)	説明
フィールド	C および C++		
char(n)	char()	()内の数	n バイトの長さを持つ文字データ。
double	double	8	数値 (1.7E±308 (15 桁))。
float	float	4	数値 (3.4E±38 (7 桁))。
long	long	4	数値 (-2,147,483,648~2,147,483,647)。
short	short	2	数値 (-32,768~32,767)。
string(n)	char[]	()内の数	n バイトの長さを持つ文字列。最後の文字は、「null」。
time_t	unsigned long	4	数値 (0~4,294,967,295)。
timeval	構造体	8	数値 (最初の 4 バイトは秒、次の 4 バイトはマイクロ秒を表す)。
ulong	unsigned long	4	数値 (0~4,294,967,295)。
utime	構造体	8	数値 (最初の 4 バイトは秒、次の 4 バイトはマイクロ秒を表す)。
word	unsigned short	2	数値 (0~65,535)。
(該当なし)	unsigned char	1	数値 (0~255)。

フィールドの値

ここでは、各フィールドに格納される値について説明します。

データソース

各フィールドには、Performance Management や監視対象プログラムから取得した値や、これらの値をある計算式に基づいて計算した値が格納されます。各フィールドの値の取得先または計算方法は、フィールドの表の「データソース」列で示します。

PFM - Agent for Enterprise Applications の「データソース」列の文字列は、SAP システムのトランザクションコードを示します。該当するトランザクションコードに示されている値を取得することを示します。トランザクションコードだけでは値が特定できない場合、MTE (Monitoring Tree Element) 名を補足しています (例: SAP システム ID¥SAP インスタンス名¥Background¥Utilisation)。MTE 名については、SAP システムのマニュアルを参照してください。

デルタ

累積値として収集するデータに対し、変化量でデータを表すことを「デルタ」と呼びます。例えば、1 回目に収集されたパフォーマンスデータが「3」、2 回目に収集されたパフォーマンスデータが「4」とすると、累積値の場合は「7」、変化量の場合は「1」が格納されます。各フィールドの値がデルタ値かどうかは、フィールドの表の「デルタ」列で示します。

PFM - Agent for Enterprise Applications で収集されるパフォーマンスデータは、次の表のように異なります。

レコードタイプ	デルタ	データ種別	[デルタ値で表示] の チェック*	レコードの値
PI レコードタイプ	Yes	リアルタイムデータ	あり	変化量が表示される。
			なし	累積値が表示される。
		• 履歴データ • アラームの監視データ	—	変化量が表示される。
	No	リアルタイムデータ	あり	収集時点の値が表示される。
			なし	収集時点の値が表示される。
		• 履歴データ • アラームの監視データ	—	収集時点の値が表示される。
PD レコードタイプ	Yes	リアルタイムデータ	あり	変化量が表示される。
			なし	累積値が表示される。
		• 履歴データ • アラームの監視データ	—	累積値が表示される。
	No	リアルタイムデータ	あり	収集時点の値が表示される。

レコードタイプ	デルタ	データ種別	[デルタ値で表示] の チェック※	レコードの値
PD レコードタイプ	No	リアルタイムデータ	なし	収集時点の値が表示される。
		<ul style="list-style-type: none"> • 履歴データ • アラームの監視データ 	—	収集時点の値が表示される。

(凡例)

—：該当しない

注※

次に示す PFM - Web Console のダイアログボックスの項目でチェックされていることを示します。

- レポートウィザードの [編集 > 表示設定 (リアルタイムレポート)] 画面の [デルタ値で表示]
- レポートウィンドウの [Properties] タブの [表示設定 (リアルタイムレポート)] の [デルタ値で表示]

パフォーマンスデータが収集される際の注意事項を次に示します。

- リアルタイムレポートの設定で、[デルタ値で表示] がチェックされている場合、最初にデータが収集されたときから値が表示されます。ただし、前回のデータを必要とするレポートの場合、初回の値は 0 で表示されます。2 回目以降のデータ収集は、収集データの値が表示されます。

Store データベースに記録されるときだけ追加されるフィールド

Store データベースに記録されるときだけ追加されるフィールドを次の表に示します。

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	形式	デルタ	サポートバージョン	データソース
Agent Host (DEVICEID)	PFM - Agent が動作しているホスト名。	string(256)	No	すべて	—
Agent Instance (PROD_INST)	PFM - Agent のインスタンス名。	string(256)	No	すべて	—
Agent Type (PRODID)	PFM - Agent のプロダクト ID。1 バイトの識別子で表される。	char	No	すべて	—
Date (DATE)	レコードが作成された日。グリニッジ標準時。*1*2	char(3)	No	すべて	—
Date and Time (DATETIME)	Date (DATE) フィールドと Time (TIME) フィールドの組み合わせ。*2	char(6)	No	すべて	—
Drawer Type (DRAWER_TYPE)	PI レコードタイプのレコードの場合、データが要約される区分。	char	No	すべて	—
GMT Offset (GMT_ADJUST)	グリニッジ標準時とローカル時間の差。秒単位。	long	No	すべて	—
Time (TIME)	レコードが作成された時刻。グリニッジ標準時。*1*2	char(3)	No	すべて	—

(凡例)

— : SAP システムから取得したパフォーマンスデータを加工してフィールドの値を設定していないことを意味する

注※1

PI レコードタイプのレコードでは、データが要約されるため、要約される際の基準となる時刻が設定されます。レコード区分ごとの設定値を次の表に示します。

区分	レコード区分ごとの設定値
分	レコードが作成された時刻の 0 秒
時	レコードが作成された時刻の 0 分 0 秒
日	レコードが作成された日の 0 時 0 分 0 秒
週	レコードが作成された週の月曜日の 0 時 0 分 0 秒
月	レコードが作成された月の 1 日の 0 時 0 分 0 秒

区分	レコード区分ごとの設定値
年	レコードが作成された年の1月1日の0時0分0秒

注※2

レポートによるデータ表示を行った場合、"Date"フィールドはYYYYMMDD形式で、"Date and Time"フィールドはYYYYMMDD hh:mm:ss形式で、"Time"フィールドはhh:mm:ss形式で表示されます。

レコードの注意事項

レコードを収集する場合の注意事項を次に示します。

データを取得できない場合のレコード生成結果

フィールドに格納するデータを取得できない場合のレコード生成結果について説明します。

- レコードが生成されない

次の場合、レコードは生成されません。

- ODBC キーフィールドとして定義されたフィールドに格納するパフォーマンスデータを PFM - Agent for Enterprise Applications が収集できない場合
- Enterprise Applications の性能値を表すフィールドに格納するパフォーマンスデータを PFM - Agent for Enterprise Applications が収集できない場合
- SAP システムのパフォーマンスデータを PFM - Agent for Enterprise Applications が収集できない場合
- 空のフィールドを持つレコードが生成される

次の場合、空のフィールドを持つレコードが生成されます。

- 文字型のデータの収集に PFM - Agent for Enterprise Applications が失敗した場合
- 空の文字型のデータを PFM - Agent for Enterprise Applications が収集した場合
- 値が「-1」のフィールドを持つレコードが生成される
数値型の構成データの収集に PFM - Agent for Enterprise Applications が失敗した場合は、値が「-1」のフィールドを持つレコードが生成されます。
- 値が「Unknown」のフィールドを持つレコードが生成される
次の場合、値が「Unknown」のフィールドを持つレコードが生成されます。
 - データモデルに定義域を持つフィールドに対して、PFM - Agent for Enterprise Applications が収集したデータが定義域に含まれない場合
 - データモデルに定義域を持つフィールドに対して、PFM - Agent for Enterprise Applications がデータを収集できない場合

PI レコードタイプのレコードに関する注意事項

PI レコードタイプのレコードに関する注意事項について説明します。

- 収集するパフォーマンスデータ

PFM - Agent for Enterprise Applications は、SAP システム上で定期的に報告されるパフォーマンスデータのうち「最後の 1 分間の平準化」値を収集して、レコードに格納します。

- SAP システム上でパフォーマンスデータが未更新の状態が続いた場合のレコード生成結果

PFM - Agent for Enterprise Applications は、SAP システム上で報告された最新のパフォーマンスデータを収集して、レコードに格納します。

例えば、次のように SAP システム上でパフォーマンスデータが未更新の状態が続いた場合、PFM - Agent for Enterprise Applications は、SAP システム上で最後に報告されたパフォーマンスデータをレコードに格納します。

表 10-5 SAP システム上のパフォーマンスデータの更新状況

時刻	パフォーマンスデータの更新状況
10:00	更新済 (パフォーマンスデータ = 10.0)
10:01	未更新
10:02	未更新
10:03	未更新
10:04	未更新
10:05	未更新

この条件下において、PFM - Agent for Enterprise Applications から「10:05」にレコード収集を行った場合、レコードの生成結果は「10.0」となります。

レコード一覧

ここでは、PFM - Agent for Enterprise Applications で収集できるレコードの一覧を記載します。

PFM - Agent for Enterprise Applications で収集できるレコードおよびそのレコードに格納される情報を、レコード名順およびレコード ID 順で次の表に示します。

表 10-6 PFM - Agent for Enterprise Applications のレコード一覧 (レコード名)

レコード名	レコード ID	格納される情報
Background Processing	PI_BTCP	SAP システム全体のバックグラウンドシステムの状態および処理効率についての情報。
Background Service	PI_BTC	バックグラウンドサービスについての統計情報。
CCMS Alert Monitor Command	PD_ALMX	SAP システムの CCMS アラート情報の抽出結果。
Dialog Service	PI_DIA	ダイアログサービスについての統計情報。
Enqueue Service	PI_ENQ	エンキューサービスについての統計情報。
SAP Buffer Summary	PI_BUFF	SAP バッファについての要約情報。
SAP Instance Summary	PD_SRV	SAP インスタンスについての情報 (トランザクションコード SM51 で確認できる情報に相当)。
SAP Memory Summary	PI_MEM	各種 SAP メモリーについての要約情報。
Spool Service	PI_SPO	スプールサービスについての統計情報。
System Log Monitor Command	PD_SLMX	SAP システムのシステムログ情報の抽出結果。
Update1 Service	PI_UPD1	V1 更新サービスについての統計情報。
Update2 Service	PI_UPD2	V2 更新サービスについての統計情報。
User defined Monitor (Perf.)	PI_UMP	SAP システムのモニター情報のうち、ユーザーの定義に基づいて収集したパフォーマンス情報。
Work Process Summary	PD	ワークプロセスの概要 (トランザクションコード SM50 で確認できる情報に相当)。
WorkLoad Summary Interval	PI	ダイアログタスクのワークロード時間統計を取得および分析するための情報。

表 10-7 PFM - Agent for Enterprise Applications のレコード一覧 (レコード ID)

レコード ID	レコード名	格納される情報
PD	Work Process Summary	ワークプロセスの概要 (トランザクションコード SM50 で確認できる情報に相当)。
PD_ALMX	CCMS Alert Monitor Command	SAP システムの CCMS アラート情報の抽出結果。

レコード ID	レコード名	格納される情報
PD_SLMX	System Log Monitor Command	SAP システムのシステムログ情報の抽出結果。
PD_SRV	SAP Instance Summary	SAP インスタンスについての情報（トランザクションコード SM51 で確認できる情報に相当）。
PI	WorkLoad Summary Interval	ダイアログタスクのワークロード時間統計を取得および分析するための情報。
PI_BTC	Background Service	バックグラウンドサービスについての統計情報。
PI_BTCP	Background Processing	SAP システム全体のバックグラウンドシステムの状態および処理効率についての情報。
PI_BUFF	SAP Buffer Summary	SAP バッファについての要約情報。
PI_DIA	Dialog Service	ダイアログサービスについての統計情報。
PI_ENQ	Enqueue Service	エンキューサービスについての統計情報。
PI_MEM	SAP Memory Summary	各種 SAP メモリーについての要約情報。
PI_SPO	Spool Service	スプールサービスについての統計情報。
PI_UMP	User defined Monitor (Perf.)	SAP システムのモニター情報のうち、ユーザーの定義に基づいて収集したパフォーマンス情報。
PI_UPD1	Update1 Service	V1 更新サービスについての統計情報。
PI_UPD2	Update2 Service	V2 更新サービスについての統計情報。

Background Processing (PI_BTCP)

機能

Background Processing (PI_BTCP) レコードは、SAP システム全体のバックグラウンドシステムの状態および処理効率についての情報を示します。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	○
Collection Offset	40	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

なし

レコードサイズ

- 固定部：743 バイト
- 可変部：0 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポートバージョン	データソース
Instance Name (INSTANCE_NAME)	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。	COPY	string(21)	No	7.00 以降	—
Interval (INTERVAL)	レコードが格納されたインターバル (Record Time フィールドの値 - 前回取	ADD	ulong	No	7.00 以降	—

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポートバージョン	データソース
Interval (INTERVAL)	得時の Recode Time フィールドの値)の秒数。最初の値は 0。	ADD	ulong	No	7.00 以降	—
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	7.00 以降	—
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード種別。常に「BTCP」。	COPY	char(8)	No	7.00 以降	—
System ID (SYSTEM_ID)	SAP システム ID。	COPY	string(9)	No	7.00 以降	—
SystemWideFreeBPWP (SYSTEM_WIDE_FREE_BPWP)	システム全体でのフリーバックグラウンドワークプロセスの数。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥Background Service ¥SystemWide FreeBPWP)
SystemWideQueueLength (SYSTEM_WIDE_QUEUE_LENGTH)	すべてのアプリケーションサーバでバックグラウンドワークプロセスを持つ実行待ちの平均ジョブ数。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥Background Service ¥SystemWide QueueLength)

Background Service (PI_BTC)

機能

Background Service (PI_BTC) レコードは、バックグラウンドサービスについての統計情報を示します。このサービスを提供する SAP インスタンスごとに、1 件のレコードが作成されます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	○
Collection Offset	40	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

なし

レコードサイズ

- 固定部：759 バイト
- 可変部：0 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポートバージョン	データソース
Instance Name (INSTANCE_NAME)	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。	COPY	string(21)	No	7.00 以降	—
Interval (INTERVAL)	レコードが格納されたインターバル (Record Time フィールドの値 - 前回	ADD	ulong	No	7.00 以降	—

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート バージョ ン	データソー ス
Interval (INTERVAL)	取得時の Recode Time フィールドの 値) の秒数。最初の値は 0。	ADD	ulong	No	7.00 以降	—
NumberOfWpBTC (NUMBER_OF_ WP_BTC)	1 つのアプリケーションサーバでのバック グラウンドワークプロセスの数。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥Background ¥NumberOfWp BTC)
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	7.00 以降	—
Record Type (INPUT_RECOR D_TYPE)	レコード種別。常に「BTC」。	COPY	char(8)	No	7.00 以降	—
ServerSpecificQu eueLength (SERVER_SPECIF IC_QUEUE_LEN GTH)	アプリケーションサーバで明示的に実行 されなければならないが、空いている バックグラウンドワークプロセスが存在 しない実行待ちジョブの数。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥Background ¥ServerSpec ificQueueLe ngth)
System ID (SYSTEM_ID)	SAP システム ID。	COPY	string(9)	No	7.00 以降	—
Utilization % (UTILIZATION)	現在のバックグラウンド処理キャパシ ティの使用率。このフィールドの値は、 バックグラウンドワークプロセス全体で の平均の割合である。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥Background ¥Utilisatio n)

CCMS Alert Monitor Command (PD_ALMX)

機能

CCMS Alert Monitor Command (PD_ALMX) レコードは、SAP システムの CCMS アラート情報の抽出結果を示します。

注意

- このレコードはリアルタイムレポートでは表示できません。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	○
Collection Offset	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

なし

レコードサイズ

- 固定部：5,073 バイト
- 可変部：0 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	形式	デルタ	サポート バージョン	データソース
Elapsed Time (ELAPSED_TIME)	コマンドの実行時間。ミリ秒単位。	ulong	No	7.00 以降	—
Exit Code (EXIT_CODE)	コマンドの終了コード。	ulong	No	7.00 以降	—

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	形式	デルタ	サポート バージョン	データソース
Instance Name (INSTANCE_NAME)	SAP インスタンス名。この名前は通常、 ホスト名、SAP システム ID 名、および システム番号から構成される。rdisp/ myname パラメーターによって設定を変 更できる。	string(21)	No	—	—
Interval (INTERVAL)	レコードが格納されたインターバル (Record Time フィールドの値 - 前回取 得時の Recode Time フィールドの値) の秒数。最初の値は 0。	ulong	No	—	—
Path (PATH)	コマンドのパス (引数部分は含まない)。	string(256)	No	7.00 以降	—
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	time_t	No	—	—
Record Type (INPUT_RECORD_ TYPE)	レコード種別。常に「ALMX」。	char(8)	No	—	—
Stderr Buffer (STDERR_BUFFER)	コマンドの標準エラー出力バッファ。	string(2049)	No	7.00 以降	—
Stdout Buffer (STDOUT_BUFFER)	コマンドの標準出力バッファ。	string(2049)	No	7.00 以降	—
System ID (SYSTEM_ID)	SAP システム ID。	string(9)	No	—	—

Dialog Service (PI_DIA)

機能

Dialog Service (PI_DIA) レコードは、ダイアログサービスについての統計情報を示します。このサービスを提供する SAP インスタンスごとに、1 件のレコードが作成されます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	○
Collection Offset	35	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

なし

レコードサイズ

- 固定部：959 バイト
- 可変部：0 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポートバージョン	データソース
DBRequestTime (DB_REQUEST_TIME)	論理データベース要求を処理するための平均時間。ミリ秒単位。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥Dialog ¥DBRequestTime)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート バージョ ン	データソー ス
DialogSteps (DIALOG_STEPS)	1 分当たりの平均ダイアログステップ数。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥Dialog ¥DialogStep s)
FrontendNetTime (FRONTEND_NE T_TIME)	フロントエンドからアプリケーション サーバへの最初のデータ転送時と、アプ リケーションサーバからフロントエンド への最後のデータ転送時に、ネットワー クで使われる時間。ミリ秒単位。 GuiCallBackTime フィールドの値は含 まれていない。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥Dialog ¥FrontEndNe tTime)
FrontendResponseTime (FRONTEND_RE SPONSE_TIME)	自分の要求が処理されるのをユーザーが フロントエンドで待つ平均時間。つま り、応答時間、ネットワーク転送時間、 およびフロントエンド処理時間の合計平 均時間。ミリ秒単位。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥Dialog ¥FrontendRe sponseTime)
GuiCallBackTime (GUI_CALL_BAC K_TIME)	ダイアログステップ中のアプリケーショ ンサーバとフロントエンドの間の通信時 に、ワークプロセスがフロントエンドを 待つ平均時間。ミリ秒単位。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥Dialog ¥GuiCallBac kTime)
Instance Name (INSTANCE_NA ME)	SAP インスタンス名。この名前は通常、 ホスト名、SAP システム ID 名、および システム番号から構成される。rdisp/ myname パラメーターによって設定を 変更できる。	COPY	string(21)	No	7.00 以降	—
Interval (INTERVAL)	レコードが格納されたインターバル (Record Time フィールドの値 - 前回 取得時の Recode Time フィールドの 値) の秒数。最初の値は 0。	ADD	ulong	No	7.00 以降	—
Load+GenTime (LOAD_GENTIM E)	データベースからのソーステキスト、グ ラフィカルユーザーインターフェース、 および画面情報の平均ロードと作成時 間。ミリ秒単位。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥Dialog ¥Load +GenTime)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート バージョ ン	データソー ス
LongRunners (LONG_RUNNE RS)	長期間実行中のダイアログワークプロセ ス数。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥Dialog ¥LongRunne rs)
MonitoringTime (MONITORING_ TIME)	ダイアログステップでモニタリングデー タを作成するための平均時間。ミリ秒単 位。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥Dialog ¥Monitoring Time)
NumberOfWPDia (NUMBER_OF_ WP_DIA)	ダイアログワークプロセスの数。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥Dialog ¥NumberOfWp DIA)
QueueLength % (QUEUE LENGT H)	ディスパッチャー待ち行列の平均使用 率。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥Dialog ¥QueueLengt h)
QueueTime (QUEUE_TIME)	ディスパッチャー待ち行列での平均待ち 時間。つまり、ユーザー要求がディス パッチャーキューに入っている平均待ち 時間。ミリ秒単位。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥Dialog ¥QueueTime)
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	7.00 以降	—
Record Type (INPUT_RECOR D_TYPE)	レコード種別。常に「DIA」。	COPY	char(8)	No	7.00 以降	—
ResponseTime (RESPONSE_TIM E)	ダイアログステップの処理時間の平均 値。ミリ秒単位。ダイアログステップの 処理に必要な全処理時間を含む。 データベース処理時間を含むが、ネット	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポートバージョン	データソース
ResponseTime (RESPONSE_TIME)	ワーク転送時間やフロントエンド処理時間は含まれない。ダイアログステップが存在しない時間帯は、最後にダイアログステップが存在した時間帯の処理時間の平均値を報告する。*	AVG	float	No	7.00 以降	¥Dialog ¥ResponseTime)
ResponseTime:StandardTran. (RESPONSE_TIME_STANDARD_TRAN)	標準トランザクションの応答時間。ミリ秒単位。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥Dialog ¥ResponseTime(Standard Tran.))
System ID (SYSTEM_ID)	SAP システム ID。	COPY	string(9)	No	7.00 以降	—
UsersLoggedIn (USERS_LOGGED_IN)	ログインしているユーザー数。	HILO	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥Dialog ¥UsersLoggedIn)
Utilization % (UTILIZATION)	1 アプリケーションサーバ当たりのダイアログワークプロセスの平均利用率。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥Dialog ¥Utilisation)

注※

ダイアログステップが存在しない時間帯は、SAP システム上でダイアログステップの処理時間の平均値が更新されません。このため、SAP システム上で最後に更新されたダイアログステップの処理時間の平均値（つまり、最後にダイアログステップが存在した時間帯の処理時間の平均値）が報告されます。本動作については、「10. レコード」の「レコードの注意事項」の「PI レコードタイプのレコードに関する注意事項」を参照してください。

Enqueue Service (PI_ENQ)

機能

Enqueue Service (PI_ENQ) レコードは、エンキューサービスについての統計情報を示します。SAP インスタンスごとに、1 件のレコードが作成されます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	○
Collection Offset	40	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

なし

レコードサイズ

- 固定部：743 バイト
- 可変部：0 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポートバージョン	データソース
EnqueueClient EnqueueFreq (ENQUEUE_CLIENT_ENQUEUE_FREQ)	ほかのインスタンスからセントラルインスタンスへの、1 分当たりのエンキュー処理数（論理データロック）。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥EnqueueClient ¥EnqueueFreq)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポートバージョン	データソース
EnqueueServer QueueLength % (ENQUEUE_SERVER_QUEUE_LENGTH)	エンキューサービスの待ち行列の長さの割合。 SAP システムを ASCS インスタンス構成としている場合、このフィールドは、接続先ダイアログインスタンスに存在しないため、値が 0 になります。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥Enqueue Server ¥QueueLength)
Instance Name (INSTANCE_NAME)	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。	COPY	string(21)	No	7.00 以降	—
Interval (INTERVAL)	レコードが格納されたインターバル (Record Time フィールドの値 - 前回取得時の Recode Time フィールドの値) の秒数。最初の値は 0。	ADD	ulong	No	7.00 以降	—
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	7.00 以降	—
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード種別。常に「ENQ」。	COPY	char(8)	No	7.00 以降	—
System ID (SYSTEM_ID)	SAP システム ID。	COPY	string(9)	No	7.00 以降	—

SAP Buffer Summary (PI_BUFF)

機能

SAP Buffer Summary (PI_BUFF) レコードは、次の SAP バッファについての要約情報を示します。SAP インスタンスごとに、1 件のレコードが作成されます。

- Nametab バッファ (NTAB バッファ)
 - Field description バッファ (FTAB バッファ, table DDNTF)
リポジトリの項目内容説明を格納するバッファです。
 - Initial record バッファ (IREC バッファ)
テーブルにあるデータレコードのレイアウトを格納するバッファです。
 - Short nametab バッファ (Short NTAB バッファ, SNTAB バッファ)
Field description バッファと Table definition バッファの結合形で、各バッファの最重要情報だけを格納するバッファです。
 - Table definition バッファ (TTAB バッファ, table DDNTT)
リポジトリのテーブル定義を格納するバッファです。
- Program バッファ (R/3 executable バッファ, ABAP バッファ, PXA バッファ)
コンパイル済みのプログラムを格納するバッファです。
- R/3 GUI バッファ
 - CUA バッファ (Menu バッファ)
ABAP プログラムの画面メニューおよびボタン定義を格納するバッファです。
 - Screen バッファ (Presentation バッファ, Dynpro バッファ)
ABAP プログラムの画面情報を格納するバッファです。
- Table バッファ
 - Generic key バッファ (Generic table バッファ, TABL)
データベーステーブルの内容の一部または全部を格納するバッファです。
 - Single record バッファ (Partial table バッファ, TABLP)
データベーステーブルから個々のレコードを格納するバッファです。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	○
Collection Offset	40	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○

項目	デフォルト値	変更可否
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

なし

レコードサイズ

- 固定部：1,287 バイト
- 可変部：0 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポートバージョン	データソース
CUA DirectoryUsed % (CUA_DIRECTORY_USED)	CUA バッファのディレクトリの使用率 (エントリーの数)。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥CUA ¥DirectoryUsed)
CUA HitRatio % (CUA_HIT_RATIO)	CUA バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース間問い合わせの割合。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥CUA ¥HitRatio)
CUA SpaceUsed % (CUA_SPACE_USED)	CUA バッファストレージの使用率。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥CUA ¥SpaceUsed)
CUA Swap (CUA_SWAP)	CUA バッファで発生した、1 分ごとのバッファフルによるスワップ回数。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタ

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート バージョ ン	データソー ス
CUA Swap (CUA_SWAP)	CUA バッファで発生した、1 分ごとの バッファフルによるスワップ回数。	AVG	float	No	7.00 以降	タンス名 ¥CUA¥Swap)
FieldDescription DirectoryUsed % (FIELD_DESCRIP TION_DIRECTO RY_USED)	Field description バッファのディレク トリの使用率 (エントリーの数)。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥FieldDescr iption ¥DirectoryU sed)
FieldDescription HitRatio % (FIELD_DESCRIP TION_HIT_RATI O)	Field description バッファに存在した ため、データベースに渡される必要がな かったデータベース問い合わせの割合。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥FieldDescr iption ¥HitRatio)
FieldDescription SpaceUsed % (FIELD_DESCRIP TION_SPACE_US ED)	Field description バッファストレージ の使用率。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥FieldDescr iption ¥SpaceUsed)
FieldDescription Swap (FIELD_DESCRIP TION_SWAP)	Field description バッファで発生した、 1 分ごとのバッファフルによるスワップ 回数。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥FieldDescr iption ¥Swap)
GenericKey DirectoryUsed % (GENERIC_KEY_ DIRECTORY_US ED)	Generic key バッファのディレクトリの 使用率 (エントリーの数)。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥GenericKey ¥DirectoryU sed)
GenericKey HitRatio % (GENERIC_KEY_ HIT_RATIO)	Generic key バッファに存在したため、 データベースに渡される必要がなかった データベース問い合わせの割合。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥GenericKey ¥HitRatio)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポートバージョン	データソース
GenericKey SpaceUsed % (GENERIC_KEY_SPACE_USED)	Generic key バッファストレージの使用率。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥GenericKey ¥SpaceUsed)
GenericKey Swap (GENERIC_KEY_SWAP)	Generic key バッファで発生した、1 分ごとのバッファフルによるスワップ回数。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥GenericKey ¥Swap)
InitialRecords DirectoryUsed % (INITIAL_RECORDS_DIRECTORY_USED)	Initial records バッファのディレクトリの使用率 (エントリーの数)。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥InitialRecords ¥DirectoryUsed)
InitialRecords HitRatio % (INITIAL_RECORDS_HIT_RATIO)	Initial records バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥InitialRecords ¥HitRatio)
InitialRecords SpaceUsed % (INITIAL_RECORDS_SPACE_USED)	Initial records バッファストレージの使用率。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥InitialRecords ¥SpaceUsed)
InitialRecords Swap (INITIAL_RECORDS_SWAP)	Initial records バッファで発生した、1 分ごとのバッファフルによるスワップ回数。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥InitialRecords ¥Swap)
Instance Name (INSTANCE_NAME)	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/	COPY	string(21)	No	7.00 以降	—

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート バージョ ン	データソー ス
Instance Name (INSTANCE_NA ME)	myname パラメーターによって設定を 変更できる。	COPY	string(21)	No	7.00 以降	—
Interval (INTERVAL)	レコードが格納されたインターバル (Record Time フィールドの値 - 前回 取得時の Recode Time フィールドの 値) の秒数。最初の値は 0。	ADD	ulong	No	7.00 以降	—
Program DirectoryUsed % (PROGRAM_DIR ECTORY_USED)	Program バッファのディレクトリの使 用率 (エントリーの数)。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥Program ¥DirectoryU sed)
Program HitRatio % (PROGRAM_HIT _RATIO)	Program バッファに存在したため、 データベースに渡される必要がなかった データベース問い合わせの割合。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥Program ¥HitRatio)
Program SpaceUsed % (PROGRAM_SPA CE_USED)	Program バッファストレージの使用率。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥Program ¥SpaceUsed)
Program Swap (PROGRAM_SW AP)	Program バッファで発生した、1 分ご とのバッファフルによるスワップ回数。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥Program ¥Swap)
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	7.00 以降	—
Record Type (INPUT_RECOR D_TYPE)	レコード種別。常に「BUFF」。	COPY	char(8)	No	7.00 以降	—
Screen DirectoryUsed % (SCREEN_DIREC TORY_USED)	Screen バッファのディレクトリの使用 率 (エントリーの数)。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥Screen

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート バージョ ン	データソー ス
Screen DirectoryUsed % (SCREEN_DIREC TORY_USED)	Screen バッファのディレクトリの使用 率 (エントリーの数)。	%	float	No	7.00 以降	¥DirectoryU sed)
Screen HitRatio % (SCREEN_HIT_R ATIO)	Screen バッファに存在したため、デー タベースに渡される必要がなかったデー タベース問い合わせの割合。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥Screen ¥HitRatio)
Screen SpaceUsed % (SCREEN_SPACE _USED)	Screen バッファストレージの使用率。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥Screen ¥SpaceUsed)
Screen Swap (SCREEN_SWAP)	Screen バッファで発生した、1 分ごと のバッファフルによるスワップ回数。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥Screen ¥Swap)
ShortNameTAB DirectoryUsed % (SHORT_NAME_ TAB_DIRECTOR Y_USED)	Short nametab バッファのディレクト リの使用率 (エントリーの数)。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥ShortNameT AB ¥DirectoryU sed)
ShortNameTAB HitRatio % (SHORT_NAME_ TAB_HIT_RATIO)	Short nametab バッファに存在したた め、データベースに渡される必要がな かったデータベース問い合わせの割合。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥ShortNameT AB ¥HitRatio)
ShortNameTAB SpaceUsed % (SHORT_NAME_ TAB_SPACE_USE D)	Short nametab バッファストレージの 使用率。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥ShortNameT AB ¥SpaceUsed)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポートバージョン	データソース
ShortNameTAB Swap (SHORT_NAME_TAB_SWAP)	Short nametab バッファで発生した、1 分ごとのバッファフルによるスワップ回数。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥ShortNameTAB¥Swap)
SingleRecord DirectoryUsed % (SINGLE_RECORD_DIRECTORY_USED)	Single record バッファのディレクトリの使用率 (エントリーの数)。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥SingleRecord ¥DirectoryUsed)
SingleRecord HitRatio % (SINGLE_RECORD_HIT_RATIO)	Single record バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥SingleRecord ¥HitRatio)
SingleRecord SpaceUsed % (SINGLE_RECORD_SPACE_USED)	Single record バッファのバッファストレージの使用率。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥SingleRecord ¥SpaceUsed)
SingleRecord Swap (SINGLE_RECORD_SWAP)	Single record バッファで発生した、1 分ごとのバッファフルによるスワップ回数。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥SingleRecord¥Swap)
System ID (SYSTEM_ID)	SAP システム ID。	COPY	string(9)	No	7.00 以降	—
TableDefinition DirectoryUsed % (TABLE_DEFINITION_DIRECTORY_USED)	Table definition バッファのディレクトリの使用率 (エントリーの数)。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥TableDefinition ¥DirectoryUsed)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポートバージョン	データソース
TableDefinitionHitRatio % (TABLE_DEFINITION_HIT_RATIO)	Table definition バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥TableDefinition ¥HitRatio)
TableDefinitionSpaceUsed % (TABLE_DEFINITION_SPACE_USED)	Table definition バッファストレージの使用率。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥TableDefinition ¥SpaceUsed)
TableDefinitionSwap (TABLE_DEFINITION_SWAP)	Table definition バッファで発生した、1 分ごとのバッファフルによるスワップ回数。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥TableDefinition¥Swap)

SAP Instance Summary (PD_SRV)

機能

SAP Instance Summary (PD_SRV) レコードは、SAP インスタンスについての情報（トランザクションコードが SM51 で確認できる情報に相当）を示します。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	○
Collection Offset	35	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	Yes	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

ODBC キーフィールド

PD_SRV_NAME

ライフタイム

サーバ名の設定から変更まで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：102 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	形式	デルタ	サポート バージョン	データソース
Host (HOST)	SAP インスタンスが動作するホスト名。	string(21)	No	7.00 以降	SM51
Instance Name (INSTANCE_NAME)	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。	string(21)	No	7.00 以降	—

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	形式	デルタ	サポート バージョン	データソース
Interval (INTERVAL)	レコードが格納されたインターバル (Record Time フィールドの値 - 前回取得時の Record Time フィールドの値) の秒数。最初の値は 0。	ulong	No	7.00 以降	—
Name (NAME)	SAP インスタンス名。この名前は通常、 ホスト名、SAP システム ID 名、および システム番号から構成される。rdisp/ myname パラメーターによって設定を変 更できる。	string(21)	No	7.00 以降	SM51
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	time_t	No	7.00 以降	—
Record Type (INPUT_RECORD_ TYPE)	レコード種別。常に「SRV」。	char(8)	No	7.00 以降	—
Serv (SERV)	サービス名。	string(21)	No	7.00 以降	SM51
System ID (SYSTEM_ID)	SAP システム ID。	string(9)	No	7.00 以降	—
TypeList (TYPELIST)	SAP インスタンスのタイプリスト。	string(9)	No	7.00 以降	SM51

SAP Memory Summary (PI_MEM)

機能

SAP Memory Summary (PI_MEM) レコードは、各種 SAP メモリーについての要約情報を示します。SAP インスタンスごとに、1 件のレコードが作成されます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	○
Collection Offset	40	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

なし

レコードサイズ

- 固定部：951 バイト
- 可変部：0 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポートバージョン	データソース
EmSlotRecentPeak % (EM_SLOT_RECENT_PEAK)	最近の、拡張メモリースロット最大使用率。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥R3MemMgmtResources ¥EmSlotRecentPeak)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート バージョ ン	データソー ス
EmSlotsAct % (EM_SLOTS_AC T)	現在の、拡張メモリスロットの使用 率。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥R3MemMgmtR esources ¥EmSlotsAct)
EmSlotsPeak % (EM_SLOTS_PEA K)	拡張メモリスロットの最大使用率。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥R3MemMgmtR esources ¥EmSlotsPea k)
EmSlotsTotal (EM_SLOTS_TO TAL)	拡張メモリスロットの合計数。	COPY	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥R3MemMgmtR esources ¥EmSlotsTot al)
EsAct % (ES_ACT)	現在の、拡張メモリーの使用率。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥R3MemMgmtR esources ¥EsAct)
EsAttached % (ES_ATTACHED)	アタッチされている拡張メモリーの使用 率。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥R3MemMgmtR esources ¥EsAttached)
EsPeak % (ES_PEAK)	拡張メモリーの最大使用率。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥R3MemMgmtR

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート バージョン	データソース
EsPeak % (ES_PEAK)	拡張メモリの最大使用率。	%	float	No	7.00 以降	esources ¥EsPeak)
EsRecentPeak % (ES_RECENT_P EAK)	最近の、拡張メモリの最大使用率。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥R3MemMgmtR esources ¥EsRecentPe ak)
EsTotal (ES_TOTAL)	拡張メモリのサイズ。メガバイト単 位。	COPY	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥R3MemMgmtR esources ¥EsTotal)
HeapAct % (HEAP_ACT)	現在の、ヒープ領域の使用率。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥R3MemMgmtR esources ¥HeapAct)
HeapPeak % (HEAP_PEAK)	ヒープ領域の最大使用率。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥R3MemMgmtR esources ¥HeapPeak)
HeapRecentPeak % (HEAP_RECENT_ PEAK)	最近の、ヒープ領域の最大使用率。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥R3MemMgmtR esources ¥HeapRecent Peak)
HeapTotal (HEAP_TOTAL)	ヒープ領域の合計。メガバイト単位。	COPY	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥R3MemMgmtR

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート バージョ ン	データソー ス
HeapTotal (HEAP_TOTAL)	ヒープ領域の合計。メガバイト単位。	COPY	float	No	7.00 以降	esources ¥HeapTotal)
Instance Name (INSTANCE_NA ME)	SAP インスタンス名。この名前は通常、 ホスト名、SAP システム ID 名、および システム番号から構成される。rdisp/ myname パラメーターによって設定を 変更できる。	COPY	string(21)	No	7.00 以降	—
Interval (INTERVAL)	レコードが格納されたインターバル (Record Time フィールドの値 - 前回 取得時の Recode Time フィールドの 値) の秒数。最初の値は 0。	ADD	ulong	No	7.00 以降	—
PrivWpNo (PRIV_WP_NO)	PRIV モードになったワークプロセス数。	HILO	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥R3MemMgmtR esources ¥PrivWpNo)
R3PagingUsed % (R3_PAGING_US ED)	ページング領域の使用率。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥R3RollPagi ng ¥R3PagingUs ed)
R3RollUsed % (R3_ROLL_USED)	ロール領域の使用率。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥R3RollPagi ng ¥R3RollUsed)
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	7.00 以降	—
Record Type (INPUT_RECOR D_TYPE)	レコード種別。常に「MEM」。	COPY	char(8)	No	7.00 以降	—
System ID (SYSTEM_ID)	SAP システム ID。	COPY	string(9)	No	7.00 以降	—

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート バージョ ン	データソー ス
WpDiaRestart (WP_DIA_RESTA RT)	「リスタート=Yes」のダイアログワーク プロセス数。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥R3MemMgmtR esources ¥WpDiaResta rt)
WpNonDiaRestar t (WP_NON_DIA_ RESTART)	「リスタート=No」のダイアログワーク プロセス数。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥R3MemMgmtR esources ¥WpNonDiaRe start)

Spool Service (PI_SPO)

機能

Spool Service (PI_SPO) レコードは、スプールサービスについての統計情報を示します。このサービスを提供する SAP インスタンスごとに、1 件のレコードが作成されます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	○
Collection Offset	40	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

なし

レコードサイズ

- 固定部：855 バイト
- 可変部：0 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポートバージョン	データソース
DeviceCacheFixed % (DEVICE_CACHE_FIXED)	固定デバイスキャッシュの使用済み領域の割合。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥SpoolService ¥DeviceCacheFixed)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート バージョ ン	データソー ス
DeviceCacheUsed % (DEVICE_CACHED_USED)	デバイスキャッシュ全体の使用済み領域の割合。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥SpoolServ ice ¥DeviceCach eUsed)
HostspoolListUsed % (HOSTSPOOL_LIST_USED)	ホストプール要求リストの使用済み領域の割合。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥SpoolServ ice ¥HostspoolL istUsed)
Instance Name (INSTANCE_NAME)	SAP インスタンス名。この名前は通常、 ホスト名、SAP システム ID 名、および システム番号から構成される。rdisp/ myname パラメーターによって設定を 変更できる。	COPY	string(21)	No	7.00 以降	—
Interval (INTERVAL)	レコードが格納されたインターバル (Record Time フィールドの値 - 前回 取得時の Recode Time フィールドの 値) の秒数。最初の値は 0。	ADD	ulong	No	7.00 以降	—
NumberOfWpSPO (NUMBER_OF_WP_SPO)	プールワークプロセスの数。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥SpoolServ ice ¥NumberOfWp SPO)
QueueLength % (QUEUE_LENGTH)	ディスパッチャーキューの使用済み領域 の割合。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥SpoolServ ice ¥QueueLengt h)
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	7.00 以降	—

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート バージョ ン	データソー ス
Record Type (INPUT_RECOR D_TYPE)	レコード種別。常に「SPO」。	COPY	char(8)	No	7.00 以降	—
ServiceQueue % (SERVICE_QUE UE)	スプール要求キューの使用済み領域の割合。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥SpoolServi ce ¥ServiceQue ue)
ServiceQueuePag es (SERVICE_QUE UE_PAGES)	スプール要求キューにあるページ数。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥SpoolServi ce ¥ServiceQue uePages)
ServiceQueuePriv % (SERVICE_QUE UE_PRIV)	順次処理されるスプール要求キューの使用済み領域の割合。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥SpoolServi ce ¥ServiceQue uePriv)
System ID (SYSTEM_ID)	SAP システム ID。	COPY	string(9)	No	7.00 以降	—
Utilization % (UTILIZATION)	スプールワークプロセスの使用率。このフィールドの値は、スプールワークプロセス全体での平均の割合である。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥SpoolServi ce ¥Utilisatio n)

System Log Monitor Command (PD_SLMX)

機能

System Log Monitor Command (PD_SLMX) レコードは、SAP システムのシステムログ情報の抽出結果を示します。SAP インスタンスごとに、1 件のレコードが作成されます。

注意

- このレコードはリアルタイムレポートでは表示できません。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	○
Collection Offset	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

なし

レコードサイズ

- 固定部：5,073 バイト
- 可変部：0 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	形式	デルタ	サポートバージョン	データソース
Elapsed Time (ELAPSED_TIME)	コマンドの実行時間。ミリ秒単位。	ulong	No	7.00 以降	—
Exit Code (EXIT_CODE)	コマンドの終了コード。	ulong	No	7.00 以降	—

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	形式	デルタ	サポート バージョン	データソース
Instance Name (INSTANCE_NAME)	SAP インスタンス名。この名前は通常、 ホスト名、SAP システム ID 名、および システム番号から構成される。rdisp/ myname パラメーターによって設定を変 更できる。	string(21)	No	—	—
Interval (INTERVAL)	レコードが格納されたインターバル (Record Time フィールドの値 - 前回取 得時の Recode Time フィールドの値) の秒数。最初の値は 0。	ulong	No	—	—
Path (PATH)	コマンドのパス (引数部分は含まない)。	string(256)	No	7.00 以降	—
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	time_t	No	—	—
Record Type (INPUT_RECORD_ TYPE)	レコード種別。常に「SLMX」。	char(8)	No	—	—
Stderr Buffer (STDERR_BUFFER)	コマンドの標準エラー出力バッファ。	string(2049)	No	7.00 以降	—
Stdout Buffer (STDOUT_BUFFER)	コマンドの標準出力バッファ。	string(2049)	No	7.00 以降	—
System ID (SYSTEM_ID)	SAP システム ID。	string(9)	No	—	—

Update1 Service (PI_UPD1)

機能

Update1 Service (PI_UPD1) レコードは、V1 更新サービスについての統計情報を示します。このサービスを提供する SAP インスタンスごとに、1 件のレコードが作成されます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	○
Collection Offset	40	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

なし

レコードサイズ

- 固定部：775 バイト
- 可変部：0 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポートバージョン	データソース
Instance Name (INSTANCE_NAME)	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。	COPY	string(21)	No	7.00 以降	—
Interval (INTERVAL)	レコードが格納されたインターバル (Record Time フィールドの値 - 前回	ADD	ulong	No	7.00 以降	—

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート バージョ ン	データソー ス
Interval (INTERVAL)	取得時の Recode Time フィールドの 値) の秒数。最初の値は 0。	ADD	ulong	No	7.00 以降	—
NumberOfWpUD 1 (NUMBER_OF_ WP_UD1)	更新ワークプロセスの数。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥Performanc eU1¥Number0 fWpUD1)
QueueTime (QUEUE_TIME)	ディスパッチャークューでの平均待ち時 間。ミリ秒単位。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥Performanc eU1¥QueueTi me)
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	7.00 以降	—
Record Type (INPUT_RECOR D_TYPE)	レコード種別。常に「UPD1」。	COPY	char(8)	No	7.00 以降	—
ResponseTime (RESPONSE_TIM E)	更新サービスの平均応答時間。ミリ秒単 位。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥Performanc eU1¥Respons eTime)
System ID (SYSTEM_ID)	SAP システム ID。	COPY	string(9)	No	7.00 以降	—
Utilization % (UTILIZATION)	更新ワークプロセスの使用率。この フィールドの値は、更新ワークプロセス 全体での平均の割合である。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥Performanc eU1¥Utilisa tion)

Update2 Service (PI_UPD2)

機能

Update2 Service (PI_UPD2) レコードは、V2 更新サービスについての統計情報を示します。このサービスを提供する SAP インスタンスごとに、1 件のレコードが作成されます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	○
Collection Offset	40	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

なし

レコードサイズ

- 固定部：775 バイト
- 可変部：0 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポートバージョン	データソース
Instance Name (INSTANCE_NAME)	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。	COPY	string(21)	No	7.00 以降	—
Interval (INTERVAL)	レコードが格納されたインターバル (Record Time フィールドの値 - 前回	ADD	ulong	No	7.00 以降	—

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート バージョ ン	データソー ス
Interval (INTERVAL)	取得時の Recode Time フィールドの 値) の秒数。最初の値は 0。	ADD	ulong	No	7.00 以降	—
NumberOfWpUD 2 (NUMBER_OF_ WP_UD2)	更新ワークプロセスの数。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥Performanc eU2¥Number0 fWpUD2)
QueueTime (QUEUE_TIME)	ディスパッチャークューでの平均待ち時 間。ミリ秒単位。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥Performanc eU2¥QueueTi me)
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	7.00 以降	—
Record Type (INPUT_RECOR D_TYPE)	レコード種別。常に「UPD2」。	COPY	char(8)	No	7.00 以降	—
ResponseTime (RESPONSE_TIM E)	更新サービスの平均応答時間。ミリ秒単 位。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥Performanc eU2¥Respons eTime)
System ID (SYSTEM_ID)	SAP システム ID。	COPY	string(9)	No	7.00 以降	—
Utilization % (UTILIZATION)	更新ワークプロセスの使用率。この フィールドの値は、更新ワークプロセス 全体での平均の割合である。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥Performanc eU2¥Utilisa tion)

User defined Monitor (Perf.) (PI_UMP)

機能

User defined Monitor (Perf.) (PI_UMP) レコードは、SAP システムのモニター情報のうち、ユーザーの定義に基づいて収集したパフォーマンス情報を示します。指定した SAP システムのモニター情報のうち、MTE タイプがパフォーマンス属性である MTE ごとに、1 件のレコードが作成されます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	○
Collection Offset	45	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	Yes	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

ODBC キーフィールド

PI_UMP_MTE_NAME

ライフタイム

なし

レコードサイズ

- 固定部：833 バイト
- 可変部：293 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポートバージョン	データソース
Instance Name (INSTANCE_NAME)	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。	COPY	string(21)	No	7.00 以降	—

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート バージョ ン	データソー ス
Interval (INTERVAL)	レコードが格納されたインターバル (Record Time フィールドの値 - 前回 取得時の Recode Time フィールドの 値) の秒数。最初の値は 0。	ADD	ulong	No	7.00 以降	—
Measured Date (MEASURED_DA TE)	パフォーマンス値 (Measured Value) の測定日付。	COPY	String(9)	No	7.00 以降	RZ20
Measured Time (MEASURED_TI ME)	パフォーマンス値 (Measured Value) の測定時刻。	COPY	String(7)	No	7.00 以降	RZ20
Measured Value (MEASURED_VA LUE)	パフォーマンス値 (SAP システム側で 計算済みの値)。	HILO	float	No	7.00 以降	RZ20
Monitor Name (MONITOR_NA ME)	監視対象モニター名。	COPY	string(61)	No	7.00 以降	RZ20
Monitor Set (MONITOR_SET)	監視対象モニターセット名。	COPY	string(61)	No	7.00 以降	RZ20
MTE Context (MTE_CONTEX T)	MTE の Context 部の名称。	COPY	string(41)	No	7.00 以降	RZ20
MTE Name (MTE_NAME)	MTE 名 (MTE の System ID 部, Context 部, Objectname 部, Shortname 部を'¥' で連結したもの。 例: SAPシステムID¥SAPインスタンス名 ¥Background¥Utilisation)。	COPY	string(132)	No	7.00 以降	RZ20
MTE Objectname (MTE_OBJECTN AME)	MTE の Objectname 部の名称。	COPY	string(41)	No	7.00 以降	RZ20
MTE Shortname (MTE_SHORTNA ME)	MTE の Shortname 部の名称。	COPY	string(41)	No	7.00 以降	RZ20
MTE System ID (MTE_SYSID)	MTE の System ID 部の名称。	COPY	string(9)	No	7.00 以降	RZ20
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	7.00 以降	—
Record Type	レコード種別。常に「UMP」。	COPY	char(8)	No	7.00 以降	—

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート バージョ ン	データソー ス
(INPUT_RECOR D_TYPE)	レコード種別。常に「UMP」。	COPY	char(8)	No	7.00 以降	—
System ID (SYSTEM_ID)	SAP システム ID。	COPY	string(9)	No	7.00 以降	—
Unit (UNIT)	パフォーマンス値の単位。	COPY	string(5)	No	7.00 以降	RZ20
Value (VALUE)	パフォーマンス値。	HILO	float	No	7.00 以降	RZ20

Work Process Summary (PD)

機能

Work Process Summary (PD) レコードは、ワークプロセスの概要（トランザクションコード SM50 で確認できる情報に相当）を示します。SAP インスタンスごとに、1 件のレコードが作成されます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset	35	○
Log	Yes	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	Yes	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

ODBC キーフィールド

PD_NO

ライフタイム

ワークプロセス数の設定から変更まで。

レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：273 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	形式	デルタ	サポート バージョン	データソース
Action (ACTION)	ワークプロセスの該当アクティビティ名。	string(26)	No	7.00 以降	SM50
Bname (BNAME)	現在ワークプロセスが処理している依頼のユーザー名。	string(13)	No	7.00 以降	SM50
CPU (CPU)	予約フィールドのため、使用できない。	string(9)	No	7.00 以降	SM50
Dumps	ワークプロセスが異常終了した回数。	string(3)	No	7.00 以降	SM50

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	形式	デルタ	サポート バージョン	データソース
(DUMPS)	ワークプロセスが異常終了した回数。	string(3)	No	7.00 以降	SM50
ElTime (ELTIME)	ワークプロセスの実行経過時間。秒単位。	string(7)	No	7.00 以降	SM50
Instance Name (INSTANCE_NAME)	SAP インスタンス名。この名前は通常、 ホスト名、SAP システム ID 名、および システム番号から構成される。rdisp/ myname パラメーターによって設定を変 更できる。	string(21)	No	7.00 以降	—
Interval (INTERVAL)	レコードが格納されたインターバル (Record Time フィールドの値 - 前回取 得時の Recode Time フィールドの値) の秒数。最初の値は 0。	ulong	No	7.00 以降	—
ManDt (MANDT)	現在ワークプロセスが処理している依頼 のクライアント名。	string(4)	No	7.00 以降	SM50
No (NO)	ワークプロセス番号。	string(3)	No	7.00 以降	SM50
Pid (PID)	ホストシステムでのワークプロセスのプ ロセス ID。	string(9)	No	7.00 以降	SM50
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	time_t	No	7.00 以降	—
Record Type (INPUT_RECORD_ TYPE)	レコード種別。常に「PD」。	char(8)	No	7.00 以降	—
Report (REPORT)	ワークプロセスが実行しているレポート 名。	string(41)	No	7.00 以降	SM50
Restart (RESTART)	異常終了したイベントで、ワークプロセ スが自動的に再実行されるかどうかを Yes (再実行される) または No (再実 行されない) で表す。	string(5)	No	7.00 以降	SM50
Sem (SEM)	ワークプロセスが待ち状態にあるセマ フォの番号。	string(3)	No	7.00 以降	SM50
Server (SERVER)	サーバ名。	string(21)	No	7.00 以降	SM50
Status (STATUS)	ワークプロセスの現在の状態 (例: 待機 中, 実行中)。	string(8)	No	7.00 以降	SM50
System ID (SYSTEM_ID)	SAP システム ID。	string(9)	No	7.00 以降	—

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	形式	デルタ	サポート バージョン	データソース
Table (TABLE)	ワークプロセスの最終アクセス DB テーブル名。	string(31)	No	7.00 以降	SM50
Typ (TYP)	ワークプロセスのタイプ (例: DIA, UPD, UP2, ENQ, BGD, SPO)。	string(4)	No	7.00 以降	SM50
WaitInf (WAITINF)	待機理由についての追加情報。	string(41)	No	7.00 以降	SM50
WaitTim (WAITTIM)	待機開始時刻。	string(9)	No	7.00 以降	SM50
Waiting (WAITING)	ワークプロセスが待機中である理由。	string(6)	No	7.00 以降	SM50

WorkLoad Summary Interval (PI)

機能

WorkLoad Summary Interval (PI) レコードは、ダイアログタスクのワークロード時間統計を取得および分析するための情報を示します。SAP インスタンスごとに、1 件のレコードが作成されます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset	0	○
Log	Yes	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Realtime Report Data Collection Mode	Reschedule	○

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

なし

レコードサイズ

- 固定部：1,075 バイト
- 可変部：0 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート バージョ ン	データソー ス
CUA HitRatio % (CUA _HIT_RATIO)	CUA バッファに存在したため、データ ベースに渡される必要がなかったデータ ベース問い合わせの割合。CUA バッ ファについては、 SAP Buffer Summary (PI_BUFF) レコードを参照 のこと。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インス タンス名 ¥CUA ¥HitRatio)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート バージョ ン	データソー ス
DBRequestTime (DB_REQUEST_ TIME)	論理データベース要求を処理するための 平均時間。ミリ秒単位。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥Dialog ¥DBRequestT ime)
DialogSteps (DIALOG_STEPS)	1 分当たりの平均ダイアログステップ数。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥Dialog ¥DialogStep s)
EsAct % (ES_ACT)	現在の、拡張メモリーの使用率。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥R3MemMgmtR esources ¥EsAct)
FieldDescription HitRatio % (FIELD_DESCRIP TION_HIT_RATI O)	Field description バッファに存在した ため、データベースに渡される必要がな かったデータベース問い合わせの割合。 Field description バッファについては、 SAP Buffer Summary (PI_BUFF) レ コードを参照のこと。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥FieldDescr iption ¥HitRatio)
FrontendNetTime (FRONTEND_NE T_TIME)	フロントエンドからアプリケーション サーバへの最初のデータ転送時と、ア プリケーションサーバからフロントエンド への最後のデータ転送時にネットワーク で使われる時間。GuiCallBackTime フィールドの値は含まれていない。ミリ 秒単位。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥Dialog ¥FrontEndNe tTime)
FrontendRespon seTime (FRONTEND_RE SPONSE_TIME)	自分の要求が処理されるのをユーザーが フロントエンドで待つ平均時間。つま り、応答時間、ネットワーク転送時間、 およびフロントエンド処理時間の合計平 均時間。ミリ秒単位。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥Dialog ¥FrontendRe sponseTime)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポートバージョン	データソース
GenericKey HitRatio % (GENERIC_KEY_HIT_RATIO)	Generic key バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。Generic key バッファについては、 SAP Buffer Summary (PI_BUFF) レコードを参照のこと。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥GenericKey ¥HitRatio)
HeapAct % (HEAP_ACT)	現在の、ヒープ領域の使用率。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥R3MemMgmtResources ¥HeapAct)
InitialRecords HitRatio % (INITIAL_RECORDS_HIT_RATIO)	Initial records バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。Initial records バッファについては、 SAP Buffer Summary (PI_BUFF) レコードを参照のこと。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥InitialRecords ¥HitRatio)
Instance Name (INSTANCE_NAME)	SAP インスタンス名。この名前は通常、ホスト名、SAP システム ID 名、およびシステム番号から構成される。rdisp/myname パラメーターによって設定を変更できる。	COPY	string(21)	No	7.00 以降	—
Interval (INTERVAL)	レコードが格納されたインターバル (Record Time フィールドの値 - 前回取得時の Recode Time フィールドの値) の秒数。最初の値は 0。	ADD	ulong	No	7.00 以降	—
Load+GenTime (LOAD_GENTIME)	データベースからのソーステキスト、グラフィカルユーザーインターフェース、および画面情報の平均ロードと作成時間。ミリ秒単位。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥Dialog ¥Load+GenTime)
PrivWpNo (PRIV_WP_NO)	PRIV モードになったワークプロセス数。	HI	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥R3MemMgmtResources ¥PrivWpNo)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート バージョン	データソース
Program HitRatio % (PROGRAM_HIT_RATIO)	Program バッファに存在したため、データベースに渡される必要がなかったデータベース問い合わせの割合。Program バッファについては、SAP Buffer Summary (PI_BUFF) レコードを参照のこと。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥Program ¥HitRatio)
QueueTime (QUEUE_TIME)	ディスパッチャー待ち行列での平均待ち時間。ユーザー要求がディスパッチャーキューに入っている平均待ち時間。ミリ秒単位。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥Dialog ¥QueueTime)
R3PagingUsed % (R3_PAGING_USED)	ページング領域の使用率。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥R3RollPaging ¥R3PagingUsed)
R3RollUsed % (R3_ROLL_USED)	ロール領域の使用率。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥R3RollPaging ¥R3RollUsed)
Record Time (RECORD_TIME)	レコードが作成された時刻。	COPY	time_t	No	7.00 以降	—
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード種別。常に「PI」。	COPY	char(8)	No	7.00 以降	—
ResponseTime (RESPONSE_TIME)	ダイアログステップの処理時間の平均値。ミリ秒単位。ダイアログステップの処理に必要な全処理時間を含む。データベース処理時間を含むが、ネットワーク転送時間やフロントエンド処理時間は含まれない。ダイアログステップが存在しない時間帯は、最後にダイアログステップが存在した時間帯の処理時間の平均値を報告する。*	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP インスタンス名 ¥Dialog ¥ResponseTime)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート バージョ ン	データソー ス
ResponseTime:St andardTran. (RESPONSE_TIM E_STANDARD_T RAN)	標準トランザクションの応答時間。ミリ 秒単位。	AVG	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥Dialog ¥ResponseTi me(Standard Tran.))
Screen HitRatio % (SCREEN_HIT_R ATIO)	Screen バッファに存在したため、デー タベースに渡される必要がなかったデー タベース問い合わせの割合。Screen バッファについては、 SAP Buffer Summary (PI_BUFF) レコードを参照 のこと。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥Screen ¥HitRatio)
ShortNameTAB HitRatio % (SHORT_NAME_ TAB_HIT_RATIO)	Short nametab バッファに存在したた め、データベースに渡される必要がな かったデータベース問い合わせの割合。 Short nametab バッファについては、 SAP Buffer Summary (PI_BUFF) レ コードを参照のこと。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥ShortNameT AB ¥HitRatio)
SingleRecord HitRatio % (SINGLE_RECOR D_HIT_RATIO)	Single record バッファに存在したた め、データベースに渡される必要がな かったデータベース問い合わせの割合。 Single record バッファについては、 SAP Buffer Summary (PI_BUFF) レ コードを参照のこと。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥SingleReco rd ¥HitRatio)
System ID (SYSTEM_ID)	SAP システム ID。	COPY	string(9)	No	7.00 以降	—
TableDefinition HitRatio % (TABLE_DEFINI TION_HIT_RATI O)	Table definition バッファに存在したた め、データベースに渡される必要がな かったデータベース問い合わせの割合。 Table definition バッファについては、 SAP Buffer Summary (PI_BUFF) レ コードを参照のこと。	%	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥TableDefin ition ¥HitRatio)
UsersLoggedIn (USERS_LOGGE D_IN)	ログインしているユーザー数。	HILO	float	No	7.00 以降	RZ20 (SAP システム ID ¥SAP イン スタンス名 ¥Dialog ¥UsersLogge dIn)

注※

ダイアログステップが存在しない時間帯は、SAP システム上でダイアログステップの処理時間の平均値が更新されません。このため、SAP システム上で最後に更新されたダイアログステップの処理時間の平均値（つまり、最後にダイアログステップが存在した時間帯の処理時間の平均値）が報告されます。詳細については、「10. レコード」の「レコードの注意事項」の「PI レコードタイプのレコードに関する注意事項」を参照してください。

11

コマンド

この章では、PFM - Agent for Enterprise Applications のコマンドについて説明します。

PFM - Agent for Enterprise Applications のコマンドの記載形式および文法規則は、Windows と Linux とで共通です。

Windows の場合、コマンドプロンプトからコマンドを実行します。

Linux の場合、制御端末からコマンドを実行します。

コマンドの記載形式

ここでは、コマンドの記載形式として、コマンドの指定方法と、コマンドの文法の説明に使用する記号について説明します。

コマンドの指定方法

コマンドの指定形式を次に示します。

```
jpctxxx [-オプションA [値a [, 値b [, 値c...]]]] ... (1)
        [-オプションB [値a [, 値b [, 値c...]]]] ... (1) } ... (2)
        [任意名X[任意名Y[任意名Z...]]]
```

(1)を「オプション」と呼びます。(2)を「引数」と呼びます。

コマンドの文法の説明に使用する記号

コマンドの文法の説明に使用する記号を次の表に示します。

表 11-1 コマンドの文法の説明に使用する記号

記号	意味と例
 (ストローク)	複数の項目に対して項目間の区切りを示し、「または」の意味を示します。 (例) 「A B C」は、「A, B, または C」を示します。
{ } (波括弧)	この記号で囲まれている複数の項目の中から、必ず一組の項目を選択します。項目と項目の区切りは「 」で示します。 (例) 「{A B C}」は、「A, B, または C のどれかを必ず指定する」ことを示します。
[] (角括弧)	この記号で囲まれている項目は、任意に指定できます (省略できます)。 (例) 「[A]」は、「必要に応じて A を指定する」ことを示します (必要でない場合は、A を省略できます)。 「[B C]」は、「必要に応じて B, または C を指定する」ことを示します (必要でない場合は、B および C を省略できます)。
... (点線)	この記号の直前に示された項目を繰り返して複数個、指定できます。なお、項目を複数個指定する場合は、項目の区切りに 1 バイトの空白文字 (半角スペース) を使用します。 (例) 「A B...」は、「A の後に、B を複数個指定できる」ことを示します。
_ (下線)	括弧で囲まれているすべての項目を省略したときに、システムが採用する値を示します。 (例) 「[A B]」は、「A および B を指定しなかった場合、システムは A を採用する」ことを示します。

ワイルドカード文字について

コマンドを実行する際に、複数のサービスまたはホスト名を指定する場合、ワイルドカード文字を使用できます。使用できるワイルドカード文字を次に示します。

- * : 任意の 1 文字以上の文字列を示します。
- ? : 任意の 1 文字を示します。

Linux で、ワイルドカード文字を指定する場合、シェルで解析されるのを防ぐため、「*」のように「」で囲んで指定してください。

コマンド共通の注意事項

カレントディレクトリをコマンドの格納先ディレクトリに移動してからコマンドを実行してください。コマンドの格納先ディレクトリについては、各コマンドの説明を参照してください。

コマンド一覧

PFM - Agent for Enterprise Applications のコマンド一覧を次の表に示します。

各コマンドの詳細説明は、次の節以降にアルファベット順に記載しています。

表 11-2 PFM - Agent for Enterprise Applications コマンドの一覧

コマンド名	機能	実行ホスト	必要な実行権限	
			Windows	Linux
<code>jr3alget</code>	SAP システムの CCMS アラート情報を抽出する。	PFM - Agent for Enterprise Applications	なし	なし
<code>jr3slget</code>	SAP システムのシステムログ情報を抽出する。	PFM - Agent for Enterprise Applications	なし	なし

形式

```
jr3alget [RFC接続情報]
          [ターゲット情報]
          [-lasttime タイムスタンプファイル名]
          [出力先]
          [-cnf 環境パラメーター設定ファイル名]
          [-help]
          [-v]
```

機能

jr3alget コマンドは、SAP システムの CCMS アラート情報を抽出します。

コマンドを実行できるホスト

PFM - Agent for Enterprise Applications

実行権限

Windows の場合

なし

Linux の場合

なし

格納先ディレクトリ

Windows の場合

```
インストール先フォルダ¥agtm¥evtrap¥
```

Linux の場合

```
/opt/jp1pc/agtm/evtrap/
```

引数

RFC 接続情報

コマンド実行時に、SAP システムとの RFC 接続を確立するための情報を指定します。

環境パラメーター設定ファイルで、RFC 接続情報 (CONNECT セクション) が指定されている場合、これらの引数の指定を省略できます。環境パラメーター設定ファイルおよびコマンドの両方で RFC 接続情報が指定された場合、コマンドでの指定が優先されます。環境パラメーター設定ファイルについては、「6.4.3 コマンドを実行して CCMS アラート情報を抽出する場合の環境パラメーター設定ファイル」を参照してください。

RFC 情報の各引数について説明します。

-h アプリケーションサーバホスト名

接続先のアプリケーションサーバホスト名を指定します。指定できる値は、1~100バイトの半角英数字です。アプリケーションサーバホスト名は、次の形式で指定できます。

- hosts ファイルに指定されたホスト名
- IP アドレス
- SAP ルーターアドレス

アプリケーションサーバホスト名は、トランザクションコード SM51 で確認できます。

このオプションを指定する場合は、-s オプションも指定する必要があります。

-s システム番号

-h オプションで指定したアプリケーションサーバホストで識別するためのシステム番号を指定します。指定できる値は、0~99の数値です。

このオプションを指定する場合は、-h オプションも指定する必要があります。

-c クライアント名

接続に利用するユーザーのクライアント名を1~3バイトで指定します。指定できる値は、0~999の数値です。

このオプションを指定する場合は、-u、および-p または-p2 オプションも指定する必要があります。

-u ユーザー名

接続に利用するユーザー名を指定します。指定できる値は、1~12バイトの半角英数字です。

このオプションを指定する場合は、-c、および-p または-p2 オプションも指定する必要があります。

指定できる SAP ユーザーについては「[接続に使用する SAP ユーザー](#)」を参照してください。

-p パスワード

-u オプションで指定したユーザーのパスワードを指定します。指定できる値は、1~8バイトの半角文字列です。

このオプションは、-p2 オプションと同時に指定できません。

このオプションを指定する場合は、-c、および-u オプションも指定する必要があります。

このオプションは、SAP システム側で従来型のパスワードルールが適用されている場合に指定します。

パスワードに指定できる文字については「[接続に使用する SAP ユーザー](#)」を参照してください。

-p2 拡張パスワード

SAP NetWeaver 7.0 以降をベースシステムとした拡張パスワード対応の SAP システムへ接続する場合、-u オプションで指定したユーザーの拡張パスワードを指定します。指定できる値は、1~40バイトの半角文字列です。英字の大文字と小文字は区別されます。

このオプションは、-p オプションと同時に指定できません。

このオプションを指定する場合は、-c、および-u オプションも指定する必要があります。

このオプションは、SAP システム側で拡張パスワードルールが適用されている場合に指定します。

拡張パスワードに指定できる文字については「[接続に使用する SAP ユーザー](#)」を参照してください。

-l 言語

-u オプションで指定したユーザーの言語を指定します。指定できる値は、SAP システムで使用されている、2 バイトの ISO ID または 1 バイトの言語キーです。例えば、次のように指定します。

- 日本語の場合：JA
- 日本語以外の場合：EN

このオプションの指定を省略した場合、接続先システムで定義されているユーザーの言語が仮定されます。

このオプションを指定する場合は、-c、-u、および-p または-p2 オプションも指定する必要があります。

-codepage コードページ

接続先の Unicode 版 SAP システムで文字コードを変換するときに使用するコードページを指定します。コードページは、-l オプションの言語と組み合わせて指定する必要があります。

次の組み合わせで設定してください。次の組み合わせ以外の言語とコードページを指定した場合、SAP システムから取得した情報が文字化けする可能性があります。

表 11-3 言語とコードページの指定内容の組み合わせ

接続先 SAP システム	接続言語	言語 (-l)	コードページ (-codepage)
Unicode 版	日本語	JA	8000
	英語	EN	指定する必要はありません。指定する場合は、1100 を指定してください。
非 Unicode 版	日本語	JA	指定する必要はありません。指定する場合は、8000 を指定してください。
	英語	EN	指定する必要はありません。指定する場合は、1100 を指定してください。

接続先の Unicode 版 SAP システムで文字コードを変換するときに使用するコードページは、SAP システムが提供する環境変数 SAP_CODEPAGE でも設定することができます。環境変数 SAP_CODEPAGE とこのオプションの両方でコードページが指定された場合は、このオプションの指定が有効となります。

このオプションの指定を省略した場合、接続先システムのデフォルトコードページが仮定されます。このオプションを指定する場合は、-c、-u、および-p または-p2 オプションも指定する必要があります。

ターゲット情報

抽出対象の CCMS アラート情報を特定するための情報を指定します。

環境パラメーター設定ファイルでターゲット情報 (TARGET セクション) が指定されている場合は、これらの引数の指定を省略できます。環境パラメーター設定ファイルおよびコマンドの両方でターゲット接続情報が指定された場合、コマンドでの指定が優先されます。環境パラメーター設定ファイルにつ

いては、「6.4.3 コマンドを実行して CCMS アラート情報を抽出する場合の環境パラメーター設定ファイル」を参照してください。

ターゲット情報の各引数について説明します。

-ms モニターセット名

モニターセット名を指定します。指定できる値は、1~60 バイトの半角英数字です。モニターセット名とは、SAP システムの警告モニター（トランザクションコード RZ20）で、「CCMS 監視セット」として表示される名称です。

このオプションを指定する場合は、-mn オプションも指定する必要があります。

-mn モニター名

モニターセット内に定義されているモニター名を指定します。指定できる値は、1~60 バイトの半角英数字です。モニター名とは、SAP システムの警告モニター（トランザクションコード RZ20）で、CCMS 監視セットのツリーに表示される名称です。

このオプションを指定する場合は、-ms オプションも指定する必要があります。

-lasttime タイムスタンプファイル名

前回のコマンド実行時以降に出力された CCMS アラート情報だけを抽出する場合に、前回の抽出時刻を管理するためのタイムスタンプファイル名を指定します。

指定できる値は、1~255 バイトの半角文字列です。

相対パスで指定する場合、コマンドの作業ディレクトリからの相対パスを指定してください。ただし、環境パラメーター設定ファイルの COMMAND セクションの WORKDIR ラベルで、コマンドの作業ディレクトリを指定していない場合、カレントディレクトリからの相対パスを指定してください。

このオプションの指定を省略した場合、コマンド実行日の 0 時 0 分 0 秒から 23 時 59 分 59 秒までの期間が仮定されます。

このオプションの初回実行時に、指定したタイムスタンプファイルが存在しない場合、新規に作成されます。初回実行時は、CCMS アラート情報が出力されません。

出力先

CCMS アラート情報の出力先を指定します。このオプションの指定を省略した場合、CCMS アラート情報は、改行コードで区切られてコマンドの標準出力に出力されます。

CCMS アラート情報の出力ファイルの形式には、次の 2 種類があります。

- **WRAP1**

CCMS アラート情報が一定の容量に達すると、ラップアラウンドして再び先頭からデータを上書きする形式のファイルです。出力ファイル数は、1 つです。

- **WRAP2**

CCMS アラート情報が一定の容量に達してラップアラウンドするとき、データを削除して再び先頭からデータを書き込む形式のファイルです。1 つ目のファイルが一定の容量に達すると、ラップアラウンドして 2 つ目のファイルに書き込みます。このとき、2 つ目のファイルのデータを削除し、先頭からデータを書き込みます。複数のファイルすべてで一定の容量に達すると、1 つ目のファイルに戻ってデータを削除し、先頭からデータを書き込みます。

出力ファイルは2~9個用意できます。デフォルトは5個です。出力ファイルの個数は、環境パラメーター設定ファイルのEXTRACTFILEセクションのNUMラベルで指定します。

出力ファイルの形式を変更する場合は、事前に出力ファイルを監視している製品を停止し、出力ファイルとその管理ファイル（存在する場合）を削除してください。

出力先の各引数について説明します。

-x WRAP1 形式の格納ファイル名

CCMS アラート情報を格納する WRAP1 形式のファイル名を、相対パスまたはフルパスで指定します。指定できる値は、1~251 バイトの半角文字列です。

相対パスで指定する場合、コマンドの作業ディレクトリからの相対パスを指定してください。ただし、環境パラメーター設定ファイルのCOMMANDセクションのWORKDIRラベルで、コマンドの作業ディレクトリを指定していない場合、カレントディレクトリからの相対パスを指定してください。

このファイルの先頭には、管理情報として1行のヘッダーがあります。

ファイルサイズのデフォルトは10,240キロバイトです。ファイルサイズを変更する場合は、環境パラメーター設定ファイルのEXTRACTFILEセクションのSIZEラベルで指定してください。

格納ファイルと同じディレクトリに、格納ファイル名.ofsという名称で管理ファイルが作成されます。たとえば、格納ファイル名としてALERTを指定したとき、ALERTファイルとは別にALERT.ofsファイルが管理ファイルとして作成されます。格納ファイルを削除する場合は、この管理ファイルも合わせて削除してください。

-x オプション、-x2 オプション、-xw オプションは同時に指定できません。

-xw WRAP2 形式複数面出力の格納ファイル名

CCMS アラート情報を格納する WRAP2 形式のファイル名を指定します。指定できる値は、1~254 バイトの半角文字列です。ファイル名は、指定されたファイル名の末尾に1バイトの数字が付与された名称で格納されます。

ここで付与される数字は、環境パラメーター設定ファイルのEXTRACTFILEセクションのNUMラベルで設定した値を基に、1~「NUMラベルの値」の範囲で付与されます。例えば、「ALERT」を指定した場合、デフォルトではALERT1~ALERT5まで格納ファイルを生成します。

相対パスで指定する場合、コマンドの作業ディレクトリからの相対パスを指定してください。ただし、環境パラメーター設定ファイルのCOMMANDセクションのWORKDIRラベルで、コマンドの作業ディレクトリを指定していない場合、カレントディレクトリからの相対パスを指定してください。

ファイルサイズのデフォルトは10,240キロバイトです。ファイルサイズを変更する場合は、環境パラメーター設定ファイルのEXTRACTFILEセクションのSIZEラベルで指定してください。

-xw オプション、-x オプション、-x2 オプションは同時に指定できません。

-x2

環境パラメーター設定ファイルのEXTRACTFILEセクションのX2PATHラベルで設定したファイルに、CCMS アラート情報を出力する場合に指定します。

-x2 オプション、-x オプション、-xw オプションは同時に指定できません。

-cnf 環境パラメーター設定ファイル名

コマンドが参照する環境パラメーター設定ファイル名を指定します。指定できる値は、1~255バイトの半角文字列です。

相対パスで指定する場合、コマンドのカレントディレクトリからの相対パスを指定してください。

このオプションの指定を省略した場合、カレントディレクトリ下のデフォルト環境パラメーター設定ファイル `jr3alget.ini` が仮定されます。デフォルト環境パラメーター設定ファイルが存在しない場合、PFM - Agent for Enterprise Applications でのデフォルトの設定値が仮定されます。

環境パラメーター設定ファイルおよびデフォルトの設定値については、「[6.4.3 コマンドを実行して CCMS アラート情報を抽出する場合の環境パラメーター設定ファイル](#)」を参照してください。

-help

`jr3alget` コマンドの使用方法を標準出力に出力します。

-v

標準出力に `jr3alget` コマンドの処理状況を示すメッセージを出力します。このオプションの指定を省略した場合、コマンドの処理状況を示すメッセージは出力されません。

接続に使用する SAP ユーザー

`jr3alget` コマンドは CCMS アラート情報を収集するために、SAP 社の通信プロトコルである RFC を使用して、SAP システム側に定義されている外部管理インターフェースを実行します。詳細については、「[3.1.5 \(2\) PFM - Agent for Enterprise Applications で使用する SAP ユーザーの作成](#)」を参照してください。

注意事項

- CCMS アラート情報は、SAP システム内で1つのリソースとして扱われていて、どのアプリケーションサーバからも参照できるため、接続先のアプリケーションサーバは、任意です。1つの SAP システムにつき、1つだけコマンドを実行するようにしてください。
- リモート監視機能を使用する場合、コマンドの引数に指定する RFC 接続情報やターゲット情報、および環境パラメーター設定ファイルの CONNECT セクションには、監視対象の SAP システムの情報（ホスト名やインスタンス名など）を指定してください。

出力形式および内容

CCMS アラート情報は、デフォルトでは次の形式で出力されます。< >は、フィールド ID を示します。

```
<ALERTDATE><ALERTTIME><MTSYSID><MTMCNAME><OBJECTNAME><FIELDNAME><VALUE><SEVERITY><MSG>
```

CCMS アラート情報の各値が、各フィールドに対して決められた長さに満たない場合、半角の空白で埋められます。出力される各値について次に説明します。

表 11-4 出力される CCMS アラート情報の内容

フィールド ID	意味	参照元	長さ (単位: バイト)	
<ALSYSID>	SAP システムの名称	アラート ID (AID) (BAPIAID)	8	
<MSEGNAME>	監視セグメント名		40	
<ALUNIQNUM>	AID で使用される一意の ID		10	
<ALERTDATE>	アラート発生日付 (YYYYMMDD)		8	
<ALERTTIME>	アラート発生時刻 (HHMMSS)		6	
<MTSYSID>	SAP システムの名称	アラートに関連づけられている MTE の ID (TID) (BAPITID)	8	
<MTCLASS>	MTE タイプ		3	
<MTNUMRANGE>	番号範囲 (常駐, 一時など)		3	
<MTMCNAME>	監視コンテキスト名		40	
<MTUID>	TID で使用される一意の ID		10	
<VALUE>	警告値 (トランザクションコード RZ20 で見る CCMS アラートエントリーの色に対応) <ul style="list-style-type: none"> • 0: 灰 (無効情報) • 1: 緑 (OK) • 2: 黄 (警告) • 3: 赤 (問題またはエラー) 	アラートの重要度 (BAPIALDATA)	11	
<SEVERITY>	重大度 (0~255。数値が大きいほど重大)			
<FIELDNAME>	MTE 略称	一般プロパティ (BAPIALERT)	40	
<STATUS>	アラートステータス		11	
<OBJECTNAME>	監視オブジェクト名		40	
<MANDT>	クライアント		3	
<USERID>	SAP ユーザー		12	
<REPORTEDBY>	報告者 (論理名)		16	
<STATCHGDAT>	ステータス最終変更日付		8	
<STATCHGBY>	ステータス最終変更者 (論理名)		16	
<STATCHGTIM>	ステータス最終変更時間		6	
<MSCGLID>	ログ属性のメッセージがアラートを発生させたときのメッセージ識別		50	
<MSGCLASS>	メッセージ記録者		メッセージ	16

フィールド ID	意味	参照元	長さ (単位: バイト)
<MSGID>	メッセージ ID	メッセージ	30
<MSGARG1>	メッセージの挿入語句 1 の文字列		128
<ARGTYPE1>	メッセージの挿入語句 1 のタイプ		1
<MSGARG2>	メッセージの挿入語句 2 の文字列		128
<ARGTYPE2>	メッセージの挿入語句 2 のタイプ		1
<MSGARG3>	メッセージの挿入語句 3 の文字列		128
<ARGTYPE3>	メッセージの挿入語句 3 のタイプ		1
<MSGARG4>	メッセージの挿入語句 4 の文字列		128
<ARGTYPE4>	メッセージの挿入語句 4 のタイプ		1
<MSGTEXT>	メッセージテキスト		128
<MSG>	翻訳済みメッセージ	255	

戻り値

0	正常終了した。
1 以上	異常終了した。

使用例

モニターセット名として SAP CCMS Monitor Templates, モニター名を Entire System として CCMS アラート情報を出力する場合のコマンド実行例を次に示します。RFC 接続情報は、環境パラメーター設定ファイルで定義済みであることを前提としています。

```
jr3alget -ms "SAP CCMS Monitor Templates" -mn "Entire System"
```

このコマンドの出力例を次に示します。

```
20030321171911SD5 o246bci_SD5_00 Background AbortedJobs Job
DBA:CHECKOPT_____@021500/6007 (ID number 02153101) terminated20030321171911SD5
o246bci_SD5_00 GenericKey SpaceUsed 95 % > 90 % 15 min. avg. value over threshold
value
```

jr3slget

形式

```
jr3slget [RFC接続情報]
          [ターゲット情報]
          [-lasttime タイムスタンプファイル名]
          [出力先]
          [-cnf 環境パラメーター設定ファイル名]
          [-help]
          [-v]
```

機能

jr3slget コマンドは、SAP システムのシステムログ情報を抽出します。

コマンドを実行できるホスト

PFM - Agent for Enterprise Applications

実行権限

Windows の場合

なし

Linux の場合

なし

格納先ディレクトリ

Windows の場合

```
インストール先フォルダ¥agtm¥evtrap¥
```

Linux の場合

```
/opt/jp1pc/agtm/evtrap/
```

引数

RFC 接続情報

コマンド実行時に、SAP システムとの RFC 接続を確立するための情報を指定します。

環境パラメーター設定ファイルで、RFC 接続情報 (CONNECT セクション) が指定されている場合、これらの引数の指定を省略できます。環境パラメーター設定ファイルおよびコマンドの両方で RFC 接続情報が指定された場合、コマンドでの指定が優先されます。環境パラメーター設定ファイルについては、「[5.4.3 コマンドを実行してシステムログ情報を抽出する場合の環境パラメーター設定ファイル](#)」を参照してください。

RFC 情報の各引数について説明します。

-h アプリケーションサーバホスト名

接続先のアプリケーションサーバホスト名を指定します。指定できる値は、1~100バイトの半角英数字です。アプリケーションサーバホスト名は、次の形式で指定できます。

- hosts ファイルに指定されたホスト名
- IP アドレス
- SAP ルーターアドレス

アプリケーションサーバホスト名は、トランザクションコード SM51 で確認できます。

このオプションを指定する場合は、-s オプションも指定する必要があります。

-s システム番号

-h オプションで指定したアプリケーションサーバホストで識別するためのシステム番号を指定します。指定できる値は、0~99の数値です。

このオプションを指定する場合は、-h オプションも指定する必要があります。

-c クライアント名

接続に利用するユーザーのクライアント名を1~3バイトで指定します。指定できる値は、0~999の数値です。

このオプションを指定する場合は、-u、および-p または-p2 オプションも指定する必要があります。

-u ユーザー名

接続に利用するユーザー名を指定します。指定できる値は、1~12バイトの半角英数字です。

このオプションを指定する場合は、-c、および-p または-p2 オプションも指定する必要があります。

指定できる SAP ユーザーについては「[接続に使用する SAP ユーザー](#)」を参照してください。

-p パスワード

-u オプションで指定したユーザーのパスワードを指定します。指定できる値は、1~8バイトの半角文字列です。

このオプションは、-p2 オプションと同時に指定できません。

このオプションを指定する場合は、-c、および-u オプションも指定する必要があります。

このオプションは、SAP システム側で従来型のパスワードルールが適用されている場合に指定します。

パスワードに指定できる文字については「[接続に使用する SAP ユーザー](#)」を参照してください。

-p2 拡張パスワード

SAP NetWeaver 7.0 以降をベースシステムとした拡張パスワード対応の SAP システムへ接続する場合、-u オプションで指定したユーザーの拡張パスワードを指定します。指定できる値は、1~40バイトの半角文字列です。英字の大文字と小文字は区別されます。

このオプションは、-p オプションと同時に指定できません。

このオプションは、SAP システム側で拡張パスワードルールが適用されている場合に指定します。

このオプションを指定する場合は、-c、および-u オプションも指定する必要があります。

拡張パスワードに指定できる文字については「[接続に使用する SAP ユーザー](#)」を参照してください。

-l 言語

-u オプションで指定したユーザーの言語を指定します。指定できる値は、SAP システムで使用されている、2 バイトの ISO ID または 1 バイトの言語キーです。例えば、次のように指定します。

- 日本語の場合：JA
- 日本語以外の場合：EN

このオプションの指定を省略した場合、接続先システムで定義されているユーザーの言語が仮定されます。

このオプションを指定する場合は、-c、-u、および-p または-p2 オプションも指定する必要があります。

-codepage コードページ

接続先の Unicode 版 SAP システムで文字コードを変換するときに使用するコードページを指定します。コードページは、-l オプションの言語と組み合わせて指定する必要があります。

次の組み合わせで設定してください。次の組み合わせ以外の言語とコードページを指定した場合、SAP システムから取得した情報が文字化けする可能性があります。

表 11-5 言語とコードページの指定内容の組み合わせ

接続先 SAP システム	接続言語	言語 (-l)	コードページ (-codepage)
Unicode 版	日本語	JA	8000
	英語	EN	指定する必要はありません。指定する場合は、1100 を指定してください。
非 Unicode 版	日本語	JA	指定する必要はありません。指定する場合は、8000 を指定してください。
	英語	EN	指定する必要はありません。指定する場合は、1100 を指定してください。

接続先の Unicode 版 SAP システムで文字コードを変換するときに使用するコードページは、SAP システムが提供する環境変数 SAP_CODEPAGE でも設定することができます。環境変数 SAP_CODEPAGE とこのオプションの両方でコードページが指定された場合は、このオプションの指定が有効となります。

このオプションの指定を省略した場合、接続先システムのデフォルトコードページが仮定されます。このオプションを指定する場合は、-c、-u、および-p または-p2 オプションも指定する必要があります。

ターゲット情報

抽出対象のシステムログ情報を特定するための情報を指定します。

環境パラメーター設定ファイルでターゲット情報 (TARGET セクション) が指定されている場合は、この引数の指定を省略できます。環境パラメーター設定ファイルおよびコマンドの両方でターゲット接続情報が指定された場合、コマンドでの指定が優先されます。環境パラメーター設定ファイルについて

は、[5.4.3 コマンドを実行してシステムログ情報を抽出する場合の環境パラメーター設定ファイル]を参照してください。

ターゲット情報の引数について説明します。

-server SAP インスタンス名

システムログを採取している SAP インスタンス名を指定します。指定できる値は、1~20 バイトの半角英数字です。1 つの SAP インスタンス名だけ指定できます。SAP インスタンス名は、トランザクションコード SM50 や SM66 などを確認できます。

-lasttime タイムスタンプファイル名

前回のコマンド実行時以降に出力されたシステムログ情報だけを抽出する場合に、前回の抽出時刻を管理するためのタイムスタンプファイル名を指定します。

指定できる値は、1~255 バイトの半角文字列です。

相対パスで指定する場合、コマンドの作業ディレクトリからの相対パスを指定してください。ただし、環境パラメーター設定ファイルの COMMAND セクションの WORKDIR ラベルで、コマンドの作業ディレクトリを指定していない場合、カレントディレクトリからの相対パスを指定してください。

このオプションの指定を省略した場合、コマンド実行日の 0 時 0 分 0 秒から 23 時 59 分 59 秒までの期間が仮定されます。

このオプションの初回実行時に、指定したタイムスタンプファイルが存在しない場合、新規に作成されます。初回実行時は、システムログ情報が出力されません。

出力先

システムログ情報の出力先を指定します。このオプションの指定を省略した場合、システムログ情報は、改行コードで区切られてコマンドの標準出力に出力されます。

システムログ情報の出力ファイルの形式には、次の 2 種類があります。

- **WRAP1**

システムログ情報が一定の容量に達すると、ラップアラウンドして再び先頭からデータを上書きする形式のファイルです。出力ファイル数は、1 つです。

- **WRAP2**

システムログ情報が一定の容量に達してラップアラウンドするとき、データを削除して再び先頭からデータを書き込む形式のファイルです。1 つ目のファイルが一定の容量に達すると、ラップアラウンドして 2 つ目のファイルに書き込みます。このとき、2 つ目のファイルのデータを削除し、先頭からデータを書き込みます。複数のファイルすべてで一定の容量に達すると、1 つ目のファイルに戻ってデータを削除し、先頭からデータを書き込みます。

出力ファイルは 2~9 個用意できます。デフォルトは 5 個です。出力ファイルの個数は、環境パラメーター設定ファイルの EXTRACTFILE セクションの NUM ラベルで指定します。

出力ファイルの形式を変更する場合は、事前に出力ファイルを監視している製品を停止し、出力ファイルとその管理ファイル（存在する場合）を削除してください。

出力先の各引数について説明します。

-x WRAP1 形式の格納ファイル名

システムログ情報を出力する WRAP1 形式のファイル名を、相対パスまたはフルパスで指定します。指定できる値は、1~251 バイトの半角文字列です。

相対パスで指定する場合、コマンドの作業ディレクトリからの相対パスを指定してください。ただし、環境パラメーター設定ファイルの COMMAND セクションの WORKDIR ラベルで、コマンドの作業ディレクトリを指定していない場合、カレントディレクトリからの相対パスを指定してください。

このファイルの先頭には、管理情報として 1 行のヘッダーがあります。

ファイルサイズのデフォルトは 10,240 キロバイトです。ファイルサイズを変更する場合は、環境パラメーター設定ファイルの EXTRACTFILE セクションの SIZE ラベルで指定してください。

出力ファイルと同じディレクトリに、出力ファイル名 ofs という名称で管理ファイルが作成されます。たとえば、出力ファイル名として SYSLOG を指定したとき SYSLOG ファイルとは別に SYSLOG ofs ファイルが管理ファイルとして作成されます。出力ファイルを削除する場合は、この管理ファイルも合わせて削除してください。

-x オプション、-x2 オプション、-xw オプションは同時に指定できません。

-xw WRAP2 形式複数面出力の格納ファイル名

システムログ情報を格納する WRAP2 形式のファイル名を指定します。指定できる値は、1~254 バイトの半角文字列です。ファイル名は、指定されたファイル名の末尾に 1 バイトの数字が付与された名称で格納されます。

ここで付与される数字は、環境パラメーター設定ファイルの EXTRACTFILE セクションの NUM ラベルで設定した値を基に、1~「NUM ラベルの値」の範囲で付与されます。例えば、「SYSLOG」を指定した場合、デフォルトでは SYSLOG1~SYSLOG5 まで格納ファイルを生成します。

相対パスで指定する場合、コマンドの作業ディレクトリからの相対パスを指定してください。ただし、環境パラメーター設定ファイルの COMMAND セクションの WORKDIR ラベルで、コマンドの作業ディレクトリを指定していない場合、カレントディレクトリからの相対パスを指定してください。

ファイルサイズのデフォルトは 10,240 キロバイトです。ファイルサイズを変更する場合は、環境パラメーター設定ファイルの EXTRACTFILE セクションの SIZE ラベルで指定してください。

-xw オプション、-x オプション、-x2 オプションは同時に指定できません。

-x2

環境パラメーター設定ファイルの EXTRACTFILE セクションの X2PATH ラベルで設定したファイルに、システムログ情報を出力する場合に指定します。

-x2 オプション、-x オプション、-xw オプションは同時に指定できません。

-cnf 環境パラメーター設定ファイル名

コマンドが参照する環境パラメーター設定ファイル名を指定します。指定できる値は、1~255 バイトの半角文字列です。

相対パスで指定する場合、コマンドのカレントディレクトリからの相対パスを指定してください。

このオプションの指定を省略した場合、カレントディレクトリ下のデフォルト環境パラメーター設定ファイルjr3slget.iniが仮定されます。デフォルト環境パラメーター設定ファイルが存在しない場合、PFM - Agent for Enterprise Applicationsでのデフォルトの設定値が仮定されます。

環境パラメーター設定ファイルおよびデフォルトの設定値については、「[5.4.3 コマンドを実行してシステムログ情報を抽出する場合の環境パラメーター設定ファイル](#)」を参照してください。

-help

jr3slget コマンドの使用方法を標準出力に出力します。

-v

標準出力にjr3slget コマンドの処理状況を示すメッセージを出力します。このオプションの指定を省略した場合、コマンドの処理状況を示すメッセージは出力されません。

接続に使用する SAP ユーザー

jr3slget コマンドはシステムログ情報を収集するために、SAP 社の通信プロトコルである RFC を使用して、SAP システム側に定義されている外部管理インターフェースを実行します。そのため、jr3slget コマンドが接続に使用するユーザーをあらかじめ SAP システム側に用意しておく必要があります。詳細については、「[3.1.5 \(2\) PFM - Agent for Enterprise Applications で使用する SAP ユーザーの作成](#)」を参照してください。

注意事項

リモート監視機能を使用する場合、コマンドの引数に指定する RFC 接続情報やターゲット情報、および環境パラメーター設定ファイルの CONNECT セクションには、監視対象の SAP システムの情報（ホスト名やインスタンス名など）を指定してください。

出力形式および内容

SAP システムのトランザクションコード SM21 で確認できるシステムログ情報（パラメーターレコード行を含む）を抽出します。

システムログ情報は、デフォルトでは次の形式で出力されます。< >は、フィールド ID を示します。

```
<TIME><INSTANCE><USER><PROGRAM><MSGNO><MSGTEXT>
```

システムログ情報の各値が、各フィールドに対して決められた長さに満たない場合、半角の空白で埋められます。出力される各値について次に説明します。

表 11-6 出力されるシステムログ情報の内容

フィールド ID	意味	長さ (単位: バイト)
<TIME>	メッセージ記録時刻 (HH:MM:SS)	8
<INSTANCE>	メッセージを記録したサーバ	20

フィールド ID	意味	長さ (単位: バイト)
<USER>	メッセージを記録したユーザー	12
<PROGRAM>	メッセージを記録したプログラム	8
<MSGNO>	メッセージ番号	3
<MSGTEXT>	メッセージテキスト	255

戻り値

0	正常終了した。
1 以上	異常終了した。

使用例

SAP インスタンス o246bci_SD5_00 のシステムログ情報を出力する場合のコマンド実行例を次に示します。RFC 接続情報は、環境パラメーター設定ファイルで定義済みであることを前提としています。

```
jr3slget -server o246bci_SD5_00
```

このコマンドの出力例を次に示します。

```
13:58:04o246bci_SD5_00  SAPSYS  SAPMSSY8R49 通信エラー、CPIC リターンコード 027、SAP
リターンコード 456
13:58:04o246bci_SD5_00  SAPSYS  SAPMSSY8R64> CPI-C 機能: CMINIT (SAP)
```


12

メッセージ

この章では、PFM - Agent for Enterprise Applications のメッセージ形式、出力先一覧、syslog と Windows イベントログの一覧、およびメッセージ一覧について説明します。

12.1 メッセージの形式

PFM - Agent for Enterprise Applications が出力するメッセージの形式と、マニュアルでの記載形式を示します。

12.1.1 メッセージの出力形式

PFM - Agent for Enterprise Applications が出力するメッセージの形式を説明します。メッセージは、メッセージ ID とそれに続くメッセージテキストで構成されます。形式を次に示します。

```
KAVFnnnnn-Yメッセージテキスト
```

メッセージ ID は、次の内容を示しています。

K

システム識別子を示します。

AVF

PFM - Agent のメッセージであることを示します。

nnnnn

メッセージの通し番号を示します。PFM - Agent for Enterprise Applications のメッセージ番号は、「14xxx」です。

Y

メッセージの種類を示します。

- E：エラー
処理は中断されます。
- W：警告
メッセージ出力後、処理は続けられます。
- I：情報
ユーザーに情報を知らせます。
- Q：応答
ユーザーに応答を促します。

メッセージの種類と syslog の priority レベルとの対応を次に示します。

-E

- レベル：LOG_ERR
- 意味：エラーメッセージ。

-W

- レベル：LOG_WARNING
- 意味：警告メッセージ。

-I

- レベル：LOG_INFO
- 意味：付加情報メッセージ。

-Q

(出力されない)

メッセージの種類と Windows イベントログの種類との対応を次に示します。

-E

- レベル：エラー
- 意味：エラーメッセージ。

-W

- レベル：警告
- 意味：警告メッセージ。

-I

- レベル：情報
- 意味：付加情報メッセージ。

-Q

(出力されない)

12.1.2 メッセージの記載形式

このマニュアルでのメッセージの記載形式を示します。メッセージテキストで太字になっている部分は、メッセージが表示される状況によって表示内容が変わることを示しています。また、メッセージをメッセージ ID 順に記載しています。記載形式の例を次に示します。

メッセージ ID

英語メッセージテキスト

日本語メッセージテキスト

メッセージの説明文

(S)

システムの処置を示します。

(O)

メッセージが表示されたときに、オペレーターが取る処置を示します。

参考

運用中にトラブルが発生した場合には、「[13. トラブルへの対処方法](#)」を参照してログ情報を採取し、初期調査をしてください。

トラブル要因の初期調査をする場合は、OS のログ情報（Windows の場合は Windows イベントログ、Linux の場合は syslog）や、PFM - Agent for Enterprise Applications が出力する各種ログ情報を参照してください。これらのログ情報でトラブル発生時間帯の内容を参照して、トラブルを回避したり、トラブルに対処したりしてください。また、トラブルが発生するまでの操作方法などを記録してください。同時に、できるだけ再現性の有無を確認するようにしてください。

12.2 メッセージの出力先一覧

ここでは、PFM - Agent for Enterprise Applications が出力する各メッセージの出力先を一覧で示します。

表中では、出力先を凡例のように表記しています。

(凡例)

- ：出力する
- －：出力しない

表 12-1 PFM - Agent for Enterprise Applications のメッセージの出力先一覧

メッセージID	出力先						
	syslog	Windows イベントログ	共通メッセージログ	標準出力	標準エラー出力	JP1 システムイベント※1	拡張エージェントイベント※2
KAVF14000	○	○	○	－	－	－	－
KAVF14001	○	○	○	－	－	－	－
KAVF14002	○	○	○	－	－	－	－
KAVF14100	－	－	○	－	－	○	○
KAVF14103	－	－	○	－	－	○	○
KAVF14105	－	－	○	－	－	－	－
KAVF14121	○	○	○	－	－	○	○
KAVF14122	－	－	○	－	－	－	－
KAVF14125	○	○	○	－	－	○	○
KAVF14126	－	－	○	－	－	－	－
KAVF14127	○	○	○	－	－	○	○
KAVF14128	○	○	○	－	－	○	○
KAVF14129	○	○	○	－	－	○	○
KAVF14131	○	○	○	－	－	○	○
KAVF14133	○	○	○	－	－	－	－
KAVF14134	○	○	○	－	－	○	○
KAVF14136	○	○	○	－	－	○	－
KAVF14137	○	○	○	－	－	○	○
KAVF14140	○	○	○	－	－	○	○
KAVF14141	○	○	○	－	－	○	○

メッセージID	出力先						
	syslog	Windows イベントログ	共通メッセージログ	標準出力	標準エラー出力	JP1 システムイベント※1	拡張エージェントイベント※2
KAVF14150	○	○	○	—	—	○	—
KAVF14151	○	—	○※3	—	—	○※3	○※3
KAVF14152	○	—	○※3	—	—	○※3	○※3
KAVF14160	○	○	○	—	—	○	○
KAVF14161	○	○	○	—	—	○	○
KAVF14171	○	○	○	—	—	○	○
KAVF14172	○	○	○	—	—	○	○
KAVF14173	○	○	○	—	—	○	○
KAVF14174	○	○	○	—	—	○	○
KAVF14175	○	○	○	—	—	○	○
KAVF14176	○	○	○	—	—	○	○
KAVF14177	○	○	○	—	—	○	○
KAVF14178	○	○	○	—	—	—	—
KAVF14179	○	○	○	—	—	—	—
KAVF14184	○	○	○	—	—	○	○
KAVF14185	○	○	○	—	—	○	○
KAVF14186	○	○	○	—	—	○	○
KAVF14190	○	○	○	—	—	○	○
KAVF14191	○	○	○	—	—	○	○
KAVF14200	—	—	—	○	—	—	—
KAVF14201	—	—	—	○	—	—	—
KAVF14210	—	—	—	○	—	—	—
KAVF14211	—	—	—	—	○	—	—
KAVF14212	—	—	—	○	—	—	—
KAVF14213	—	—	—	○	—	—	—
KAVF14215	—	—	—	○	—	—	—
KAVF14216	—	—	—	○	—	—	—
KAVF14220	—	—	—	—	○	—	—

メッセージ ID	出力先						
	syslog	Windows イベントログ	共通メッセージログ	標準出力	標準エラー出力	JP1 システムイベント※1	拡張エージェントイベント※2
KAVF14221	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14222	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14223	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14224	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14225	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14226	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14227	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14229	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14230	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14231	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14232	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14233	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14240	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14241	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14242	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14243	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14244	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14245	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14250	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14251	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14253	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14254	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14255	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14256	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14257	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14260	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14261	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14262	-	-	-	-	○	-	-

メッセージ ID	出力先						
	syslog	Windows イベントログ	共通メッセージログ	標準出力	標準エラー出力	JP1 システムイベント※1	拡張エージェントイベント※2
KAVF14263	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14270	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14271	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14272	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14273	-	-	-	○	-	-	-
KAVF14274	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14275	-	-	-	○	-	-	-
KAVF14276	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14277	-	-	-	○	-	-	-
KAVF14278	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14280	○	○	-	-	○	-	-
KAVF14281	○	○	-	-	○	-	-
KAVF14285	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14286	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14287	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14288	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14289	-	-	-	-	○	-	-
KAVF14290	-	-	-	-	○	-	-

注※1

JP1 システムイベントは、エージェントの状態の変化を JP1/IM に通知するイベントです。JP1 システムイベントの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、統合管理製品 (JP1/IM) と連携した稼働監視について説明している章を参照してください。

JP1 システムイベントを発行するための前提プログラムを次の表に示します。

表 12-2 JP1 システムイベントを発行するための前提プログラム

ホスト種別	前提プログラム	バージョン
監視マネージャー	PFM - Manager	08-00 以降
監視コンソールサーバ	PFM - Web Console	08-00 以降
監視エージェントホスト	PFM - Agent for Enterprise Applications	09-00 以降
	PFM - Manager または PFM - Base	09-00 以降

ホスト種別	前提プログラム	バージョン
監視エージェントホスト	JP1/Base	08-50 以降

PFM - Agent ホストの PFM - Manager または PFM - Base が 08-xx の場合、JP1 システムイベントは発行しません。また、Agent Collector サービスのプロパティで JP1 システムイベントを発行するように設定しても、JP1 システムイベントは発行しません。

JP1 システムイベントを使用する場合は、PFM - Agent ホストの PFM - Manager または PFM - Base を 09-00 以降にしてください。

注※2

拡張エージェントイベントは、エージェントの状態の変化を PFM - Manager に通知するイベントです。エージェントイベントの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、イベントの表示について説明している章を参照してください。なお、拡張エージェントイベントは、PFM-Manager と接続している場合にだけ発行します。

拡張エージェントイベントを発行するための前提プログラムを次の表に示します。

表 12-3 拡張エージェントイベントを発行するための前提プログラム

ホスト種別	前提プログラム	バージョン
監視マネージャー	PFM - Manager	09-00 以降
監視コンソールサーバ	PFM - Web Console	08-00 以降
監視エージェントホスト	PFM - Agent for Enterprise Applications	09-00 以降
	PFM - Manager または PFM - Base	09-00 以降

PFM - Agent ホストの PFM - Manager または PFM - Base が 08-xx の場合、拡張エージェントイベントは発行しません。

拡張エージェントイベントを使用する場合は、PFM - Agent ホストの PFM - Manager または PFM - Base を 09-00 以降にしてください。

注※3

Linux 版だけに出力されます。

12.3 syslog と Windows イベントログの一覧

ここでは、PFM - Agent for Enterprise Applications が syslog と Windows イベントログに出力するメッセージ情報の一覧を示します。

syslog は、syslog ファイル（デフォルトは/var/log/messages*）に出力されます。

Windows イベントログは、次の個所に表示されます。

[イベントビューア] ウィンドウのアプリケーションログに表示されます。

[イベントビューア] ウィンドウは、Windows の [スタート] メニューから表示される [管理ツール] - [イベントビューア] を選択することで表示できます。

PFM - Agent for Enterprise Applications が出力するイベントの場合、[イベントビューア] ウィンドウの [ソース] に識別子「PFM-R3」が表示されます。

PFM - Agent for Enterprise Applications が syslog と Windows イベントログに出力するメッセージ情報の一覧を次の表に示します。

表 12-4 syslog と Windows イベントログ出力メッセージ情報一覧

メッセージID	syslog		Windows イベントログ	
	ファシリティ	レベル	イベント ID	レベル
KAVF14000-I	LOG_DAEMON	LOG_INFO	14000	情報
KAVF14001-I	LOG_DAEMON	LOG_INFO	14001	情報
KAVF14002-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	14002	エラー
KAVF14121-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	14121	エラー
KAVF14125-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	14125	エラー
KAVF14127-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	14127	エラー
KAVF14128-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	14128	エラー
KAVF14129-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	14129	エラー
KAVF14131-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	14131	エラー
KAVF14133-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	14133	エラー
KAVF14134-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	14134	エラー
KAVF14136-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	14136	エラー
KAVF14137-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	14137	エラー
KAVF14140-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	14140	エラー
KAVF14141-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	14141	エラー

メッセージ ID	syslog		Windows イベントログ	
	ファシリティ	レベル	イベント ID	レベル
KAVF14150-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	14150	エラー
KAVF14151-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	—	—
KAVF14152-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	—	—
KAVF14160-I	LOG_DAEMON	LOG_INFO	14160	情報
KAVF14161-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	14161	エラー
KAVF14171-W	LOG_DAEMON	LOG_WARNING	14171	警告
KAVF14172-W	LOG_DAEMON	LOG_WARNING	14172	警告
KAVF14173-W	LOG_DAEMON	LOG_WARNING	14173	警告
KAVF14174-W	LOG_DAEMON	LOG_WARNING	14174	警告
KAVF14175-W	LOG_DAEMON	LOG_WARNING	14175	警告
KAVF14176-W	LOG_DAEMON	LOG_WARNING	14176	警告
KAVF14178-W	LOG_DAEMON	LOG_WARNING	14178	警告
KAVF14179-W	LOG_DAEMON	LOG_WARNING	14179	警告
KAVF14184-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	14184	エラー
KAVF14185-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	14185	エラー
KAVF14186-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	14186	エラー
KAVF14190-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	14190	エラー
KAVF14191-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	14191	エラー
KAVF14280-W	LOG_DAEMON	LOG_WARNING	14280	警告
KAVF14281-W	LOG_DAEMON	LOG_WARNING	14281	警告

12.4 メッセージ一覧

PFM - Agent for Enterprise Applications が出力するメッセージと対処方法について説明します。PFM - Agent for Enterprise Applications のメッセージ一覧を次に示します。

KAVF14000-I

```
Agent Collector has started. (host=ホスト名, service=サービス ID)
Agent Collector が起動しました (host=ホスト名, service=サービス ID)
```

Agent Collector サービスの起動および初期化が完了しました。

(S)

SAP システムのパフォーマンスデータの収集を開始します。

KAVF14001-I

```
Agent Collector has stopped. (host=ホスト名, service=サービス ID)
Agent Collector が停止しました (host=ホスト名, service=サービス ID)
```

`jpcspm stop` コマンドでの停止要求, Windows サービスの停止, またはシグナル割り込みによって, Agent Collector サービスが終了しました。

シグナル割り込み時には, このメッセージの前にシグナル受信イベントと補足したシグナル番号を表すメッセージ KAVF14151-E が出力されます。

(S)

Agent Collector サービスを停止します。

KAVF14002-E

```
Agent Collector failed to start. (rc=保守コード)
Agent Collector の起動に失敗しました (rc=保守コード)
```

Agent Collector サービスの起動および初期化に失敗したため, Agent Collector サービスの処理を続行できません。

(S)

Agent Collector サービスを停止します。

(O)

syslog (Linux の場合), Windows イベントログ (Windows の場合), または共通メッセージログに出力されている直前のメッセージを確認し, そのメッセージの対処方法に従ってください。

KAVF14100-I

Connected to the SAP system. (sid=SAP システム ID)
SAP システムに接続しました (sid=SAP システム ID)

SAP システムとの RFC 接続が確立されました。

(S)

Agent Collector サービスの初期化処理を続行します。

KAVF14103-I

Reconnected to the SAP system. (sid=SAP システム ID)
SAP システムに再接続しました (sid=SAP システム ID)

SAP システムとの RFC 接続が再確立されました。このメッセージは、Agent Collector サービスが起動してから少なくとも 1 度は接続が確立されたあと、何らかの理由で切断され、SAP システムに再接続する場合に出力されます。

(S)

Agent Collector サービスの初期化処理を続行します。

KAVF14105-I

The connection to the SAP system was closed. (sid=SAP システム ID)
SAP システムとの接続を閉じました (sid=SAP システム ID)

SAP システムとの RFC 接続が停止しました。

このメッセージは、停止要求に基づいた処理をする場合、または稼働中の一時的なエラーに対して RFC ハンドルを解放する場合に出力されます。

(S)

停止要求に基づいた処理をする場合は、Agent Collector サービスを終了します。

稼働中の一時的なエラーに対して RFC ハンドルを解放する場合は、次の接続まで待機します。

KAVF14121-E

An error occurred in the RFC API. (エラーが発生した API 名)
RFC API でエラーが発生しました (エラーが発生した API 名)

RFC 関数の呼び出しでエラーが発生しました。SAP システムとの接続時に発生した RFC API エラーについては、このメッセージの代わりにメッセージ KAVF14127-E またはメッセージ KAVF14128-E が出力されます。共通メッセージログ内には、続いて詳細なエラー情報を示すメッセージ KAVF14122-E が出力されます。エラーの要因として、次のことが考えられます。

- SAP システムが稼働していない
- SAP システムが高負荷であるため RFC 要求を受け付けられない
- ネットワークの設定に問題がある

(S)

- 起動処理中にこのエラーが発生した場合
Agent Collector サービスを停止します。
- 起動完了後（運用中）にこのエラーが発生した場合
監視を続行します。開いている RFC ハンドルは閉じられ、次の収集タイミングで接続が再確立されます。なお、このタイミングで取得されるはずだったパフォーマンスデータの更新は、延期されます。

(O)

- 起動処理中にこのエラーが発生した場合
Agent Collector サービス起動情報ファイル（`jpccagt.ini`）内に設定されている接続パラメーター、SAP システムの稼働状態、ネットワークの状態などを見直し、問題を取り除いてから再起動してください。
- 起動完了後（運用中）にこのエラーが発生した場合
SAP システムがダウンしているなどの致命的な状態になっていることがあります。このエラーが発生した時刻の前後に、共通メッセージログ内に出力されているメッセージ `KAVF14122-E` を確認して問題を解決してください。
Agent Collector サービス起動情報ファイル（`jpccagt.ini`）内の接続パラメーターの誤りを訂正する場合、起動中の PFM - Agent for Enterprise Applications を `jpccspm stop` コマンドで停止してから訂正してください。
SAP システムのメンテナンスなど、計画された停止によってこのエラーが発生した場合は、このメッセージを無視してかまいません。PFM - Agent for Enterprise Applications は、SAP システムが再起動された時点で接続を再確立し、監視を続行します。

KAVF14122-E

RFC_ERROR_INFO: code=リターンコード, group=エラーグループ, key=エラーキー, message=エラーメッセージ, abapMsgClass=ABAP メッセージクラス, abapMsgType=ABAP メッセージタイプ, abapMsgNumber=ABAP メッセージ番号, abapMsgV1=ABAP メッセージ詳細フィールド 1, abapMsgV2=ABAP メッセージ詳細フィールド 2, abapMsgV3=ABAP メッセージ詳細フィールド 3, abapMsgV4=ABAP メッセージ詳細フィールド 4

このメッセージは、`KAVF14121-E`、`KAVF14127-E`、または `KAVF14128-E` に続けて RFC API のエラーの詳細を示すメッセージです。メッセージに出力される値の意味を次に示します。

- code：RFC リターンコードの整数
- group：key を識別する整数

- key：エラーを識別する最大 127 バイトのコード
- message：エラー内容を説明する最大 511 バイトのテキスト（改行コードを含むことがある）
- abapMsgClass：ABAP メッセージクラスで最大 20 バイト
- abapMsgType：ABAP メッセージタイプで最大 1 バイト
- abapMsgNumber：ABAP メッセージ番号で最大 3 バイト
- abapMsgV1：ABAP メッセージの詳細フィールドで最大 50 バイトのテキスト
- abapMsgV2：ABAP メッセージの詳細フィールドで最大 50 バイトのテキスト
- abapMsgV3：ABAP メッセージの詳細フィールドで最大 50 バイトのテキスト
- abapMsgV4：ABAP メッセージの詳細フィールドで最大 50 バイトのテキスト

RFC API のエラー詳細のバイト数は「¥0」を含まないサイズです。

これらの値は、RFC API のエラー情報を格納する RFC_ERROR_INFO 構造体中のメンバー値をそのまま設定しています。RFC の詳細については、SAP システムのマニュアルを参照してください。

(S)

このメッセージの前に、メッセージ KAVF14121-E、KAVF14127-E、または KAVF14128-E のどれかが出力されています。これらのメッセージに記載されているシステムの処置を参照してください。

(O)

このメッセージの前に出力されているメッセージ KAVF14121-E、KAVF14127-E、または KAVF14128-E を確認して、要因を取り除いてください。

KAVF14125-E

An error occurred in the function module of the SAP system. (エラーが発生した汎用モジュール名)

SAP システムの汎用モジュールでエラーが発生しました (エラーが発生した汎用モジュール名)

SAP システム上の汎用モジュールから予期しないエラーコードが返されました。共通メッセージログ内には、続いて詳細なエラー情報を示すメッセージ KAVF14126-E が出力されます。エラーの要因は、呼び出した汎用モジュールごとに定義されます。エラーの要因については、メッセージ KAVF14126-E を参照してください。

(S)

- 起動処理中にこのエラーが発生した場合
Agent Collector サービスを停止します。
- 起動完了後（運用中）にこのエラーが発生した場合
監視を続行します。なお、このタイミングで取得されるはずだったパフォーマンスデータの更新は、延期されます。

(O)

- 起動処理中にこのエラーが発生した場合

SAP システムのバージョンを確認してください。BAPI_XMI_LOGON が権限チェックによってエラーとなることがあります。この場合は、接続に使用するユーザーに権限オブジェクト SXMI_PROD を付与してください。

- 起動完了後（運用中）にこのエラーが発生した場合

このエラーが発生した時刻の前後に、共通メッセージログ内に出力されているメッセージ KAVF14126-E を確認して問題を解決してください。

KAVF14126-E

```
BAPIRET2: TYPE=メッセージタイプ, ID=メッセージクラス, NUMBER=メッセージ番号,  
MESSAGE=メッセージテキスト
```

```
BAPIRET2: TYPE=メッセージタイプ, ID=メッセージクラス, NUMBER=メッセージ番号,  
MESSAGE=メッセージテキスト
```

汎用モジュール（BAPI）のエラーの詳細を示すメッセージです。メッセージに出力される値の意味を次に示します。

- TYPE：メッセージの重要度を表す 1 バイトの文字（S：正常，E：エラー，W：警告，I：情報，A：強制終了）
- ID：メッセージを分類する最大 20 バイトのクラス
- NUMBER：エラーを識別する最大 3 バイトのエラーコード
- MESSAGE：エラー内容を説明する最大 220 バイトのテキスト

これらの値は、BAPI のエラーを格納する BAPIRET2 構造体中のメンバー値をそのまま設定しています。BAPI の詳細については、SAP システムのマニュアルを参照してください。呼び出した BAPI の仕様については、SAP システムのオブジェクトナビゲーター（SE80）、BAPI ブラウザー（BAPI）、または SAP システムのマニュアルを参照してください。

(S)

このメッセージの前に、メッセージ KAVF14125-E が出力されています。メッセージ KAVF14125-E のシステムの処置を参照してください。

(O)

このメッセージの前に出力されているメッセージ KAVF14125-E を確認して、要因を取り除いてください。

KAVF14127-E

```
Cannot connect to the SAP system. (エラーが発生した関数名)
```

```
SAP システムに接続できません (エラーが発生した関数名)
```


SAP システムとの接続処理で通信エラーが発生しました。SAP システムとの接続時に発生した RFC API エラーについては、メッセージ KAVF14121-E の代わりにこのメッセージまたはメッセージ KAVF14128-E が出力されます。共通メッセージログ内には、続いて詳細なエラー情報を示すメッセージ KAVF14122-E が出力されます。

エラーの要因として、次のことが考えられます。

- SAP システムが稼働していない
- SAP システムが高負荷であるため RFC 要求を受け付けられない
- ネットワークの設定に問題がある
- あて先情報が不正である（ホスト名、システム番号などに誤りがある）

(S)

- 起動処理中にこのエラーが発生した場合
Agent Collector サービスを停止します。
- 起動完了後（運用中）にこのエラーが発生した場合
監視を続行します。開いている RFC ハンドルは閉じられ、次のパフォーマンスデータ収集のタイミングで、接続が再確立されます。なお、このタイミングで取得されるはずだったパフォーマンスデータの更新は、延期されます。

(O)

- 起動処理中にこのエラーが発生した場合
Agent Collector サービス起動情報ファイル（`jpgagt.ini`）内に設定されている接続パラメーター、SAP システムの稼働状態、ネットワークの状態などを見直し、問題を取り除いてから再起動してください。
- 起動完了後（運用中）にこのエラーが発生した場合
SAP システムがダウンしているなどの致命的な状態になっていることがあります。このエラーが発生した時刻の前後に、共通メッセージログ内に出力されているメッセージ KAVF14122-E を確認して問題を解決してください。
Agent Collector サービス起動情報ファイル（`jpgagt.ini`）内の接続パラメーターの誤りを訂正する場合、起動中の PFM - Agent for Enterprise Applications を `jpgspm stop` コマンドで停止してから訂正してください。
SAP システムのメンテナンスなど、計画された停止によってこのエラーが発生した場合は、このメッセージを無視してかまいません。PFM - Agent for Enterprise Applications は、SAP システムが再起動された時点で接続を再確立し、監視を続行します。

KAVF14128-E

Cannot log on to the SAP system. (エラーが発生した関数名)
SAP システムにログオンできません (エラーが発生した関数名)

SAP システムとの接続処理でログオンエラーが発生しました。SAP システムとの接続時に発生した RFC API エラーについては、メッセージ KAVF14121-E の代わりにこのメッセージまたはメッセージ KAVF14127-E が出力されます。共通メッセージログ内には、続いて詳細なエラー情報を示すメッセージ KAVF14122-E が出力されます。

エラーの要因として、次のことが考えられます。

- ログオン情報が不正である（クライアント、ユーザー、パスワードなどに誤りがある）
- ユーザーのパスワードが変更された
- ユーザーに適切な権限が付与されていない
権限とは、汎用モジュールに RFC 接続するための権限（S_RFC）のことです。
- SAP NetWeaver 7.0 以降をベースとした SAP システムで小文字を含む拡張パスワードを定義しているが、インスタンス情報の EXTPWD 項目に"N"（拡張パスワードを使用しない）を指定している

(S)

- 起動処理中にこのエラーが発生した場合
Agent Collector サービスを停止します。
- 起動完了後（運用中）にこのエラーが発生した場合
監視を続行します。開いている RFC ハンドルは閉じられ、次のパフォーマンスデータ収集のタイミングで、接続が再確立されます。なお、このタイミングで取得されるはずだったパフォーマンスデータの更新は、延期されます。

(O)

- 起動処理中にこのエラーが発生した場合
Agent Collector サービス起動情報ファイル（jpcagt.ini）内に設定されている接続パラメーター、SAP システム上のユーザー定義などを見直し、問題を取り除いてから再起動してください。
- 起動完了後（運用中）にこのエラーが発生した場合
ユーザーが削除された、パスワードが変更された、などの原因が考えられます。このエラーが発生した時刻の前後に、共通メッセージログ内に出力されているメッセージ KAVF14122-E を確認して問題を解決してください。
Agent Collector サービス起動情報ファイル（jpcagt.ini）内の接続パラメーターの誤りを訂正する場合、起動中の PFM - Agent for Enterprise Applications を `jpcspm stop` コマンドで停止してから訂正してください。

KAVF14129-E

SAP instance=SAP インスタンス名

SAP instance=SAP インスタンス名

このメッセージは、KAVF14121-E または KAVF14127-E のメッセージ出力時に、通信障害の発生した SAP インスタンス名を示すメッセージです。

(S)

このメッセージの前に、KAVF14121-E または KAVF14127-E のメッセージが出力されています。これらのメッセージに記載されているシステムの処置を参照してください。

(O)

このメッセージの前に出力されている KAVF14121-E または KAVF14127-E のメッセージを確認して、要因を取り除いてください。

KAVF14131-E

The system resources are insufficient.

システムリソースが不足しています

システムのメモリーやハンドルなどのリソースが不足しています。Performance Management が必要とするリソースに対してシステムのリソースが不足しているか、またはほかのアプリケーションのリソースリークによってシステムが不安定になっています。

(S)

- 起動処理中にこのエラーが発生した場合
Agent Collector サービスを停止します。
- 起動完了後（運用中）にこのエラーが発生した場合
できるかぎり Agent Collector サービスは監視を続行しようとし、一連の操作または要求はリジェクトされ、このタイミングで取得されるはずだったパフォーマンスデータの更新は、延期されます。

(O)

できるかぎり早く問題を特定し、システムの状態を回復してください。必要なリソースを再見積もりするとともに、メモリーの拡張、カーネルパラメーターの見直しなどをして、システムリソースを確保してください。

KAVF14133-E

An error occurred in an internal function. (func=関数名, rc=保守コード)

内部関数（関数名）でエラーが発生しました（func=関数名, rc=保守コード）

内部制御の関数インターフェースで関数エラーが発生しました。

(S)

起動処理中にこのエラーが発生すると Agent Collector サービスは異常終了します。起動完了後（運用中）にエラーが発生した場合は、Agent サービスは監視を続けます。ただし、一連の操作または要求のリジェクトによってこのタイミングで取得されるはずだったパフォーマンスデータの更新は延期されます。

(O)

頻繁に問題が発生してエラーが回復しない場合は、保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。保守資料の採取方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

KAVF14134-E

A file or directory cannot be accessed. (パス)

ファイルまたはディレクトリにアクセスできません (パス)

ファイルの作成、削除、読み込み、書き込みなどの一般アクセスをする際に、エラー（ディスク容量不足以外のエラー）が発生しました。このエラーが発生する要因として、次のことが考えられます。

- ファイルが存在しない
- アクセス権限がない
- ファイルシステムがアンマウントされている
- ファイルのパスがディレクトリのパスになっている（環境不正）

(S)

- 起動処理中にこのエラーが発生した場合
Agent Collector サービスを停止します。
- 起動完了後（運用中）にこのエラーが発生した場合
できるかぎり Agent Collector サービスは監視を続行しようとし、一連の操作または要求はリジェクトされ、このタイミングで取得されるはずだったパフォーマンスデータの更新は、延期されます。

(O)

メッセージに出力されたパスが示すファイルの状態を確認して、問題を取り除いてください。

KAVF14136-E

The content of the Agent Collector service startup initialization file is invalid. (section=セクション名, subsection=サブセクション名, label=ラベル名)

Agent Collector サービス起動情報ファイルの内容が不正です (section=セクション名, subsection=サブセクション名, label=ラベル名)

Agent Collector サービス起動情報ファイル (jpcagt.ini) の指定内容に誤りがあります。

(S)

起動処理を中断して Agent Collector サービスを停止します。

(O)

メッセージに出力された**セクション名**、**サブセクション名**、および**ラベル名**を参照して、Agent Collector サービス起動情報ファイル（jpcagt.ini）の不正な指定値を訂正してから Agent Collector サービスを再起動してください。

KAVF14137-E

A prerequisite module was not found.
前提とするモジュールがありません

前提とするモジュールがシステムにありません。

(S)

Agent Collector サービスを終了します。

(O)

次の対処を実施したあと、コマンドを再実行してください。それでも問題が解決しない場合は、保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。

- 前提 OS パッケージが適用されているか確認してください。
必要な OS の前提パッケージについては、リリースノートを参照してください。

KAVF14140-E

An attempt to convert the character code failed. (source character code=**変換前の文字コード**, destination character code=**変換後の文字コード**)
文字コードの変換に失敗しました（変換元の文字コード=**変換前の文字コード**、変換後の文字コード=**変換後の文字コード**）

文字コードの変換に失敗しました。

(S)

起動処理中にこのエラーが発生すると Agent サービスは異常終了します。

起動完了後（運用中）に発生するエラーの場合は、収集処理を続けます（パフォーマンスデータの更新は次回の収集要求まで延期されます）。

(O)

エージェント起動情報ファイル（jpcagt.ini）にシフト JIS（外字・機種依存文字・第三、第四水準漢字を除く）範囲外の文字が含まれていないか見直してください。

KAVF14141-E

Preparation for character code conversion failed.
文字コード変換の準備に失敗しました

SAP システムとの通信処理で文字コード変換テーブルのオープンに失敗しました。

(S)

Agent Collector サービスを終了します。

(O)

カーネルパラメーターなどからシステムまたはプロセスでオープンできるファイルの数が不足していないことを確認したあと、コマンドを再実行してください。

それでも解決しない場合は、保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。

KAVF14150-E

The system environment is invalid. (rc=保守コード)

システム環境が不正です (rc=保守コード)

システム環境が不正です。インストールおよびセットアップが不完全であるか、またはシステムファイルやレジストリが不当に削除または変更された状態でこのエラーが発生します。メッセージカタログが利用できない状況では、日本語環境でも英語でメッセージが出力されます。

(S)

Agent Collector サービスを異常終了します。

(O)

必要なデータをバックアップしてシステムをアンインストールしたあと、再インストールしてください。それでも解決しない場合、保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。保守資料の採取方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

KAVF14151-E

The processing was interrupted by a signal. (signal=シグナル番号)

シグナルによって処理が中断されました (signal=シグナル番号)

システムのシャットダウンなどによって、プロセスの終了シグナルを受け付けたため Agent Collector サービスを停止します。

(S)

Agent Collector サービスを停止します。

KAVF14152-W

Reception of a signal caused the service to stop. (signal=シグナル番号)

シグナル受信によってサービスは停止処理を実行します (signal=シグナル番号)

Linux の場合、シグナル受信によって Agent Collector サービスは停止処理を実行します。

(S)

Agent Collector サービスの処理を終了します。

KAVF14160-I

The performance data will now be collected. (sid=SAP システム ID, server=SAP インスタンス名)
パフォーマンスデータを収集します (sid=SAP システム ID, server=SAP インスタンス名)

Agent Collector サービスがパフォーマンスデータの収集を開始しました。この時点で収集についてのすべての初期化処理が終了しています。

(S)

パフォーマンスデータを収集します。

KAVF14161-E

The SAP instance does not exist. (sid=SAP システム ID, server=SAP インスタンス名)
SAP インスタンスが存在しません (sid=SAP システム ID, server=SAP インスタンス名)

インスタンス環境の設定手順で、SID 項目または SERVER 項目に入力した値に誤りがあります。

(S)

- 起動処理中にこのエラーが発生した場合
Agent Collector サービスを停止します。
- 起動完了後（運用中）にこのエラーが発生した場合
監視を続行します。なお、このタイミングで取得されるはずだったパフォーマンスデータの更新は、延期されます。

(O)

指定した SID 項目または SERVER 項目を見直してコマンドを再実行してください。SAP インスタンス名は、トランザクションコード SM51 などで確認できます。SAP インスタンス名は、通常、「ホスト名_SID_システム番号」の形式です。

KAVF14171-W

The performance data could not be updated. (レコード ID[.フィールド名])
パフォーマンスデータを更新できませんでした (レコード ID[.フィールド名])

パフォーマンスデータの取得に失敗しました。このメッセージの前に、通信障害や汎用モジュール (BAPI) エラーなどの直接的な要因となるエラーを示すメッセージが出力されています。このメッセージに、影響を受けるレコード ID とフィールド名が「.」で区切った形式で出力されます。レコード ID およびフィールド名は、PFM - Manager 名で出力されます。

(S)

収集を続行します。パフォーマンスデータの更新は、次の収集要求まで延期されます。

(O)

エラーの要因を取り除いてください。

KAVF14172-W

The performance data cannot be collected now.

パフォーマンスデータを収集できない状態です

通信障害が発生しているため、パフォーマンスデータの収集処理が実行されていないことを示すメッセージです。SAP システムへの接続が復旧したことを示すメッセージ KAVF14103-I が出力されてから、初期化が完了したことを示すメッセージ KAVF14160-I が出力されるまで、このエージェントでは、パフォーマンスデータが収集できません。

(S)

収集要求ごとに SAP システムへ再接続します。なお、2 回目以降の接続エラーは報告されません。SAP システムへの接続が復旧した場合、メッセージ KAVF14103-I を出力します。

(O)

このメッセージの前に出力されている通信障害メッセージ KAVF14121-E および KAVF14122-E を確認して、要因を取り除いてください。

KAVF14173-W

The performance data cannot be reported. (レコード ID[フィールド名])

パフォーマンスデータは報告されません (レコード ID[フィールド名])

接続先の SAP システムでは、このパフォーマンスデータはサポートされていません。パフォーマンスデータに対応するデータソースが接続先の SAP システム内に見つかりません。

このメッセージに、サポートされていないパフォーマンスデータのレコード ID とフィールド名が「.」で区切った形式で出力されます。レコード ID およびフィールド名は、PFM- Manager 名で出力されます。

(S)

このパフォーマンスデータを監視対象から外して、エージェントの初期化を続行します。

(O)

サポートしているパフォーマンスデータを確認してください。サポートしているパフォーマンスデータについては、「10. [レコード](#)」を参照してください。

KAVF14174-W

During collection of data, the number of instances of a multi-instance record exceeded the maximum. (record=レコード ID, limit=上限値, instance=インスタンス数)

データの収集中に複数インスタンスレコードのインスタンス数が上限値を超えました (record=レコード ID, limit=上限値, instance=インスタンス数)

データの収集で取得した複数インスタンスレコードのインスタンス数が上限値を超えました。上限値を超えたインスタンスは切り捨てられます。

(S)

処理を続行します。

(O)

監視対象のモニターの設定を見直してください。

KAVF14175-W

The specified monitor set name is invalid. (モニターセット名)

指定されたモニターセット名が不正です (モニターセット名)

Agent Collector サービスのプロパティの [Agent] - [PI_UMP] フォルダの設定情報について、次のことが考えられます。

- MONITOR_SET プロパティが設定されていない。
- 設定されているモニターセット名が SAP システム上で定義されていない。
- 定義されているモニターセット名が無効。

(S)

User defined Monitor (Perf.) (PI_UMP) レコードの収集を中断して、処理を続行します。

(O)

Agent Collector サービスのプロパティの [Agent] - [PI_UMP] フォルダの MONITOR_SET プロパティに設定されているモニターセット名が SAP システム上に存在しているか確認してください。

モニターセット名は、トランザクションコード RZ20 などで確認できます。モニターセット名は、「監視セット」と表記されていることもあります。なお、設定値の大文字・小文字は区別されます。

KAVF14176-W

The specified monitor name is invalid. (モニター名)

指定されたモニター名が不正です (モニター名)

Agent Collector サービスのプロパティの [Agent] - [PI_UMP] フォルダの設定情報について、次のことが考えられます。

- MONITOR_SET プロパティが設定されていない。
- 設定されているモニター名が SAP システム上で定義されていない。
- 定義されているモニター名が無効。

(S)
User defined Monitor (Perf.) (PI_UMP) レコードの収集を中断して、処理を続行します。

(O)
Agent Collector サービスのプロパティの [Agent] - [PI_UMP] フォルダの MONITOR_SET プロパティに設定されているモニター名が SAP システム上に存在しているか確認してください。
モニター名は、トランザクションコード RZ20 などで確認できます。モニター名は、「監視セット」と表記されていることもあります。なお、設定値の大文字・小文字は区別されます。

KAVF14177-W

The performance data could not be collected. (レコード ID, モニターセット名, モニター名, MTE 名)

パフォーマンスデータの取得に失敗しました (レコード ID, モニターセット名, モニター名, MTE 名)

MTE 名で示されたパフォーマンスデータの取得に失敗しました (BAPI エラー)。このメッセージの直前に、通信障害や汎用モジュールエラーなどの直接的な要因となるエラーを示すメッセージが出力されています。

(S)
MTE 名で示されたパフォーマンスデータの収集を中断して処理を続行します。このタイミングで取得されるはずだったパフォーマンスデータの更新は次回の収集タイミングまで延期されます。

(O)
このメッセージの直前に出力されているメッセージを確認して、要因を取り除いてください。

KAVF14178-W

It failed to issue JP1 system event or Agent event extension.

JP1 システムイベントの発行または拡張エージェントイベントの発行に失敗しました

Agent Collector サービスで、JP1 システムイベントの発行または拡張エージェントイベントの発行に失敗しました。なお、2 回目以降の発行失敗は報告されません。

(S)
Agent Collector サービスは処理を続行します。

(O)
PFM - Agent for Enterprise Applications と同一ホスト上で動作する JP1/Base が起動しているかどうか確認してください。また、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、統合管理製品 (JP1/IM) と連携した稼働監視について説明している章を参照して、設定を見直してください。それでも解決しない場合、保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。保守資料の採取方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

KAVF14179-W

It failed to issue JP1 system event or Agent event extension, because Memory is insufficient.
メモリー不足のため JP1 システムイベントの発行または拡張エージェントイベントの発行に失敗しました

システムのメモリーが不足していたため、Agent Collector サービスでの JP1 システムイベントの発行または拡張エージェントイベントの発行に失敗しました。PFM が必要とするリソースに対してシステムが有するリソースが不足しているか、またはほかのアプリケーションのリソースリークによってシステムが不安定になっています。

(S)

Agent Collector サービスは処理を続行します。

(O)

問題を特定し、システムの状態を回復させてください。必要なリソースを再見積もりするとともに、メモリーの拡張などをしてシステムリソースを確保してください。

KAVF14184-E

An attempt to load the RFC library failed. (file path=ファイルパス, reason=要因, func=API 名, error code=エラーコード)

RFC ライブラリのロードに失敗しました (file path=ファイルパス, reason=要因, func=API 名, error code=エラーコード)

RFC ライブラリのロード中にエラーが発生しました。

メッセージに出力される値の意味を次に示します。

file path : RFC ライブラリのファイルパス

reason : 要因 (次のどれか)

- no such file(s) (ファイルが存在しない)
- invalid library(ies) (不正なライブラリ)
- the CRT libraries are not installed (必要な CRT ライブラリがインストールされていない)
- system error (システムエラー)

func : エラーが発生した API 名

error code : エラー番号

API で発生したエラーではない場合は、func, error code には何も値が設定されません。

(S)

Agent Collector サービスを終了します。

(O)

要因の出力メッセージを確認し、次の対処を実施したあと、Agent Collector サービスを起動してください。それでも問題が解決しない場合は、保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。

- 要因の出力メッセージが"no such file(s)"の場合
ファイルパスが示すパスに RFC ライブラリが格納されているか確認してください。
- 要因の出力メッセージが"invalid library(ies)"の場合
ファイルパスが示すパスに正しい RFC ライブラリが格納されているか確認してください。
- 要因の出力メッセージが"the CRT libraries are not installed"の場合
Visual C++再頒布パッケージのライブラリがインストールされていることを確認してください。
- 要因の出力メッセージが"system error"の場合
保守資料を採取したあと、システム管理者またはサポートサービスに連絡してください。

必要な RFC ライブラリのバージョンについては、リリースノートを参照してください。

RFC ライブラリの入手方法については、リリースノートを参照してください。

問題が解決しない場合は、jpcras コマンドで資料を採取してから、システム管理者またはサポートサービスに連絡してください。

KAVF14185-E

The RFC library version is invalid. (file path=ファイルパス, version=メジャーバージョン.マイナーバージョン.パッチレベル)

RFC ライブラリのバージョンが不適切です (file path=ファイルパス, version=メジャーバージョン.マイナーバージョン.パッチレベル)

RFC ライブラリのバージョンが、PFM - Agent for Enterprise Applications の動作に必要なバージョンではありません。

(S)

Agent Collector サービスを終了します。

(O)

ファイルパスが示すパスに適切なバージョンの RFC ライブラリを格納してから再度 Agent Collector サービスを起動してください。

製品の動作に必要な RFC ライブラリのバージョンについては、リリースノートを参照してください。

RFC ライブラリの入手方法についてはリリースノートを参照してください。

KAVF14186-E

A timeout occurred during interprocess communication. (timeout seconds=タイムアウト時間)
プロセス間通信でタイムアウトが発生しました (timeout seconds=タイムアウト時間)

プロセス間通信でタイムアウトが発生しました。

このエラーが発生する要因として次のようなことが考えられます。

- 監視対象の SAP システムが高負荷であり、パフォーマンスデータの取得が遅延している
- 大量のパフォーマンスデータの取得が発生し、SAP システムまたは PFM - Agent for Enterprise Applications の処理に時間が掛かっている
- 上記以外の理由で SAP システムからの応答がない

(S)

このエラーが起動処理中に発生した場合、Agent Collector サービスは異常終了します。

このエラーが起動完了後（運用中）に発生した場合、エラー発生時に要求していたパフォーマンスデータの取得をスキップします。

スキップされたパフォーマンスデータについては、このメッセージのあとに出力されている KAVF14171-W メッセージを確認してください。

(O)

システムの負荷状況やワークプロセスの使用状況、SAP システムの状態を確認してください。

頻繁に問題が発生してエラーが回復しない場合には、jpcras コマンドで保守資料を採取したあと、システム管理者またはサポートサービスに連絡してください。

KAVF14190-E

Interprocess communication failed (reason=理由コード)

プロセス間通信に失敗しました (reason=理由コード)

jpcMcollect プロセスとのプロセス間通信に失敗しました。

reason：理由コード（次のどれか）

- initialization of interprocess communication failed（プロセス間通信の初期化に失敗した）
- shared memory does not exist（共有メモリーが存在しない）
- corruption of communication data was detected（通信データの破壊を検知）

(S)

このエラーが起動処理中に発生した場合、Agent Collector サービスは異常終了します。

このエラーが起動完了後（運用中）に発生した場合、エラー発生時に要求していたパフォーマンスデータの取得をスキップします。

スキップされたパフォーマンスデータについては、このメッセージのあとに出力されている KAVF14171-W メッセージを確認してください。

(O)

頻繁に問題が発生してエラーが回復しない場合には、jpcras コマンドで保守資料を採取したあと、システム管理者またはサポートサービスに連絡してください。

KAVF14191-E

An attempt to load the RFC library failed. (file path=ファイルパス, reason=要因, func=関数名)
RFC ライブラリのロードに失敗しました (file path=ファイルパス, reason=要因, func=関数名)

RFC ライブラリのロード中にエラーが発生しました。

メッセージに出力される値の意味を次に示します。

- file path : RFC ライブラリの絶対パス
- reason : OS の API から返却されたエラーメッセージ
- func : エラーが発生した OS の API 名

(S)

Agent Collector サービスを終了します。

(O)

次の対処を実施したあと、Agent Collector サービスを再起動してください。

それでも問題が解決しない場合は、保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。

- ファイルパスが示すパスに RFC ライブラリが格納されているか確認してください
- ファイルパスが示すパスに格納されている RFC ライブラリが正しいライブラリか (動作環境の OS /アーキテクチャに対応したライブラリか) 確認してください
- ファイルパスが示すパスに格納されている RFC ライブラリの権限 (-r-xr-xr-x) が正しいかを確認してください

必要な RFC ライブラリのバージョンについては、リリースノートを参照してください。

RFC ライブラリの入手方法についてはリリースノートを参照してください。

KAVF14200-I

Usage:

```
jr3slget [-h application-server-host -s system-number]
[-c client -u user {-p password | -p2 extended password}]
[-l language] [-codepage codepage]]
[-server sap-instance-name]
[-lasttime timestamp-file]
[{-x The-name-of-the-storage-file-in-WRAP1-format |
-xw The-prefix-for-the-storage-files-in-WRAP2-format |
-x2}]
[-cnf environment-parameters-file]
[-help] [-v]
```

使用方法

```
jr3slget [-h アプリケーションサーバホスト -s システム番号]
[-c クライアント -u ユーザー]
{-p パスワード | -p2 拡張パスワード}
[-l 言語] [-codepage コードページ]]
[-server SAP インスタンス名]
[-lasttime タイムスタンプファイル]
[{-x WRAP1 形式の格納ファイル名 |
-xw WRAP2 形式複数面出力の格納ファイル名 | -x2}]
[-cnf 環境パラメーター設定ファイル]
[-help] [-v]
```

-help オプションが指定されたため、jr3slget コマンドの使用方法を表示します。

(S)

コマンドを正常終了します。

KAVF14201-I

```
Usage:
jr3alget [-h application-server-host -s system-number]
[-c client -u user {-p password | -p2 extended password}]
[-l language] [-codepage codepage]]
[-c client -u user -p password [-l language] [-codepage codepage]]
[-ms monitor-set-name -mn monitor-name]
[-lasttime timestamp-file]
[{-x The-name-of-the-storage-file-in-WRAP1-format |
-xw The-prefix-for-the-storage-files-in-WRAP2-format |
-x2}]
[-cnf environment-parameters-file]
[-help] [-v]
使用方法:
jr3alget [-h アプリケーションサーバホスト -s システム番号]
[-c クライアント -u ユーザー]
{-p パスワード | -p2 拡張パスワード}
[-l 言語] [-codepage コードページ]]
[-ms モニターセット名 -mn モニター名]
[-lasttime タイムスタンプファイル]
[{-x WRAP1 形式の格納ファイル名 |
```

```
-xw WRAP2 形式複数面出力の格納ファイル名 | -x2]
[-cnf 環境パラメーター設定ファイル]
[-help] [-v]
```

-help オプションが指定されたため、jr3alget コマンドの使用方法を表示します。

(S)

コマンドを正常終了します。

KAVF14210-I

```
The command ended normally.
コマンドが正常終了しました
```

コマンドが正常終了したことを示すメッセージです。このメッセージは、コマンドに-v オプションが指定されたときにだけ出力されます。

(S)

終了コード 0 でコマンドを終了します。

KAVF14211-E

```
The command ended abnormally. (exit=終了コード)
コマンドが異常終了しました (exit=終了コード)
```

コマンドが異常終了したことを示すメッセージです。

(S)

終了コードでコマンドを終了します。

(O)

このメッセージの前に出力されている要因メッセージを参照してください。

KAVF14212-I

```
Connected to the SAP system.
SAP システムに接続しました
```

SAP システムとの RFC 接続が確立されました。このメッセージは、コマンドに-v オプションが指定されたときにだけ出力されます。

(S)

このメッセージを出力したあとに、接続に使用したパラメーター情報を示す KAVF14213-I と KAVF14215-I を出力します。その後、処理を続行します。

KAVF14213-I

SAP system data: ashost=アプリケーションサーバホスト, sysnr=システム番号

SAP システムデータ: ashost=アプリケーションサーバホスト, sysnr=システム番号

このメッセージは、RFC 接続確立時に KAVF14212-I に続けて、RFC 接続情報（あて先）として使用したパラメーターを示しています。このメッセージは、コマンドに `-v` オプションが指定されたときにだけ出力されます。

(S)

メッセージ KAVF14212-I が出力されたあとに、接続に使用したパラメーター情報を示します。

KAVF14215-I

SAP user data: client=クライアント, user=ユーザー, lang=言語, codepage=コードページ

SAP ユーザーデータ: client=クライアント, user=ユーザー, lang=言語, codepage=コードページ

このメッセージは、RFC 接続確立時に、KAVF14212-I に続けて RFC 接続情報（ログオン情報）として使用したパラメーターを示しています。このメッセージは、コマンドに `-v` オプションが指定されたときにだけ出力されます。言語とコードページの指定を省略した場合、`lang=`、`codepage=`には値が設定されません。また、パスワードは表示されません。

(S)

メッセージ KAVF14212-I が出力されたあとに、接続に使用したパラメーター情報を示します。

KAVF14216-I

Logged on to the external interface. (interface=インターフェース名, version=バージョン)

外部インターフェースにログオンしました (interface=インターフェース名, version=バージョン)

SAP システムの外部インターフェースに対するログオンが成功しました。インターフェース名およびバージョンは、ログオン先のインターフェース名とバージョンです。このメッセージは、コマンドに `-v` オプションが指定されたときにだけ出力されます。

(S)

処理を続行します。

KAVF14220-E

An error occurred in the RFC API. (エラーが発生した RFC API 名)

RFC API でエラーが発生しました (エラーが発生した RFC API 名)

RFC API の呼び出しでエラーが発生しました。

(S)

このメッセージに続けて、詳細なエラー情報を示すメッセージ KAVF14221-E を出力します。また、分類できるエラーについてさらに補足メッセージを出力することがあります。その後、コマンドの実行を中止します。

(O)

継続メッセージを参照して、問題を取り除いてからコマンドを再実行してください。

KAVF14221-E

```
RFC_ERROR_INFO: code=リターンコード, group=エラーグループ, key=エラーキー, message=エラーメッセージ, abapMsgClass=ABAP メッセージクラス, abapMsgType=ABAP メッセージタイプ, abapMsgNumber=ABAP メッセージ番号, abapMsgV1=ABAP メッセージ詳細フィールド 1, abapMsgV2=ABAP メッセージ詳細フィールド 2, abapMsgV3=ABAP メッセージ詳細フィールド 3, abapMsgV4=ABAP メッセージ詳細フィールド 4
```

RFC API のエラー詳細を示します。メッセージ KAVF14220-E に続けて出力されるメッセージです。メッセージに出力される値の意味を次に示します。

- code : RFC リターンコードの整数
- group : key を識別する整数
- key : エラーを識別する最大 127 バイトのコード
- message : エラー内容を説明する最大 511 バイトのテキスト（改行コードを含むことがある）
- abapMsgClass : ABAP メッセージクラスで最大 20 バイト
- abapMsgType : ABAP メッセージタイプで最大 1 バイト
- abapMsgNumber : ABAP メッセージ番号で最大 3 バイト
- abapMsgV1 : ABAP メッセージの詳細フィールドで最大 50 バイトのテキスト
- abapMsgV2 : ABAP メッセージの詳細フィールドで最大 50 バイトのテキスト
- abapMsgV3 : ABAP メッセージの詳細フィールドで最大 50 バイトのテキスト
- abapMsgV4 : ABAP メッセージの詳細フィールドで最大 50 バイトのテキスト

RFC API のエラー詳細のバイト数は「¥0」を含まないサイズです。

これらの値は、RFC API のエラー情報を格納する RFC_ERROR_INFO 構造体中のメンバー値をそのまま設定しています。RFC の詳細については、SAP システムのマニュアルを参照してください。

(S)

コマンドの実行を中止します。

(O)

問題を取り除いてからコマンドを再実行してください。

KAVF14222-E

An error occurred in the function module of the SAP system. (汎用モジュール名)
SAP システムの汎用モジュールでエラーが発生しました (汎用モジュール名)

SAP システムの汎用モジュール (BAPI) からエラーが返されました。

(S)

このメッセージに続けて、詳細なエラー情報を示すメッセージ KAVF14223-E または KAVF14224-E を出力します。また、分類できるエラーについてさらに補足メッセージを出力することがあります。その後、コマンドの実行を中止します。

(O)

継続メッセージを参照して、問題を取り除いてからコマンドを再実行してください。

KAVF14223-E

BAPIRET2: type=メッセージタイプ, id=メッセージクラス, number=メッセージ番号, message=メッセージテキスト
BAPIRET2: type=メッセージタイプ, id=メッセージクラス, number=メッセージ番号, message=メッセージテキスト

汎用モジュール (BAPI) のエラーを検出したときに、メッセージ KAVF14222-E に続けてこのメッセージを表示します。メッセージに出力される値の意味を次に示します。

- type: メッセージの重要度を表す 1 バイトの文字 (S: 正常, E: エラー, W: 警告, I: 情報, A: 強制終了)
- id: メッセージを分類する最大 20 バイトのクラス
- number: エラーを識別する最大 3 バイトのエラーコード
- message: エラー内容を説明する最大 220 バイトのテキスト

これらの値は、BAPI のエラーを格納する BAPIRET2 構造体中のメンバー値をそのまま設定しています。BAPI の詳細については、SAP システムのマニュアルを参照してください。呼び出した BAPI の仕様については、SAP システムのオブジェクトナビゲーター (SE80)、BAPI ブラウザー (BAPI)、または SAP システムのマニュアルを参照してください。

(S)

コマンドの実行を中止します。

(O)

問題を取り除いてからコマンドを再実行してください。

KAVF14224-E

RFC_EXCEPTION: エラー要因コード

RFC_EXCEPTION: エラー要因コード

RFC 例外によって汎用モジュールのエラーを検出した場合、メッセージ KAVF14222-E に続けてこのメッセージを表示します。

(S)

コマンドの実行を中止します。

(O)

問題を取り除いてからコマンドを再実行してください。

KAVF14225-E

Cannot connect to the SAP system.

SAP システムに接続できません

SAP システムとの RFC 接続を確立する際に通信エラーが発生しました。このメッセージの直前に、エラーが発生した関数名と詳細情報を示すメッセージ KAVF14220-E および KAVF14221-E が出力されています。このエラーが発生する要因として次のことが考えられます。

- RFC 接続情報が正しく設定されていない（ホスト名が解決できない、誤ったシステム番号が設定されているなど）
- SAP システムが稼働していない
- SAP システムが高負荷であるため RFC 要求を受け付けられない
- ネットワークの設定に問題がある

(S)

このメッセージに続けて、接続に使用したパラメーター情報を示すメッセージ KAVF14227-E と KAVF14229-E を出力します。その後、コマンドの実行を中止します。

(O)

RFC 接続情報で指定するあて先について、SAP システムの稼働状態、ネットワークの状態などを見直し、問題を取り除いてからコマンドを再実行してください。

KAVF14226-E

Cannot connect to the SAP system, because an attempt to log on failed.

ログオンに失敗したため SAP システムに接続できません

SAP システムとの RFC 接続を確立する際にログオンエラーが発生しました。このメッセージの直前に、エラーが発生した関数名と詳細情報を示すメッセージ KAVF14220-E および KAVF14221-E が出力されています。このエラーが発生する要因として次のことが考えられます。

- RFC 接続情報が正しく設定されていない（存在しないユーザーや誤ったパスワードを設定したなど）

- ユーザーがロックアウトされている
- ユーザーに S_RFC 権限が適切に付与されていない
- SAP NetWeaver 7.0 以降をベースとした SAP システムで小文字を含む拡張パスワードを定義しているが、拡張パスワードに対応していない接続情報 (-p オプションや環境パラメーター設定ファイルの PASSWD ラベル) を指定している

(S)

このメッセージに続けて、接続に使用したパラメーター情報を示すメッセージ KAVF14227-E と KAVF14229-E を出力します。その後、コマンドの実行を中止します。

(O)

RFC 接続情報で指定するユーザーについて、未定義、パスワードの有効期限切れ、ロックアウト、権限などを見直し、問題を取り除いてからコマンドを再実行してください。

KAVF14227-E

```
SAP システムデータ: ashost=アプリケーションサーバホスト, sysnr=システム番号  
SAP system data: ashost=アプリケーションサーバホスト, sysnr=システム番号
```

このメッセージは、RFC 接続エラー時に、メッセージ KAVF14225-E または KAVF14226-E に続けて、RFC 接続情報（あて先）として使用したパラメーターを示しています。

(S)

コマンドの実行を中止します。

(O)

問題を取り除いてからコマンドを再実行してください。

KAVF14229-E

```
SAP user data: client=クライアント, user=ユーザー, lang=言語, codepage=コードページ  
SAP ユーザーデータ: client=クライアント, user=ユーザー, lang=言語, codepage=コードページ
```

このメッセージは、RFC 接続エラー時に、メッセージ KAVF14225-E または KAVF14226-E に続けて、RFC 接続情報（ログオン）として使用したパラメーターを示しています。言語とコードページの指定を省略した場合、lang=、codepage= には値が設定されません。また、パスワードは表示されません。

(S)

コマンドの実行を中止します。

(O)

問題を取り除いてからコマンドを再実行してください。

KAVF14230-E

Cannot log on to the external interface. (interface=ログオン先のインターフェース名, version=バージョン)

外部インターフェースにログオンできません (interface=ログオン先のインターフェース名, version=バージョン)

SAP システムの外部インターフェースに対するログオンが拒否されました (BAPI エラー)。このメッセージの直前にエラーが発生した汎用モジュール名と詳細情報を示すメッセージ KAVF14222-E および KAVF14223-E が出力されています。このエラーが発生する要因として次のことが考えられます。

- 接続先の SAP システムがこのインターフェースをサポートしていない
- ユーザーに S_XMI_PROD 権限が適切に付与されていない

(S)

コマンドの実行を中止します。

(O)

接続先の SAP システムの SAP Basis (SAP WebAS) のリリースとパッチレベルが前提条件を満たしていることを確認してください。汎用モジュール BAPI_XMI_LOGON が権限チェックでエラーとなっている場合は、RFC 接続に使用するユーザーに権限オブジェクト SXMI_PROD を適切に付与してください。

KAVF14231-E

The specified server name is invalid. (指定された SAP インスタンス名)

指定されたサーバ名は無効です (指定された SAP インスタンス名)

次のどちらかで指定した SAP インスタンス名が定義されていないか、または無効です (BAPI エラー)。

- jr3slget コマンドの -server オプション
- 環境パラメーター設定ファイル (TARGET セクションの SERVER ラベル)

このメッセージの直前に、エラーが発生した汎用モジュール名と詳細情報を示すメッセージ KAVF14222-E および KAVF14223-E が出力されています。

(S)

コマンドの実行を中止します。

(O)

指定した SAP インスタンス名を見直してコマンドを再実行してください。SAP インスタンス名は、トランザクションコード SM51 などで確認できます。SAP インスタンス名は、通常「ホスト名_システム ID_システム番号」の形式です。なお、SAP インスタンスの大文字・小文字は区別されます。

KAVF14232-E

The specified monitor set name is invalid. (指定されたモニターセット名)
指定されたモニターセット名は無効です (指定されたモニターセット名)

次のどちらかで指定したモニターセット名が定義されていないか、または無効です (BAPI エラー)。

- jr3alget コマンドの -ms オプション
- 環境パラメーター設定ファイル (TARGET セクションの MONITOR_SET ラベル)

このメッセージの直前に、エラーが発生した汎用モジュール名と詳細情報を示すメッセージ KAVF14222-E および KAVF14223-E が出力されています。

(S)

コマンドの実行を中止します。

(O)

指定したモニターセット名を見直してコマンドを再実行してください。モニターセット名は、トランザクションコード RZ20 などで確認できます。モニターセット名は、「監視セット」と表記されていることもあります。なお、モニターセット名の大文字・小文字は区別されます。

KAVF14233-E

The specified monitor name is invalid. (指定されたモニター名)
指定されたモニター名は無効です (指定されたモニター名)

次のどちらかで指定したモニター名が定義されていないか、または無効です (BAPI エラー)。

- jr3alget コマンドの -mn オプション
- 環境パラメーター設定ファイル (TARGET セクションの MONITOR ラベル)

このメッセージの直前に、エラーが発生した汎用モジュール名と詳細情報を示すメッセージ KAVF14222-E および KAVF14223-E が出力されています。

(S)

コマンドの実行を中止します。

(O)

指定したモニター名を見直してコマンドを再実行してください。モニターセット名とモニター名は、トランザクションコード RZ20 などで確認できます。モニターセット名は、「監視セット」と表記されていることもあります。なお、モニター名の大文字・小文字は区別されます。

KAVF14240-E

The command execution will be terminated because the system resources are insufficient.

システムリソースが不足したため処理を打ち切ります

メモリーが不足しているため、処理を続行できません。

(S)

コマンドの実行を中止します。

(O)

不要なアプリケーションを終了するか、メモリーを拡張したあと再度コマンドを実行してください。

KAVF14241-E

A file or directory cannot be opened. (エラーが発生したファイル名またはディレクトリ名)
ファイルまたはディレクトリをオープンできません (エラーが発生したファイル名またはディレクトリ名)

ファイルまたはディレクトリのオープンまたは作成時にエラーが発生しました。エラーが発生したファイル名またはディレクトリ名が相対パスで示されている場合、コマンドの作業ディレクトリからの相対パスを示します。ただし、環境パラメーター設定ファイルで別の作業ディレクトリを指定した場合、カレントディレクトリと異なることがあります。このエラーが発生する要因として次のことが考えられます。

- ファイルまたはディレクトリが存在しない (既存ファイルをオープンするとき)
- コマンド実行ユーザーにこのファイルまたはディレクトリをオープンする適切な権限がない
- ファイルまたはディレクトリを作成するためのシステムリソースが不足している

(S)

コマンドの実行を中止します。

(O)

コマンド実行ユーザーの権限と、エラーが発生したファイル名またはディレクトリ名が示すパスの状態を確認して、問題を取り除いてから再度コマンドを実行してください。

KAVF14242-E

The available free space is insufficient for extending the file or directory. (エラーが発生したファイル名またはディレクトリ名)
ファイルまたはディレクトリを拡張するための空き領域がありません (エラーが発生したファイル名またはディレクトリ名)

オープン済みのファイルまたはディレクトリの領域を拡張する際に、ディスク容量不足が発生しました。エラーが発生したファイル名またはディレクトリ名が相対パスで示されている場合、コマンドの作業ディレクトリからの相対パスを示します。ただし、環境パラメーター設定ファイルで別の作業ディレクトリを指定した場合、カレントディレクトリと異なることがあります。なお、標準入出力に対するアクセスでエラーが発生した場合、エラーが発生したファイル名またはディレクトリ名には、空の文字列が出力されます。

(S)

コマンドの実行を中止します。

(O)

エラーが発生したファイル名またはディレクトリ名が示すファイルシステムの空き容量を増やすか、またはファイルの作成先を変更してから再度コマンドを実行してください。

KAVF14243-E

An error occurred during the accessing of the file or directory. (エラーが発生したファイル名またはディレクトリ名)

ファイルまたはディレクトリをアクセス中にエラーが発生しました (エラーが発生したファイル名またはディレクトリ名)

ファイルまたはディレクトリに対する一般アクセスで I/O エラーが発生しました。エラーが発生したファイル名またはディレクトリ名が相対パスで示されている場合、コマンドの作業ディレクトリからの相対パスを示します。ただし、環境パラメーター設定ファイルで別の作業ディレクトリを指定した場合、カレントディレクトリと異なることがあります。なお、標準入出力に対するアクセスでエラーが発生した場合、エラーが発生したファイル名またはディレクトリ名には空の文字列が出力されます。

(S)

コマンドの実行を中止します。

(O)

エラーが発生したファイル名またはディレクトリ名が示すパスの状態を確認して、問題を取り除いてから再度コマンドを実行してください。

KAVF14244-E

Initialization of the command failed.

Initialization of the command failed.

コマンドの初期化が失敗しました。

(S)

コマンドの実行を中止します。

(O)

保守資料を採取したあと、システム管理者、またはサポートサービスに連絡してください。

KAVF14245-E

Installation of the product has not finished correctly.

Installation of the product has not finished correctly.

製品のインストールが正しく完了していません。

(S)

コマンドの実行を中止します。

(O)

製品を再インストールしてください。

KAVF14250-W

A specified environment parameter is invalid. (section=**セクション名**, label=**ラベル名**)
環境パラメーターの指定に誤りがあります (section=**セクション名**, label=**ラベル名**)

メッセージの**セクション名**および**ラベル名**が示す、環境パラメーター設定ファイルの環境パラメーターの値に誤りがあります。このエラーが発生する要因として次のことが考えられます。

- 値の長さが制限値を超えている
- 値に指定できない文字が含まれている
- 指定できる範囲外の数値が指定されている

(S)

指定値を無効にして処理を続行します。この警告によってコマンドが異常終了することはありません。

(O)

環境パラメーター設定ファイルの指定値を見直してください。-cnf オプションで環境パラメーター設定ファイルを指定しない場合、デフォルト環境パラメーター設定ファイル（カレントディレクトリ下の「**コマンド名.ini**」）が参照されます。

KAVF14251-E

A required option is missing.
省略できないオプションが指定されていません

指定しなければならないオプションまたは指定の組み合わせによって省略できないオプションが指定されていません。例えば、RFC 接続情報について引数で-h オプションを指定するとき、-s オプションは省略できません。

(S)

コマンドの実行を中止します。

(O)

コマンド文法を見直して再度実行してください。

KAVF14253-E

The option value is invalid. (**オプション**)
オプションの値の指定に誤りがあります (**オプション**)

オプションで示す値の指定に誤りがあります。このエラーが発生する要因として次のことが考えられます。

- 値が省略されている
- 値の長さが制限値を超えている
- 値に指定できない文字が含まれている
- 指定できる範囲外の数値が指定されている

(S)

コマンドの実行を中止します。

(O)

コマンド文法を見直して再度実行してください。

KAVF14254-E

An option is invalid. (オプション)
無効なオプションです (オプション)

オプションで示す文字列は、オプションとして認識されません。

(S)

コマンドの実行を中止します。

(O)

コマンド文法を見直して再度実行してください。

KAVF14255-E

Mutually-exclusive options are specified.
同時に指定できないオプションが指定されています

同時に指定できないオプションが指定されています。例えば、出力先を指定する-x オプションと-x2 オプションは同時に指定できません。

(S)

コマンドの実行を中止します。

(O)

コマンド文法を見直して再度実行してください。

KAVF14256-E

An option is duplicated. (オプション)
オプションが重複指定されています (オプション)

オプションで示すオプションは、複数指定できません。

(S)

コマンドの実行を中止します。

(O)

コマンド文法を見直して再度実行してください。

KAVF14257-E

Mutually exclusive keys or section names are specified as environment parameters.

環境パラメーターの指定に同時に指定できないキー・セクション名が指定されています

環境パラメーター設定ファイルで、同時に指定できないキー・セクション名が指定されています。このエラーが発生する要因として次のことが考えられます。

- パスワード指定の PASSWD セクションと PASSWD2 セクションは同時に指定できません。

(S)

コマンドの実行を中止します。

(O)

環境パラメーター設定ファイルの指定値を見直してください。

KAVF14260-E

The specified RFC connection parameter (destination) is incomplete.

RFC 接続情報（宛先）の指定が不完全です

引数（-h および -s オプション）が省略されましたが、環境パラメーター設定ファイル内に環境パラメーター「RFC 接続情報」が定義されていないか、誤りがあるため、処理を続行できません。引数を省略する場合は、環境パラメーター設定ファイルの CONNECT セクション中に、次の項目を正しく定義してください。

- アプリケーションサーバホスト（ASHOST）
- システム番号（SYSNR）

(S)

コマンドの実行を中止します。

(O)

環境パラメーター設定ファイルの指定値を見直して、コマンドを再実行してください。なお、-cnf オプションで環境パラメーター設定ファイルを指定しない場合、デフォルト環境パラメーター設定ファイル（カレントディレクトリ下の「コマンド名.ini」）が参照されます。

KAVF14261-E

The specified RFC connection parameter (logon) is incomplete.

RFC 接続情報（ログオン）の指定が不完全です

引数（-c, -u, および-p オプション）が省略されましたが、環境パラメーター設定ファイル内に環境パラメーター「RFC 接続情報」が定義されていないか、誤りがあるため、処理を続行できません。引数を省略する場合は、環境パラメーター設定ファイルの CONNECT セクション中に、次の項目を定義してください。

- クライアント (CLIENT)
- ユーザー (USER)
- パスワード (PASSWORD)

(S)

コマンドの実行を中止します。

(O)

環境パラメーター設定ファイルの指定値を見直して、コマンドを再実行してください。なお、-cnf オプションで環境パラメーター設定ファイルを指定しない場合は、デフォルト環境パラメーター設定ファイル（カレントディレクトリ下の「コマンド名.ini」）が参照されます。

KAVF14262-E

The specified target is incomplete.

ターゲットの指定が不完全です

- jr3slget コマンドの場合

引数（-server）が省略されましたが、環境パラメーター設定ファイル内に環境パラメーター「ターゲット」が定義されていないか、誤りがあるため、処理を続行できません。引数を省略する場合は、環境パラメーター設定ファイルの TARGET セクション中に、次の項目を定義してください。

- アプリケーションサーバ (SERVER)

- jr3alget コマンドの場合

引数（-ms および-mn）が省略されましたが、環境パラメーター設定ファイル内に環境パラメーター「ターゲット」が定義されていないか、誤りがあるため、処理を続行できません。引数を省略する場合は、環境パラメーター設定ファイルの TARGET セクション中に、次の項目を定義してください。

- モニターセット名 (MONITOR_SET)
- モニター名 (MONITOR)

(S)

コマンドの実行を中止します。

(O)

環境パラメーター設定ファイルの指定値を見直して、コマンドを再実行してください。なお、-cnf オプションで環境パラメーター設定ファイルを指定しないときはデフォルト環境パラメーター設定ファイル（カレントディレクトリ下の「コマンド名.ini」）が参照されます。

KAVF14263-E

The specified output place is incomplete.

出力先の指定が不完全です

-x2 オプションが指定されましたが、環境パラメーター設定ファイルの EXTRACTFILE セクションの X2PATH ラベルに出力先のパスが定義されていないか、または指定に誤りがあるため処理を続行できません。

(S)

コマンドの実行を中止します。

(O)

環境パラメーター設定ファイルの指定値を見直して、コマンドを再度実行してください。なお、-cnf オプションで環境パラメーター設定ファイルを指定しないときは、デフォルト環境パラメーター設定ファイル（カレントディレクトリ下の「コマンド名.ini」）が参照されます。

KAVF14270-E

The environment parameter settings file cannot be accessed. (エラーが発生した環境パラメーター設定ファイルのパス名)

環境パラメーター設定ファイルにアクセスできません (エラーが発生した環境パラメーター設定ファイルのパス名)

-cnf オプションで指定された環境パラメーター設定ファイルにアクセスできません。エラーが発生した環境パラメーター設定ファイルのパス名が相対パスで示されている場合、カレントディレクトリからの相対パスを示します。このエラーが発生する要因として次のことが考えられます。

- ファイルが存在しない
- コマンド実行ユーザーに対して読み込みのアクセス権限がない

(S)

コマンドの実行を中止します。

(O)

コマンド実行ユーザーの権限と、エラーが発生した環境パラメーター設定ファイルのパス名が示すパスの状態を確認して、問題を取り除いてから再度コマンドを実行してください。

KAVF14271-W

The trace file cannot be accessed. (エラーが発生したトレースファイルのパス名)
トレースファイルにアクセスできません (エラーが発生したトレースファイルのパス名)

トレースファイルのオープンまたは書き込み処理で、1 回以上のエラーが発生しました。保守情報がまったく採取されないか、欠落している可能性があります。エラーが発生したトレースファイルのパス名が相対パスで示されている場合、コマンドの作業ディレクトリからの相対パスを示します。ただし、環境パラメーター設定ファイルで別の作業ディレクトリを指定した場合、カレントディレクトリと異なることがあります。このエラーが発生する要因として次のことが考えられます。

- ファイルが存在しない
- コマンド実行ユーザーに対して読み込みおよび書き込みのアクセス権限がない

(S)

処理を続行します。この警告によってコマンドが異常終了することはありません。

(O)

コマンド実行ユーザーの権限と、エラーが発生したトレースファイルのパス名が示すパスの状態を確認して、問題を取り除いてください。なお、トレースファイルの出力先は、環境パラメーター設定ファイルで変更できます。

KAVF14272-E

The work directory cannot be changed. (作業ディレクトリ)
作業ディレクトリを変更できません (作業ディレクトリ)

環境パラメーター設定ファイルで指定されたパス (COMMAND セクションの WORKDIR ラベルに指定されている値) に作業ディレクトリを変更できません。このエラーが発生する要因として次のことが考えられます。

- 無効なパスが指定されている
- 指定したディレクトリがディレクトリではない
- ディレクトリに実行 (サーチ) 権限がない

(S)

コマンドの実行を中止します。

(O)

環境パラメーター設定ファイルで指定されたパス (COMMAND セクションの WORKDIR ラベルに指定されている値) の指定を見直して、問題を取り除いてから再度コマンドを実行してください。

KAVF14273-I

The time-stamp file was initialized. (タイムスタンプファイル名)

タイムスタンプファイルを初期化しました (タイムスタンプファイル名)

タイムスタンプファイルを新規作成し、管理情報を初期化しました。-lasttime オプションを指定したコマンドの初回実行時 (指定されたタイムスタンプファイルが存在しないとき) に出力されます。このメッセージは、コマンドに-v オプションが指定されたときにだけ出力されます。

(S)

コマンドを正常終了します。

(O)

差分情報は、次回以降のコマンド実行時に出力されます。同じタイムスタンプファイルを指定して、再度コマンドを実行してください。

KAVF14274-E

The time-stamp file cannot be updated. (タイムスタンプファイル名)

タイムスタンプファイルを更新できません (タイムスタンプファイル名)

タイムスタンプファイルを更新する際に予期しないエラーが発生しました。コマンドの処理結果を格納できなかったため、次回のコマンド実行時に、レコードが重複して報告されるなど、差分レコードを正しく報告できない可能性があります。

(S)

コマンドの実行を中止します。

(O)

タイムスタンプファイル名が示すパスの状態を確認して問題を取り除いてください。

KAVF14275-I

Number of processing records: 処理レコード数

処理レコード数: 処理レコード数

コマンドが報告したレコードの数を示します。このメッセージは、コマンドに-v オプションが指定されたときにだけ出力されます。

(S)

処理を続行します。

KAVF14276-W

The specified output format column value is invalid. (指定値)

出力書式の列値の指定に誤りがあります (指定値)

環境パラメーター設定ファイルの FORMAT セクションの COLUMN ラベルに指定した値に誤りがあります。

(S)

該当する列の値の指定を無効にして処理を続行します（表示する列が少なくなります）。この警告によって、コマンドの実行は中止しません。

(O)

環境パラメーター設定ファイルの FORMAT セクションの COLUMN ラベルに、有効なフィールド ID を指定してください。フィールド ID については、「11. コマンド」を参照してください。-cnf オプションで環境パラメーター設定ファイルを指定しないときは、デフォルト環境パラメーター設定ファイル（カレントディレクトリ下の「コマンド名.ini」）が参照されます。

KAVF14277-I

The time-stamp file was updated. (タイムスタンプファイル名)
タイムスタンプファイルを更新しました (タイムスタンプファイル名)

タイムスタンプファイルを更新しました。このメッセージは、コマンドに-v オプションが指定されたときにだけ出力されます。

(S)

コマンドを正常終了します。

KAVF14278-E

The time-stamp file format is invalid. (エラーが発生したタイムスタンプファイル名)
タイムスタンプファイルの形式が不正です (エラーが発生したタイムスタンプファイル名)

-lasttime オプションで指定したファイルは、タイムスタンプファイルではありません。エラーが発生したタイムスタンプファイル名が相対パスで示されている場合、コマンドの作業ディレクトリからの相対パスを示します。ただし、環境パラメーター設定ファイルで別の作業ディレクトリを指定した場合、カレントディレクトリと異なることがあります。

(S)

コマンドの実行を中止します。

(O)

正しいタイムスタンプファイルを指定してコマンドを再実行してください。ファイルアクセスエラーなどでタイムスタンプファイルの管理情報が破壊された場合、タイムスタンプファイルを削除して再作成してください。

KAVF14280-W

System log information was output but it exceeded the size of data writable to a system log information storage file in one collection operation. (ashost=アプリケーションサーバホスト, sysnr=システム番号, server=SAP インスタンス名, validsize=有効データサイズ (バイト), datasize=抽出出力したサイズ (バイト), path=システムログ情報格納ファイルパス)

1 回の収集でシステムログ情報格納ファイルの有効データサイズを超過してシステムログ情報を出力しました (ashost=アプリケーションサーバホスト, sysnr=システム番号, server=SAP インスタンス名, validsize=有効データサイズ (バイト), datasize=抽出出力したサイズ (バイト), path=システムログ情報格納ファイルパス)

1 回の収集でシステムログ情報格納ファイルの上限サイズ「有効データサイズ」を超えるシステムログ情報が出力されました。

有効データサイズとは、ファイル監視製品のログファイルトラップで情報喪失や監視遅延が発生しないサイズの上限值であり、ファイルサイズから製品で必要とするデータを差し引いた値です。

メッセージの「システムログ情報格納ファイルパス」は、コマンドの-x オプションに設定した値、-xw オプションに設定した値、または-x2 オプションで指定した場合の環境パラメーター設定ファイルの ECTRACEFILE セクションの X2PATH ラベルで設定した値が出力されます。

抽出出力したサイズは、最大 2 ギガバイト-1 バイトまで表示します。

(S)

処理を続行します。

(O)

メッセージ発生時の対処

- SAP システム側で、本メッセージが出力された収集の対象時間帯およびそれ以降に発生したシステムログ情報を確認し、ファイル監視製品のログファイルトラップで通知されなかった情報を特定してください。通知されなかった情報の中に対処すべき情報があれば、出力されたシステムログ情報の内容に応じて対処してください。
- JP1/Base のログファイルトラップで WRAP1 形式を監視していた場合は、JP1/Base のログファイルトラップを再起動してください。

見直し時の対処

- メッセージに出力された「抽出出力したサイズ」と「有効データサイズ」の情報を基に、有効データサイズを超過した書き込みが発生しないように、システムログ情報格納ファイルのファイルサイズ (環境パラメーター設定ファイルの EXTRACTFILE セクションの SIZE ラベルの設定値) を「抽出出力したサイズ」よりも大きくなるように見直してください。「抽出出力したサイズ」-「有効データサイズ」のサイズが、書き込みに不足したサイズとなります。
- 格納ファイルを WRAP1 形式で出力している場合、複数面を指定できる WRAP2 形式で出力するように見直してください。

KAVF14281-W

CCMS alert information was output but it exceeded the size of data writable to a CCMS alert information storage file in one collection operation. (ashost=アプリケーションサーバホスト, sysnr=システム番号, monitorset=モニターセット名, monitor=モニター名, validsize=有効データサ

イズ (バイト) , datasize=抽出出力したサイズ (バイト) , path=CCMS アラート情報格納ファイルパス)

1 回の収集で CCMS アラート情報格納ファイルの有効データサイズを超過して CCMS アラート情報を出力しました (ashost=アプリケーションサーバホスト, sysnr=システム番号, monitorset=モニターセット名, monitor=モニター名, validsize=有効データサイズ (バイト) , datasize=抽出出力したサイズ (バイト) , path=CCMS アラート情報格納ファイルパス)

1 回の収集で CCMS アラート情報格納ファイルの上限サイズ「有効データサイズ」を超える CCMS アラート情報が出力されました。

有効データサイズとは、ファイル監視製品のログファイルトラップで情報喪失や監視遅延が発生しないサイズの上限值であり、ファイルサイズから製品で必要とするデータを差し引いた値です。

メッセージの「CCMS アラート情報格納ファイルパス」は、コマンドの-x オプションに設定した値、-xw オプションに設定した値、または-x2 オプションで指定した場合の環境パラメーター設定ファイルの ECTTRACEFILE セクションの X2PATH ラベルで設定した値が出力されます。

抽出出力したサイズは、最大 2 ギガバイト-1 バイトまで表示します。

(S)

処理を続行します。

(O)

メッセージ発生時の対処

- SAP システム側で、本メッセージが出力された収集の対象時間帯およびそれ以降に発生した CCMS アラート情報を確認し、ファイル監視製品のログファイルトラップで通知されなかった情報を特定してください。通知されなかった情報の中に対処すべき情報があれば、格納された CCMS アラート情報の内容に応じて対処してください。
- JP1/Base のログファイルトラップで WRAP1 形式を監視していた場合は、JP1/Base のログファイルトラップを再起動してください。

見直し時の対処

- メッセージに出力された「抽出出力したサイズ」と「有効データサイズ」の情報を基に、有効データサイズを超過した書き込みが発生しないように、CCMS アラート情報格納ファイルのファイルサイズ (環境パラメーター設定ファイルの EXTRACTFILE セクションの SIZE ラベルの設定値) を「抽出出力したサイズ」よりも大きくなるように見直してください。「抽出出力したサイズ」-「有効データサイズ」のサイズが、書き込みに不足したサイズとなります。
- 格納ファイルを WRAP1 形式で出力している場合、複数面を指定できる WRAP2 形式で出力するように見直してください。

KAVF14285-E

An attempt to convert the character code failed. (source character code=変換前の文字コード, destination character code=変換後の文字コード)

文字コードの変換に失敗しました (変換元の文字コード=変換前の文字コード, 変換後の文字コード=変換後の文字コード)

文字コードの変換に失敗しました。

(S)

コマンドの実行を打ち切ります (異常終了)。

(O)

引数または環境パラメーター設定ファイルの指定値にシフト JIS (外字・機種依存文字・第三, 第四水準漢字を除く) 範囲外の文字が含まれていないか見直して, コマンドを再実行してください。

なお, -cnf オプションで環境パラメーター設定ファイルを指定しないときはデフォルト環境パラメーター設定ファイル (カレントディレクトリ下の「コマンド名.ini」) が検索されます。

KAVF14286-E

An attempt to load the RFC library failed. (file path=ファイルパス, reason=要因, func=API 名, error code=エラーコード)

RFC ライブラリのロードに失敗しました (file path=ファイルパス, reason=要因, func=API 名, error code=エラーコード)

RFC ライブラリのロード中にエラーが発生しました。

メッセージに出力される値の意味を次に示します。

file path : RFC ライブラリのファイルパス

reason : 要因 (次のどれか)

- no such file(s) (ファイルが存在しない)
- invalid library(ies) (不正なライブラリ)
- the CRT libraries are not installed (必要な CRT ライブラリがインストールされていない)
- system error (システムエラー)

func : エラーが発生した API 名

error code : エラー番号

API で発生したエラーでない場合は, func, error code には何も値が設定されません。

(S)

コマンドの実行を打ち切ります (異常終了)。

(O)

要因の出力メッセージを確認し, 次の対処を実施したあと, コマンドを再実行してください。それでも問題が解決しない場合は, 保守資料を採取したあと, システム管理者に連絡してください。

- 要因の出力メッセージが"no such file(s)"の場合
ファイルパスが示すパスに RFC ライブラリが格納されているか確認してください。
- 要因の出力メッセージが"invalid library(ies)"の場合
ファイルパスが示すパスに正しい RFC ライブラリが格納されているか確認してください。
- 要因の出力メッセージが"the CRT libraries are not installed"の場合
Visual C++再頒布パッケージのライブラリがインストールされていることを確認してください。
- 要因の出力メッセージが"system error"の場合
保守資料を採取したあと、システム管理者またはサポートサービスに連絡してください。

必要な RFC ライブラリのバージョンについては、リリースノートを参照してください。

RFC ライブラリの入手方法については、リリースノートを参照してください。

問題が解決しない場合は、jpcras コマンドで保守資料を採取したあと、システム管理者またはサポートサービスに連絡してください。

KAVF14287-E

The RFC library version is invalid. (file path=ファイルパス, version=メジャーバージョン.マイナーバージョン.パッチレベル)

RFC ライブラリのバージョンが不適切です (file path=ファイルパス, version=メジャーバージョン.マイナーバージョン.パッチレベル)

RFC ライブラリのバージョンが、PFM - Agent for Enterprise Applications の動作に必要なバージョンではありません。

(S)

コマンドの実行を打ち切ります (異常終了)。

(O)

ファイルパスが示すパスに適切なバージョンの RFC ライブラリを格納してから再度コマンドを実行してください。

製品の動作に必要な RFC ライブラリのバージョンについては、リリースノートを参照してください。

RFC ライブラリの入手方法については、リリースノートを参照してください。

KAVF14288-E

An attempt to load the RFC library failed. (file path=ファイルパス, reason=要因,func=関数名)

RFC ライブラリのロードに失敗しました (file path=ファイルパス, reason=要因,func=関数名)

RFC ライブラリのロード中にエラーが発生しました。

メッセージに出力される値の意味を次に示します。

- file path : RFC ライブラリのファイルパス

- reason：エラーが発生した API 名
- func：エラーが発生した OS の API 名

(S)

コマンドの実行を打ち切ります（異常終了）。

(O)

要因の出力メッセージを確認し、次の対処を実施したあと、コマンドを再実行してください。それでも問題が解決しない場合は、保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。

- ファイルパスが示すパスに RFC ライブラリが格納されているか確認してください。
- ファイルパスが示すパスに RFC ライブラリが正しいライブラリか（動作環境の OS/アーキテクチャに対応したライブラリか）確認してください。
- ファイルパスが示すパスに格納されている RFC ライブラリの権限（-r-xr-xr-x）が正しいか確認してください。

必要な RFC ライブラリのバージョンについては、リリースノートを参照してください。

RFC ライブラリの入手方法についてはリリースノートを参照してください。

KAVF14289-E

A prerequisite module was not found.

前提とするモジュールがありません

前提とするモジュールがシステムにありません。

(S)

Agent Collector サービスを終了します。

(O)

次の対処を実施したあと、コマンドを再実行してください。それでも問題が解決しない場合は、保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。

- 前提 OS パッケージが適用されているか確認してください。
必要な OS の前提パッケージについては、リリースノートを参照してください。

KAVF14290-E

Preparation for character code conversion failed.

文字コード変換の準備に失敗しました

SAP システムとの通信処理で文字コード変換テーブルのオープンに失敗しました。

(S)

Agent Collector サービスを終了します。

(O)

カーネルパラメーターなどからシステムまたはプロセスでオープンできるファイルの数が不足していないことを確認したあと、コマンドを再実行してください。

それでも問題が解決しない場合は、保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。

13

トラブルへの対処方法

この章では、Performance Management の運用中にトラブルが発生した場合の対処方法などについて説明します。ここでは、主に PFM - Agent でトラブルが発生した場合の対処方法について記載しています。Performance Management システム全体のトラブルへの対処方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

13.1 対処の手順

Performance Management でトラブルが起きた場合の対処の手順を次に示します。

現象の確認

次の内容を確認してください。

- トラブルが発生したときの現象
- メッセージの内容（メッセージが出力されている場合）
- 共通メッセージログなどのログ情報

各メッセージの要因と対処方法については、「[12. メッセージ](#)」を参照してください。また、Performance Management が出力するログ情報については、「[13.3 トラブルシューティング時に採取するログ情報](#)」を参照してください。

資料の採取

トラブルの要因を調べるために資料の採取が必要です。「[13.4 トラブルシューティング時に採取が必要な資料](#)」および「[13.5 トラブルシューティング時に採取する資料の採取方法](#)」を参照して、必要な資料を採取してください。

問題の調査

採取した資料を基に問題の要因を調査し、問題が発生している部分、または問題の範囲を切り分けてください。

13.2 トラブルシューティング

ここでは、Performance Management 使用時のトラブルシューティングについて記述します。Performance Management を使用しているときにトラブルが発生した場合、まず、この節で説明している現象が発生していないか確認してください。

Performance Management に発生する主なトラブルの内容を次の表に示します。

表 13-1 トラブルの内容

分類	トラブルの内容	記述箇所
セットアップやサービスの起動について	<ul style="list-style-type: none">Performance Management のプログラムのサービスが起動しないサービスの起動要求をしてからサービスが起動するまで時間が掛かるPerformance Management のプログラムのサービスを停止した直後に、別のプログラムがサービスを開始したとき、通信が正しく実行されない「ディスク容量が不足しています」というメッセージが出力されたあと Master Store サービスまたは Agent Store サービスが停止するAgent Collector サービスまたは Remote Monitor Collector サービスが起動しない	13.2.1
コマンドの実行について	<ul style="list-style-type: none">jpctool service list コマンドを実行すると稼働していないサービス名が出力されるjpctool db dump コマンドを実行すると、指定した Store データと異なるデータが出力される	13.2.2
レポートの定義について	<ul style="list-style-type: none">履歴レポートに表示されない時間帯がある	13.2.3
アラームの定義について	<ul style="list-style-type: none">アクション実行で定義したプログラムが正しく動作しないアラームイベントが表示されないアラームしきい値を超えているのに、エージェント階層の「アラームの状態の表示」画面に表示されているアラームアイコンの色が緑のまま変わらない	13.2.4
パフォーマンスデータの収集と管理について	<ul style="list-style-type: none">データの保存期間を短く設定したにもかかわらず、PFM - Agent の Store データベースのサイズが小さくならない共通メッセージログに「KAVE00128-E Store データベースに不正なデータが検出されました」または「KAVE00163-E データベース種別が不正です」というメッセージが出力され、Store サービスの起動に失敗する共通メッセージログに「KAVF14173-W パフォーマンスデータは報告されません (レコード ID[フィールド名])」というメッセージが出力される	13.2.5
ファイル監視について	<ul style="list-style-type: none">JP1 イベントが正しく発行されない (JP1/Base のログファイルトラップを使用している場合)	13.2.6

分類	トラブルの内容	記述箇所
ファイル監視について	<ul style="list-style-type: none"> Windows イベントログ (Windows の場合) または syslog (Linux の場合) に、メッセージ KAVF14280-W が出力される Windows イベントログ (Windows の場合) または syslog (Linux の場合) に、メッセージ KAVF14281-W が出力される 	13.2.6

13.2.1 セットアップやサービスの起動に関するトラブルシューティング

セットアップやサービスの起動に関するトラブルの対処方法を次に示します。

(1) Performance Management のプログラムのサービスが起動しない

考えられる要因およびその対処方法を次に示します。

- PFM - Manager が停止している

PFM - Manager と PFM - Agent が同じホストにある場合、PFM - Manager が停止していると、PFM - Agent サービスは起動できません。PFM - Manager サービスが起動されているか確認してください。PFM - Manager サービスが起動されていない場合は、起動してください。サービスの起動方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

- Performance Management のプログラムの複数のサービスに対して同一のポート番号を設定している

Performance Management のプログラムの複数のサービスに対して同一のポート番号を設定している場合、Performance Management のプログラムのサービスは起動できません。デフォルトでは、ポート番号は自動的に割り当てられるため、ポート番号が重複することはありません。Performance Management のセットアップ時に Performance Management のプログラムのサービスに対して固定のポート番号を設定している場合は、ポート番号の設定を確認してください。Performance Management のプログラムの複数のサービスに対して同一のポート番号を設定している場合は、異なるポート番号を設定し直してください。ポート番号の設定については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

- Store データベースの格納ディレクトリの設定に誤りがある

次のディレクトリを、アクセスできないディレクトリまたは存在しないディレクトリに設定していると、Agent Store サービスは起動できません。ディレクトリ名や属性の設定を見直し、誤りがあれば修正してください。

- Store データベースの格納先ディレクトリ
- Store データベースのバックアップ先ディレクトリ
- Store データベースのエクスポート先ディレクトリ

- Store データベースの部分バックアップ先ディレクトリ (Store バージョン 2.0 の場合)
- Store データベースのインポート先ディレクトリ (Store バージョン 2.0 の場合)

また、これらのディレクトリを複数の Agent Store サービスに対して設定していると、Agent Store サービスは起動できません。ディレクトリ設定を見直し、誤りがあれば修正してください。

- **指定された方法以外の方法でマシンのホスト名を変更した**

マシンのホスト名の変更方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。指定された方法以外の方法でホスト名を変更した場合、Performance Management のプログラムのサービスが起動しないことがあります。

- **サービスコントロールマネージャでエラーが発生した**

Windows で `jpcspm start` コマンドを実行した場合、「Windows のサービスコントロールマネージャでエラーが発生しました」というエラーメッセージが出力され、サービスの起動に失敗することがあります。この現象が発生した場合、`jpcspm start` コマンドを再実行してください。頻繁に同じ現象が発生する場合は、`jpcspm start` コマンド実行時にサービス起動処理がリトライされる間隔および回数を、`jpccomm.ini` ファイルを編集して変更してください。リトライ間隔およびリトライ回数を変更する方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

- **SAP システムが停止している**

インスタンス環境構築時に「`DELAYCONNECT=N`」を設定した場合、SAP システム接続時に SAP システムが停止していると、Agent Collector サービスは起動できません。SAP システムが稼働しているかどうか確認してください。SAP システムの稼働状況に関係なく Agent Collector サービスを起動したい場合、「`DELAYCONNECT=Y`」を設定してください。

- **ライブラリのセットアップを正しく実施していない**

PFM - Agent for Enterprise Applications のインストール後に、ライブラリのセットアップを実施していない、または実施手順に誤りがある場合、Agent Collector サービスは起動できません。このとき、`KAVF14184-E` メッセージが出力されます。「[3.1.4 ライブラリの適用手順](#)」のセットアップ手順を参照し、ライブラリのセットアップを正しく実施したか確認してください。

(2) サービスの起動要求をしてからサービスが起動するまで時間が掛かる

`jpcspm start` コマンドを実行してから、または [サービス] アイコンでサービスを開始してから、実際にサービスが起動するまで時間が掛かることがあります。次の要因で時間が掛かっている場合、2 回目の起動時からはサービスの起動までに掛かる時間が短縮されます。

- スタンドアロンモードで起動する場合、サービスが起動するまでに時間が掛かることがあります。
- システム停止時にサービスを自動で停止させる設定をしないで、システムを再起動してサービスを起動すると、Store データベースのインデックスが再構築される場合があります。この場合、サービスが起動するまでに時間が掛かることがあります。
- エージェントを新規に追加したあとサービスを起動すると、初回起動時だけ Store データベースのインデックスが作成されます。そのため、サービスが起動するまでに時間が掛かることがあります。

- 電源切断などによって Store サービスが正常な終了処理を行えなかったときは、再起動時に Store データベースのインデックスが再構築されるため、Store サービスの起動に時間が掛かることがあります。

(3) Performance Management のプログラムのサービスを停止した直後に、別のプログラムがサービスを開始したとき、通信が正しく実行されない

Performance Management のプログラムのサービスを停止した直後に、このサービスが使用していたポート番号で、ほかのプログラムがサービスを開始した場合、通信が正しく実行されないことがあります。この現象を回避するために、次のどちらかの設定をしてください。

- Performance Management のプログラムのサービスに割り当てるポート番号を固定する
Performance Management のプログラムの各サービスに対して、固定のポート番号を割り当てて運用してください。ポート番号の設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。
- TCP_TIMEWAIT 値の設定をする
TCP_TIMEWAIT 値で接続待ち時間を設定してください。
 - Windows の場合：2 分
 - Linux の場合、接続待ち時間のデフォルト値（60 秒）は変更できません。Performance Management プログラムのサービスのポート番号を固定する方法で対応してください。

(4) 「ディスク容量が不足しています」というメッセージが出力されたあと Master Store サービスまたは Agent Store サービスが停止する

Store データベースが使用しているディスクに十分な空き容量がない場合、Store データベースへのデータの格納が中断されます。この場合、「ディスク容量が不足しています」というメッセージが出力されたあと、Master Store サービスまたは Agent Store サービスが停止します。

このメッセージが表示された場合、次のどちらかの対処をしてください。

- 十分なディスク容量を確保する
Store データベースのディスク占有量を見積もり、Store データベースの格納先を十分な容量があるディスクに変更してください。Store データベースのディスク占有量を見積もる方法については、PFM - Agent for Enterprise Applications のリリースノートを参照してください。Store データベースの格納先を変更する方法については、「[3.6.1 パフォーマンスデータの格納先の変更](#)」を参照してください。
- Store データベースの保存条件を変更する
Store データベースの保存条件を変更し、Store データベースのデータ量の上限値を調整してください。Store データベースの保存条件を変更する方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

これらの対処を実施したあとも Master Store サービスまたは Agent Store サービスが起動されない場合、Store データベースに回復できない論理矛盾が発生しています。この場合、バックアップデータから Store データベースをリストアしたあと、Master Store サービスまたは Agent Store サービスを起動してください。利用できるバックアップデータが存在しない場合は、Store データベースを初期化したあと、Master Store サービスまたは Agent Store サービスを起動してください。Store データベースを初期化するには、Store データベースの格納先ディレクトリにある次のファイルをすべて削除してください。

- 拡張子が .DB であるファイル
- 拡張子が .IDX であるファイル

Store データベースの格納先ディレクトリについては、「[3.6.1 パフォーマンスデータの格納先の変更](#)」を参照してください。

(5) Agent Collector サービスまたは Remote Monitor Collector サービスが起動しない

PFM - Agent または PFM - RM ホストが Windows の場合、PFM - Agent または PFM - RM の起動時に Agent Collector サービスまたは Remote Monitor Collector サービスの起動に失敗して、Windows の再起動時、Windows イベントログに次のどちらかのメッセージが出力されることがあります。

- 「サービス名サービスは起動時に停止しました。」
- 「サービス名サービスは開始時にハングしました。」

この現象は、Windows のサービスコントロールマネージャーのタイムアウトによって発生するため、PFM - Manager への通信負荷が高く、PFM - Manager からの応答に時間が掛かるときに発生しやすくなります。次の条件にすべて該当する場合に発生します。

- PFM - Manager への通信負荷が高い。
例えば、多数の PFM - Agent または PFM - RM の起動処理が同時に実行されている場合などが該当します。
- PFM - Agent または PFM - RM の各サービスについて、Windows の [サービス] アプレットでスタートアップ種別が「自動」に設定されている。
- OS を再起動する。

この現象を回避するためには、次のどちらかの設定をして運用してください。

- OS の再起動と同時にサービスを起動する場合、Windows のサービスコントロールマネージャーから起動するのではなく、`jpcspm start` コマンドを実行して起動する。
- PFM - Agent または PFM - RM ホストで次の設定を行って、PFM - Agent または PFM - RM の起動時間を短縮する。

この設定で、PFM - Agent または PFM - RM のサービスの起動時に、PFM - Manager に接続できない場合の再接続処理が短縮されます。この場合、PFM - Agent または PFM - RM のサービスがスタンダロンモードで起動する確率が高くなります。

PFM - Agent または PFM - RM の起動時間を短縮するには、起動情報ファイル (jpccomm.ini) の [Agent Collector x Section] ※および [Agent Store x Section] ※の「NS Init Retry Count」ラベルを、「NS Init Retry Count =2」から「NS Init Retry Count =1」に変更します。

注※

[x] には、PFM - Agent または PFM - RM のプロダクト ID が入ります。プロダクト ID については、各 PFM - Agent または PFM - RM マニュアルの、付録に記載されている識別子一覧を参照してください。同一ホスト上に PFM - Agent または PFM - RM が複数インストールされている場合は、それぞれのプロダクト ID ごとに「NS Init Retry Count」ラベルの値を設定してください。

起動情報ファイル (jpccomm.ini) の格納先は、次のとおりです。

PFM - Agent または PFM - RM ホストが物理ホストの場合
インストール先フォルダ¥jpccomm.ini

PFM - Agent または PFM - RM ホストが論理ホストの場合
環境ディレクトリ¥jp1pc¥jpccomm.ini

注※

論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリを示します。

13.2.2 コマンドの実行に関するトラブルシューティング

Performance Management のコマンドの実行に関するトラブルの対処方法を次に示します。

(1) jpctool service list コマンドを実行すると稼働していないサービス名が出力される

考えられる要因およびその対処方法を次に示します。

- Performance Management のプログラムのサービス情報を削除しないで Performance Management のプログラムをアンインストールした

Performance Management のプログラムをアンインストールしても Performance Management のプログラムのサービス情報はデータベースに残っています。jpctool service delete コマンドを実行して、Performance Management のプログラムのサービス情報を削除してください。サービス情報の削除方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

- Performance Management のプログラムのサービス情報を削除しないでマシンのホスト名を変更した

Performance Management のプログラムのサービス情報を削除しないでマシンのホスト名を変更した場合、以前のホスト名が付加されているサービス ID のサービス情報が、Master Manager サービスが管理しているデータベースに残っています。jpctool service delete コマンドを実行して、Performance Management のプログラムのサービス情報を削除してください。サービス情報の削除方

法およびホスト名の変更方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、Performance Management のインストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

(2) jpctool db dump コマンドを実行すると、指定した Store データと異なるデータが出力される

同じ Master Store サービスまたは Agent Store サービスに対して、同じエクスポートファイル名を指定して、複数回jpctool db dump コマンドを実行すると、先に実行した出力結果があとから実行された実行結果に上書きされます。同じ Master Store サービスまたは Agent Store サービスに対して、複数回jpctool db dump コマンドを実行する場合は、異なる名称のエクスポートファイルを指定してください。Store データのエクスポート方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

(3) jr3alget コマンドまたは jr3slget コマンドが異常終了する

PFM - Agent for Enterprise Applications のインストール後に、ライブラリのセットアップを実施していない、または実施手順に誤りがある場合、jr3alget コマンドおよびjr3slget コマンドが異常終了します。このとき、KAVF14286-E メッセージが出力されます。「[3.1.4 ライブラリの適用手順](#)」のセットアップ手順を参照し、ライブラリのセットアップを正しく実施したか確認してください。

13.2.3 レポートの定義に関するトラブルシューティング

Performance Management のレポートの定義に関するトラブルの要因を次に示します。

(1) 履歴レポートに表示されない時間帯がある

PFM - Agent がインストールされたマシンの現在時刻を、現在時刻よりも未来の時刻に変更した場合、変更前の時刻から変更後の時刻までの履歴情報は保存されません。

13.2.4 アラームの定義に関するトラブルシューティング

Performance Management のアラームの定義に関するトラブルの対処方法を次に示します。

(1) アクション実行で定義したプログラムが正しく動作しない

考えられる要因とその対処方法を次に示します。

- PFM - Manager またはアクション実行先ホストの Action Handler サービスが起動されていない

PFM - Manager またはアクション実行先ホストの Action Handler サービスが停止していると、アクションが実行されません。アクションを実行する場合は、PFM - Manager およびアクション実行先ホストの Action Handler サービスを起動しておいてください。

(2) アラームイベントが表示されない

考えられる要因とその対処方法を次に示します。

- PFM - Manager が起動されていない

PFM - Manager を停止すると、PFM - Agent からのアラームイベントを正しく発行できません。アラームイベントを監視する場合は、PFM - Manager を起動しておいてください。

(3) アラームしきい値を超えているのに、エージェント階層の「アラームの状態の表示」に表示されているアラームアイコンの色が緑のまま変わらない

考えられる要因とその対処方法を次に示します。

- PFM - Manager ホストおよび PFM - Agent ホストの LANG 環境変数が日本語にそろっていない環境で、日本語を使用したアラームテーブルをバインドしている

このような場合、日本語を使用したアラームは正常に評価されません。PFM - Manager ホストおよび PFM - Agent ホストの LANG 環境変数を、日本語にそろえて運用してください。LANG 環境変数の設定は共通メッセージログを確認し、最新のサービス起動メッセージが日本語と英語のどちらで出力されているかで確認してください。

なお、PFM - Manager ホストが英語環境の場合、現在の設定のまま日本語環境に変更すると、既存のアラーム定義が文字化けして削除できなくなります。このため、次の作業を実施してください。

1. 定義内に日本語を使用したアラームテーブルが必要な場合は、PFM - Web Console からすべてエクスポートする。
エクスポートする際に、`jpctool alarm export` コマンドは使用できません。
2. 定義内に日本語を使用したアラームテーブルをすべて削除する。
3. PFM - Manager サービスを停止する。
4. PFM - Manager ホストの LANG 環境変数を日本語に変更する。
5. PFM - Manager サービスを起動する。
6. 手順 1 でアラームテーブルをエクスポートした場合は、PFM - Web Console または `jpctool alarm import` コマンドを使用して、アラームテーブルをインポートする。

また、複数言語の混在環境での、その他の注意事項については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、複数言語の混在環境での注意事項について記載している章を参照してください。

13.2.5 パフォーマンスデータの収集と管理に関するトラブルシューティング

Performance Management のパフォーマンスデータの収集と管理に関するトラブルの対処方法を次に示します。

(1) データの保存期間を短く設定したにもかかわらず、PFM - Agent の Store データベースのサイズが小さくならない

Store バージョン 1.0 で Store データベースのファイル容量がすでに限界に達している場合、データの保存期間を短く設定してもファイルサイズは小さくなりません。この場合、保存期間を短く設定したあと、いったん Store データベースをバックアップし、リストアし直してください。

データの保存期間の設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。また、Store データベースのバックアップとリストアの方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、バックアップとリストアについて説明している章を参照してください。

(2) 共通メッセージログに「KAVE00128-E」または「KAVE00163-E」などのメッセージが出力され、Store サービスの起動に失敗する

予期しない PFM サービスの停止またはマシンの電源断などの強制停止などによって、Store データベースに不整合なデータが発生したおそれがあります。次の方法で対処をしてください。

- Store データベースを退避してある場合は、Store データベースを回復してください。
- Store データベースを退避していない場合は、起動できない対象の Store サービス（Master Store サービス、Agent Store サービス、または Remote Monitor Store サービス）を含んだ PFM を停止し Store データベースを初期化したあと、停止した PFM サービスを起動してください。

Store データベースを初期化するには、Store データベースの格納先ディレクトリにある次のファイルをすべて削除してください。

[StoreVR が 1.0 の場合]

- 拡張子が.DB であるファイル
- 拡張子が.IDX であるファイル

[StoreVR が 2.0 の場合]

- 拡張子が.DB であるファイル
- 拡張子が.IDX であるファイル

STPI, STPD, STPL ディレクトリ配下を削除してください。

(STPI, STPD, STPL ディレクトリは残してください)

デフォルトの Store データベースの格納先ディレクトリは、次のとおりです。

パフォーマンスデータの Store データベース格納先ディレクトリ

詳細については、「[3.6.1 パフォーマンスデータの格納先の変更](#)」を参照してください。

イベントデータの Store データベースの格納先ディレクトリ

[PFM - Agent for Enterprise Applications がクラスタ環境でない場合]

- Windows の場合：
インストール先フォルダ¥agtm¥store¥インスタンス名¥
- Linux の場合：
/opt/jplpc/agtm/store/インスタンス名/

[PFM - Agent for Enterprise Applications がクラスタ環境である場合]

- Windows の場合：
環境ディレクトリ¥agtm¥store¥インスタンス名¥
- Linux の場合：
環境ディレクトリ/jplpc/agtm/store/インスタンス名/

(3) 共通メッセージログに「KAVF14173-W パフォーマンスデータは報告されません (レコード ID[.フィールド名])」というメッセージが出力される

SAP システムの接続先ダイアログインスタンスに取得対象の MTE 名がない場合、一部のレコードのフィールドは、接続先ダイアログインスタンスに存在しないため、値が 0 になります。なお、この警告メッセージは、監視対象としていなくても出力されます。

SAP システムを ASCS インスタンス構成としている場合は、このメッセージを無視してください。

13.2.6 ログ監視プログラムに関するトラブルシューティング

ログ監視プログラムに関するトラブルの対処方法を次に示します。

(1) JP1/Base のログファイルトラップで JP1 イベントが正しく発行されない

WRAP1 形式で格納したシステムログ情報または CCSM アラート情報の格納ファイルを JP1/Base のログファイルトラップを使用して監視した場合、格納ファイルのラップアラウンド時に JP1 イベントの送信が正しく実施できない現象が発生します。このような現象が発生した場合、次の対処を実施してください。

メッセージ発生時の対処

- SAP システム側で、JP1 イベントが正しく発行されなかった時間帯に発生したシステムログ情報または CCMS アラート情報を確認し、ファイル監視製品のログファイルトラップで通知されなかった

情報を特定してください。通知されなかった情報の中に対処すべき情報があれば、出力されたシステムログ情報または CCMS アラート情報の内容に応じて対処してください。

- JP1/Base のログファイルトラップを再起動する

見直し時の対処

- 格納ファイルのサイズを見直す

Windows イベントログ (Windows の場合) または syslog (Linux の場合) に出力された、メッセージ KAVF14280-W, または KAVF14281-W の「抽出出力したサイズ」と「有効データサイズ」の情報を基に、有効データサイズを超過した書き込みが発生しないように、システムログ情報または CCMS アラート情報の格納ファイルのファイルサイズ (環境パラメーター設定ファイルの EXTRACTFILE セクションの SIZE ラベルの設定値) を「抽出出力したサイズ」よりも大きくなるように見直してください。「抽出出力したサイズ」－「有効データサイズ」のサイズが、書き込みに不足したサイズとなります。

- 格納ファイルの形式を WRAP1 から WRAP2 に変更する

格納ファイルの形式を変更する場合は、事前にコマンドの実行、あるいはレコード収集を停止し、JP1/Base のログファイルトラップを停止してください。そして、格納ファイル、管理ファイルおよびタイムスタンプファイルを手動で削除してください。

(2) Windows イベントログ (Windows の場合) または syslog (Linux の場合) に、メッセージ KAVF14280-W が出力される

Windows イベントログ (Windows の場合) または syslog (Linux の場合) にメッセージ KAVF14280-W が表示されたときは、次の対処を実施してください。

メッセージ発生時の対処

- SAP システム側で、このメッセージが出力された収集の対象時間帯およびそれ以降に発生したシステムログ情報を確認し、ファイル監視製品のログファイルトラップで通知されなかった情報を特定してください。通知されなかった情報の中に対処すべき情報があれば、出力されたシステムログ情報の内容に応じて対処してください。
- JP1/Base のログファイルトラップで WRAP1 形式を監視していた場合は、JP1/Base のログファイルトラップを再起動してください。

見直し時の対処

- メッセージに出力された「抽出出力したサイズ」と「有効データサイズ」の情報を基に、有効データサイズを超過した書き込みが発生しないように、システムログ情報格納ファイルのファイルサイズ (環境パラメーター設定ファイルの EXTRACTFILE セクションの SIZE ラベルの設定値) を「抽出出力したサイズ」よりも大きくなるように見直してください。「抽出出力したサイズ」－「有効データサイズ」のサイズが、書き込みに不足したサイズとなります。
- 格納ファイルを WRAP1 形式で出力している場合、複数面を指定できる WRAP2 形式で出力するように見直してください。

(3) Windows イベントログ (Windows の場合) または syslog (Linux の場合) に、メッセージ KAVF14281-W が出力される

Windows イベントログ (Windows の場合) または syslog (Linux の場合) にメッセージ KAVF14281-W が表示されたときは、次の対処を実施してください。

メッセージ発生時の対処

- SAP システム側で、このメッセージが出力された収集の対象時間帯およびそれ以降に発生した CCMS アラート情報を確認し、ファイル監視製品のログファイルトラップで通知されなかった情報を特定してください。通知されなかった情報の中に対処すべき情報があれば、格納された CCMS アラート情報の内容に応じて対処してください。
- JP1/Base のログファイルトラップで WRAP1 形式を監視していた場合は、JP1/Base のログファイルトラップを再起動してください。

見直し時の対処

- メッセージに出力された「抽出出力したサイズ」と「有効データサイズ」の情報を基に、有効データサイズを超過した書き込みが発生しないように、CCMS アラート情報格納ファイルのファイルサイズ (環境パラメーター設定ファイルの EXTRACTFILE セクションの SIZE ラベルの設定値) を「抽出出力したサイズ」よりも大きくなるように見直してください。「抽出出力したサイズ」 - 「有効データサイズ」のサイズが、書き込みに不足したサイズとなります。
- 格納ファイルを WRAP1 形式で出力している場合、複数面を指定できる WRAP2 形式で出力するように見直してください。

13.2.7 リモート監視機能に関するトラブルシューティング

リモート監視に関するトラブルの対処方法を次に示します。

- システムログ情報の抽出および CCMS アラート情報の抽出では、前回収集したレコードの収集時刻より後に発生した情報だけを抽出しています。この場合、PFM - Agent for Enterprise Applications をインストールしたホストと SAP システムのシステム時刻にずれが生じた場合、次の表に示す現象が発生します。

表 13-2 SAP システム時刻の遅延状況と発生する現象

機能	PFM - Agent for Enterprise Applications のシステム時刻より SAP システム時刻が進んでいる場合	PFM - Agent for Enterprise Applications のシステム時刻より SAP システム時刻が遅れている場合
システムログ情報の抽出	抽出される	エラーメッセージ KAVF14222-E を出力し、システムログ情報の抽出に失敗する
CCMS アラート情報の抽出		CCMS アラート情報が正しく抽出されない

このような現象が発生した場合には、収集基点時間の設定をしてください。

- SAP システムの時刻遅延が SHIFTEXTRACTTIME を超えた場合、次の現象が発生することがあります。
 - メッセージ KAVF14222-E が出力される
 - CCMS アラート情報が正しく抽出されない

これらの現象が発生した場合は、SAP システムの時刻遅延を測定して、十分余裕を持った SHIFTEXTRACTTIME を設定してください。SAP システムの時刻遅延の測定は、OS が提供する機能などを使用してください。詳細は OS のマニュアルを参照してください。

- PFM - Agent for Enterprise Applications の稼働ホストと SAP システムのタイムゾーンが異なる場合は、SAPTIMEZONEOFFSET を設定しないでシステムログ情報抽出機能を実行すると、各ホストのタイムゾーンに基づくローカル時刻の差によって、次のどちらかの現象が発生します。

PFM - Agent for Enterprise Applications の稼働ホストのタイムゾーンに基づくローカル時刻が SAP システムより進んでいる場合

エラーメッセージ KAVF14222-E が出力され、システムログ情報の抽出が常に失敗します。

SAP システムのタイムゾーンに基づくローカル時刻が PFM - Agent for Enterprise Applications の稼働ホストより進んでいる場合

抽出されるシステムログ情報が、常に古い時刻範囲の情報となり、抽出時点で発生している最新のシステムログ情報を抽出できません。

13.2.8 その他のトラブルに関するトラブルシューティング

トラブルが発生したときの現象を確認してください。メッセージが出力されている場合は、メッセージの内容を確認してください。また、Performance Management が出力するログ情報については、「13.3 トラブルシューティング時に採取するログ情報」を参照してください。

「13.2.1 セットアップやサービスの起動に関するトラブルシューティング」～「13.2.6 ログ監視プログラムに関するトラブルシューティング」に示した対処をしても、トラブルが解決できなかった場合、または、これら以外のトラブルが発生した場合、トラブルの要因を調査するための資料を採取し、システム管理者に連絡してください。

採取が必要な資料および採取方法については、「13.4 トラブルシューティング時に採取が必要な資料」および「13.5 トラブルシューティング時に採取する資料の採取方法」を参照してください。

13.3 トラブルシューティング時に採取するログ情報

Performance Management でトラブルが発生した場合、ログ情報を確認して対処方法を検討します。Performance Management を運用しているときに出力されるログ情報には、次の4種類があります。

- システムログ
- 共通メッセージログ
- 稼働状況ログ
- トレースログ

ここでは、4種類のログ情報、および各ログ情報に設定できるログオプションについて説明します。

13.3.1 トラブルシューティング時に採取するログ情報の種類

(1) システムログ

システムログとは、システムの状態やトラブルを通知するログ情報のことです。このログ情報は次のログファイルに出力されます。

- Windows の場合
イベントログファイル
- Linux の場合
syslog ファイル

出力形式については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、ログ情報について説明している章を参照してください。

論理ホスト運用の場合の注意事項

Performance Management のシステムログのほかに、クラスタソフトによる Performance Management の制御などを確認するためにクラスタソフトのログが必要です。

(2) 共通メッセージログ

共通メッセージログとは、システムの状態やトラブルを通知するログ情報のことです。システムログよりも詳しいログ情報が出力されます。共通メッセージログの出力先ファイル名やファイルサイズについては、「13.3.2 トラブルシューティング時に採取するログファイルおよびディレクトリ一覧」を参照してください。また、出力形式については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、ログ情報について説明している章を参照してください。

論理ホスト運用の場合の注意事項

論理ホスト運用の Performance Management の場合、共通メッセージログは共有ディスクに出力されます。共有ディスク上にあるログファイルは、フェールオーバーするときにシステムとともに引き継がれますので、メッセージは同じログファイルに記録されます。

(3) 稼働状況ログ

稼働状況ログとは、PFM - Web Console が出力するログ情報のことです。稼働状況ログの出力先ファイル名やファイルサイズについては、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。また、出力形式については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、ログ情報について説明している章を参照してください。

(4) トレースログ

トレースログとは、トラブルが発生した場合に、トラブル発生の経緯を調査したり、各処理の処理時間を測定したりするために採取するログ情報のことです。

トレースログは、Performance Management のプログラムの各サービスが持つログファイルに出力されます。

論理ホスト運用の場合の注意事項

論理ホスト運用の Performance Management の場合、トレースログは共有ディスクに出力されます。共有ディスク上にあるログファイルは、フェールオーバーするときにシステムとともに引き継がれますので、メッセージは同じログファイルに記録されます。

13.3.2 トラブルシューティング時に採取するログファイルおよびディレクトリ一覧

ここでは、Performance Management から出力されるログ情報について説明します。稼働状況ログの出力先ファイル名やファイルサイズについては、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

(1) 共通メッセージログ

共通メッセージログの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、ログ情報の詳細について説明している章を参照してください。

(2) トレースログ

ここでは、Performance Management のログ情報のうち、PFM - Agent のトレースログの出力元であるサービス名または制御名、および格納先ディレクトリ名を、OS ごとに表に示します。

表 13-3 トレースログの格納先フォルダ名 (Windows の場合)

ログ情報の種類	出力元	フォルダ名
トレースログ	Agent Collector サービス	インストール先フォルダ¥agtm¥agent¥インスタンス名¥log¥
	Agent Store サービス	インストール先フォルダ¥agtm¥store¥インスタンス名¥log¥
トレースログ (論理ホスト運用の場合)	Agent Collector	環境ディレクトリ**¥jp1pc¥agtm¥agent¥インスタンス名¥log¥
	Agent Store	環境ディレクトリ**¥jp1pc¥agtm¥store¥インスタンス名¥log¥

注※

環境ディレクトリは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

表 13-4 トレースログの格納先ディレクトリ名 (Linux の場合)

ログ情報の種類	出力元	ディレクトリ名
トレースログ	Agent Collector サービス	/opt/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/log/
	Agent Store サービス	/opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/log/
トレースログ (論理ホスト運用の場合)	Agent Collector	環境ディレクトリ**/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/log/
	Agent Store	環境ディレクトリ**/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/log/

注※

環境ディレクトリは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

13.4 トラブルシューティング時に採取が必要な資料

「13.2 トラブルシューティング」に示した対処をしてもトラブルを解決できなかった場合、トラブルの要因を調べるための資料を採取し、システム管理者に連絡する必要があります。この節では、トラブル発生時に採取が必要な資料について説明します。

Performance Management では、採取が必要な資料を一括採取するためのコマンドを用意しています。PFM - Agent の資料を採取するには、jpcras コマンドを使用します。jpcras コマンドを使用して採取できる資料については、表中に記号で示しています。

注意

jpcras コマンドで採取できる資料は、コマンド実行時に指定するオプションによって異なります。コマンドに指定するオプションと採取できる資料については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

論理ホスト運用の場合の注意事項

論理ホスト運用の場合の注意事項を次に示します。

- 論理ホスト運用する場合の Performance Management のログは、共有ディスクに格納されます。なお、共有ディスクがオンラインになっている場合 (Windows)、またはマウントされている場合 (Linux) は、jpcras コマンドで共有ディスク上のログも一括して採取することができます。
- フェールオーバー時の問題を調査するには、フェールオーバーの前後の資料が必要です。このため、実行系と待機系の両方の資料が必要になります。

論理ホスト運用の Performance Management の調査には、クラスタソフトの資料が必要です。論理ホスト運用の Performance Management は、クラスタソフトから起動や停止を制御されているので、クラスタソフトの動きと Performance Management の動きを対比して調査するためです。

13.4.1 トラブルシューティング時に Windows 環境で採取が必要な資料

(1) OS のログ情報

OS に関する次の情報の採取が必要です。

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpcras コマンドでの採取
システムログ	Windows イベントログ	—	○
プロセス情報	プロセスの一覧	—	○
システムファイル	hosts ファイル	システムフォルダ¥system32¥drivers¥etc¥hosts	○
	services ファイル	システムフォルダ¥system32¥drivers¥etc¥services	○

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpcras コマンドでの採取
OS 情報	システム情報	—	○
	ネットワークステータス	—	○
	ホスト名	—	○
ダンプ情報	問題のレポートと解決策のログファイル	ユーザーモードプロセスダンプの出力先フォルダ¥プログラム名.プロセス ID. dmp 例：jpcagtm.exe.2420.dmp	×

(凡例)

- ：採取できる
- ×
- ：該当しない

注※

別のフォルダにログファイルが出力されるように設定している場合は、該当するフォルダから資料を採取してください。

(2) Performance Management の情報

Performance Management に関する次の情報の採取が必要です。また、ネットワーク接続でのトラブルの場合、接続先マシン上のファイルの採取も必要です。

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpcras コマンドでの採取
共通メッセージログ	Performance Management から出力されるメッセージログ (シーケンシャルファイル方式)	インストール先フォルダ¥log¥jpc log{01 02}※1	○
	Performance Management から出力されるメッセージログ (ラップアラウンドファイル方式)	インストール先フォルダ¥log¥jpc logw{01 02}※1	○
共通メッセージログ (論理ホスト運用の場合)	論理ホスト運用の Performance Management から出力されるメッセージログ (シーケンシャルファイル方式)	環境ディレクトリ※2¥jp1pc¥log¥jpc log{01 02}※1	○
	論理ホスト運用の Performance	環境ディレクトリ※2¥jp1pc¥log¥jpc logw{01 02}※1	○

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpccras コマンドでの採取
共通メッセージログ（論理ホスト運用の場合）	Management から出力されるメッセージログ（ラップアラウンドファイル方式）	環境ディレクトリ※2¥jp1pc¥log¥jpclogw{01 02}※1	○
構成情報	各構成情報ファイル	—	○
	jpccool service list コマンドの出力結果	—	○
バージョン情報	製品バージョン	—	○
	履歴情報	—	○
データベース情報	Agent Store サービス	<ul style="list-style-type: none"> Store バージョン 1.0 の場合 インストール先フォルダ¥agtm¥store¥インスタンス名¥*.DB インストール先フォルダ¥agtm¥store¥インスタンス名¥*.IDX Store バージョン 2.0 の場合 インストール先フォルダ¥agtm¥store¥インスタンス名¥STPD¥, インストール先フォルダ¥agtm¥store¥インスタンス名¥STPI¥ フォルダ下の次に示すファイル。 *.DB *.IDX 	○
データベース情報（論理ホスト運用の場合）	論理ホスト運用の Agent Store サービス	<ul style="list-style-type: none"> Store バージョン 1.0 の場合 環境ディレクトリ※2¥jp1pc¥agtm¥store¥インスタンス名¥*.DB 環境ディレクトリ※2¥jp1pc¥agtm¥store¥インスタンス名¥*.IDX Store バージョン 2.0 の場合 環境ディレクトリ※2¥jp1pc¥agtm¥store¥インスタンス名¥STPD¥, 環境ディレクトリ※2¥jp1pc¥agtm¥store¥インスタンス名¥STPI¥ フォルダ下の次に示すファイル。 *.DB *.IDX 	○
トレースログ	Performance Management のプログラムの各サービスのトレース情報	— ※3	○
インストールログ※4	インストール時のメッセージログ	%windir¥TEMP¥HCDINSTフォルダ下のすべてのファイル。	×

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpccras コマンドでの採取
コマンド情報	環境パラメーター設定ファイル	インストール先フォルダ¥agtm¥agent¥インスタンス名¥jr3alget. ini インストール先フォルダ¥agtm¥agent¥インスタンス名¥jr3slget. ini	○
	トレース情報	—	○
	タイムスタンプファイル	—	○
	格納ファイル	<ul style="list-style-type: none"> • WRAP1 の場合 インストール先フォルダ¥agtm¥agent¥インスタンス名¥log¥ALERT インストール先フォルダ¥agtm¥agent¥インスタンス名¥log¥SYSLOG • WRAP2 の場合 インストール先フォルダ¥agtm¥agent¥インスタンス名¥log¥ALERTn¥5 インストール先フォルダ¥agtm¥agent¥インスタンス名¥log¥SYSLOGn¥5 	○¥6
	管理ファイル	インストール先フォルダ¥agtm¥agent¥インスタンス名¥log¥ALERT. ofs インストール先フォルダ¥agtm¥agent¥インスタンス名¥log¥SYSLOG. ofs	○
コマンド情報（論理ホスト運用の場合）	環境パラメーター設定ファイル	環境ディレクトリ¥2¥jp1pc¥agtm¥agent¥インスタンス名¥jr3alget. ini 環境ディレクトリ¥2¥jp1pc¥agtm¥agent¥インスタンス名¥jr3slget. ini	○
	トレース情報	—	○
	タイムスタンプファイル	—	○
	格納ファイル	<ul style="list-style-type: none"> • WRAP1 の場合 環境ディレクトリ¥2¥jp1pc¥agtm¥agent¥インスタンス名¥log¥ALERT 環境ディレクトリ¥2¥jp1pc¥agtm¥agent¥インスタンス名¥log¥SYSLOG • WRAP2 の場合 環境ディレクトリ¥2¥jp1pc¥agtm¥agent¥インスタンス名¥log¥ALERTn¥5 環境ディレクトリ¥2¥jp1pc¥agtm¥agent¥インスタンス名¥log¥SYSLOGn¥5 	○¥6
	管理ファイル	環境ディレクトリ¥2¥jp1pc¥agtm¥agent¥インスタンス名¥log¥ALERT. ofs	○

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpcras コマンドでの採取
コマンド情報（論理ホスト運用の場合）	管理ファイル	環境ディレクトリ※2¥jp1pc¥agtm¥agent¥インスタンス名¥log¥SYSLOG.ofs	○

(凡例)

- ：採取できる
- ×：採取できない
- －：該当しない

注※1

ログファイルの出力方式については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

注※2

環境ディレクトリは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

注※3

トレースログの格納先フォルダについては、「[13.3.2 トラブルシューティング時に採取するログファイルおよびディレクトリ一覧](#)」を参照してください。

注※4

インストールに失敗した場合に採取してください。

注※5

n は数字を示します。

注※6

デフォルトの格納先から変更した場合、jpcras コマンドでは採取できません。手動で採取してください。格納ファイルの格納先については、「[5.3.2 設定内容](#)」の EXTRACTFILE セクション、および「[6.3.2 設定内容](#)」の EXTRACTFILE セクションを参照してください。

(3) SAP システムの情報

監視対象プログラムである SAP システムに関する次の情報の採取が必要です。

表 13-5 SAP システムの情報

情報の種類	採取資料
システムログ	<p>SAP フロントエンドソフトウェアでトランザクション SM21 を使用して、次の選択条件で採取した資料</p> <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー：指定なし • トランザクションコード：指定なし • SAP プロセス：指定なし • 障害クラス：全メッセージ • 開始日/時刻，終了日/時刻：その障害が発生した時間帯

情報の種類	採取資料
システムログ	システムログの詳細については、SAP システムのマニュアルおよびオンラインヘルプを参照してください。
XMI ログ	SAP フロントエンドソフトウェアでトランザクション RZ15 を使用して、次の選択条件で採取した資料 <ul style="list-style-type: none"> • Interface : * • Object : * • セッション ID : * • 外部ユーザー : * • 期間 : その障害が発生した時間帯 XMI ログの詳細については、SAP システムのマニュアルおよびオンラインヘルプを参照してください。
リリース・パッチ情報	<ul style="list-style-type: none"> • SAP フロントエンドソフトウェアでメニュー「システム」→「ステータス」を選択したときに表示される画面のハードコピー • 上記の画面から表示される次の画面のハードコピー [システム：ステータス] 画面 [システム：コンポーネント情報] 画面 [システム：カーネル情報] 画面
開発者トレース	PFM - Agent for Enterprise Applications が提供するコマンドの実行や、Agent Collector サービスでエラーが発生した場合に採取する SAP システム上の開発者トレース (SAP フロントエンドソフトウェアでトランザクション ST11 を使用して採取する、dev_w*, dev_rfc*および、dev_rd ファイル)

(凡例)

* : ワイルドカード文字です。任意の 1 文字以上の文字列を示します。

(4) オペレーション内容

トラブル発生時のオペレーション内容について、次に示す情報が必要です。

- オペレーション内容の詳細
- トラブル発生時刻
- マシン構成 (各 OS のバージョン、ホスト名、PFM - Manager と PFM - Agent の構成など)
- 再現性の有無
- PFM - Web Console からログインしている場合は、ログイン時の Performance Management ユーザー名

(5) 画面上のエラー情報

次に示すハードコピーを採取してください。

- アプリケーションエラーが発生した場合は、操作画面のハードコピー
- エラーメッセージダイアログボックスのハードコピー（詳細ボタンがある場合はその内容を含む）
- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は、[コマンドプロンプト] ウィンドウまたは [管理者コンソール] ウィンドウのハードコピー

(6) ユーザーダンプ

Performance Management のプロセスがアプリケーションエラーで停止した場合は、ユーザーダンプを採取してください。

(7) 問題レポートの採取

Performance Management のプロセスがアプリケーションエラーで停止した場合は、問題レポートを採取してください。

(8) その他の情報

上記以外に必要な情報を次に示します。

- Windows の [イベントビューア] ウィンドウの、[システム] および [アプリケーション] の内容
- [アクセサリ] - [システムツール] - [システム情報] の内容
- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は、コマンドに指定した引数

13.4.2 トラブルシューティング時に Linux 環境で採取が必要な資料

(1) OS のログ情報

OS に関する次の情報の採取が必要です。

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpcras コマンドでの採取
システムログ	syslog	/var/log/messages*	○*
プロセス情報	プロセスの一覧	—	○
システムファイル	hosts ファイル	/etc/hosts	○
	services ファイル	/etc/services	○
OS 情報	パッチ情報	—	○
	カーネル情報	—	○
	バージョン情報	—	○

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpcras コマンドでの採取
OS 情報	ネットワークステータス	—	○
	環境変数	—	○
	ホスト名	—	○
ダンプ情報	core ファイル	—	○

(凡例)

- ：採取できる
- ：該当しない

注※

デフォルトのパスおよびファイル名以外に出力されるように設定されているシステムでは、収集できません。手動で収集してください。

(2) Performance Management の情報

Performance Management に関する次の情報の採取が必要です。また、ネットワーク接続でのトラブルの場合、接続先マシン上のファイルの採取も必要です。

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpcras コマンドでの採取
共通メッセージログ	Performance Management から出力されるメッセージログ (シーケンシャルファイル方式)	/opt/jp1pc/log/jpcLog{01 02}* ¹	○
	Performance Management から出力されるメッセージログ (ラップアラウンドファイル方式)	/opt/jp1pc/log/jpcLogw{01 02}* ¹	○
共通メッセージログ (論理ホスト運用の場合)	論理ホスト運用の Performance Management から出力されるメッセージログ (シーケンシャルファイル方式)	環境ディレクトリ ^{※2} /jp1pc/log/jpcLog{01 02}* ¹	○
	論理ホスト運用の Performance Management から出力されるメッセージログ (ラップアラウンドファイル方式)	環境ディレクトリ ^{※2} /jp1pc/log/jpcLogw{01 02}* ¹	○

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpccras コマンドでの採取
構成情報	各構成情報ファイル	—	○
	jpccras tool service list コマンドの出力結果	—	○
バージョン情報	製品バージョン	—	○
	履歴情報	—	○
データベース情報	Agent Store サービス	<ul style="list-style-type: none"> Store バージョン 1.0 の場合 /opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/*.DB /opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/*.IDX Store バージョン 2.0 の場合 /opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/STPD/, /opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/STPI/ ディレクトリ下の次に示すファイル。 *.DB *.IDX 	○
データベース情報 (論理ホスト運用の場合)	論理ホスト運用の Agent Store サービス	<ul style="list-style-type: none"> Store バージョン 1.0 の場合 環境ディレクトリ^{※2}/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/*.DB 環境ディレクトリ^{※2}/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/*.IDX Store バージョン 2.0 の場合 環境ディレクトリ^{※2}/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/STPD/, 環境ディレクトリ^{※2}/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/STPI/ ディレクトリ下の次に示すファイル。 *.DB *.IDX 	○
トレースログ	Performance Management のプログラムの各サービスのトレース情報	— ^{※3}	○
インストールログ ^{※4}	Hitachi PP Installer の標準ログ	/ etc / . hitachi / . hitachi . log / etc / . hitachi / . hitachi . log { 01 02 03 04 05 } / etc / . hitachi / . install . log / etc / . hitachi / . install . log { 01 02 03 04 05 }	×
コマンド情報	環境パラメーター設定ファイル	/opt/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/jr3alget.ini /opt/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/jr3slget.ini	○
	トレース情報	—	○

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpccras コマンドでの採取
コマンド情報	タイムスタンプファイル	—	○
	格納ファイル	<ul style="list-style-type: none"> • WRAP1 の場合 /opt/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/log/ALERT /opt/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/log/SYSLOG • WRAP2 の場合 /opt/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/log/ALERT^{※5} /opt/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/log/SYSLOG^{※5} 	○ ^{※6}
	管理ファイル	/opt/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/log/ALERT.ofs /opt/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/log/SYSLOG.ofs	○
コマンド情報（論理 ホスト運用の場合）	環境パラメーター設定 ファイル	環境ディレクトリ ^{※2} /jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/ jr3alget.ini 環境ディレクトリ ^{※2} /jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/ jr3slget.ini	○
	トレース情報	—	○
	タイムスタンプファイル	—	○
	格納ファイル	<ul style="list-style-type: none"> • WRAP1 の場合 環境ディレクトリ^{※2}/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/log/ALERT 環境ディレクトリ^{※2}/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/log/SYSLOG • WRAP2 の場合 環境ディレクトリ^{※2}/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/log/ALERT^{※5} 環境ディレクトリ^{※2}/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/log/SYSLOG^{※5} 	○ ^{※6}
	管理ファイル	環境ディレクトリ ^{※2} /jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/log/ALERT.ofs 環境ディレクトリ ^{※2} /jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/log/SYSLOG.ofs	○

(凡例)

- ：採取できる
- ×：採取できない
- ：該当しない

注※1

ログファイルの出力方式については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

注※2

環境ディレクトリは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

注※3

トレースログの格納先ディレクトリについては、「13.3.2 トラブルシューティング時に採取するログファイルおよびディレクトリ一覧」を参照してください。

注※4

インストールに失敗した場合に採取してください。

注※5

n は数字を示します。

注※6

デフォルトの格納先から変更した場合、jpcras コマンドでは採取できません。手動で採取してください。
格納ファイルの格納先については、「5.3.2 設定内容」の EXTRACTFILE セクション、および「6.3.2 設定内容」の EXTRACTFILE セクションを参照してください。

(3) SAP システムの情報

監視対象プログラムである SAP システムに関する次の情報の採取が必要です。

表 13-6 SAP システムの情報

情報の種類	採取資料
システムログ	SAP フロントエンドソフトウェアでトランザクション SM21 を使用して、次の選択条件で採取した資料 <ul style="list-style-type: none">• ユーザー：指定なし• トランザクションコード：指定なし• SAP プロセス：指定なし• 障害クラス：全メッセージ• 開始日/時刻，終了日/時刻：その障害が発生した時間帯 システムログの詳細については、SAP システムのマニュアルおよびオンラインヘルプを参照してください。
XMI ログ	SAP フロントエンドソフトウェアでトランザクション RZ15 を使用して、次の選択条件で採取した資料 <ul style="list-style-type: none">• Interface：*• Object：*• セッション ID：*• 外部ユーザー：*• 期間：その障害が発生した時間帯

情報の種類	採取資料
XMI ログ	XMI ログの詳細については、SAP システムのマニュアルおよびオンラインヘルプを参照してください。
リリース・パッチ情報	<ul style="list-style-type: none"> • SAP フロントエンドソフトウェアでメニュー「システム」→「ステータス」を選択したときに表示される画面のハードコピー • 上記の画面から表示される次の画面のハードコピー [システム：ステータス] 画面 [システム：コンポーネント情報] 画面 [システム：カーネル情報] 画面
開発者トレース	PFM - Agent for Enterprise Applications が提供するコマンドの実行や、Agent Collector サービスでエラーが発生した場合に採取する SAP システム上の開発者トレース (SAP フロントエンドソフトウェアでトランザクション ST11 を使用して採取する、dev_w*, dev_rfc*および、dev_rd ファイル)

(凡例)

*: ワイルドカード文字です。任意の 1 文字以上の文字列を示します。

(4) オペレーション内容

トラブル発生時のオペレーション内容について、次に示す情報が必要です。

- オペレーション内容の詳細
- トラブル発生時刻
- マシン構成 (各 OS のバージョン, ホスト名, PFM - Manager と PFM - Agent の構成など)
- 再現性の有無
- PFM - Web Console からログインしている場合は、ログイン時の Performance Management ユーザー名

(5) エラー情報

次に示すエラー情報を採取してください。

- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は、コンソールに出力されたメッセージ

(6) その他の情報

上記以外に必要な情報を次に示します。

- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は、コマンドに指定した引数

13.5 トラブルシューティング時に採取する資料の採取方法

トラブルが発生したときに資料を採取する方法を次に示します。

13.5.1 トラブルシューティング時に Windows 環境で採取する資料の採取方法

(1) ダンプ情報を採取する

ダンプ情報を採取する手順を次に示します。

1. タスクマネージャーを開く。
2. プロセスのタブを選択する。
3. ダンプを取得するプロセス名を右クリックし、「ダンプ ファイルの作成」を選択する。

次のフォルダに、ダンプファイルが格納されます。

```
システムドライブ¥Users¥ユーザー名¥AppData¥Local¥Temp
```

4. 手順 3 のフォルダからダンプファイルを採取する。

手順 3 と異なるフォルダにダンプファイルが出力されるように環境変数の設定を変更している場合は、変更先のフォルダからダンプファイルを採取してください。

(2) 資料採取コマンドを実行する

トラブルの要因を調べるための資料の採取には、jpcras コマンドを使用します。資料採取コマンドの実行手順を次に示します。なお、ここで説明する操作は、OS ユーザーとして Administrators 権限を持つユーザーが実行してください。

1. 資料採取するサービスがインストールされているホストにログオンする。
2. コマンドプロンプトで次に示すコマンドを実行して、コマンドインタープリタの「コマンド拡張機能」を有効にする。

```
cmd /E:ON
```

3. 採取する資料および資料の格納先フォルダを指定して、jpcras コマンドを実行する。

jpcras コマンドで、データベース情報とダンプ情報を除く情報を c:¥tmp¥jpc¥agt フォルダに格納する場合の、コマンドの指定例を次に示します。

```
jpcras c:¥tmp¥jpc¥agt all
```

jpccras コマンドを実行すると、PFM サービスの一覧取得および起動状態の確認のため、内部的に「jpccras service list -id * -host *」コマンドが実行されます。コマンド実行ホストとほかの Performance Management システムのホストとの間にファイアウォールが設定されていたり、システム構成が大規模だったりすると、「jpccras service list -id * -host *」コマンドの実行に時間が掛かる場合があります。そのような場合は、環境変数 JPC_COLCTRLNOHOST に 1 を設定することで「jpccras service list -id * -host *」コマンドの処理を抑止し、コマンドの実行時間を短縮できます。

jpccras コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

注意事項

OS のユーザーアカウント制御機能 (UAC) を有効にしている場合は、コマンド実行時にユーザーアカウント制御のダイアログボックスが表示されることがあります。ダイアログボックスが表示された場合は、[続行] ボタンをクリックして資料採取を続行してください。[キャンセル] ボタンをクリックした場合は、資料採取が中止されます。

(3) 資料採取コマンドを実行する (論理ホスト運用の場合)

論理ホスト運用の Performance Management の資料は共有ディスクにあり、資料は実行系と待機系の両方で採取する必要があります。

トラブルの要因を調べるための資料の採取には、jpccras コマンドを使用します。資料採取コマンドの実行手順を次に示します。なお、ここで説明する操作は、OS ユーザーとして Administrators 権限を持つユーザーが実行してください。

論理ホスト運用の場合の資料採取コマンドの実行について、手順を説明します。

1. 共有ディスクをオンラインにする。

論理ホストの資料は共有ディスクに格納されています。実行系ノードでは、共有ディスクがオンラインになっていることを確認して資料を採取してください。

2. 実行系と待機系の両方で、採取する資料および資料の格納先フォルダを指定して、jpccras コマンドを実行する。

jpccras コマンドで、データベース情報とダンプ情報を除く情報を c:¥tmp¥jpc¥agt フォルダに格納する場合の、コマンドの指定例を次に示します。

```
jpccras c:¥tmp¥jpc¥agt all
```

jpccras コマンドを lhost の引数を指定しないで実行すると、そのノードの物理ホストと論理ホストの Performance Management の資料が一とおり採取されます。論理ホスト環境の Performance Management がある場合は、共有ディスク上のログファイルが取得されます。

なお、共有ディスクがオフラインになっているノードで jpccras コマンドを実行すると、共有ディスク上のファイルを取得できませんが、エラーは発生しないで正常終了します。

注意

実行系ノードと待機系ノードの両方で、資料採取コマンドを実行して資料採取をしてください。
フェールオーバーの前後の調査をするには、実行系と待機系の両方の資料が必要です。

jpcras コマンドについては、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

3. クラスタソフトの資料を採取する。

この資料は、クラスタソフトと Performance Management のどちらでトラブルが発生しているのかを調査するために必要になります。クラスタソフトから Performance Management への起動停止などの制御要求と結果を調査できる資料を採取してください。

(4) システムログ情報や CCMS アラート情報をデフォルトの格納先から変更した場合

変更後の格納先から、格納ファイルおよび管理ファイルを手動で採取してください。

(5) Windows イベントログを採取する

Windows の [イベントビューア] ウィンドウで、Windows イベントログをファイルに出力してください。

(6) SAP システムの情報を採取する

監視対象プログラムである SAP システムに関する情報を採取します。

採取する資料は「[13.4.1 \(3\) SAP システムの情報](#)」を参照してください。

(7) オペレーション内容を確認する

トラブル発生時のオペレーション内容を確認し、記録しておいてください。確認が必要な情報を次に示します。

- オペレーション内容の詳細
- トラブル発生時刻
- マシン構成 (各 OS のバージョン, ホスト名, PFM - Manager と PFM - Agent の構成など)
- 再現性の有無
- PFM - Web Console からログインしている場合は、ログイン時の Performance Management ユーザー名

(8) 画面上のエラー情報を採取する

次に示すハードコピーを採取してください。

- アプリケーションエラーが発生した場合は、操作画面のハードコピー

- エラーメッセージダイアログボックスのハードコピー
詳細情報がある場合はその内容をコピーしてください。
- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は、[コマンドプロンプト] ウィンドウまたは [管理者コンソール] ウィンドウのハードコピー
[コマンドプロンプト] ウィンドウのハードコピーを採取する際は、["コマンドプロンプト"のプロパティ] ウィンドウについて次のように設定しておいてください。
 - [オプション] タブの [編集オプション]
[簡易編集モード] がチェックされた状態にする。
 - [レイアウト] タブ
[画面バッファのサイズ] の [高さ] に「500」を設定する。

(9) その他の情報を採取する

- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は、コマンドに指定した引数
- [アクセサリ] - [システムツール] - [システム情報] の内容
- Windows の [イベントビューア] ウィンドウを開き、左ペイン [Windows ログ] の、[システム] および [アプリケーション] の内容

13.5.2 トラブルシューティング時に Linux 環境で採取する資料の採取方法

(1) 資料採取コマンドを実行する

トラブルの要因を調べるための資料の採取には、jpcras コマンドを使用します。資料採取コマンドの実行手順を次に示します。なお、ここで説明する操作は、OS ユーザーとして root ユーザー権限を持つユーザーが実行してください。

1. 資料採取するサービスがインストールされているホストにログインする。

2. 採取する資料および資料の格納先ディレクトリを指定して、jpcras コマンドを実行する。

jpcras コマンドで、データベース情報とダンプ情報を除く情報を /tmp/jpc/agt ディレクトリに格納する場合の、コマンドの指定例を次に示します。

```
jpcras /tmp/jpc/agt all
```

資料採取コマンドで、収集された資料は tar コマンドおよび compress コマンドで圧縮された形式で、指定されたディレクトリに格納されます。ファイル名を次に示します。

```
jpcrasYYMMDD.tar.Z
```

YYMMDD には年月日が付加されます。

jpcras コマンドを実行すると、PFM サービスの一覧取得および起動状態の確認のため、内部的に「jpc tool service list -id * -host *」コマンドが実行されます。コマンド実行ホストとほかの Performance

Management システムのホストとの間にファイアウォールが設定されていたり、システム構成が大規模だったりすると、「jpctool service list -id * -host *」コマンドの実行に時間が掛かる場合があります。そのような場合は、環境変数 JPC_COLCTRLNOHOST に 1 を設定することで「jpctool service list -id * -host *」コマンドの処理を抑止し、コマンドの実行時間を短縮できます。

jpccras コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

(2) 資料採取コマンドを実行する（論理ホスト運用の場合）

論理ホスト運用の Performance Management の資料は共有ディスクにあり、資料は実行系と待機系の両方で採取する必要があります。

トラブルの要因を調べるための資料の採取には、jpccras コマンドを使用します。資料採取コマンドの実行手順を次に示します。なお、ここで説明する操作は、OS ユーザーとして root ユーザー権限を持つユーザーが実行してください。

論理ホスト運用の場合の、資料採取コマンドの実行について、手順を説明します。

1. 共有ディスクをマウントする。

論理ホストの資料は共有ディスクに格納されています。実行系ノードでは、共有ディスクがマウントされていることを確認して資料を採取してください。

2. 実行系と待機系の両方で、採取する資料および資料の格納先ディレクトリを指定して、jpccras コマンドを実行する。

jpccras コマンドで、データベース情報とダンプ情報を除く情報を /tmp/jpc/agt ディレクトリに格納する場合の、コマンドの指定例を次に示します。

```
jpccras /tmp/jpc/agt all
```

資料採取コマンドで収集された資料は、tar コマンドおよびcompress コマンドで圧縮された形式で、指定されたディレクトリに格納されます。ファイル名を次に示します。

```
jpccrasYYMMDD.tar.Z
```

YYMMDD には年月日が付加されます。

jpccras コマンドを lhost の引数を指定しないで実行すると、そのノードの物理ホストと論理ホストの Performance Management の資料が一とおり採取されます。論理ホスト環境の Performance Management がある場合は、共有ディスク上のログファイルが取得されます。

なお、共有ディスクがマウントされていないノードで jpccras コマンドを実行すると、共有ディスク上のファイルを取得できませんが、エラーは発生しないで正常終了します。

注意

実行系ノードと待機系ノードの両方で、資料採取コマンドを実行して資料採取をしてください。フェールオーバーの前後の調査をするには、実行系と待機系の両方の資料が必要です。

jpccras コマンドについては、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

3. クラスタソフトの資料を採取する。

この資料は、クラスタソフトと Performance Management のどちらでトラブルが発生しているのかを調査するために必要になります。クラスタソフトから Performance Management への起動停止などの制御要求と結果を調査できる資料を採取してください。

(3) システムログ情報や CCMS アラート情報をデフォルトの格納先から変更した場合

変更後の格納先から、格納ファイルおよび管理ファイルを手動で採取してください。

(4) SAP システムの情報を採取する

監視対象プログラムである SAP システムに関する情報を採取します。

採取する資料は「13.4.2 (3) SAP システムの情報」を参照してください。

(5) オペレーション内容を確認する

トラブル発生時のオペレーション内容を確認し、記録しておいてください。確認が必要な情報を次に示します。

- オペレーション内容の詳細
- トラブル発生時刻
- マシン構成 (各 OS のバージョン, ホスト名, PFM - Manager と PFM - Agent の構成など)
- 再現性の有無
- PFM - Web Console からログインしている場合は、ログイン時の Performance Management ユーザー名

(6) エラー情報を採取する

次に示すエラー情報を採取してください。

- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は、コンソールに出力されたメッセージ

(7) その他の情報を採取する

上記以外に必要な情報を採取してください。

- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は、コマンドに指定した引数

13.6 Performance Management の障害検知

Performance Management では、ヘルスチェック機能を利用することで Performance Management 自身の障害を検知できます。ヘルスチェック機能では、監視エージェントや監視エージェントが稼働するホストの稼働状態を監視し、監視結果を監視エージェントの稼働状態の変化として PFM - Web Console 上に表示します。

また、PFM サービス自動再起動機能を利用することで、PFM サービスが何らかの原因で異常停止した場合に自動的に PFM サービスを再起動したり、定期的に PFM サービスを再起動したりすることができます。

ヘルスチェック機能によって監視エージェントの稼働状態を監視したり、PFM サービス自動再起動機能によって PFM サービスを自動再起動したりするには、Performance Management のサービスの詳細な状態を確認するステータス管理機能を使用します。このため、対象となる監視エージェントがステータス管理機能に対応したバージョンであり、ステータス管理機能が有効になっている必要があります。ホストの稼働状態を監視する場合は前提となる条件はありません。

また、Performance Management のログファイルをシステム統合監視製品である JP1/Base で監視することによっても、Performance Management 自身の障害を検知できます。これによって、システム管理者は、トラブルが発生したときに障害を検知し、要因を特定して復旧の対処をします。

Performance Management 自身の障害検知の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

13.7 Performance Management システムの障害回復

Performance Management のサーバで障害が発生したときに、バックアップファイルを基にして、障害が発生する前の正常な状態に回復する必要があります。

障害が発生する前の状態に回復する手順については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

付録

付録 A 構築前のシステム見積もり

PFM - Agent for Enterprise Applications を使ったシステムを構築する前に、使用するマシンの性能が、PFM - Agent for Enterprise Applications を運用するのに十分であるか、検証しておくことをお勧めします。

付録 A.1 メモリー所要量

メモリー所要量は、PFM - Agent for Enterprise Applications の設定状況や使用状況によって変化します。メモリー所要量の見積もり式については、PFM - Agent for Enterprise Applications のリリースノートを参照してください。

付録 A.2 ディスク占有量

ディスク占有量は、パフォーマンスデータを収集するレコード数によって変化します。ディスク占有量の検証には、システム全体のディスク占有量、Store データベース (Store バージョン 1.0) のディスク占有量、または Store データベース (Store バージョン 2.0) の見積もりが必要になります。これらの見積もり式については、PFM - Agent for Enterprise Applications のリリースノートを参照してください。

付録 A.3 クラスタ運用時のディスク占有量

クラスタ運用時のディスク占有量の検証は、クラスタシステムで運用しない場合のディスク占有量と同じです。ディスク占有量については、PFM - Agent for Enterprise Applications のリリースノートを参照してください。

付録 B カーネルパラメーター

PFM - Agent for Enterprise Applications では、カーネルパラメーターの調整は不要です。

なお、Linux 環境で Store データベースを Store バージョン 2.0 で使用する場合は、カーネルパラメーターの調整については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、付録に記載されているカーネルパラメーター一覧を参照してください。

付録 C 識別子一覧

PFM - Agent for Enterprise Applications を操作したり、PFM - Agent for Enterprise Applications の Store データベースからパフォーマンスデータを抽出したりする際、PFM - Agent for Enterprise Applications であることを示す識別子が必要な場合があります。PFM - Agent for Enterprise Applications の識別子を次の表に示します。

表 C-1 PFM - Agent for Enterprise Applications の識別子一覧

用途	名称	識別子	説明
コマンドなど	プロダクト ID	M	プロダクト ID とは、サービス ID の一部。サービス ID は、コマンドを使用して Performance Management のシステム構成を確認する場合や、パフォーマンスデータをバックアップする場合などに必要である。サービス ID については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、付録に記載されている命名規則を参照のこと。
	サービスキー	agtm または EAP	コマンドを使用して PFM - Agent for Enterprise Applications を起動する場合や、終了する場合などに必要である。サービスキーについては、マニュアル JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、付録に記載されているサービスキーを参照のこと。
ヘルプ	ヘルプ ID	pcam	PFM - Agent for Enterprise Applications のヘルプであることを表す。

付録 D プロセス一覧

ここでは、PFM - Agent for Enterprise Applications のプロセス一覧を記載します。

PFM - Manager, PFM - Web Console, および PFM - Base のプロセスについては、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の付録を参照してください。

PFM - Agent for Enterprise Applications のプロセス一覧を次の表に示します。なお、プロセス名の後ろに記載されている値は、同時に起動できるプロセス数です。

注意

論理ホストの PFM - Agent でも、動作するプロセスおよびプロセス数は同じです。

表 D-1 PFM - Agent for Enterprise Applications のプロセス一覧 (Windows 版)

プロセス名 (プロセス数)	機能
jpcagtm.exe(n) ※1	Agent Collector サービスプロセス。このプロセスは、PFM - Agent for Enterprise Applications のインスタンスごとに 1 つ起動する。
jpcMcollect(n) ※2	SAP との通信処理を行う実行プロセス。このプロセスは、jpcagtm プロセスと 1 : 1 で存在する。
jpcsto.exe(n) ※1	Agent Store サービスプロセス。このプロセスは、PFM - Agent for Enterprise Applications のインスタンスごとに 1 つ起動する。
jr3alget.exe(1) ※2	CCMS アラート情報を収集する実行プロセス。
jr3slget.exe(1) ※2	システムログ情報を収集する実行プロセス。
stpqlpr.exe(1) ※3	Store データベースのバックアップ/エクスポート実行プロセス。

注※1

n はプロセス数です。

注※2

jpcagtm プロセスの子プロセスです。

注※3

jpcsto プロセスの子プロセスです。

表 D-2 PFM - Agent for Enterprise Applications のプロセス一覧 (Linux 版)

プロセス名 (プロセス数)	機能
jpcagtm(n) ※1	Agent Collector サービスプロセス。このプロセスは、PFM - Agent for Enterprise Applications のインスタンスごとに 1 つ起動する。
jpcMcollect(n) ※2	SAP との通信処理を行う実行プロセス。このプロセスは、jpcagtm プロセスと 1 : 1 で存在する。
jpcsto(n) ※1	Agent Store サービスプロセス。このプロセスは、PFM - Agent for Enterprise Applications のインスタンスごとに 1 つ起動する。

プロセス名 (プロセス数)	機能
jr3alget(1) ^{※2}	CCMS アラート情報を収集する実行プロセス。
jr3slget(1) ^{※2}	システムログ情報を収集する実行プロセス。
stpqlpr(1) ^{※3}	Store データベースのバックアップ/エクスポート実行プロセス。

注※1

n はプロセス数です。

注※2

jpcagtm プロセスの子プロセスです。

注※3

jpcsto プロセスの子プロセスです。

付録 E ポート番号一覧

ここでは、Performance Management のポート番号を記載します。

PFM - Manager, および PFM - Base のポート番号およびファイアウォールの通過方向については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の付録を参照してください。

ポート番号は、ユーザー環境に合わせて任意の番号に変更することもできます。

ポート番号の変更方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。なお、使用するプロトコルは TCP/IP です。

注意

Performance Management は、1 対 1 のアドレス変換をする静的 NAT(Basic NAT)に対応していません。

動的 NAT や、ポート変換機能を含む NATP (IP Masquerade, NAT+) には対応していません。

付録 E.1 Performance Management のポート番号

Performance Management で使用するポート番号を次の表に示します。

表 E-1 Performance Management で使用するポート番号

ポート番号	パラメーター	サービス名	用途
—※1	jp1pcstom[nnn]※2	Agent Store サービス	パフォーマンスデータを記録したり、履歴レポートを取得したりするときに使用する。
—※1	jp1pcagtm[nnn]※2	Agent Collector サービス	アラームをバインドしたり、リアルタイムレポートを取得したりするときに使用する。

注※1

サービスが再起動されるたびに、システムで使用されていないポート番号が自動的に割り当てられます。

注※2

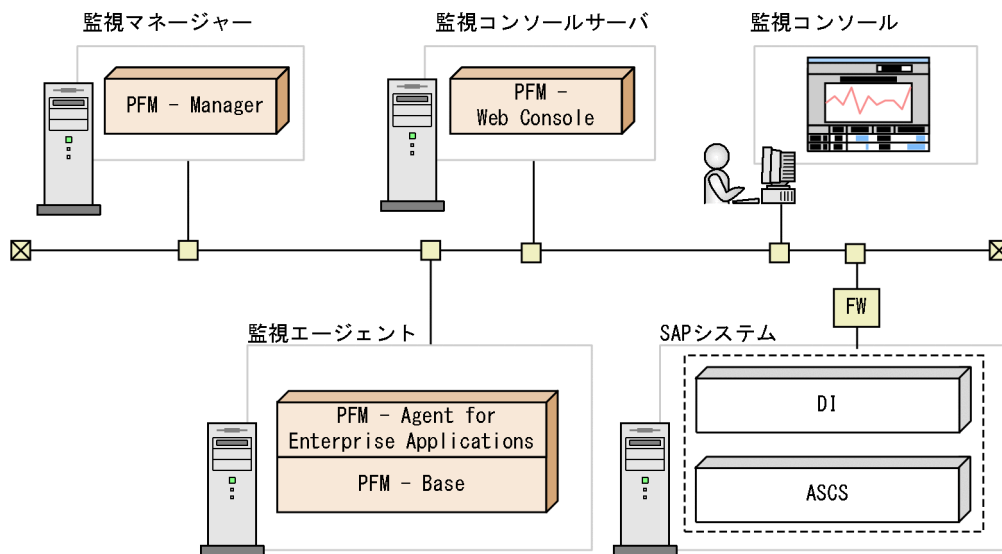
複数インスタンスを作成している場合、2 番目以降に作成したインスタンスに通番 (nnn) が付加されます。最初に作成したインスタンスには、通番は付加されません。

付録 E.2 ファイアウォールの通過方向

ファイアウォールを挟んで PFM - Manager と PFM - Agent for Enterprise Applications を配置する場合は、PFM - Manager と PFM - Agent のすべてのサービスにポート番号を固定値で設定してください。また、各ポート番号がすべてのサービスについてファイアウォールを通過させるようにしてください。

詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、ファイアウォールの通過方向について説明している箇所を参照してください。

リモート監視機能を使用する場合、監視対象の SAP システムのポート番号がファイアウォールを通過するように設定してください。



(凡例)

- FW : ファイアウォール
- : Performance Managementが提供するプログラム
- : 必要なプログラム
- ASCS : ABAP Central Servicesインスタンス
- DI : ダイアログインスタンス

表 E-2 ファイアウォールの通過方向とサポートするファイアウォール

サービス名	ポート番号	通信の方向※1※2	サポートするファイアウォール
sapgw<nn>※3	33<nn>※3/tcp	PFM - Agent for Enterprise Applications→SAP システム	パケットフィルタリング型、および NAT (スタティックモード) 型のアドレス変換
任意 (デフォルト: sapdp99) ※4	任意/tcp (デフォルト: 3299/ tcp)	PFM - Agent for Enterprise Applications→SAP システム	パケットフィルタリング型、および NAT (スタティックモード) 型のアドレス変換

(凡例)

→：通信（コネクション）を開始する方向

注※1

通信（コネクション）が開始したあと、確立されたセッション間で送受信をします。確立されたセッションに対する受信についても通過できるように設定してください。

注※2

通信（コネクション）を開始するときは、接続する側は OS によって割り当てられる空きポート番号を受信ポートとして使用します。このため、受信ポートは任意のポート番号を通過できるように設定してください。

注※3

<nn>は、接続先 SAP システムのシステム番号を示します。

注※4

SAProuter を使用して接続 SAP システムに接続する場合、SAProuter で使用するポート番号を指定します。

付録 F PFM - Agent for Enterprise Applications のプロパティ

ここでは、PFM - Web Console で表示される PFM - Agent for Enterprise Applications の Agent Store サービスのプロパティ一覧、および Agent Collector サービスのプロパティ一覧を記載します。

付録 F.1 Agent Store サービスのプロパティ一覧

PFM - Agent for Enterprise Applications の Agent Store サービスのプロパティ一覧を次の表に示します。

表 F-1 PFM - Agent for Enterprise Applications の Agent Store サービスのプロパティ一覧

フォルダ名	プロパティ名	説明
-	First Registration Date	サービスが PFM - Manager に認識された最初の日時が表示される。
	Last Registration Date	サービスが PFM - Manager に認識された最新の日時が表示される。
General	-	ホスト名やディレクトリなどの情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
	Directory	サービスの動作するカレントディレクトリ名が表示される。
	Host Name	サービスが動作する物理ホスト名が表示される。
	Process ID	サービスのプロセス ID が表示される。
	Physical Address	サービスが動作するホストの IP アドレスおよびポート番号が表示される。
	User Name	サービスプロセスを実行したユーザー名が表示される。
	Time Zone	サービスで使用されるタイムゾーンが表示される。
System	-	サービスが起動されている OS の、OS 情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
	CPU Type	CPU の種類が表示される。
	Hardware ID	ハードウェア ID が表示される。
	OS Type	OS の種類が表示される。
	OS Name	OS 名が表示される。
	OS Version	OS のバージョンが表示される。
Network Services	-	Performance Management 通信共通ライブラリについての情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
	Build Date	Agent Store サービスの作成日が表示される。
	INI File	jpgns.ini ファイルの格納ディレクトリ名が表示される。

フォルダ名		プロパティ名	説明
Network Services	Service	—	サービスについての情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
		Description	次の形式でホスト名が表示される。 インスタンス名_ホスト名
		Local Service Name	サービス ID が表示される。
		Remote Service Name	接続先 PFM - Manager ホストの Master Manager サービスのサービス ID が表示される。
		EP Service Name	接続先 PFM - Manager ホストの Correlator サービスのサービス ID が表示される。
Retention		—	データの保存期間を設定する。詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照のこと。
		Product Interval - Minute Drawer	分ごとの PI レコードタイプのレコードの保存期間を設定する。次のリストから選択できる。 <ul style="list-style-type: none"> • Minute • Hour • Day • 2 Days • 3 Days • 4 Days • 5 Days • 6 Days • Week • Month • Year
		Product Interval - Hour Drawer	時間ごとの PI レコードタイプのレコードの保存期間を設定する。次のリストから選択できる。 <ul style="list-style-type: none"> • Hour • Day • 2 Days • 3 Days • 4 Days • 5 Days • 6 Days • Week • Month • Year
		Product Interval - Day Drawer	日ごとの PI レコードタイプのレコードの保存期間を設定する。次のリストから選択できる。 <ul style="list-style-type: none"> • Day

フォルダ名		プロパティ名	説明
Retention		Product Interval - Day Drawer	<ul style="list-style-type: none"> • 2 Days • 3 Days • 4 Days • 5 Days • 6 Days • Week • Month • Year
		Product Interval - Week Drawer	<p>週ごとの PI レコードタイプのレコードの保存期間を設定する。次のリストから選択できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Week • Month • Year
		Product Interval - Month Drawer	<p>月ごとの PI レコードタイプのレコードの保存期間を設定する。次のリストから選択できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Month • Year
		Product Interval - Year Drawer	<p>年ごとの PI レコードタイプのレコードの保存期間。Year で固定。</p>
		Product Detail - PD レコードタイプのレコード ID	<p>各 PD レコードタイプのレコードの保存レコード数を設定する。0~2,147,483,647 の整数が指定できる。</p> <p>注意：範囲外の数値、またはアルファベットなどの文字を指定した場合、エラーメッセージが表示される。</p>
RetentionEx		—	<p>Store バージョンが 2.0 の場合にデータの保存期間を設定する。詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照のこと。</p>
RetentionEx	Product Interval - PI レコードタイプのレコード ID	—	PI レコードタイプのレコードの保存期間を設定する。
		Period - Minute Drawer (Day)	<p>PI レコードタイプのレコード ID ごとに、分単位のパフォーマンスデータの保存期間を設定する。</p> <p>保存期間（日数）を 0~366 の整数で指定できる。</p>
		Period - Hour Drawer (Day)	<p>PI レコードタイプのレコード ID ごとに、時間単位のパフォーマンスデータの保存期間を設定する。</p> <p>保存期間（日数）を 0~366 の整数で指定できる。</p>
		Period - Day Drawer (Week)	<p>PI レコードタイプのレコード ID ごとに、日単位のパフォーマンスデータの保存期間を設定する。</p> <p>保存期間（週の数）を 0~522 の整数で指定できる。</p>
		Period - Week Drawer (Week)	<p>PI レコードタイプのレコード ID ごとに、週単位のパフォーマンスデータの保存期間を設定する。</p> <p>保存期間（週の数）を 0~522 の整数で指定できる。</p>

フォルダ名		プロパティ名	説明
RetentionEx	Product Interval - PI レコードタイプのレコード ID	Period - Month Drawer (Month)	PI レコードタイプのレコード ID ごとに、月単位のパフォーマンスデータの保存期間を設定する。 保存期間（月の数）を 0～120 の整数で指定できる。
		Period - Year Drawer (Year)	PI レコードタイプのレコード ID ごとに、年単位のパフォーマンスデータの保存期間が表示される。 常に「10」が表示される。保存期間は制限なし。
	Product Detail - PD レコードタイプのレコード ID	Period (Day)	PD レコードタイプのレコード ID ごとに、パフォーマンスデータの保存期間を設定する。 保存期間（日数）を 0～366 の整数で指定できる。
Disk Usage		—	各データベースで使用されているディスク容量が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティには、プロパティを表示した時点でのディスク使用量が表示される。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
		Product Interval	PI レコードタイプのレコードで使用されるディスク容量が表示される。
		Product Detail	PD レコードタイプのレコードで使用されるディスク容量が表示される。
		Product Alarm	PA レコードタイプのレコードで使用されるディスク容量が表示される。PFM - Agent for Enterprise Applications では使用しない。
		Product Log	PL レコードタイプのレコードで使用されるディスク容量が表示される。PFM - Agent for Enterprise Applications では使用しない。
		Total Disk Usage	データベース全体で使用されるディスク容量が表示される。
Configuration		—	Agent Store サービスのプロパティが表示される。
		Store Version	Store データベースのバージョンが表示される。 <ul style="list-style-type: none"> • Store バージョン 1.0 の場合 「1.0」 • Store バージョン 2.0 の場合 「2.0」

(凡例)

—：該当しない

付録 F.2 Agent Collector サービスのプロパティ一覧

PFM - Agent for Enterprise Applications の Agent Collector サービスのプロパティ一覧を次の表に示します。

表 F-2 PFM - Agent for Enterprise Applications の Agent Collector サービスのプロパティ一覧

フォルダ名		プロパティ名	説明
-		First Registration Date ^{*1}	サービスが PFM - Manager に認識された最初の日時が表示される。
		Last Registration Date ^{*1}	サービスが PFM - Manager に認識された最新の日時が表示される。
		Data Model Version	データモデルのバージョンが表示される。
General		-	ホスト名やディレクトリなどの情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
		Directory	サービスの動作するカレントディレクトリ名が表示される。
		Host Name	サービスが動作する物理ホスト名が表示される。
		Process ID	サービスのプロセス ID が表示される。
		Physical Address	サービスが動作するホストの IP アドレスおよびポート番号が表示される。
		User Name	サービスプロセスを実行したユーザー名が表示される。
		Time Zone	サービスで使用されるタイムゾーンが表示される。
System		-	サービスが起動されている OS の、OS 情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
		CPU Type	CPU の種類が表示される。
		Hardware ID	ハードウェア ID が表示される。
		OS Type	OS の種類が表示される。
		OS Name	OS 名が表示される。
		OS Version	OS のバージョンが表示される。
Network Services		-	Performance Management 通信共通ライブラリについての情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
		Build Date	Agent Collector サービスの作成日が表示される。
		INI File	jpcns.ini ファイルの格納ディレクトリ名が表示される。
Network Services	Service	-	サービスについての情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
		Description	次の形式でホスト名が表示される。 インスタンス名_ホスト名
		Local Service Name	サービス ID が表示される。

フォルダ名		プロパティ名	説明
Network Services	Service	Remote Service Name	Agent Collector サービスが接続する Agent Store サービスのサービス ID が表示される。
		AH Service Name	同一ホストにある Action Handler サービスのサービス ID が表示される。
JP1 Event Configurations		—	JP1 イベントの発行条件を設定する。
		各サービス	Agent Collector サービス, Agent Store サービス, Action Handler サービス, および Status Server サービスのリスト項目から「Yes」または「No」を選択し、サービスごとに JP1 システムイベントを発行するかどうかを指定する。
		JP1 Event Send Host	JP1/Base の接続先イベントサーバ名を指定する。ただし、Action Handler サービスと同一マシンの論理ホストまたは物理ホストで動作しているイベントサーバだけ指定できる。指定できる値は 0~255 バイトの半角英数字および「.」「-」で、範囲外の値が指定された場合は、省略されたと仮定する。値が省略された場合は、Action Handler サービスが動作するホストをイベント発行元ホストとして使用する。「localhost」が指定された場合は、物理ホストが指定されたものと仮定する。
		Monitoring Console Host	JP1/IM - Manager のモニター起動で PFM - Web Console のブラウザを起動する場合、起動させる PFM - Web Console ホストを指定する。指定できる値は 0~255 バイトの半角英数字および「.」「-」で、範囲外の値が指定された場合は、省略されたと仮定する。値が省略された場合は、接続先の PFM - Manager ホストを仮定する。
		Monitoring Console Port	起動する PFM - Web Console のポート番号 (http リクエストポート番号) を指定する。指定できる値は 1~65535 で、範囲外の値が指定された場合は、省略されたと仮定する。値が省略された場合は、20358 が設定される。
		Monitoring Console Https	JP1/IM - Manager のモニター起動で PFM - Web Console を起動する場合、PFM - Web Console に https を使用した暗号化通信で接続するかどうかを指定する。デフォルトは No。 <ul style="list-style-type: none"> • Yes：暗号化通信で接続する • No：暗号化通信で接続しない
JP1 Event Configurations	Alarm	JP1 Event Mode	アラームの状態が変化したときに、JP1 システムイベントと JP1 ユーザーイベントのどちらのイベントを発行するか設定する。 <ul style="list-style-type: none"> • JP1 User Event：JP1 ユーザーイベントを発行する • JP1 System Event：JP1 システムイベントを発行する
Detail Records		—	PD レコードタイプのレコードのプロパティが格納されている。収集されているレコードのレコード ID は、太字で表示される。
Detail Records	レコード ID ^{※2}	—	レコードのプロパティが格納されている。
		Description	レコードの説明が表示される。このプロパティは変更できない。

フォルダ名		プロパティ名	説明
Detail Records	レコード ID※2	Log	リスト項目から「Yes」または「No」を選択し、レコードを Store データベースに記録するかどうかを指定する。この値が「Yes」でかつ、Collection Interval が 0 より大きい値であれば、データベースに記録される。
		Log(ITSLM)	JP1/SLM - Manager と連携する場合に、JP1/SLM - Manager からレコードを PFM - Agent for Enterprise Applications の Store データベースに記録するかどうかについて「Yes」または「No」で表示される。連携しない場合は「No」固定で表示される。このプロパティは変更できない。
		Monitoring(ITSLM)	JP1/SLM - Manager と連携する場合に、レコードを JP1/SLM - Manager に送信するかどうかについて、JP1/SLM - Manager での設定が「Yes」または「No」で表示される。連携しない場合は「No」固定で表示される。このプロパティは変更できない。
		Collection Interval ※3	データの収集間隔を指定する。指定できる値は 0～2,147,483,647 秒で、1 秒単位で指定できる。なお、0 と指定した場合は 0 秒となり、データは収集されない。
		Collection Offset※3	データの収集を開始するオフセット値を指定する。指定できる値は、Collection Interval で指定した値の範囲内で、0～32,767 秒の 1 秒単位で指定できる。なお、データ収集の記録時間は、Collection Offset の値によらないで、Collection Interval と同様の時間となる。
		Over 10 Sec Collection Time	履歴データの収集をリアルタイムレポートの表示処理より優先する場合（履歴収集優先機能が有効な場合）にだけ表示される。レコードの収集に 10 秒以上掛かることがあるかどうか「Yes」または「No」で表示される。 <ul style="list-style-type: none"> • Yes：10 秒以上掛かることがある。 • No：10 秒掛からない。 このプロパティは変更できない。
		Realtime Report Data Collection Mode	履歴データの収集をリアルタイムレポートの表示処理より優先する場合（履歴収集優先機能が有効な場合）にだけ表示される。リアルタイムレポートの表示モードを指定する。 <ul style="list-style-type: none"> • Reschedule：再スケジュールモードの場合 • Temporary Log：一時保存モードの場合 なお、Over 10 Sec Collection Time の値が「Yes」のレコードには、一時保存モード（Temporary Log）を指定する必要がある。
LOGIF	レコードをデータベースに記録するときの条件を指定する。条件に合ったレコードだけがデータベースに記録される。PFM - Web Console の [サービス階層] タブで表示されるサービスのプロパティ画面の、下部フレームの [LOGIF] をクリックすると表示される [ログ収集条件設定] ウィンドウで作成した条件式（文字列）が表示される。		

フォルダ名	プロパティ名	説明
Interval Records	—	PI レコードタイプのレコードのプロパティが格納されている。収集されているレコードのレコード ID は、太字で表示される。
Interval Records	レコード ID※2	—
	Description	レコードの説明が表示される。このプロパティは変更できない。
	Log	リスト項目から「Yes」または「No」を選択し、レコードを Store データベースに記録するかどうかを指定する。この値が「Yes」でかつ、Collection Interval が 0 より大きい値であれば、データベースに記録される。
	Log(ITSLM)	JP1/SLM - Manager と連携する場合に、JP1/SLM - Manager からレコードを PFM - Agent for Enterprise Applications の Store データベースに記録するかどうかについて「Yes」または「No」で表示される。連携しない場合は「No」固定で表示される。このプロパティは変更できない。
	Monitoring(ITSLM)	JP1/SLM - Manager と連携する場合に、レコードを JP1/SLM - Manager に送信するかどうかについて、JP1/SLM - Manager での設定が「Yes」または「No」で表示される。連携しない場合は「No」固定で表示される。このプロパティは変更できない。
	Collection Interval	データの収集間隔を指定する。指定できる値は 0～2,147,483,647 秒で、1 秒単位で指定できる。なお、0 と指定した場合は 0 秒となり、データは収集されない。
	Collection Offset	データの収集を開始するオフセット値を指定する。指定できる値は、Collection Interval で指定した値の範囲内で、0～32,767 秒の 1 秒単位で指定できる。なお、データ収集の記録時間は、Collection Offset の値によらないで、Collection Interval と同様の時間となる。
	Over 10 Sec Collection Time	履歴データの収集をリアルタイムレポートの表示処理より優先する場合（履歴収集優先機能が有効な場合）にだけ表示される。レコードの収集に 10 秒以上掛かることがあるかどうか「Yes」または「No」で表示される。 <ul style="list-style-type: none"> • Yes：10 秒以上掛かることがある。 • No：10 秒掛からない。 このプロパティは変更できない。
	Realtime Report Data Collection Mode	履歴データの収集をリアルタイムレポートの表示処理より優先する場合（履歴収集優先機能が有効な場合）にだけ表示される。リアルタイムレポートの表示モードを指定する。 <ul style="list-style-type: none"> • Reschedule：再スケジュールモードの場合 • Temporary Log：一時保存モードの場合 なお、Over 10 Sec Collection Time の値が「Yes」のレコードには、一時保存モード（Temporary Log）を指定する必要がある。

フォルダ名		プロパティ名	説明
Interval Records	レコード ID※2	LOGIF	レコードをデータベースに記録するときの条件を指定する。条件に合ったレコードだけがデータベースに記録される。PFM - Web Console の [サービス階層] タブで表示されるサービスのプロパティ画面の、下部フレームの [LOGIF] をクリックすると表示される [ログ収集条件設定] ウィンドウで作成した条件式 (文字列) が表示される。
Log Records		—	PL レコードタイプのレコードのプロパティが格納されている。PFM - Agent for Enterprise Applications ではこのレコードをサポートしていないため使用しない。
Restart Configurations		—	PFM サービス自動再起動の条件を設定する。PFM - Manager または PFM - Base が 08-50 以降の場合に設定できる。PFM サービス自動再起動機能については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、Performance Management の機能について説明している章を参照のこと。
		Restart when Abnormal Status	Status Server サービスが Action Handler サービス、Agent Collector サービス、および Agent Store サービスの状態を正常に取得できない場合にサービスを自動再起動するかどうかを設定する。
		Restart when Single Service Running	Agent Store サービスと Agent Collector サービスのどちらかしか起動していない場合にサービスを自動再起動するかどうかを設定する。
Restart Configurations	Action Handler	Auto Restart	Action Handler サービスに対して自動再起動機能を利用するかどうかを設定する。
		Auto Restart - Interval (Minute)	自動再起動機能を利用する場合、サービスの稼働状態を確認する間隔を設定する。設定できる値は 1~1,440 分で、1 分単位で設定できる。
		Auto Restart - Repeat Limit	自動再起動機能を利用する場合、連続して再起動を試行する回数を 1~10 の整数で設定する。
		Scheduled Restart	リスト項目から「Yes」または「No」を選択し、Action Handler サービスに対して、定期再起動機能を利用するかどうかを設定する。
		Scheduled Restart - Interval	定期再起動機能を利用する場合、再起動間隔を 1~1,000 の整数で設定する。
		Scheduled Restart - Interval Unit	定期再起動機能を利用する場合、リスト項目から「Hour」、「Day」、「Week」または「Month」を選択し、再起動間隔の単位を設定する。
		Scheduled Restart - Origin - Year	再起動する年を 1971~2035 の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Month	再起動する月を 1~12 の整数で指定できる。

フォルダ名		プロパティ名	説明
Restart Configurations	Action Handler	Scheduled Restart - Origin - Day	再起動する日を 1～31 の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Hour	再起動する時間（時）を 0～23 の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Minute	再起動する時間（分）を 0～59 の整数で指定できる。
	Agent Collector	Auto Restart	Agent Collector サービスに対して自動再起動機能を利用するかどうかを設定する。
		Auto Restart - Interval (Minute)	自動再起動機能を利用する場合、サービスの稼働状態を確認する間隔を設定する。設定できる値は 1～1,440 分で、1 分単位で設定できる。
		Auto Restart - Repeat Limit	自動再起動機能を利用する場合、連続して再起動を試行する回数を 1～10 の整数で設定する。
		Scheduled Restart	リスト項目から「Yes」または「No」を選択し、Agent Collector サービスに対して、定期再起動機能を利用するかどうかを設定する。
		Scheduled Restart - Interval	定期再起動機能を利用する場合、再起動間隔を 1～1,000 の整数で設定する。
		Scheduled Restart - Interval Unit	定期再起動機能を利用する場合、リスト項目から「Hour」、「Day」、「Week」または「Month」を選択し、再起動間隔の単位を設定する。
		Scheduled Restart - Origin - Year	再起動する年を 1971～2035 の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Month	再起動する月を 1～12 の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Day	再起動する日を 1～31 の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Hour	再起動する時間（時）を 0～23 の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Minute	再起動する時間（分）を 0～59 の整数で指定できる。
		Agent Store	Auto Restart
Auto Restart - Interval (Minute)	自動再起動機能を利用する場合、サービスの稼働状態を確認する間隔を設定する。設定できる値は 1～1,440 分で、1 分単位で設定できる。		
Auto Restart - Repeat Limit	自動再起動機能を利用する場合、連続して再起動を試行する回数を 1～10 の整数で設定する。		

フォルダ名		プロパティ名	説明
Restart Configurations	Agent Store	Scheduled Restart	リスト項目から「Yes」または「No」を選択し、Agent Store サービスに対して、定期再起動機能を利用するかどうかを設定する。
		Scheduled Restart - Interval	定期再起動機能を利用する場合、再起動間隔を1~1,000の整数で設定する。
		Scheduled Restart - Interval Unit	定期再起動機能を利用する場合、リスト項目から「Hour」、「Day」、「Week」または「Month」を選択し、再起動間隔の単位を設定する。
		Scheduled Restart - Origin - Year	再起動する年を1971~2035の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Month	再起動する月を1~12の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Day	再起動する日を1~31の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Hour	再起動する時間（時）を0~23の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Minute	再起動する時間（分）を0~59の整数で指定できる。
ITSMLM Connection Configuration		—	連携するJP1/SLM - Managerに関する情報が表示される。
ITSMLM Connection Configuration	ITSMLM Connection	—	接続先JP1/SLM - Managerに関する情報が表示される。
		ITSMLM Host	接続しているJP1/SLM - Managerのホスト名が表示される。JP1/SLM - Managerと接続していない場合、本プロパティは表示されない。
		ITSMLM Port	接続しているJP1/SLM - Managerのポート番号が表示される。JP1/SLM - Managerと接続していない場合、本プロパティは表示されない。
	MANAGE ITSMLM CONNECTION	—	JP1/SLM - Managerとの接続を停止するかどうかを設定する。
		DISCONNECT ITSMLM CONNECTION	接続を停止するJP1/SLM - Managerのホスト名をリスト項目から指定する。リスト項目から「(空文字)」を指定した場合は何もしない。JP1/SLM - Managerと接続していない場合、リスト項目には「(空文字)」だけが表示される。
Agent		—	PFM - Agent for Enterprise Applications 固有の設定用プロパティが格納されている。
Agent	Target	—	監視対象となるSAPシステムの概要が表示される。このディレクトリに格納されているプロパティは変更できない。
		SID	監視対象となるSAPシステムIDが表示される。
		SERVER	監視対象となるSAPインスタンス名が表示される。

フォルダ名		プロパティ名	説明
Agent	Destination	—	SAP システムに接続するための情報が表示される。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
		ASHOST	接続先アプリケーションサーバのホスト名が表示される。通常は、ローカルホスト名が表示される。
		SYSNR	SAP システムのシステム番号が表示される。
		CLIENT	SAP ユーザーが属するクライアント名（接続先ダイアログインスタンスに割り当てられているシステム番号）が表示される。
		USER	SAP ユーザー名が表示される。
		EXTPWD	SAP システムへの接続に、拡張パスワードを使用するかどうかが表示される。 <ul style="list-style-type: none"> • Y：拡張パスワードを使用する。 • N：拡張パスワードを使用しない。
		PASSWD	SAP ユーザーのパスワードが*（アスタリスク）で表示される。
		LANG	SAP ユーザーの使用言語または接続先 SAP システムの言語が表示される。常に「EN」が表示される。
		CODEPAGE	SAP システムとの接続に使用するコードページが表示される。常に空欄で表示される。
	Mode	—	Agent Collector サービスの動作モードが表示される。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
		DELAYCONNECT	SAP システムにいつ接続するかが表示される。 <ul style="list-style-type: none"> • Y：パフォーマンスデータ収集時に SAP システムに接続する。この場合、Agent Collector サービスは、接続時の SAP システムの稼働状況に関係なく起動される。 • N：Agent Collector サービス起動時に SAP システムに接続する。この場合、Agent Collector サービスは、接続時に SAP システムが停止していると起動されない。
		KEEPCONNECT	パフォーマンスデータ収集完了後に SAP システムとの接続を続行するかどうかが表示される。常に「Y」が表示される。 <ul style="list-style-type: none"> • Y：接続を続行する。 • N：接続を続行しない。
	PI_UMP	MONITOR_SET	User defined Monitor (Perf.) (PI_UMP) レコードで監視対象とする、SAP システムのモニター情報のモニターセット名を指定する。 指定できる文字列は、1～60 バイトの半角英数字。
		MONITOR	User defined Monitor (Perf.) (PI_UMP) レコードで監視対象とする、SAP システムのモニター情報のモニター名を指定する。 指定できる文字列は、1～60 バイトの半角英数字。

(凡例)

－：該当しない

注※1

[プロパティ - [サービス]] ダイアログボックスを [Performance Management - View] ウィンドウから表示した場合、[First Registration Date] および [Last Registration Date] は表示されません。これらのプロパティ値を参照したい場合は、[管理ツール] ウィンドウから [プロパティ - [サービス]] ダイアログボックスを表示してください。

注※2

フォルダ名には、データベース ID を除いたレコード ID が表示されます。各レコードのレコード ID については、「[10. レコード](#)」を参照してください。

注※3

Sync Collection With が表示されている場合、Collection Interval と Collection Offset は表示されません。

付録 G ディレクトリおよびファイル一覧

ここでは、PFM - Agent for Enterprise Applications のファイルおよびディレクトリ一覧を OS ごとに記載します。

Performance Management のインストールディレクトリを OS ごとに示します。

Windows の場合

Performance Management のインストール先フォルダは、任意です。デフォルトのインストール先フォルダは次のとおりです。

- Windows の場合
システムドライブ¥Program Files (x86)¥Hitachi¥jp1pc¥

付録 G.1 フォルダおよびファイル一覧 (Windows の場合)

Windows 版 PFM - Agent for Enterprise Applications のファイルおよびフォルダ一覧を次の表に示します。

表 G-1 PFM - Agent for Enterprise Applications のファイルおよびフォルダ一覧 (Windows 版)

フォルダ名	ファイル名	説明
インストール先フォルダ¥agtm¥	—	PFM - Agent for Enterprise Applications のルートフォルダ
	readme_ja.txt	README.TXT (日本語)
	readme_en.txt	README.TXT (英語)
	version.txt	バージョン情報
インストール先フォルダ¥agtm¥agent¥	—	Agent Collector サービスのルートフォルダ
	jpcagtm.exe	Agent Collector サービス実行プログラム
	jpcMcollect.exe	Agent Collector サービス実行プログラム jpcagtm.exe の子プロセス。SAP システムとの通信を行う。
インストール先フォルダ¥agtm¥agent¥インスタンス名¥	—	Agent Collector サービスのルートフォルダ (インスタンスごと) ※1
	jpcagt.ini	Agent Collector サービス起動情報ファイル (インスタンスごと) ※1
	jpcagt.ini.model	Agent Collector サービス起動情報ファイルのモデルファイル (インスタンスごと) ※1

フォルダ名	ファイル名	説明
インストール先フォルダ¥agtm¥agent¥インスタンス名¥	jpcMcollect.ini	SAP 通信プロセスの環境パラメーター設定ファイル※1
	jr3alget.ini	CCMS Alert Monitor Command (PD_ALMX) レコード用の環境パラメーター設定ファイル※1
	jr3slget.ini	System Log Monitor Command (PD_SLMX) レコード用の環境パラメーター設定ファイル※1
インストール先フォルダ¥agtm¥agent¥インスタンス名¥log¥	—	Agent Collector サービス内部ログファイル格納フォルダ (インスタンスごと) ※1
	ALERT	WRAP1 形式の CCMS アラート情報格納ファイル (デフォルト) ※3
	ALERTn※8	WRAP2 形式の CCMS アラート情報格納ファイル※3
	ALERT.ofs	CCMS アラート情報格納ファイルの管理ファイル (デフォルト) ※3
	jr3alget.log	CCMS アラート情報抽出の実行履歴を保存しているメッセージログファイル※3
	jr3alget.dat	CCMS アラート情報抽出の実行履歴を保存しているデータログファイル※3
	jr3alget.lasttime	CCMS アラート情報抽出の前回実行日時を保存しているタイムスタンプファイル※3
	SYSLOG	WRAP1 形式のシステムログ情報格納ファイル (デフォルト) ※4
	SYSLOGn※8	WRAP2 形式のシステムログ情報格納ファイル※4
	SYSLOG.ofs	システムログ情報格納ファイルの管理ファイル (デフォルト) ※4
	jr3slget.log	システムログ情報抽出の実行履歴を保存しているメッセージログファイル※4
	jr3slget.dat	システムログ情報抽出の実行履歴を保存しているデータログファイル※4
	jr3slget.lasttime	システムログ情報抽出の前回実行日時を保存しているタイムスタンプファイル※4
	インストール先フォルダ¥agtm¥evtrap¥	—
jr3alget		CCMS アラートの抽出と変換コマンド
jr3alget.ini.sample		jr3alget コマンドの環境パラメーター設定ファイルのモデルファイル

フォルダ名	ファイル名	説明
インストール先フォルダ¥agtm¥evtrap¥	jr3slget	システムログの抽出と変換コマンド
	jr3slget.ini.sample	jr3slget コマンドの環境パラメーター設定ファイルのモデルファイル
インストール先フォルダ¥agtm¥lib¥	—	メッセージカタログ格納フォルダ
インストール先フォルダ¥agtm¥lib¥rfc	—	RFC ライブラリの格納フォルダ
インストール先フォルダ¥agtm¥store¥	—	Agent Store サービスのルートフォルダ
	*.DAT	データモデル定義ファイル
インストール先フォルダ¥agtm¥store¥インスタンス名¥	—	Agent Store サービスのルートフォルダ (インスタンスごと) ※1
	*.DB	パフォーマンスデータファイル (インスタンスごと) ※2
	*.IDX	パフォーマンスデータファイルのインデックスファイル (インスタンスごと) ※2
	*.LCK	パフォーマンスデータファイルのロックファイル (インスタンスごと) ※2
	jpcsto.ini	Agent Store サービス起動情報ファイル (インスタンスごと) ※1
	jpcsto.ini.model	Agent Store サービス起動情報ファイルのモデル (インスタンスごと) ※1
	*.DAT	データモデル定義ファイル (インスタンスごと) ※1
インストール先フォルダ¥agtm¥store¥インスタンス名¥backup¥	—	標準のデータベースバックアップ先フォルダ (インスタンスごと) ※1
インストール先フォルダ¥agtm¥store¥インスタンス名¥dump¥	—	標準のデータベースエクスポート先フォルダ (インスタンスごと) ※1
インストール先フォルダ¥agtm¥store¥インスタンス名¥import¥	—	Store バージョン 2.0 の場合、標準のデータベースインポート先フォルダ (インスタンスごと) ※5
インストール先フォルダ¥agtm¥store¥インスタンス名¥log¥	—	Agent Store サービス内部ログファイル格納フォルダ (インスタンスごと) ※1
インストール先フォルダ¥agtm¥store¥インスタンス名¥partial¥	—	Store バージョン 2.0 の場合、標準のデータベース部分バックアップ先フォルダ (インスタンスごと) ※5
インストール先フォルダ¥agtm¥store¥インスタンス名¥STPD¥	—	Store バージョン 2.0 の場合、PD レコードタイプのパフォーマンスデータのルートフォルダ (インスタンスごと) ※5

フォルダ名	ファイル名	説明
インストール先フォルダ¥agtm¥store¥インスタンス名¥STPI¥	—	Store バージョン 2.0 の場合の、PI レコードタイプのパフォーマンスデータのルートフォルダ（インスタンスごと）※5
インストール先フォルダ¥agtm¥store¥インスタンス名¥STPL¥	—	Store バージョン 2.0 の場合の、PL レコードタイプのパフォーマンスデータのルートフォルダ（インスタンスごと）※5
インストール先フォルダ¥agtm¥インスタンス名¥log¥	*.*	PFM - Agent for Enterprise Applications の各種ログファイル
インストール先フォルダ¥patch_files¥agtm¥	—	パッチ用ファイル格納フォルダ
インストール先フォルダ¥auditlog¥	—	動作ログファイルの標準の出力フォルダ
	jpcauditn※8.log	動作ログファイル※6
インストール先フォルダ¥setup¥	—	セットアップファイル格納フォルダ
	jpcagtmu.Z	PFM - Agent セットアップ用アーカイブファイル (UNIX)
	jpcagtmw.EXE	PFM - Agent セットアップ用アーカイブファイル (Windows)
環境ディレクトリ※7¥jp1pc¥agtm¥agent¥インスタンス名¥	—	論理ホスト運用の場合の、Agent Collector サービスのルートフォルダ（インスタンスごと）※1
	jpcagt.ini	論理ホスト運用の場合の、Agent Collector サービス起動情報ファイル（インスタンスごと）※1
	jpcagt.ini.model	論理ホスト運用の場合の、Agent Collector サービス起動情報ファイルのモデルファイル（インスタンスごと）※1
	jpcMcollect.ini	論理ホスト運用の場合の、SAP 通信プロセスの環境パラメーター設定ファイル※1
	jr3alget.ini	論理ホスト運用の場合の、CCMS Alert Monitor Command (PD_ALMX) レコード用の環境パラメーター設定ファイル※1
	jr3slget.ini	論理ホスト運用の場合の、System Log Monitor Command (PD_SLMX) レコード用の環境パラメーター設定ファイル※1
環境ディレクトリ※7¥jp1pc¥agtm¥agent¥インスタンス名¥log¥	—	論理ホスト運用の場合の、Agent Collector サービス内部ログファイル格納フォルダ（インスタンスごと）※1
	ALERT	WRAP1 形式の論理ホスト運用の場合の、CCMS アラート情報格納ファイル（デフォルト）※3
	ALERTη※8	WRAP2 形式での論理ホストの場合の、CCMS アラート情報格納ファイル（デフォルト）※3

フォルダ名	ファイル名	説明
環境ディレクトリ※7¥jp1pc¥agtm¥agent¥インスタンス名¥log¥	ALERT. ofs	論理ホスト運用の場合の、CCMS アラート情報格納ファイルの管理ファイル (デフォルト) ※3
	jr3alget. log	論理ホスト運用の場合の、CCMS アラート情報抽出の実行履歴を保存しているメッセージログファイル※3
	jr3alget. dat	論理ホスト運用の場合の、CCMS アラート情報抽出の実行履歴を保存しているデータログファイル※3
	jr3alget. lasttime	論理ホスト運用の場合の、CCMS アラート情報抽出の前回実行日時を保存しているタイムスタンプファイル※3
	SYSLOG	WRAP1 形式の論理ホスト運用の場合の、システムログ情報格納ファイル (デフォルト) ※4
	SYSLOGn※8	WRAP2 形式での論理ホスト運用の場合の、システムログ情報格納ファイル (デフォルト) ※4
	SYSLOG. ofs	論理ホスト運用の場合の、システムログ情報格納ファイルの管理ファイル (デフォルト) ※4
	jr3slget. log	論理ホスト運用の場合の、システムログ情報抽出の実行履歴を保存しているメッセージログファイル※4
	jr3slget. dat	論理ホスト運用の場合の、システムログ情報抽出の実行履歴を保存しているデータログファイル※4
	jr3slget. lasttime	論理ホスト運用の場合の、システムログ情報抽出の前回実行日時を保存しているタイムスタンプファイル※4
環境ディレクトリ※7¥jp1pc¥agtm¥store¥インスタンス名¥	-	論理ホスト運用の場合の、Agent Store サービスのルートフォルダ (インスタンスごと) ※1
	*.DB	論理ホスト運用の場合の、パフォーマンスデータファイル (インスタンスごと) ※2
	*.IDX	論理ホスト運用の場合の、パフォーマンスデータファイルのインデックスファイル (インスタンスごと) ※2
	*.LCK	論理ホスト運用の場合の、パフォーマンスデータファイルのロックファイル (インスタンスごと) ※2
	ipcsto. ini	論理ホスト運用の場合の、Agent Store サービス起動情報ファイル (インスタンスごと) ※1

フォルダ名	ファイル名	説明
環境ディレクトリ ^{※7} ¥jp1pc¥agtm¥store¥インスタンス名¥	jpcsto.ini.model	論理ホスト運用の場合の、Agent Store サービス起動情報ファイルのモデル（インスタンスごと） ※1
	*.DAT	論理ホスト運用の場合の、データモデル定義ファイル（インスタンスごと）※1
環境ディレクトリ ^{※7} ¥jp1pc¥agtm¥store¥インスタンス名¥backup¥	-	論理ホスト運用の場合の、標準のデータベースバックアップ先フォルダ（インスタンスごと）※1
環境ディレクトリ ^{※7} ¥jp1pc¥agtm¥store¥インスタンス名¥dump¥	-	論理ホスト運用の場合の、標準のデータベースエクスポート先フォルダ（インスタンスごと）※1
環境ディレクトリ ^{※7} ¥jp1pc¥agtm¥store¥インスタンス名¥import¥	-	論理ホスト運用の場合で Store バージョン 2.0 の場合の、標準のデータベースインポート先フォルダ（インスタンスごと）※5
環境ディレクトリ ^{※7} ¥jp1pc¥agtm¥store¥インスタンス名¥log¥	-	論理ホスト運用の場合の、Agent Store サービス内部ログファイル格納フォルダ（インスタンスごと）※1
環境ディレクトリ ^{※7} ¥jp1pc¥agtm¥store¥インスタンス名¥partial¥	-	論理ホスト運用の場合で Store バージョン 2.0 の場合の、標準のデータベース部分バックアップ先フォルダ（インスタンスごと）※5
環境ディレクトリ ^{※7} ¥jp1pc¥agtm¥store¥インスタンス名¥STPD¥	-	論理ホスト運用の場合で Store バージョン 2.0 の場合の、PD レコードタイプのパフォーマンスデータのルートフォルダ（インスタンスごと）※5
環境ディレクトリ ^{※7} ¥jp1pc¥agtm¥store¥インスタンス名¥STPI¥	-	論理ホスト運用の場合で Store バージョン 2.0 の場合の、PI レコードタイプのパフォーマンスデータのルートフォルダ（インスタンスごと）※5
環境ディレクトリ ^{※7} ¥jp1pc¥agtm¥store¥インスタンス名¥STPL¥	-	論理ホスト運用の場合で Store バージョン 2.0 の場合の、PL レコードタイプのパフォーマンスデータのルートフォルダ（インスタンスごと）※5
環境ディレクトリ ^{※7} ¥jp1pc¥audit log¥	-	論理ホスト運用の場合の、動作ログファイルの標準の出力フォルダ
	jpcauditn ^{※8} .log	論理ホスト運用の場合の、動作ログファイル ^{※6}

(凡例)

—：該当しない

注※1

jpconf inst setup コマンドの実行で作成されます。

注※2

Agent Store サービス起動時に作成されます。

注※3

CCMS Alert Monitor Command (PD_ALMX) レコードを収集する場合に作成されます。

注※4

System Log Monitor Command (PD_SLMX) レコードを収集する場合に作成されます。

注※5

Store データベースを Store バージョン 2.0 で構築したときに作成されます。

注※6

ログファイル数は、jpccomm.ini ファイルで変更できます。

注※7

環境ディレクトリは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

注※8

n は数値です。

付録 G.2 ディレクトリおよびファイル一覧 (Linux の場合)

Linux 版 PFM - Agent for Enterprise Applications のファイルおよびディレクトリ一覧を次の表に示します。

表 G-2 PFM - Agent for Enterprise Applications のファイルおよびディレクトリ一覧 (Linux 版)

ディレクトリ名	ファイル名	説明
/opt/jp1pc/agtm/	—	PFM - Agent for Enterprise Applications のルートディレクトリ
/opt/jp1pc/agtm/agent/	—	Agent Collector サービスのルートディレクトリ
	jpcagtm	Agent Collector サービス実行プログラム
	jpcMcollect	Agent Collector サービス実行プログラム jpcagtm.exe の子プロセス。SAP システムとの通信を行う。
/opt/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/	—	Agent Collector サービスのルートディレクトリ (インスタンスごと) ※1
	jpcagt.ini	Agent Collector サービス起動情報ファイル (インスタンスごと) ※1
	jpcagt.ini.lck	Agent Collector サービス起動情報ファイル (インスタンスごと) のロックファイル※2
	jpcagt.ini.model	Agent Collector サービス起動情報ファイルのモデルファイル (インスタンスごと) ※1

ディレクトリ名	ファイル名	説明
/opt/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/	jpgmcollect.ini	SAP 通信プロセスの環境パラメーター設定ファイル ※1
	jr3alget.ini	CCMS Alert Monitor Command (PD_ALMX) レコード用の環境パラメーター設定ファイル※1
	jr3slget.ini	System Log Monitor Command (PD_SLMX) レ コード用の環境パラメーター設定ファイル※1
/opt/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/log/	—	Agent Collector サービス内部ログファイル格納 ディレクトリ (インスタンスごと) ※1
	ALERT	WRAP1 形式の CCMS アラート情報格納ファイル (デフォルト) ※3
	ALERTn※9	WRAP2 形式の CCMS アラート情報格納ファイル ※3
	ALERT.ofs	CCMS アラート情報格納ファイルの管理ファイル (デフォルト) ※4
	jr3alget.log	CCMS アラート情報抽出の実行履歴を保存してい るメッセージログファイル※4
	jr3alget.dat	CCMS アラート情報抽出の実行履歴を保存してい るデータログファイル※4
	jr3alget.lasttime	CCMS アラート情報抽出の前回実行日時を保存し ているタイムスタンプファイル※4
	SYSL0G	WRAP1 形式のシステムログ情報格納ファイル (デ フォルト) ※4
	SYSL0Gn※9	WRAP2 形式のシステムログ情報格納ファイル※4
	SYSL0G.ofs	システムログ情報格納ファイルの管理ファイル (デ フォルト) ※5
	jr3slget.log	システムログ情報抽出の実行履歴を保存している メッセージログファイル※5
	jr3slget.dat	システムログ情報抽出の実行履歴を保存している データログファイル※5
	jr3slget.lasttime	システムログ情報抽出の前回実行日時を保存してい るタイムスタンプファイル※5
	.	PFM - Agent for Enterprise Applications の各種 ログファイル
	/opt/jp1pc/agtm/evtrap/	—
jr3alget		CCMS アラートの抽出と変換コマンド

ディレクトリ名	ファイル名	説明
/opt/jp1pc/agtm/evtrap/	jr3alget.ini.sample	jr3alget コマンドの環境パラメーター設定ファイルのモデルファイル
	jr3slget	システムログの抽出と変換コマンド
	jr3slget.ini.sample	jr3slget コマンドの環境パラメーター設定ファイルのモデルファイル
/opt/jp1pc/agtm/lib/rfc	—	RFC ライブラリ格納ディレクトリ
/opt/jp1pc/agtm/nls/	—	メッセージカタログ格納ディレクトリ
/opt/jp1pc/agtm/store/	—	Agent Store サービスのルートディレクトリ
	*.DAT	データモデル定義ファイル
/opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/	—	Agent Store サービスのルートディレクトリ (インスタンスごと) ※1
	*.DB	パフォーマンスデータファイル (インスタンスごと) ※3
	*.IDX	パフォーマンスデータファイルのインデックスファイル (インスタンスごと) ※3
	*.LCK	パフォーマンスデータファイルのロックファイル (インスタンスごと) ※3
	ipcsto.ini	Agent Store サービス起動情報ファイル (インスタンスごと) ※1
	ipcsto.ini.model	Agent Store サービス起動情報ファイルのモデル (インスタンスごと) ※1
	*.DAT	データモデル定義ファイル (インスタンスごと) ※1
/opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/backup/	—	標準のデータベースバックアップ先ディレクトリ (インスタンスごと) ※1
/opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/dump/	—	標準のデータベースエクスポート先ディレクトリ (インスタンスごと) ※1
/opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/import/	—	Store バージョン 2.0 の場合の、標準のデータベースインポート先ディレクトリ (インスタンスごと) ※6
/opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/log/	—	Agent Store サービス内部ログファイル格納ディレクトリ (インスタンスごと) ※1
/opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/partial/	—	Store バージョン 2.0 の場合の、標準のデータベース部分バックアップ先ディレクトリ (インスタンスごと) ※6

ディレクトリ名	ファイル名	説明
/opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/STPD/	—	Store バージョン 2.0 の場合の、PD レコードタイプのパフォーマンスデータのルートフォルダ (インスタンスごと) ※6
/opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/STPI/	—	Store バージョン 2.0 の場合の、PI レコードタイプのパフォーマンスデータのルートフォルダ (インスタンスごと) ※6
/opt/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/STPL/	—	Store バージョン 2.0 の場合の、PL レコードタイプのパフォーマンスデータのルートフォルダ (インスタンスごと) ※6
/opt/jp1pc/patch_files/agtm/	—	パッチ用ファイル格納ディレクトリ
/opt/jp1pc/auditlog/	—	動作ログファイルの標準の出力ディレクトリ
	jpcauditn※9.log	動作ログファイル※7
/opt/jp1pc/setup/	—	セットアップファイル格納ディレクトリ
	jpccagtmu.Z	PFM - Agent セットアップ用アーカイブファイル (UNIX)
	jpccagtmw.EXE	PFM - Agent セットアップ用アーカイブファイル (Windows)
環境ディレクトリ※8/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/	—	論理ホスト運用の場合の、Agent Collector サービスのルートディレクトリ (インスタンスごと) ※1
	jpccagt.ini	論理ホスト運用の場合の、Agent Collector サービス起動情報ファイル (インスタンスごと) ※1
	jpccagt.ini.model	論理ホスト運用の場合の、Agent Collector サービス起動情報ファイルのモデルファイル (インスタンスごと) ※1
	jpccmcollect.ini	SAP 通信プロセスの環境パラメーター設定ファイル ※1
	jr3alget.ini	論理ホスト運用の場合の、CCMS Alert Monitor Command (PD_ALMX) レコード用の環境パラメーター設定ファイル※1
	jr3slget.ini	論理ホスト運用の場合の、System Log Monitor Command (PD_SLMX) レコード用の環境パラメーター設定ファイル※1
環境ディレクトリ※8/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/log/	—	論理ホスト運用の場合の、Agent Collector サービス内部ログファイル格納ディレクトリ (インスタンスごと) ※1
	ALERT	WRAP1 形式の論理ホスト運用の場合の、CCMS アラート情報格納ファイル (デフォルト) ※3

ディレクトリ名	ファイル名	説明
環境ディレクトリ※8/jp1pc/agtm/agent/インスタンス名/log/	ALERTn※9	WRAP2 形式での論理ホストの場合の、CCMS アラート情報格納ファイル (デフォルト) ※3
	ALERT.ofs	論理ホスト運用の場合の、CCMS アラート情報格納ファイルの管理ファイル (デフォルト) ※4
	jr3alget.log	論理ホスト運用の場合の、CCMS アラート情報抽出の実行履歴を保存しているメッセージログファイル※4
	jr3alget.dat	論理ホスト運用の場合の、CCMS アラート情報抽出の実行履歴を保存しているデータログファイル※4
	jr3alget.lasttime	論理ホスト運用の場合の、CCMS アラート情報抽出の前回実行日時を保存しているタイムスタンプファイル※4
	SYSLOG	WRAP1 形式の論理ホスト運用の場合の、システムログ情報格納ファイル (デフォルト) ※4
	SYSLOGn※9	WRAP2 形式での論理ホスト運用の場合の、システムログ情報格納ファイル (デフォルト) ※4
	SYSLOG.ofs	論理ホスト運用の場合の、システムログ情報格納ファイルの管理ファイル (デフォルト) ※5
	jr3slget.log	論理ホスト運用の場合の、システムログ情報抽出の実行履歴を保存しているメッセージログファイル※5
	jr3slget.dat	論理ホスト運用の場合の、システムログ情報抽出の実行履歴を保存しているデータログファイル※5
	jr3slget.lasttime	論理ホスト運用の場合の、システムログ情報抽出の前回実行日時を保存しているタイムスタンプファイル※5
環境ディレクトリ※8/jp1pc/agtm/store/インスタンス名/	-	論理ホスト運用の場合の、Agent Store サービスのルートディレクトリ (インスタンスごと) ※1
	*.DB	論理ホスト運用の場合の、パフォーマンスデータファイル (インスタンスごと) ※3
	*.IDX	論理ホスト運用の場合の、パフォーマンスデータファイルのインデックスファイル (インスタンスごと) ※3
	*.LCK	論理ホスト運用の場合の、パフォーマンスデータファイルのロックファイル (インスタンスごと) ※3

ディレクトリ名	ファイル名	説明
環境ディレクトリ ^{※8} /jp1pc/agtm/store/インスタンス名/	ipcsto.ini	論理ホスト運用の場合の、Agent Store サービス起動情報ファイル（インスタンスごと） ^{※1}
	ipcsto.ini.model	論理ホスト運用の場合の、Agent Store サービス起動情報ファイルのモデル（インスタンスごと） ^{※1}
	*.DAT	論理ホスト運用の場合の、データモデル定義ファイル（インスタンスごと） ^{※1}
環境ディレクトリ ^{※8} /jp1pc/agtm/store/インスタンス名/backup/	-	論理ホスト運用の場合の、標準のデータベースバックアップ先ディレクトリ（インスタンスごと） ^{※1}
環境ディレクトリ ^{※8} /jp1pc/agtm/store/インスタンス名/dump/	-	論理ホスト運用の場合の、標準のデータベースエクスポート先ディレクトリ（インスタンスごと） ^{※1}
環境ディレクトリ ^{※8} /jp1pc/agtm/store/インスタンス名/import/	-	論理ホスト運用の場合で Store バージョン 2.0 の場合の、標準のデータベースインポート先ディレクトリ（インスタンスごと） ^{※6}
環境ディレクトリ ^{※8} /jp1pc/agtm/store/インスタンス名/log/	-	論理ホスト運用の場合の、Agent Store サービス内部ログファイル格納ディレクトリ（インスタンスごと） ^{※1}
環境ディレクトリ ^{※8} /jp1pc/agtm/store/インスタンス名/partial/	-	論理ホスト運用の場合で Store バージョン 2.0 の場合の、標準のデータベース部分バックアップ先ディレクトリ（インスタンスごと） ^{※6}
環境ディレクトリ ^{※8} /jp1pc/agtm/store/インスタンス名/STPD/	-	論理ホスト運用の場合で Store バージョン 2.0 の場合の、PD レコードタイプのパフォーマンスデータのルートディレクトリ（インスタンスごと） ^{※6}
環境ディレクトリ ^{※8} /jp1pc/agtm/store/インスタンス名/STPI/	-	論理ホスト運用の場合で Store バージョン 2.0 の場合の、PI レコードタイプのパフォーマンスデータのルートディレクトリ（インスタンスごと） ^{※6}
環境ディレクトリ ^{※8} /jp1pc/agtm/store/インスタンス名/STPL/	-	論理ホスト運用の場合で Store バージョン 2.0 の場合の、PL レコードタイプのパフォーマンスデータのルートディレクトリ（インスタンスごと） ^{※6}
環境ディレクトリ ^{※8} /jp1pc/auditlog/	-	論理ホスト運用の場合の、動作ログファイルの標準の出力ディレクトリ
	jpcauditn ^{※9} .log	論理ホスト運用の場合の、動作ログファイル ^{※7}

(凡例)

- : 該当しない

注※1

jpccnf inst setup コマンドの実行で作成されます。

注※2

PFM - Agent for Enterprise Applications が内部で使用しているファイルです。変更および削除はしないでください。

注※3

Agent Store サービス起動時に作成されます。

注※4

CCMS Alert Monitor Command (PD_ALMX) レコードを収集する場合に作成されます。

注※5

System Log Monitor Command (PD_SLMX) レコードを収集する場合に作成されます。

注※6

Store データベースを Store バージョン 2.0 で構築したときに作成されます。

注※7

ログファイル数は、jpccomm.ini ファイルで変更できます。

注※8

環境ディレクトリは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

注※9

n は数値です。

付録 H 移行手順と移行時の注意事項

PFM - Agent for Enterprise Applications のバージョンアップ方法について説明します。

付録 H.1 バージョンアップ時のインストールについて

- PFM - Agent for Enterprise Applications をバージョンアップする場合、PFM - Agent for Enterprise Applications を上書きインストールします。

上書きインストールを実施すると、次の項目が自動的に更新されます。

- Agent Store サービスの Store データベースファイル
- ini ファイル（システムログ情報および CCMS アラート情報の環境パラメーター設定ファイルを除く）
- PFM - Agent for Enterprise Applications のインスタンス環境

また、旧バージョンの Performance Management からの移行（07-50 以前から 08-00 以降へのバージョンアップ）についての詳細は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の付録を参照してください。

注意

バージョンアップする場合に、古いバージョンの PFM - Agent for Enterprise Applications をアンインストールすると、古いバージョンで収集したパフォーマンスデータも一緒に削除されてしまうため、新しいバージョンで使用できなくなります。

- ファイル監視製品で、システムログ情報および CCMS アラート情報の格納ファイルを監視している場合は、事前にファイルの監視機能を停止してください。

付録 H.2 システムログ情報と CCMS アラート情報の抽出について

- 格納ファイルのファイルサイズまたは出力形式を変更する場合、手動で格納ファイルおよび管理ファイルを削除してください。
- 既存のインスタンスを含め、システムログ情報および CCMS アラート情報の既存の環境パラメーター設定ファイルの設定値は、バージョンアップ前の設定値を引き継ぎます。
- バージョンアップ前からバージョンアップ後にかけて、環境パラメーター設定ファイルにセクションおよびラベルが追加された場合、追加されたセクションおよびラベルの情報は、環境パラメーター設定ファイルに反映されません。追加されたセクションおよびラベルについては、「[付録 L 各バージョンの変更内容](#)」を参照してください。
- 09-00 以前からバージョンアップした場合、格納ファイルの出力形式がバージョンアップ前と同じ形式（WRAP1）で出力されます。

- 09-00 以前からバージョンアップをした場合で、新規にインスタンスを構築した場合や環境パラメータ設定ファイルのサンプルファイルから環境パラメータ設定ファイルを作成する場合、システムログ情報、および CCMS アラート情報の格納ファイルに関する項目は、次に示すデフォルト値になります。
 - 出力形式 (EXTRACTFILE セクションの TYPE ラベル) : WRAP2
 - ファイルサイズ (EXTRACTFILE セクションの SIZE ラベル) : 10240 (単位:キロバイト)

付録I バージョン互換

PFM - Agent には、製品のバージョンのほかに、データモデルのバージョンがあります。

データモデルは、上位互換を保っているため、古いバージョンで定義したレポートの定義やアラームの定義は、新しいバージョンのデータモデルでも使用できます。

PFM - Agent for Enterprise Applications のバージョンの対応を次の表に示します。

表 I-1 PFM - Agent for Enterprise Applications のバージョン対応表

PFM - Agent for Enterprise Applications のバージョン	データモデルのバージョン	監視テンプレートのアラームテーブルのバージョン
06-70	3.0	6.70
07-00	4.0	7.00
07-50	5.0	7.50
08-00	5.0	8.00
08-10	5.0	8.10
08-50	5.0	8.50
09-00	5.0	9.00
10-00	5.0	10.00
10-51	5.0	10.00
11-00	5.0	10.00
12-00	5.0	10.00

バージョン互換については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、付録に記載されているバージョン互換を参照してください。

付録 J 動作ログの出力

Performance Management の動作ログとは、システム負荷などのしきい値オーバーに関するアラーム機能や PFM サービスの起動・停止などと連動した動作情報の履歴を出力するログ情報です。

例えば、PFM サービスの起動・停止時や、PFM - Manager との接続状態の変更時に動作ログに出力されます。

動作ログは、PFM - Manager または PFM - Base が 08-10 以降の場合に出力できます。

動作ログは、CSV 形式で出力されるテキストファイルです。定期的に保存して表計算ソフトで加工することで、分析資料として利用できます。

動作ログは、jpccomm.ini の設定によって出力されるようになります。ここでは、PFM - Agent および PFM - Base が出力する動作ログの出力内容と、動作ログを出力するための設定方法について説明します。

付録 J.1 動作ログに出力される事象の種別

動作ログに出力される事象の種別および PFM - Agent および PFM - Base が動作ログを出力する契機を次の表に示します。事象の種別とは、動作ログに出力される事象を分類するための、動作ログ内での識別子です。

表 J-1 動作ログに出力される事象の種別

事象の種別	説明	PFM - Agent および PFM - Base が出力する契機
StartStop	ソフトウェアの起動と終了を示す事象。	<ul style="list-style-type: none">PFM サービスの起動・停止スタンドアロンモードの開始・終了
ExternalService	JP1 製品と外部サービスとの通信結果を示す事象。 異常な通信の発生を示す事象。	PFM - Manager との接続状態の変更
ManagementAction	プログラムの重要なアクションの実行を示す事象。 ほかの監査カテゴリーを契機にアクションが実行されたことを示す事象。	自動アクションの実行

付録 J.2 動作ログの保存形式

ここでは、動作ログのファイル保存形式について説明します。

動作ログは規定のファイル（カレント出力ファイル）に出力され、満杯になった動作ログは別のファイル（シフトファイル）として保存されます。動作ログのファイル切り替えの流れは次のとおりです。

1. 動作ログは、カレント出力ファイル「jpcaudit.log」に順次出力されます。

2. カレント出力ファイルが満杯になると、その動作ログはシフトファイルとして保存されます。

シフトファイル名は、カレント出力ファイル名の末尾に数値を付加した名称です。シフトファイル名は、カレント出力ファイルが満杯になるたびにそれぞれ「ファイル名末尾の数値+1」へ変更されます。つまり、ファイル末尾の数値が大きいほど、古いログファイルとなります。

例

カレント出力ファイル「jpcaudit.log」が満杯になると、その内容はシフトファイル「jpcaudit1.log」へ保管されます。

カレント出力ファイルが再び満杯になると、そのログは「jpcaudit1.log」へ移され、既存のシフトファイル「jpcaudit1.log」は「jpcaudit2.log」へリネームされます。

なお、ログファイル数が保存面数（jpccomm.ini ファイルで指定）を超えると、古いログファイルから削除されます。

3. カレント出力ファイルが初期化され、新たな動作ログが書き込まれます。

動作ログの出力可否、出力先および保存面数は、jpccomm.ini ファイルで設定します。jpccomm.ini ファイルの設定方法については、「付録 J.4 動作ログを出力するための設定」を参照してください。

付録 J.3 動作ログの出力形式

Performance Management の動作ログには、監査事象に関する情報が出力されます。動作ログは、ホスト（物理ホスト・論理ホスト）ごとに 1 ファイル出力されます。動作ログの出力先ホストは次のようになります。

- サービスを実行した場合：実行元サービスが動作するホストに出力
- コマンドを実行した場合：コマンドを実行したホストに出力

動作ログの出力形式、出力先、出力項目について次に説明します。

(1) 出力形式

```
CALFHM x.x, 出力項目1=値1, 出力項目2=値2, ..., 出力項目n=値n
```

(2) 出力先

表 J-2 デフォルトの動作ログ出力先ディレクトリ

OS 環境	ホスト環境	デフォルトの出力先ディレクトリ
Windows	物理ホスト	インストール先フォルダ¥auditlog¥
	論理ホスト	環境ディレクトリ**¥jp1pc¥auditlog¥
Linux	物理ホスト	/opt/jp1pc/auditlog/

OS 環境	ホスト環境	デフォルトの出力先ディレクトリ
Linux	論理ホスト	環境ディレクトリ [※] /jp1pc/auditlog/

注※

環境ディレクトリは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

動作ログの出力先は、jpccomm.ini ファイルで変更できます。jpccomm.ini ファイルの設定方法については、「付録 J.4 動作ログを出力するための設定」を参照してください。

(3) 出力項目

出力項目には 2 つの分類があります。

- 共通出力項目
動作ログを出力する JP1 製品が共通して出力する項目です。
- 固有出力項目
動作ログを出力する JP1 製品が任意に出力する項目です。

(a) 共通出力項目

共通出力項目に出力される値と項目の内容を次の表に示します。なお、この表は PFM - Manager が出力する項目や内容も含まれます。

表 J-3 動作ログの共通出力項目

項番	出力項目		値	内容
	項目名	出力される属性名		
1	共通仕様識別子	—	CALFHM	動作ログフォーマットであることを示す識別子
2	共通仕様リビジョン番号	—	x.x	動作ログを管理するためのリビジョン番号
3	通番	seqnum	通し番号	動作ログレコードの通し番号
4	メッセージ ID	msgid	KAVExxxx-x	製品のメッセージ ID
5	日付・時刻	date	YYYY-MM-DDThh:mm:ss.sssTZD [※]	動作ログの出力日時およびタイムゾーン
6	発生プログラム名	progid	JP1PFM	事象が発生したプログラムのプログラム名
7	発生コンポーネント名	compid	サービス ID	事象が発生したコンポーネント名

項番	出力項目		値	内容
	項目名	出力される属性名		
8	発生プロセス ID	pid	プロセス ID	事象が発生したプロセスのプロセス ID
9	発生場所	ocp:host	<ul style="list-style-type: none"> • ホスト名 • IP アドレス 	事象が発生した場所
10	事象の種別	ctgry	<ul style="list-style-type: none"> • StartStop • Authentication • ConfigurationAccess • ExternalService • AnomalyEvent • ManagementAction 	動作ログに出力される事象を分類するためのカテゴリ名
11	事象の結果	result	<ul style="list-style-type: none"> • Success (成功) • Failure (失敗) • Occurrence (発生) 	事象の結果
12	サブジェクト識別情報	subj:pid	プロセス ID	次のどれかの情報 <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー操作により動作するプロセス ID • 事象を発生させたプロセス ID • 事象を発生させたユーザー名 • ユーザーに 1:1 で対応づけられた識別情報
		subj:uid	アカウント識別子 (PFM ユーザー/JP1 ユーザー)	
		subj:euid	実効ユーザー ID (OS ユーザー)	

(凡例)

— : なし

注※

T は日付と時刻の区切りです。

ZD はタイムゾーン指定子です。次のどれかが出力されます。

+hh:mm : UTC から hh:mm だけ進んでいることを示す。

-hh:mm : UTC から hh:mm だけ遅れていることを示す。

Z : UTC と同じであることを示す。

(b) 固有出力項目

固有出力項目に出力される値と項目の内容を次の表に示します。なお、この表は PFM - Manager が出力する項目や内容も含まれます。

表 J-4 動作ログの固有出力項目

項番	出力項目		値	内容
	項目名	出力される属性名		
1	オブジェクト情報	obj	<ul style="list-style-type: none"> PFM - Agent のサービス ID 追加, 削除, 更新されたユーザー名 (PFM ユーザー) 	操作の対象
		obj:table	アラームテーブル名	
		obj:alarm	アラーム名	
2	動作情報	op	<ul style="list-style-type: none"> Start (起動) Stop (停止) Add (追加) Update (更新) Delete (削除) Change Password (パスワード変更) Activate (有効化) Inactivate (無効化) Bind (バインド) Unbind (アンバインド) 	事象を発生させた動作情報
3	権限情報	auth	<ul style="list-style-type: none"> 管理者ユーザー Management 一般ユーザー Ordinary Windows Administrator Linux SuperUser 	操作したユーザーの権限情報
		auth:mode	<ul style="list-style-type: none"> PFM 認証モード pfm JP1 認証モード jp1 OS ユーザー os 	操作したユーザーの認証モード
4	出力元の場所	outp:host	PFM - Manager のホスト名	動作ログの出力元のホスト
5	指示元の場所	subjp:host	<ul style="list-style-type: none"> ログイン元ホスト名 実行ホスト名 (jpctool alarm) コマンド実行時だけ) 	操作の指示元のホスト
6	自由記述	msg	メッセージ	アラーム発生時, および自動アクションの実行時に出力されるメッセージ

固有出力項目は、出力契機ごとに出力項目の有無や内容が異なります。出力契機ごとに、メッセージ ID と固有出力項目の内容を次に説明します。

■ PFM サービスの起動・停止 (StartStop)

- 出力ホスト：該当するサービスが動作しているホスト
- 出力コンポーネント：起動・停止を実行する各サービス

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	起動：KAVE03000-I 停止：KAVE03001-I
動作情報	op	起動：Start 停止：Stop

■ スタンドアロンモードの開始・終了 (StartStop)

- 出力ホスト：PFM - Agent ホスト
- 出力コンポーネント：Agent Collector サービス, Agent Store サービス

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	スタンドアロンモードを開始：KAVE03002-I スタンドアロンモードを終了：KAVE03003-I

注 1

固有出力項目は出力されません。

注 2

PFM - Agent の各サービスは、起動時に PFM - Manager ホストに接続し、ノード情報の登録、最新のアラーム定義情報の取得などを行います。PFM - Manager ホストに接続できない場合、稼働情報の収集など一部の機能だけが有効な状態（スタンドアロンモード）で起動します。その際、スタンドアロンモードで起動することを示すため、KAVE03002-I が出力されます。その後、一定期間ごとに PFM - Manager への再接続を試み、ノード情報の登録、定義情報の取得などに成功すると、スタンドアロンモードから回復し、KAVE03003-I が出力されます。この動作ログによって、KAVE03002-I と KAVE03003-I が出力されている間は、PFM - Agent が不完全な状態で起動していることを知ることができます。

■ PFM - Manager との接続状態の変更 (ExternalService)

- 出力ホスト：PFM - Agent ホスト
- 出力コンポーネント：Agent Collector サービス, Agent Store サービス

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	PFM - Manager へのイベントの送信に失敗（キューイングを開始）：KAVE03300-I PFM - Manager へのイベントの再送が完了：KAVE03301-I

注 1

固有出力項目は出力されません。

注 2

Agent Store サービスは、PFM - Manager へのイベント送信に失敗すると、イベントのキューイングを開始し、以降はイベントごとに最大 3 件がキューにためられます。KAVE03300-I は、イベント送信に失敗し、キューイングを開始した時点で出力されます。PFM - Manager との接続が回復したあと、キューイングされたイベントの送信が完了した時点で、KAVE03301-I が出力されます。この動作ログによって、KAVE03300-I と KAVE03301-I が出力されている間は、PFM - Manager へのイベント送信がリアルタイムでできていなかった期間と知ることができます。

注 3

Agent Collector サービスは、通常、Agent Store サービスを経由して PFM - Manager にイベントを送信します。何らかの理由で Agent Store サービスが停止している場合だけ、直接 PFM - Manager にイベントを送信しますが、失敗した場合に KAVE03300-I が出力されます。この場合、キューイングを開始しないため、KAVE03301-I は出力されません。この動作ログによって、PFM - Manager に送信されなかったイベントがあることを知ることができます。

■ 自動アクションの実行 (ManagementAction)

- 出力ホスト：アクションを実行したホスト
- 出力コンポーネント：Action Handler サービス

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	コマンド実行プロセス生成に成功：KAVE03500-I コマンド実行プロセス生成に失敗：KAVE03501-W E-mail 送信に成功：KAVE03502-I E-mail 送信に失敗：KAVE03503-W
自由記述	msg	コマンド実行：cmd=実行したコマンドライン E-mail 送信：mailto=送信先メールアドレス

注

コマンド実行プロセスの生成に成功した時点で KAVE03500-I が出力されます。その後、コマンドが実行できたかどうかのログ、および実行結果のログは、動作ログには出力されません。

(4) 出力例

動作ログの出力例を次に示します。

```
CALFHM 1.0, seqnum=1, msgid=KAVE03000-I, date=2007-01-18T22:46:49.682+09:00,  
progid=JP1PFM, compid=TA1host01, pid=2076,  
ocp:host=host01, ctgry=StartStop, result=Occurrence,  
subj:pid=2076,op=Start
```

付録 J.4 動作ログを出力するための設定

動作ログを出力するための設定は、jpccomm.ini ファイルで定義します。設定しない場合、動作ログは出力されません。動作ログを出力するための設定内容とその手順について次に示します。

(1) 設定手順

動作ログを出力するための設定手順を次に示します。

1. ホスト上の全 PFM サービスを停止させる。
2. テキストエディターなどで、jpccomm.ini ファイルを編集する。
3. jpccomm.ini ファイルを保存して閉じる。

(2) jpccomm.ini ファイルの詳細

jpccomm.ini ファイルの詳細について説明します。

(a) 格納先ディレクトリ

表 J-5 jpccomm.ini ファイルの格納先ディレクトリ

OS 環境	ホスト環境	格納先ディレクトリ
Windows	ホスト環境	インストール先フォルダ
	論理ホスト	環境ディレクトリ※¥jp1pc¥
Linux	ホスト環境	/opt/jp1pc/
	論理ホスト	環境ディレクトリ※/jp1pc/

注※

環境ディレクトリは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

(b) 形式

jpccomm.ini ファイルには、次の内容を定義します。

- 動作ログの出力の有無
- 動作ログの出力先
- 動作ログの保存面数
- 動作ログのファイルサイズ

指定形式は次のとおりです。

"項目名"=値

設定項目を次の表に示します。

表 J-6 jpccomm.ini ファイルで設定する項目および初期値

項番	項目	説明
1	[Action Log Section]	セクション名です。変更はできません。
2	Action Log Mode	<p>動作ログを出力するかどうかを指定します。この項目の設定は省略できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> 初期値 0 (出力しない) 指定できる値 0 (出力しない), 1 (出力する) <p>これ以外の値を指定すると、エラーメッセージが出力され、動作ログは出力されません。</p>
3	Action Log Dir	<p>動作ログの出力先を指定します。</p> <p>論理ホスト環境の場合は共有ディスク上のディレクトリを指定します。共有ディスク上にないディレクトリを指定した場合、論理ホストを構成する各物理ホストへ動作ログが出力されます。</p> <p>なお、制限長を超えるパスを設定した場合や、ディレクトリへのアクセスが失敗した場合は、共通ログにエラーメッセージが出力され、動作ログは出力されません。</p> <ul style="list-style-type: none"> 初期値 省略 省略した場合に適用される値 (デフォルト値) <ul style="list-style-type: none"> Windows の場合 インストール先フォルダ¥auditlog¥ Windows の場合 (論理ホスト運用の場合) 環境ディレクトリ※¥jp1pc¥auditlog¥ Linux の場合 /opt/jp1pc/auditlog/ Linux の場合 (論理ホスト運用の場合) 環境ディレクトリ※/jp1pc/auditlog/ <p>注※ 環境ディレクトリは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。</p> <ul style="list-style-type: none"> 指定できる値 1~185 バイトの文字列
4	Action Log Num	<p>ログファイルの総数の上限 (保存面数) を指定します。カレント出力ファイルとシフトファイルの合計を指定してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> 初期値 省略 省略した場合に適用される値 (デフォルト値) 5 指定できる値 2~10 の整数

項番	項目	説明
4	Action Log Num	<p>数値以外の文字列を指定した場合、エラーメッセージが出力され、デフォルト値である 5 が設定されます。</p> <p>範囲外の数値を指定した場合、エラーメッセージを出力し、指定値に最も近い 2~10 の整数値が設定されます。</p>
5	Action Log Size	<p>ログファイルのサイズをキロバイト単位で指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 初期値 省略 • 省略した場合に適用される値 (デフォルト値) 2048 • 指定できる値 512~2096128 の整数 <p>数値以外の文字列を指定した場合、エラーメッセージが出力され、デフォルト値である 2048 が設定されます。</p> <p>範囲外の数値を指定した場合、エラーメッセージが出力され、指定値に最も近い 512~2096128 の整数値が設定されます。</p>

付録 K JP1/SLM との連携

PFM - Agent for Enterprise Applications は、JP1/SLM と連携することによって、監視を強化できます。

PFM - Agent for Enterprise Applications は、JP1/SLM 上での監視を実現するために、JP1/SLM 用のデフォルト監視項目を PFM - Manager に提供します。

表 K-1 PFM - Agent for Enterprise Applications が PFM - Manager に提供するデフォルト監視項目

JP1/SLM での表示名	説明	レコード (レコード ID)	キー (PFM - Manager 名)	フィールド名 (PFM - Manager 名)
フロントエンド待機時間 Wait time at the front end for a request	自分の要求が処理されるのをユーザーがフロントエンドで待つ平均時間 (応答時間とネットワーク転送時間とフロントエンド処理時間)。単位はミリ秒。	WorkLoad Summary Interval (PI)	—	FrontendResponseTime (FRONTEND_RESPONSE_TIME)
ダイアログ応答時間 Dialog step processing time	ダイアログステップの処理に必要なすべての処理時間を含む。データベース処理時間は含まれるが、ネットワーク転送時間やフロントエンド処理時間は含まれない。ここで表示される値は、ダイアログステップの平均値。単位はミリ秒。	WorkLoad Summary Interval (PI)	—	ResponseTime (RESPONSE_TIME)
標準トランザクションの応答時間 Response time of standard transactions	標準トランザクションの応答時間。この標準トランザクションは、データベースのデータにアクセスし、一連の ABAP ファンクションモジュールを実行することによって、トランザクションの通常負荷をシミュレーションする。単位はミリ秒。	WorkLoad Summary Interval (PI)	—	ResponseTime: StandardTran. (RESPONSE_TIME_STANDARD_TRAN)
データベース依頼時間 Database request time	論理データベース要求を処理するための平均時間。単位はミリ秒。	WorkLoad Summary Interval (PI)	—	DBRequestTime (DB_REQUEST_TIME)
ダイアログステップ数 Number of dialog steps	1 分あたりの平均ダイアログステップ数。	WorkLoad Summary Interval (PI)	—	DialogSteps (DIALOG_STEPS)
ログインユーザー数 Number of users logged on	ログオンしているユーザー数。	WorkLoad Summary Interval (PI)	—	UsersLoggedIn (USERS_LOGGED_IN)

これらのデフォルト監視項目は PFM - Manager のインストール時に PFM - Manager に自動的に登録されますため、PFM - Agent 側の設定はありません。

ただし、PFM - Manager のリリースノートに記載されていないデータモデルバージョンの PFM - Agent の場合、PFM - Manager 側でセットアップコマンド (`jpconf agent setup`) を実行する必要があります。

付録 L 各バージョンの変更内容

付録 L.1 12-00 の変更内容

- 次の OS をサポートした。
 - Windows Server 2016
- 次の OS をサポートする OS から削除した。
 - Windows Server 2008 R2
- SAP システムをリモート監視できるようにした。

付録 L.2 11-00 の変更内容

(1) 資料番号 (3021-3-A58-10) の変更内容

- Linux をサポート対象に追加した。

(2) 資料番号 (3021-3-A58) の変更内容

- インスタンスセットアップ時の設定項目のうち、「EXTPWD (拡張パスワードの使用有無)」のデフォルト値を[N] (使用しない) から[Y] (使用する) に変更した。
- UNIX についての記述を削除した。

付録 L.3 10-51 の変更内容

- インスタンスセットアップ時の設定項目のうち、「EXTPWD (拡張パスワードの使用有無)」のデフォルト値を[N] (使用しない) から[Y] (使用する) に変更した。
- 次のメッセージを追加した。
KAVF14140-E, KAVF14184-E, KAVF14185-E, KAVF14186-E, KAVF14190-E,
KAVF14285-E, KAVF14286-E, KAVF14287-E, KAVF14288-E
- 次のメッセージを変更した。
KAVF14122-E, KAVF14221-E

付録 L.4 10-00 の変更内容

- JP1/ITSLM と連携できるようにしました。デフォルトの監視項目を次に示します。

- FRONTEND_RESPONSE_TIME
 - RESPONSE_TIME
 - RESPONSE_TIME_STANDARD_TRAN
 - DB_REQUEST_TIME
 - DIALOG_STEPS
 - USERS_LOGGED_IN
- システムログ情報および CCMS アラート情報の格納ファイルを、WRAP1 形式または WRAP2 形式のどちらかで出力できるようにしました。
10-00 以降で新規にインスタンス環境を構築する場合や環境パラメーター設定ファイルのサンプルファイルから環境パラメーター設定ファイルを作成する場合、出力形式のデフォルト値が WRAP2 となります。
 - システムログ情報および CCMS アラート情報の、格納ファイルのファイルサイズのデフォルト値を 1,024 キロバイトから 10,240 キロバイトに変更しました。
 - システムログ情報および CCMS アラート情報の環境パラメーター設定ファイルに、次のラベルを追加しました。

セクション	ラベル
EXTRACTFILE	TYPE
EXTRACTFILE	NUM

- 監視テンプレートのアラームテーブルのバージョンを 9.00 から 10.00 に変更しました。
- 次のメッセージを追加しました。
KAVF14280-W, KAVF14281-W

付録 L.5 09-00 の変更内容

- 「ソリューションセット」の名称を「監視テンプレート」に変更しました。
- 監視テンプレートのアラームテーブルのバージョンを 8.50 から 9.00 に変更しました。
- 次のメッセージを追加しました。
KAVF14152-E, KAVF14178-W, KAVF14179-W
- 08-50 以前のコマンドと互換性を持つ新形式のコマンドが追加されたことに伴い、09-00 以降のコマンドを次のように表記しました。
09-00 以降のコマンド (08-50 以前のコマンド)
- 次の監視テンプレートのアラームテーブルを追加しました。
 - PFM SAP System Template Alarms 09.00
 - PFM SAP System Template Alarms [Background Processing] 09.00

- PFM SAP System Template Alarms [Background Service] 09.00
- PFM SAP System Template Alarms [Dialog Utilization] 09.00
- 次の監視テンプレートのアラームを追加しました。
 - SystemWideQueue
 - ServerSpecificQueue
 - Utilization %
 - QueueLength %

付録 M このマニュアルの参考情報

付録 M.1 関連マニュアル

このマニュアルの関連マニュアルを次に示します。必要に応じてお読みください。

JP1/Performance Management 関連

- JP1 Version 12 パフォーマンス管理 基本ガイド (3021-3-D75)
- JP1 Version 12 JP1/Performance Management 設計・構築ガイド (3021-3-D76)
- JP1 Version 12 JP1/Performance Management 運用ガイド (3021-3-D77)
- JP1 Version 12 JP1/Performance Management リファレンス (3021-3-D78)

その他 JP1 関連

- JP1 Version 12 JP1/Base 運用ガイド (3021-3-D65)
- JP1 Version 11 JP1/Service Level Management (3021-3-A32)
- JP1 Version 6 JP1/NETM/DM Manager (3000-3-841)
- JP1 Version 8 JP1/NETM/DM SubManager (UNIX(R)用) (3020-3-L42)
- JP1 Version 9 JP1/NETM/DM 運用ガイド 1 (Windows(R)用) (3020-3-S81)
- JP1 Version 9 JP1/NETM/DM Client (UNIX(R)用) (3020-3-S85)

付録 M.2 このマニュアルでの表記

このマニュアルでは、日立製品およびその他の製品の名称を省略して表記しています。製品の正式名称と、このマニュアルでの表記を次に示します。

このマニュアルでの表記		正式名称
JP1/IM	JP1/IM - Manager	JP1/Integrated Management - Manager
		JP1/Integrated Management 2 - Manager
	JP1/IM - View	JP1/Integrated Management - View
		JP1/Integrated Management 2 - View
JP1/SLM	JP1/SLM - Manager	JP1/Service Level Management - Manager

このマニュアルでの表記		正式名称	
JP1/SLM	JP1/SLM - UR	JP1/Service Level Management - User Response	
JP1/NETM/DM		JP1/NETM/DM Client	
		JP1/NETM/DM Manager	
		JP1/NETM/DM SubManager	
Linux	Linux 6 (x64)		Red Hat Enterprise Linux(R) Server 6.1 (64-bit x86_64) 以降
	Linux 7		Red Hat Enterprise Linux(R) Server 7.1 以降
	Oracle Linux	Oracle Linux 6 (x64)	Oracle Linux(R) Operating System 6.1 (x64)以降
		Oracle Linux 7	Oracle Linux(R) Operating System 7.1 以降
	SUSE Linux	SUSE Linux 12	SUSE Linux(R) Enterprise Server 12
Performance Management		JP1/Performance Management	
PFM - Agent	PFM - Agent for Cosminexus		JP1/Performance Management - Agent Option for uCosminexus Application Server
	PFM - Agent for DB2		JP1/Performance Management - Agent Option for IBM DB2
	PFM - Agent for Domino		JP1/Performance Management - Agent Option for IBM Lotus Domino
	PFM - Agent for Enterprise Applications		JP1/Performance Management - Agent Option for Enterprise Applications
	PFM - Agent for Exchange Server		JP1/Performance Management - Agent Option for Microsoft(R) Exchange Server
	PFM - Agent for HiRDB		JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB

このマニュアルでの表記		正式名称	
PFM - Agent	PFM - Agent for IIS	JP1/Performance Management - Agent Option for Microsoft(R) Internet Information Server	
	PFM - Agent for JP1/AJS	PFM - Agent for JP1/AJS2	JP1/Performance Management - Agent Option for JP1/AJS2
		PFM - Agent for JP1/AJS3	JP1/Performance Management - Agent Option for JP1/AJS3
	PFM - Agent for Microsoft SQL Server	JP1/Performance Management - Agent Option for Microsoft(R) SQL Server	
	PFM - Agent for OpenTP1	JP1/Performance Management - Agent Option for OpenTP1	
	PFM - Agent for Oracle	JP1/Performance Management - Agent Option for Oracle	
	PFM - Agent for Platform	PFM - Agent for Platform(UNIX)	JP1/Performance Management - Agent Option for Platform(UNIX 用)
		PFM - Agent for Platform(Windows)	JP1/Performance Management - Agent Option for Platform(Windows 用)
	PFM - Agent for Service Response	JP1/Performance Management - Agent Option for Service Response	
	PFM - Agent for Virtual Machine	JP1/Performance Management - Agent Option for Virtual Machine	
	PFM - Agent for WebLogic Server	JP1/Performance Management - Agent Option for Oracle(R) WebLogic Server	
	PFM - Agent for WebSphere Application Server	JP1/Performance Management - Agent Option for IBM WebSphere Application Server	
	PFM - Agent for WebSphere MQ	JP1/Performance Management - Agent Option for IBM WebSphere MQ	

このマニュアルでの表記		正式名称	
PFM - Base		JP1/Performance Management - Base	
PFM - Manager		JP1/Performance Management - Manager	
PFM - RM	PFM - RM for Microsoft SQL Server	JP1/Performance Management - Remote Monitor for Microsoft(R) SQL Server	
	PFM - RM for Oracle	JP1/Performance Management - Remote Monitor for Oracle	
	PFM - RM for Platform	PFM - RM for Platform(UNIX)	JP1/Performance Management - Remote Monitor for Platform(UNIX 用)
		PFM - RM for Platform(Windows)	JP1/Performance Management - Remote Monitor for Platform(Windows 用)
PFM - RM for Virtual Machine		JP1/Performance Management - Remote Monitor for Virtual Machine	
PFM - Web Console		JP1/Performance Management - Web Console	
SAP NetWeaver		SAP NetWeaver(R)	

- PFM - Manager, PFM - Agent, PFM - Base, PFM - Web Console, および PFM - RM を総称して、Performance Management と表記することがあります。
- HP-UX, Solaris, AIX, および Linux を総称して、UNIX と表記することがあります。

付録 M.3 このマニュアルで使用する英略語

このマニュアルで使用する英略語を、次の表に示します。

このマニュアルでの表記	正式名称
BAPI	Business Application Programming Interface
CCMS	Computer Center Management System
EST	Eastern Standard Time
IPF	Itanium (R) Processor Family

このマニュアルでの表記	正式名称
MTE	Monitoring Tree Element
ODBC	Open Database Connectivity
RFC	Remote Function Call
UTC	Coordinated Universal Time

付録 M.4 このマニュアルでのプロダクト名、サービス ID、およびサービスキーの表記

Performance Management 09-00 以降では、プロダクト名表示機能を有効にすることで、サービス ID およびサービスキーをプロダクト名で表示できます。

識別子	プロダクト名表示機能	
	無効	有効
サービス ID	MS1 インスタンス名[ホスト名]	インスタンス名[ホスト名]<SAP System>(Store)
	MA1 インスタンス名[ホスト名]	インスタンス名[ホスト名]<SAP System>
サービスキー	agtm	EAP

このマニュアルでは、プロダクト名表示機能を有効としたときの形式で表記しています。

なお、プロダクト名表示機能を有効にできるのは、次の条件を同時に満たす場合です。

- PFM - Agent の同一装置内の前提プログラム（PFM - Manager または PFM - Base）のバージョンが 09-00 以降
- PFM - Web Console および接続先の PFM - Manager のバージョンが 09-00 以降

付録 M.5 Performance Management のインストール先ディレクトリの表記

Windows 版 Performance Management のデフォルトのインストール先フォルダは、次のとおりです。

PFM - Base のインストール先フォルダ

システムドライブ¥Program Files (x86)¥Hitachi¥jp1pc

このマニュアルでは、PFM - Base のインストール先フォルダを、インストール先フォルダと表記しています。

PFM - Manager のインストール先フォルダ

システムドライブ¥Program Files (x86)¥Hitachi¥jp1pc

PFM - Web Console のインストール先フォルダ

システムドライブ¥Program Files (x86)¥Hitachi¥jp1pcWebCon

Linux 版 Performance Management のデフォルトのインストール先ディレクトリは、次のとおりです。

PFM - Base のインストール先ディレクトリ

/opt/jp1pc

PFM - Manager のインストール先ディレクトリ

/opt/jp1pc

PFM - Web Console のインストール先ディレクトリ

/opt/jp1pcwebcon

付録 M.6 KB (キロバイト) などの単位表記について

1KB (キロバイト), 1MB (メガバイト), 1GB (ギガバイト), 1TB (テラバイト) はそれぞれ $1,024$ バイト, $1,024^2$ バイト, $1,024^3$ バイト, $1,024^4$ バイトです。

(英字)

ASCS インスタンス (ABAP Central Services)

SAP システムのインスタンスです。SAP NetWeaver7.0 以降のバージョンでクラスタとして構築する単位のことです。

SAP システムのメッセージサーバとエンキューサーバを持つインスタンスです。

ダイアログサービスを持っていません。

CCMS アラート情報抽出機能

CCMS (Computer Center Management System) の警告モニター内で発生する警告 (アラート情報) を抽出する PFM - Agent for Enterprise Applications の機能のことです。

JP1/SLM

業務システムをサービス利用者が体感している性能などの視点で監視し、サービスレベルの維持を支援する製品です。

JP1/SLM と連携することで、稼働状況の監視を強化できます。

Performance Management

システムのパフォーマンスに関する問題を監視および分析するために必要なソフトウェア群の総称です。Performance Management は、次の 5 つのプログラムプロダクトで構成されます。

- PFM - Manager
- PFM - Web Console
- PFM - Base
- PFM - Agent
- PFM - RM

RFC

SAP システム間の通信用の SAP インタフェースです。

SAP システム

SAP 社が提供している ERP パッケージシステムです。

WRAP1 形式

ファイルが一定の容量に達すると、ラップアラウンドして、再び先頭からデータを上書きする形式のファイルです。

PFM - Agent for Enterprise Applications のシステムログ情報および CCMS アラート情報の格納ファイルでは、ファイルの先頭には、管理情報として 1 行のヘッダーがあります。格納できるファイル数は 1 個です。

WRAP2 形式

ファイルが一定の容量に達してラップアラウンドするとき、データを削除して再び先頭からデータを書き込む形式のファイルです。

PFM - Agent for Enterprise Applications のシステムログ情報および CCMS アラート情報の格納ファイルでは、複数のファイルに格納できます。

(カ行)

拡張パスワード

SAP NetWeaver 7.0 以降をベースとした SAP システムで利用できるパスワードのことです。SAP NetWeaver 7.0 をベースとした SAP システムでは、パスワードの文字数は 8 桁以内から 40 桁以内へと拡張、英字は大文字固定から大文字・小文字は区別されるようにパスワードルールが変更されています。

監視テンプレート

PFM - Agent に用意されている、定義済みのアラームとレポートのことです。監視テンプレートを使用することで、複雑な定義をしなくても PFM - Agent の運用状況を監視する準備が容易にできるようになります。

(サ行)

サービス ID

Performance Management プログラムのサービスに付加された、一意の ID のことです。コマンドを使用して Performance Management のシステム構成を確認する場合、または個々のエージェントのパフォーマンスデータをバックアップする場合などは、Performance Management プログラムのサービス ID を指定してコマンドを実行します。

サービス ID の形式は、プロダクト名表示機能の設定によって異なります。サービス ID の形式については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、Performance Management の機能について説明している章を参照してください。

システムログ情報抽出機能

SAP システムで発生したイベントおよび障害を記録するログ（システムログ）を抽出する PFM - Agent for Enterprise Applications の機能のことです。システムログは、アプリケーションサーバごとに記録されます。

セントラルインスタンス

PFM - Agent for Enterprise Applications が接続するダイアログサービスを持つ SAP システムのインスタンスです。SAP NetWeaver2004 以前のバージョンで PFM - Agent for Enterprise Applications を運用する場合にクラスタとして構築する単位のことです。

プライマリアプリケーションサーバインスタンスとも呼びます。

(タ行)

ダイアログインスタンス

PFM - Agent for Enterprise Applications が接続するダイアログサービスを持つ SAP システムのインスタンスです。

アプリケーションサーバインスタンスとも呼ばれます。

プライマリアプリケーションサーバインスタンス以外のアプリケーションサーバインスタンスを追加アプリケーションサーバインスタンスとも呼びます。

データベース ID

PFM - Agent の各レコードに付けられた、レコードが格納されるデータベースを示す ID です。データベース ID は、そのデータベースに格納されるレコードの種類を示しています。データベース ID を次に示します。

- PI : PI レコードタイプのレコードのデータベースであることを示します。
- PD : PD レコードタイプのレコードのデータベースであることを示します。

(マ行)

モニター情報収集機能

SAP システムのモニター情報を、ユーザーの定義に基づいて収集し、PFM - Agent for Enterprise Applications のユーザー定義レコードとして格納する機能のことです。

索引

数字

- 09-00 の変更内容 497
- 10-00 の変更内容 496
- 10-51 の変更内容 496
- 11-00 の変更内容 496
- 12-00 の変更内容 496

A

- ABAP バッファ 298
- Agent Collector サービスのプロパティ一覧 458
- Agent Store サービスのプロパティ一覧 455
- ASCS インスタンス (ABAP Central Services) 505

B

- Background Processing (PI_BTCP) レコード 286
- Background Processing SystemWideQueue レポート 265
- Background Service (PI_BTC) レコード 288
- Background Service ServerSpecificQueue レポート 266
- Background Service Utilization %レポート 267
- Buffer - CUA アラーム 209
- Buffer - FieldDescri アラーム 210
- Buffer - GenericKey アラーム 211
- Buffer - InitialReco アラーム 212
- Buffer - Program アラーム 213
- Buffer - Screen アラーム 214
- Buffer - ShortNameTA アラーム 215
- Buffer - SingleRecor アラーム 216
- Buffer - TableDefini アラーム 217

C

- CCMS Alert Monitor Command (PD_ALMX) レコード 290
- CCMS アラート情報 22
- CCMS アラート情報抽出機能 505
- CCMS アラート情報抽出機能の概要 171

- CCMS アラート情報の監視 29
- CCMS アラート情報の抽出 174
- CCMS モニタリングアーキテクチャー 197
- COMMAND セクション 165, 190
- CONNECT セクション 157, 163, 183, 188
- CUA バッファ 298

D

- Dialog ResponseTime Status レポート 235
- Dialog ResponseTime Trend(Multi-Agent) レポート 238
- Dialog ResponseTime Trend レポート 236, 237
- Dialog ResponseTime アラーム 218
- Dialog ResponseTime レポート 234
- Dialog Service (PI_DIA) レコード 292
- Dialog Utilization %レポート 239
- Dynpro バッファ 298

E

- Enqueue Service (PI_ENQ) レコード 296
- Extended Memory アラーム 219
- EXTRACTFILE セクション 154, 167, 179, 193

F

- Field description バッファ 298
- FORMAT セクション 156, 167, 181, 192
- FTAB バッファ 298

G

- Generic key バッファ 298
- Generic table バッファ 298

H

- Heap Memory アラーム 220

I

- Initial record バッファ 298
- IP アドレスの設定 31, 54

J

- JP1/SLM 505
- JP1/SLM との連携 494
- jpcdbctrl config コマンド 84
- jpcras コマンド 438
- jpcsto.ini ファイルの設定項目 87
- jpcsto.ini ファイルの編集手順 89
- jpcsto.ini ファイルの編集前の準備 88
- jpcsto.ini ファイルを編集して設定を変更する 87
- jr3alget コマンド 338
- jr3slget コマンド 346

L

- LANG 環境変数を設定する 62
- Linux 版での SAP NetWeaver7.0 以降の場合 123, 139
- Linux 版のアンインストールおよびアンセットアップする前の注意事項 79
- Linux 版のアンインストール手順 81
- Linux 版のアンインストールとアンセットアップ 79
- Linux 版のアンセットアップ手順 80
- Linux 版のインストール手順 60
- Linux 版のインストールとセットアップ 54
- Linux 版のインストールとセットアップに関する注意事項 72
- Linux 版のインストールとセットアップの流れ 58
- Linux 版のインストールの前に確認すること 54
- Linux 版のクラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップ 139
- Linux 版のクラスタシステムでのインストールとセットアップ 123
- Linux 版のセットアップ手順 62

M

- Menu バッファ 298

N

- Nametab バッファ 298

O

- ODBC キーフィールド一覧 273
- Option セクション 158, 169, 184, 194

P

- Paging Area アラーム 221
- Partial table バッファ 298
- PD 325
- PD_ALMX 290
- PD_SLMX 316
- PD_SRV 306
- PD レコードタイプ 20
- Performance Management 505
- Performance Management システムの障害回復 445
- Performance Management プログラム 34, 57
- PFM - Agent for Enterprise Applications で使用する SAP ユーザーの作成 42, 65
- PFM - Agent for Enterprise Applications の運用方式の変更 84
- PFM - Agent for Enterprise Applications の概要 18
- PFM - Agent for Enterprise Applications のシステム構成の変更 82
- PFM - Agent for Enterprise Applications の接続先 PFM - Manager の設定 48, 71, 135
- PFM - Agent for Enterprise Applications のセットアップファイルをコピーする 41, 64
- PFM - Agent for Enterprise Applications の特長 19
- PFM - Agent for Enterprise Applications のバックアップとリストア 96
- PFM - Agent ホストに障害が発生した場合のフェールオーバー 105
- PFM - Manager および PFM - Web Console への PFM - Agent for Enterprise Applications の登録 40, 63
- PFM - Manager が停止した場合の影響と対処 107
- PFM - Manager ホストでセットアップコマンドを実行する 41, 64

PFM - Web Console ホストでセットアップコマンド
を実行する 42, 65, 113

PI 328

PI_BTC 288

PI_BTCP 286

PI_BUFF 298

PI_DIA 292

PI_ENQ 296

PI_MEM 308

PI_SPO 313

PI_UMP 322

PI_UPD1 318

PI_UPD2 320

PI レコードタイプ 20

PI レコードタイプのデフォルト保存期間 92

Presentation バッファ 298

PRIV モードになったワークプロセス数の監視 28

Process Detail レポート 240

Process Overview Status レポート 241

Program バッファ 298

Program バッファの監視 26

PXA バッファ 298

Q

QueueLength %アラーム 226

R

R/3 executable バッファ 298

R/3 GUI バッファ 298

RFC 505

Roll Area アラーム 222

S

SAP Buffer Detail(CUA)レポート 242

SAP Buffer Detail(FieldDescription)レポート 243

SAP Buffer Detail(GenericKey)レポート 244

SAP Buffer Detail(InitialRecords)レポート 245

SAP Buffer Detail(Program)レポート 246

SAP Buffer Detail(Screen)レポート 247

SAP Buffer Detail(ShortNameTAB)レポート 248

SAP Buffer Detail(SingleRecord)レポート 249

SAP Buffer Detail(TableDefinition)レポート 250

SAP Buffer Hitratio Status レポート 253

SAP Buffer Hitratio Trend レポート 255, 256

SAP Buffer Hitratio レポート 251

SAP Buffer Summary (PI_BUFF) レコード 298

SAP Instance Summary (PD_SRV) レコード 306

SAP Memory Detail レポート 257

SAP Memory Summary (PI_MEM) レコード 308

SAP Memory Used Status レポート 259

SAP Memory Used Trend レポート 260, 261

SAP Memory Used レポート 258

SAP システムのタイムゾーンの設定 72

SAP システム 505

SAP システム全体の負荷状況の監視 25

SAP システムの運用上の問題点を通知できます 21

SAP システムの応答時間 25

SAP システムのシステムログ情報および CCMS アラ
ート情報を抽出できます 22

SAP システムのタイムゾーンの設定 49, 122, 136

SAP システムのタイムゾーンの注意事項 202

SAP システムのパフォーマンスデータを収集できます
19

SAP システムのモニター情報を収集できます 22

SAP システムログ, CCMS アラートの監視 28

SAP システムをリモートで監視できます 22

SAP バッファに関連するレコードとフィールド 26

SAP バッファの監視 26

SAP メモリーに関連するレコードとフィールド 27

SAP メモリーの拡張メモリー使用率の監視 28

SAP メモリーの監視 27

SAP メモリーのヒープ領域使用率の監視 28

SAP メモリーのページング領域使用率の監視 28

SAP メモリーのロール領域使用率の監視 28

Screen バッファ 298

ServerSpecificQueue アラーム 224

Short nametab バッファ 298

Short NTAB バッファ 298

Single record バッファ 298
SNTAB バッファ 298
Spool Service (PI_SPO) レコード 313
Store データベース 20
Store データベースに記録されるときだけ追加される
フィールド 280
Store バージョン 1.0 から Store バージョン 2.0 に移
行する場合 91
Store バージョン 2.0 から Store バージョン 1.0 に戻
す場合 92
Store バージョン 2.0 のレコードのデフォルト保存
期間 92
Store バージョン 2.0 への移行 90
syslog と Windows イベントログの一覧 362
System Log Monitor Command (PD_SLMX) レ
コード 316
SystemWideQueue アラーム 223

T

TABL 298
table DDNTF 298
table DDNTT 298
Table definition バッファ 298
Table バッファ 298
TABLP 298
TARGET セクション 167, 179, 192
TRACE セクション 156, 165, 182, 190
TTAB バッファ 298

U

Update1 Service (PI_UPD1) レコード 318
Update2 Service (PI_UPD2) レコード 320
User defined Monitor (Perf.) (PI_UMP) レコード
197, 322
UsersLoggedIn Trend(Multi-Agent)レポート 264
UsersLoggedIn Trend レポート 262, 263
Utilization % (ダイアログプロセスの平均使用率の監
視アラーム) 227
Utilization % (バックグラウンドワークプロセスの平
均使用率の監視アラーム) 225

W

Web ブラウザでマニュアルを参照するための設定 100
Windows 版での SAP NetWeaver7.0 以降の場合
108, 137
Windows 版のアンインストールおよびアンセット
アップする前の注意事項 75
Windows 版のアンインストール手順 77
Windows 版のアンインストールとアンセットアップ
75
Windows 版のアンセットアップ手順 76
Windows 版のインストール手順 38
Windows 版のインストールとセットアップ 31
Windows 版のインストールとセットアップに関する
注意事項 50
Windows 版のインストールとセットアップの流れ 36
Windows 版のインストールの前に確認すること 31
Windows 版のクラスタシステムでのアンインストー
ルとアンセットアップ 137
Windows 版のクラスタシステムでのインストールと
セットアップ 108
Windows 版のセットアップ手順 39
WorkLoad Summary Interval (PI) レコード 328
Work Process Summary (PD) レコード 325
WRAP1 形式 506
WRAP2 形式 506

あ

アクション 21
アラーム 21
アラーム一覧 207
アラームおよびレポートが容易に定義できます 21
アラームテーブル 21
アラームの記載形式 206
アラームの定義に関するトラブルシューティング 416
アンインストール 138, 140

い

移行時の注意事項 481
移行手順 481

インスタンス環境のアンセットアップ 76, 80, 137, 139

インスタンス環境の更新の設定 93

インスタンス環境の設定 43, 66

インストールとセットアップ 30

インストールに必要な OS ユーザー権限について 33, 56

う

運用上の注意事項 200

え

エイリアス名 31, 54

お

応答時間に関連するレコードとフィールド 25

か

カーネルパラメーター 448

外部管理インターフェースを使用するための権限 (S_XMI_PROD) 43, 66, 114, 129

拡張パスワード 506

各バージョンの変更内容 496

稼働状況ログ 424

稼働性能情報 197

環境パラメーター設定ファイル 152, 177

監視対象プログラム 34, 57

監視テンプレート 21, 204, 205, 506

監視テンプレートの概要 205

き

共通メッセージログ 423, 424

く

クラスタ運用時のディスク占有量 447

クラスタシステムでの PFM - Agent for Enterprise Applications の運用方式の変更 142

クラスタシステムでの PFM - Agent for Enterprise Applications の構成 103

クラスタシステムでの PFM - Agent for Enterprise Applications のシステム構成の変更 141

クラスタシステムでの PFM - Agent for Enterprise Applications のバックアップとリストア 143

クラスタシステムでの Store バージョン 2.0 への移行 142

クラスタシステムでのインスタンス環境の更新の設定 142

クラスタシステムでのインストールとセットアップについて 35, 58

クラスタシステムでの運用 102

クラスタシステムでのパフォーマンスデータの格納先の変更 142

こ

構築前のシステム見積もり 447

コマンド一覧 337

コマンド共通の注意事項 336

コマンドの記載形式 335

コマンドの実行に関するトラブルシューティング 415

コマンドの指定方法 335

コマンドの文法の説明に使用する記号 335

さ

サービス ID 506

し

識別子一覧 449

システムログ 423

システムログ情報 22

システムログ情報抽出機能 507

システムログ情報抽出機能の概要 146

システムログ情報の抽出 149

システムログの監視 29

実ホスト名 31, 54

収集基点時間の設定 49, 72, 122, 135

収集基点時間の注意事項 201

障害検知 444

す

ステータス管理機能 444

せ

セットアップやサービスの起動に関するトラブルシューティング 411

前提 OS 31, 54

前提プログラム 33, 56

セントラルインスタンス 507

そ

その他のトラブルに関するトラブルシューティング 422

た

ダイアログインスタンス 507

ダイアログの応答時間の監視 25

て

ディスク占有量 447

ディレクトリおよびファイル一覧 468

ディレクトリおよびファイル一覧 (Linux の場合) 474

データ型一覧 277

データベース ID 507

データベース依頼時間の監視 25

データモデル 20, 269

データを取得できない場合のレコード生成結果 282

テーブルデータの Generic key バッファの監視 27

テーブルデータの SingleRecord バッファの監視 27

と

同一ホストに Performance Management プログラムを複数インストール、セットアップするときの注意事項 50, 72

動作ログに出力される事象の種別 484

動作ログの出力 484

動作ログの出力形式 485

動作ログの保存形式 484

動作ログを出力するための設定 491

トラブルシューティング 410

トラブルシューティング時に Linux 環境で採取が必要な資料 432

トラブルシューティング時に Linux 環境で採取する資料の採取方法 441

トラブルシューティング時に採取が必要な資料 426

トラブルシューティング時に採取する資料の採取方法 438

トラブルシューティング時に採取するログ情報 423

トラブルシューティング時に採取するログ情報の種類 423

トラブルシューティング時に採取するログファイルおよびディレクトリ一覧 424

トラブルへの対処方法 408

ドリルダウンレポート (フィールドレベル) 229

ドリルダウンレポート (レポートレベル) 228

トレースログ 424

ね

ネットワークの環境設定 31, 54

ネットワークの設定 47, 70, 133

は

バージョンアップの注意事項 51, 73

バージョン互換 483

バインド 21

パスワードに指定できる文字 42, 65, 114, 128

バックアップ 96

パフォーマンス監視について 24

パフォーマンス監視の目的 24

パフォーマンス監視の例 25

パフォーマンスデータ収集の設定 199

パフォーマンスデータの格納先の変更 48, 70, 84, 134

パフォーマンスデータの収集と管理に関するトラブルシューティング 418

パフォーマンスデータの性質に応じた方法で収集できません 20

パフォーマンスデータを保存できます 20

ひ

必要な権限 43, 65, 114, 128

ふ

- ファイアウォールの通過方向 453
- フィールド 20, 228
- フィールド ID 343, 351
- フィールドの値 278
- フェールオーバー時の処理 105
- フォルダおよびファイル一覧 (Windows の場合) 468
- プログラムのインストール順序 38, 60
- プログラムのインストール方法 38, 60
- プロセス一覧 450
- プロパティ 455

へ

- ベースラインの選定 24

ほ

- ポート番号一覧 452
- ポート番号の設定 32, 55

ま

- マニュアルの参照手順 101
- マニュアルを参照するための設定手順 100

め

- メッセージ 353
- メッセージ一覧 364
- メッセージの記載形式 355
- メッセージの形式 354
- メッセージの出力形式 354
- メッセージの出力先一覧 357
- メニュー情報のバッファの監視 27
- メモリー所要量 447

も

- モニター 197
- モニター情報収集機能 507
- モニター情報収集の概要 197
- モニター情報収集の設定 198

- モニター情報の収集 196
- モニターセット 197
- モニターセット名およびモニター名の設定 198

ゆ

- ユーザーが汎用モジュールに RFC 接続するための権限 (S_RFC) 43, 66, 114, 128
- ユーザータイプ 42, 65, 114, 128

よ

- 用語解説 505
- 要約ルール 274

ら

- ライブラリの適用手順 39, 62

り

- リアルタイムレポート 19
- リストア 97
- 履歴レポート 19

れ

- レコード 20, 228, 268
- レコード一覧 284
- レコードの記載形式 270
- レコードの注意事項 282
- レポート 19
- レポート一覧 232
- レポートの記載形式 228
- レポートの定義に関するトラブルシューティング 416
- レポートのフォルダ構成 230

ろ

- ログのファイルサイズ変更 48, 70, 133

わ

- ワイルドカード文字について 336

 株式会社 日立製作所

〒100-8280 東京都千代田区丸の内一丁目6番6号
